

博士論文

「思想史的事件」としての「ラッセル来訪」再考
——第一次世界大戦後における「文明」と
「近代」への思索

(A revisitation on "B. Russell's visiting" as an
"Intellectual-historical Incident": Considerations on
"Civilization" and "Modernity" after the First World
War)

2019年3月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

ZHANG Lin

立命館大学審査博士論文
「思想史的事件」としての「ラッセル来訪」
再考——第一次世界大戦後における「文明」と
「近代」への思索

(A revisitation on "B. Russell's visiting" as an
"Intellectual-historical Incident": Considerations on
"Civilization" and "Modernity" after the First World
War)

2019年3月

March 2019

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
Doctoral Program: Major in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

ZHANG Lin

研究指導教員：桂島 宣弘 教授

Supervisor : Professor KATSURAJIMA Nobuhiro

目次

序論

- 第1節 問題の提起・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第2節 方法としての「思想史的事件」と「トランスナショナルヒストリー」・・・ 3
- 第3節 本稿の構成について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第1章 B・ラッセルの「露・中・日訪問」及び1920年代初頭の東アジア

- はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 第1節 「思想史的事件」としての「ラッセルの訪問」・・・・・・・・・・ 10
- 第2節 ラッセル来訪の実現——「講学社」と「改造社」の協働・・・・・・・・ 12
- おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

第2章 「文明」を守護する異端者——B・ラッセルが求めたもの

- はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
- 第1節 「神の死」より再び世間へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
- 第2節 「西洋の没落」——「メフィストフェレス」たる第一次世界大戦・・・ 28
- 第3節 「本能」対「文明」の格闘——「文明」への反省と再生・・・・・・・・ 31
- おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

第3章 「新しい宗教」とロシアの失敗——ラッセルのボリシェビズム論とそれが惹起した波瀾について

- はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
- 第1節 「新しい宗教」とロシアの失敗——ラッセルのボリシェビズム論・・・ 47
- 第2節 翻訳と伝播——ラッセルのボルシェヴィズム観が惹起した波瀾、その一・ 52
- 第3節 咀嚼と議論——ラッセルのボルシェヴィズム観が惹起した波瀾、その二・ 58
- おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

第4章 「小国寡民」論と「共産主義体制」——長谷川如是閑とラッセルの交錯

- はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

第1節 「科学と倫理」／「社会改造」——中日のメディアと知識人におけるラッセル	84
第2節 「小国寡民」論——「ラッセルの社会思想と支那」における図式	93
第3節 資本主義か、共産主義か——ラッセルの中国近代化論	103
おわりに	110
第5章 社会改造と文化主義の間——土田杏村における新カント主義とギルド社会主義	
はじめに	117
第1節 「特別な東洋と西洋の混合」——ラッセルが見た大正期の日本	119
第2節 「論理と情熱との調和の人格」——杏村のラッセルへの追跡と「大正人格主義の系譜」	127
第3節 汎価値主義的「文化主義」——『文化主義原論』（1921）の意図	135
おわりに	142
終章 未完の問い	150
付表1	156
付表2	160

凡例

- 1、本稿においての表記は常用漢字にしたがい、場合によって旧字体を用いた。
- 2、本稿において史料を引用する際基本的に、旧字体を常用漢字に改めている。ただし、場合によって旧字体を挿入している。
- 3、本稿において引用される外国語文献および外国に出版された文献の日本語訳は、特記がない限り、すべて筆者によるものである。
- 4、外国文献引用する際の注釈は、各国・各言語の注記方式にしたがっている。

序章

第1節 問題の提起

モダニティ（近代性）¹の大潮は、人類史上はじめての総力戦である第一次世界大戦を経て全世界を覆い尽くすようになった。歴史の歯車は、「堅牢なものは悉く気化し、神聖なものは悉く褻瀆され、（中略）すべての新式の事物も、それがまだ固定せぬ前に廃物になってしまう」ような時代へと、加速度的に回り出していった。19世紀以来つづいてきた理性万能・科学進歩への信仰という「誇り高き塔」²の倒壊と、「パックス・ブリタニカー」の崩壊を決定づけた大戦争は、その狂気と空虚から、カオスへの恐怖と悔恨、理性への反発と不信、また秩序再建への模索と希望といった複雑な時代思潮を生み出し、それは主戦場であるヨーロッパを中心に世界各地へと拡散していった。レオ・シュトラウスは、大戦の終わる頃に刊行されていたシュペングラー『西洋の没落』（1918）を人類史上における第三次の「モダニティ・クライシス」³の預言書として取り上げ、「モダニティの危機は、現代西洋人が、自分の要望を知らないことに、すなわちこれまで自明の善と悪、正しさと間違いを信じられなくなることに現れている」⁴と、大戦後の価値的混沌と虚無状態を語っている。こういったモダニティがもたらす危機に対し、人間理性への反省と再評価はせめぎ合い、その延長上にイデオロギーをめぐる複雑な闘争が繰り広げられていた。

一方19世紀以来、近代化のモデルを欧米列強に見出してきた東アジアの諸国は、最も激しい戦場から距離を置きつつも、その当事者たちよりもさらに強い心理的衝撃を受けていた。それまで向けてきたある種の「信頼」を裏返したかのように、東アジア諸国は西洋への不信と反発を抱き、それは「西洋の没落」の語に象徴的なように、大戦後の講和会議などで形成された不当な国際秩序と「民族自決」の思潮などとも相乗して、各「民族」を中心としたユートピア的な国家・連邦構想を産みだしていく。一方、新興の近代帝国としての日本は、第一次世界大戦に参戦することで、戦後の東アジアにおいてさらなる勢力拡大を求めつつあったが、その野望は列強との競争関係に立たざるを得ない局面に遭遇していた。大戦後パリ講和会議での「外交失敗」、（半）植民地のナショナリズム運動——「三・一」運動、「五・四」運動——の衝撃、さらにアメリカにおける排日問題の高揚などという一連の挫折によって、一時期日本が置かれる国際環境は「四面楚歌」の様相を呈した。このような状況を背景に、日本国内における大衆ナショナリズムの高揚は不可避のものとなっていく。また危機感に駆り立てられた知識人層も「帝国改造」を高唱しつつ行動し始める。「社会」の発見に基づく「大正デモクラシー」と護憲運動の風潮、コスモポリタニズムや社会主義に基づくインターナショナルな連帯の試み、アジア主義の国内への旋回など、「改造」をキーワードとする思想的風潮は、この時期の日本思想界における主旋律ともなったのである⁵。

一方で当時の中華民国では、北京の北洋政権と広州の革命軍政府が相対峙する内戦状態が続くなか、思想界の「新文化運動」もクライマックスを迎えていた。まさに大戦が終結を迎えるとき、『狂人日記』（1918）が誕生し、そこに記された「その歴史には年代がなく

曲り歪んで、どの紙の上にも「仁道義徳」というような文字が書いてあった。ずっと睡むらずに夜中まで見詰めていると、文字の間からようやく文字が見え出して来た。本いっばいに書き詰めてあるのが「食人」の二字⁶という名フレーズは、時代と思想の混乱を如実に語っていたといえる。そこでは「五・四」運動へと至る思潮の高まりとも相まって、翌1919年には「問題と主義」論戦、「東西文化」論戦、「社会主義」論戦、「科学と術学」論戦などの思想戦が繰り返されていった。これらは一見して国内の事件であったようにみえるが、いずれも戦後世界の情勢と深く関わっていたことは、あらためて強調するまでもないであろう。

かりに大戦後から1920年代初頭にかけての日本思想界における焦点を、労資問題、国家権力と異なる意味での「社会の発見」を前提とした国家・社会・個人の間をめぐると見出すとすれば、当該期の民国思想界における焦点の問題は、独立と統一、近代国家の構築であった。両国の知識人は、噴出する社会・国家の問題に直面しながら、それぞれのアイデンティティに立って秩序再建の経路を探っていたのである。

こうした状況を背景に、1920年10月、梁啓超、張東蓀らいわゆる「研究系」⁷知識人の招聘でイギリスの哲学者・思想家、バートランド・ラッセル (Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970)⁸が中国大陸を訪れる。時間をやや遡れば、彼は、同年5月から6月にかけてロシア革命後初めての西欧訪問団——「イギリス労働者代表団 (British Labour Delegation)」⁹のメンバーとして、革命後の「労農ロシア」を訪問し、レーニン、トロツキーとゴリキーとともに会談を交わしていた。その経験は、現地報告およびボルシェヴィキ政権の分析を行った『The Practice and Theory of Bolshevism (ボルシェヴィズムの実践と理論)』(1920)へとまとめられる。時代の核心的議題を取り上げた彼の論説は直ちに、中・日のメディアによって翻訳・紹介され、これを受けた両国の知識人たちも沸き立つように、かつ共時的に、議論を展開していた。こうしたなか、民国を訪れたラッセルは、北京大学の客員教授として一年近く在中し、「新文化運動」中後期の民国を体験し、国の進路に悩む人々に様々な建言を行う。また1921年7月に帰国する際には、「改造社」の招聘で日本にも立ち寄り、西田幾多郎、土田杏村、大杉栄など、時の学界・論壇を代表する知識人たちと交流した。ラッセルの「遠東」来訪に、日中両国の文化界と知識人は大きな期待を寄せ、それぞれの問題意識のもとでラッセルの学説を受容し、あるいは批判をくわえていく。一方、刺激を受けたのは中日の人々ばかりではない。ラッセル自身もロシアの訪問、さらに中日両国の人々との接触を通じて、彼が第一次世界大戦期より抱き始めていた問題——人類の文明様式に関する諸問題、「西洋近代」がもたらす時代的混乱状況などについて思索を深めた。これらの思索は、のちに『The problem of China (中国の問題)』(1922)、『The Prospects of Industrial Civilization (産業文明の前途)』(1923)などの著述へと繋がっていく。

かかるラッセルの「遠東」来訪の意味を考えようとするとき、本稿は二つの視点を導くことができる。まず、この訪問が双方向的な効果を生んだことである。先行研究は、ラッセルがいかに受容されたかばかりが論じられるが、実際には、この訪問からラッセル自身

も大きな影響を受けていた。よって「事件」としてのラッセル訪問を考える際には、こうした視点を見逃すわけにはいかない。次に、この「事件」が典型的なトランスナショナルな「思想史的事件」であったということである。とすれば、それを論じる際には、越境的かつ共時的視点をもって行わなければならないだろう。

しかし先行研究は、こうした双方向的、越境的な思想的回響についてほぼ看過してきたといえる。まずこの訪問を重要な問題として取り上げたのは、中国における諸研究であった。それはラッセルの来訪およびその思想の受容・伝播が、中国の近代化問題と深く関わっていると考えられたからであろう。こうした視点からの研究には、たとえば馮崇義『羅素与中国——西方思想在中国的一次經歷(ラッセルと中国——中国における西洋思想の一つの經歷)』(三聯書店、1994)、胡軍『分析哲学在中国(分析哲学の中国受容)』(首都師範大学出版社、2001)、丁子江『羅素与中華文化(ラッセルと中華文化)』(北京大学出版社、2015)などが挙げられる。これらはいずれも、中国でのラッセルの理論・学説の受容や、彼と中国知識人との間の交流を考えるうえで重要な研究といえる。しかし、その問題関心の所在ゆえに、それらの研究は、当該期において民国の「研究系」グループとネットワークを保持していた日本側のメディアや、さらに知識人の反応について見過ごし、またラッセル自身の思想変遷に与えた訪問の影響についても触れられていない。

これに対し、日本側の研究を見れば、この事件はほとんどの場合、大正期日本思想界における一エピソードとして言及されるのみで、たとえば関忠果等『雑誌『改造』の四十年』(1977)、宮本盛太郎『来日したイギリス人』(1988)などで言及される以外、研究自体がほぼ見られない状況にある。ラッセルに関しては、「日本バートランド・ラッセル協会」¹⁰が総合的に彼個人の関連資料や研究を蒐集しているが、「訪問」に関する限り、近年にいたるまで思想史的研究としては、深められていないといつてよかろう。

かかる国境によって切断された研究の状況に対し、本稿は新たな認識枠を提供することで、この「事件」を当該期の東アジアにおけるトランスナショナルなコンテキストに引き戻し、再考することを試みたい。そのために本稿は、1920年から1921年にかけて、バートランド・ラッセルが、大戦後のロシア・中国・日本を訪問、また滞在したことを、子安宣邦氏がいうところの「思想史的事件」と定義する。そして、この「事件」を当該期の日・中両国のメディアと知識人からの反響だけでなく、ラッセル自身における思想変化をも視野に入れつつ、トランスナショナルな視座に基づくテキスト分析によって、立体的に描きだしてみたい。

第2節 方法としての「思想史的事件」と「トランスナショナルヒストリー」

そこでまず、本稿において使用する際ににおける「事件」の意味について敷衍しておきたい。日本思想史の領域で「事件」というとき、一般に子安宣邦氏が『「事件」としての徂徠学』(筑摩書房、1990)において提示した、「言説＝事件」という方法論的視座を想起させられる。子安氏の概念体系は、自らを「言語論的転回」の系譜に位置づけ、ミシェル・

フーコーの「知の考古学」¹¹を方法的に継承せんとするものであった。氏はいう。「荻生徂徠の学問・思想上の表現を「事件」としてとらえていうとき、それは二重の意味においてである。一つには文字通り、徂徠学の十八世紀の言説的世界への登場あるいはその出現を「事件」としてとらえることである。(中略)「事件」としての徂徠学という私のアプローチは、徂徠の発言が十八世紀の思想空間においてもつ事件性を明らかにしようとするものであるが、そのことは同時に、そうした徂徠の学問・思想上の発言を「言説(ディスコース)」ととらえる観点から、その「言説」としての意味を問おうとするものである」¹²。すなわちそれは、歴史事象としての「事件性」とディスコースとしての「事件性」を同時に取り上げる研究方法だといえよう。こうした手法の特徴は、前者の外部性および後者の内部性への考究を通し、「思想史的事件」という歴史事象における外縁を明確化し、ディスコース内部との連鎖を深く探る一方、とりわけ後者、すなわち言説の事件性によって、「一度書かれてしまった言説(ディスコース)は、筆者の意図とテキストが乖離し、筆者によって生きられた有限な地平を逃れ出る。(中略)その言説が他の言説と関係を持つことを「事件・出来事」としてとらえ」¹³ようとする点にある。かかる氏の方法は、まさに本論で考察しようとするラッセルの各国訪問とその言論が惹起した多岐にわたる議論にアプローチする際にも適格な手がかりを与えてくれよう。

なお、事象・概念の固定化に対する批判も含めたよりラディカルな提起は、同じく思想史研究者の孫歌氏によってなされている。氏は「思想史事件としての SARS」(2005)¹⁴において、「SARS という現実の事件を、思想史の事件として扱い、思想史の角度から、知識人と公共社会生活、特に政治生活との関係について、分析する」¹⁵ことを試みた。氏の場合、必ずしも意識的に「思想史的事件」という概念を、周到に設定してから使っているのではないが、欧米・日韓のメディア報道傾向、そして中国内部の知識人の言説を取り上げて、「事件」自体とその余波から、その思想的意味を追求した。氏は一つの歴史事象の複雑性と流動性を強調し、「瞬間瞬間に激しく変わっていく「状況」そのものに直面するように迫っていた(中略)流動性が真っ先に打ち砕いたのは、何よりも固定化された概念的判断そのものだった」¹⁶と、「物事の結果から、物事の経緯を追憶したり、推測する」¹⁷傾向や、「事件の中にいるか外にいるかにもかかわらず、観念的に現実に向き合う知識人たちは、実際にはある種の(中略)「理想的公平社会」像を潜在的に持っている」¹⁸という単線的な認識論より生まれた思想的貧困と、その延長上にある同質な歴史観を戒めるよう呼びかける。それは、思想史あるいは学術研究における新たな問題提起だけにとどまらず、知識人の社会的位相をも言及の射程に入れようとするものであり、その行間からは氏の「固定化された概念的判断」に対する反省的思考が強く読み取れるのである。かかる議論の射程を取り入れるならば、「ラッセル来訪」についてこれまでに構築されてきたある種の固定化したイメージの相対化が図れよう。

さて、本稿においても一つの課題は、目的論的・国民国家的認識枠を相対化することである。本稿は考察の手法として、「日・中」両国という舞台をあらかじめ設定するが、それは決して二つの国民国家だけに視野を限定しようとするものではない。第一次世界大

戦後、東西の知識人が思索した、各国の進路のみならず、諸文明自体の運命や、これらの問題意識から発した思潮の伝播という越境的思考様式に注目することで、本稿は二項対立的・一国史的言説から脱却し、歴史を動かす重層的な要因を照射する作業を目指したい。

おおよそ 1980 年代前後に行なわれたアントニー・D・スミス (Anthony David Stephen Smith、1939-2016) による「エスニー」と「ネーション」に関する考察、またベネディクト・アンダーソン (Benedict Richard O'Gorman Anderson、1936-2015) が提起した「出版資本主義」と「想像の共同体」といった視点を梃子にして、「ナショナリズム」の視座から近代国民国家に対する批判的考察が積み上げられてきた。日本でいえば、それは 1990 年代前後に端を発する「国民国家論」的方法として、多くの成果をもたらしたといえる¹⁹。こうした研究潮流のなかも、歴史主体としての「民族」、およびその延長上に誕生した「単一民族」を中心に構築されてきた、フォーマルな循環的・単線的歴史叙述 (Cyclical and linear history) を乗り越えるために、プラセンジット・ドゥアラ (Prasenjit Duara、1950-) は、『Rescuing History from the Nation (ネーションから歴史を救い出す)』(1995) ²⁰において、「複線的歴史 (Bifurcated History)」²¹という概念を提起した。その眼目は、「過去」は直線的に前に進むだけではなく、その意義は絶え間なく時空の中へと散逸していく。目的論的歴史観を乗り越えていく、あるいはそれを反省するとともに、歴史をその中から救い出す作業を行う²²ことにあるという。こうした指摘を念頭に、当該期の言論人・思想家たちの模索・葛藤とその分岐・軋轢に象徴されるような、複数のアイデンティティが連携・相克する現場を直視することで、新たな思想史的叙述を構築することも本研究の課題の一つである。

以上二つの方法を用いることで、本稿は、複雑性ゆえに高度に流動的な第一次世界大戦後の「東アジア」という歴史世界より、「ラッセルの来訪」を、ひとつのトランスナショナルな「思想史的イベント」として取り上げ、それが惹起した波紋と反響、さらにこれを通じて見える「事件」の横断面から、当該期における時代思潮へとアプローチしてみたい。

第3節 本稿の構成について

そこで本稿は、本論全5章および、問題提起を記述する「序章」と、論のまとめを取り扱う「終章」による構成をとる。第1章では主に、「ラッセルの来訪」はいかなる意味で「思想史的イベント」として成立し得るのか、またその「事件」がいかに中・日両国知識人それぞれの問題意識と連動するなかで成立したものだったのかを追跡する。第2章では、本稿の主要考察対象のひとつとなる、第一次世界大戦後のラッセルの思想的変化の前提として、戦争開始時および戦中における彼の思想的素地を、戦中の書簡、インタビュー・著述などのテキストをもって検証する。第3章では、1920年5月から6月にかけてラッセルが訪露したあとに出版された『The Practice and Theory of Bolshevism』に対する、日中両国での伝播・受容過程をみる。またこれとも関わり、ラッセル自身におけるボルシェヴィズムに対する認識の変化もたどる。第4章ではまずラッセルが「遠東」を訪問するこ

とに関する日中のメディアおよび知識人の反応を追い、彼の学説が紹介された意味を、両国に共通する背景および各々に固有の歴史的文脈の両面から分析する。そのうえで、日本の言論家・知識人長谷川如是閑をとりあげ、彼がラッセルの学説を借用しつつ展開した中国改革論を、ラッセル自身による中国の将来に関する議論と比較させつつ検討したい。第5章では、ラッセルの訪日を取りあげ、彼が見た「近代日本」の姿とその進路についての分析を提示する。そのうえで、日本において最もラッセルの思想を接近しようとした在野の知識人・土田杏村が、ラッセルの訪日とほぼ同じ時期に展開していた日本「改造」をめぐる議論を検討することにより、両者の交差と分岐を考察する。

¹ 1970年代末から1980年代初頭にかけて、これまでに政治・経済あるいは社会・心理を可視的・制度的な面から、「西洋近代」を定規に考察してきた「近代化論」というパラダイムをさらに掘り下げつつもその相対化を図った膨大な問題群として、「モダニティ（近代性）」への言及（J. ハーバーマス、A. ギデンス、T. パーソンズなどが主要な論者）は誕生した。「モダニティ」に関する定義は論者によって多岐にわたっているが、おおよそキリスト教の直線的・線分的時間観念を前提に、「啓蒙時代」以来神本主義に代わって人本主義が主宰していくプロセスを指す。その根本のロジックにはデカルト的主客二元論にあり、「合理化」と「排除」の原理によって「主体」（主）と「他者」（客）を絶えず製造し、カオスを秩序（ヒエラルキー）化とシステム化を図るプロセスでもある。「モダニティ」の概念は主に「近代」を反省・批判する際に多用されている。具体的に、大衆生活の角度から言えば、「モダニティ」は世俗化と都市化を意味している。政治制度から見れば、モダニティは「個人」と「権利」を主軸として展開されていた。経済の角度からは、モダニティの中心概念は市場化された資本主義および機械化された工業主義である。哲学から見れば、モダニティは間違いなく、理性主義である。中世とは徹底的な断絶を要求する「脱魔術化」と「合理化」の、歴史的、緊張と衝突に満ちた複雑なプロセスである。汪民安の指摘によれば、ヨーロッパ文明を人類文明の最高様式としている「近代化論」と比べれば、「脱中心化」の自覚と「啓蒙主義」に対する道徳的懐疑と批判を背負った理論体系「モダニティ論」は、1、審美（美学）的モダニティ、2、社会的モダニティ、と3、哲学的モダニティという三つの指向性を擁しつつ、モダン生活、現代資本主義、（哲学史における）「現代」に関連する時空間認識の変容に関する概念史、工業主義と民族国家などの豊富な議題まで、その解釈網は延伸している（汪民安「歩入現代性」、汪民安等編『現代性基本読本』、1-63頁、河南大学出版社、2005）。

² *The Proud Tower: A Portrait of the World Before the War, 1890-1914*, by Barbara W. Tuchman, New York: Macmillan, 1966.

³ *The Three Waves of Modernity, An Introduction to Political Philosophy: Ten Essays* by Leo Strauss, edited by Hilail Gildin, Wayne State University Press, 1989, p. 81.

⁴ Ibid.

⁵ 拙稿「「東アジアの覚醒」と「大正デモクラシー」の相克と相乗——大正期メディアにおける三一・五四運動への認識を手がかりに」（『日本思想史研究会会報』33、143-163頁）、143頁。

⁶ 底本：魯迅、井上紅梅訳「狂人日記」『魯迅全集』改造社、1932年版。ここでの引用は、青空文庫より引いたものである。

https://www.aozora.gr.jp/cards/001124/files/42939_15330.html.

⁷ 中国民国初期の政治・思想団体。1916年、袁世凱の死後、国会をめぐる議論が復活し、梁啓超、湯化龍などが「憲法研究会」を組織、中華民国臨時約法に基づく憲法の制定反対、一院制の国会設立などを主張して、段祺瑞内閣の下で影響力を発揮した。これを「研究系」と称する。段内閣の崩壊に伴って「研究系」は政治的な力を失い、梁啓超、張君勱、丁文江、張東蓀、蔣百里などの「研究系」は、『学灯』、『晨報副鐫』などに拠って、西欧近代思想の紹介、啓蒙などに方向を転じた（芦田肇「研究系」、安宇植等編『世界文学大事典』、集英社、1996-1998）。

⁸ イギリスの哲学者、数学者、社会評論家。首相を2人生んだモンマスの名門家系に生まれ、家庭での個人教育を受けたあとケンブリッジ大学トリニティ学寮で哲学・数学を専攻、母校で講師として教鞭をとる。はじめヘーゲルの観念論から影響を受けるが、G. E. ムーアとの交友を通じて、また数学的真理は精神とは独立に存在するという確信を通じて、観念論から離れる。その数学的な達成が『The Principles of Mathematics (数学の原理)』（1903）で、これは独自に、しかし期せずしてゴットロープ・フレーゲと同じ結論に達している。この書をさらに記号論理的に体系づけたものが師であり、友人であるホワイトヘッドとの共著『Principia Mathematica (数学原理、プリンキピア・マテマティカ)』（3巻、1910-13）である。哲学的な立場としてはこの思想を延長したすべての存在は主語-述語の関係の言明に還元しようとする、いわゆる「記述理論」を考え出した。これは言語分析・論理分析の哲学の源流になるものである。彼にとっては、実体とは感覚で経験しようもの、すなわち事件であり、物と心、時間・空間はこれらから構成されるという経験論であるが、この一元論に徹するわけではなく、外的な存在を認める二元論との間を揺れ動いている。こうした哲学の業績には『The Problems of Philosophy (哲学の諸問題)』（1912）、『Mysticism and Logic (神秘主義と論理)』（1918）、『The Analysis of Mind (精神の分析)』（1921）などがある。彼の社会的な関心と道徳的な正義感は一に彼を書斎の人にせず、第一次大戦の際に反戦を説いたため、罰金、投獄の末、ケンブリッジ大学の職を失うことすらあったし、また後年、原水爆実験に反対してアインシュタインと共にバグウォッシュ会議を組織したり、百人委員会を主宰するなど自ら平和運動の先頭に立った。また婦人参政権を主唱、結婚の自由を説いたが、自らも4度の結婚と名流夫人オトリーン・モレルとの恋愛沙汰など多彩な感情生活を経験してもいる。しかし、まず挑戦的な政治的煽動者よりも、18世紀のヴォルテール、19世紀のJ. S. ミルのような役割を現代において果たした大思想家と見るのが正しいだろう。また伯爵の地位を継承したが最後まで自ら名乗ることを拒んだ。1950年ノーベル文学賞受賞（出淵博「バートランド・ラッセル」、安宇植等編『世界文学大事典』、集英社、1996-1998）。

⁹ イギリス労働者代表団は、ロシア革命後はじめての西欧代表団であり、ボルシェヴィキロシアに対する連合国の軍事干渉と経済封鎖を受けたイギリス労働党（LP）および労働組合会議（TUC）の抗議キャンペーンによって誕生した。B・ラッセルを除いた11人のメンバーには、主席を務め団員を率いる労働組合員（労働党員）Ben Turner、もと自由党員であるCharles Roden Buxton、医療係兼次官補Leslie Haden Guestほか、労働党（LP）員代表3人、労働組合会議（TUC）代表2人、そして独立労働党（ILP）代表2人がいた。

¹⁰ 日本バートランド・ラッセル協会は1965年1月20日に、早稲田大学大隈会館にて創立され、初代会長を務めたのが当時『東京朝日新聞』の論説主幹・笠信太郎であった。1975年、ラッセル研究者・牧野力教授の早稲田大学退職に伴い自然消滅となった。『日本バートランドラッセル協会会報』（1965-1975、全23号）を機関誌として刊行した。ホームページは<http://russell-j.com/index.htm>。

¹¹ 子安宣邦『「事件」としての徂徠学』筑摩書房、2000、13頁。

¹² 同上、8-9 頁。

¹³ 同上、11 頁。

¹⁴ 孫歌「思想史事件としての SARS」（中国社会文化学会）『中国-社会と文化』20、2005、312-321 頁。

¹⁵ 同上、312 頁。

¹⁶ 同上、319 頁。

¹⁷ 同上。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 佐藤成基編著『ナショナリズムとトランスナショナリズム 変容する公共圏』法政大学出版社、2009。

²⁰ Prasenjit Duara 著、王憲明訳『従民族国家救歴史——民族主義話語与中国現代史研究』社会科学文研出版社、2003。

²¹ 同上、2 頁。

²² 同上、3 頁。

第1章 B・ラッセルの「露・中・日訪問」および1920年代初頭の東アジア

はじめに

1920年10月、「研究系」知識人の招聘でイギリスの哲学者B・ラッセル(Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970)は、当時内外の危機に面した中国大陸を訪れた。すでにロシア革命とパリ講和会議の衝撃に揺れ動き、混沌の様相を呈していた民国の思想界は、ラッセルの訪問を翹望していた。だが、彼が訪れたのは、中国のみではない。1921年7月、ラッセルが帰英する際には、改造社の招聘で日本を訪問することになり、当時、いわゆる「大正デモクラシー」の最中にあった日本の思想界からも大きな注目を集めた。さらに、時間をやや遡れば、ラッセルは、「イギリス労働者代表団」のメンバーとして革命後のロシアを訪問し、レーニン、トロツキーおよびゴリーキーに面会していた。

ラッセルは、この一年あまりにわたる「露・中・日」訪問の成果を、大戦後の国際情勢およびボルシェヴィキ政権の理論と実践を考察し、冷戦体制を予言した政治学著述『The Practice and Theory of Bolshevism (ボルシェヴィズムの理論と実践)¹⁾』(1920)や、中国・日本を対象に考察することで東西文明間の差異と日本帝国主義の特殊的性質を指摘した『The problem of China (中国の問題)』(1922)、そして第一次世界大戦の原動力となった工業主義とナショナリズムの共謀・拮抗を分析した『The Prospects of Industrial Civilization (産業文明の前途)』(1923)といった著述へと結晶化させる。時代の核心的問題を模索したこれらの作品は、メディアによって広く伝播・紹介され、東西の知識人の間で共時的議論を引き起こしていく。それは、近代思想史上に大きな足跡を及ぼした一つの「思想史的イベント」であったといえよう。

第一次世界大戦の「総力戦」的性質とその危害にいち早く気づき、そしてその直後に極東地域を実際に訪れ、その観察から積極的に地域問題と国際問題を関連づけて考えた知識人として、ラッセルの思想と言論は当該期中・日に広く伝播され、議論された。かかる二方向に行き来した思想のインタラクションを特徴とする彼の思索にも関わらず、先行研究はほぼ一国史の枠内で分析するに留まっており、越境・共時的思想史の視座に立った検討が極めて少ないのが現状である。序章でも述べてきたように中国国内では、ラッセルは近代中国に大きな影響をもたらした一人の思想家として多く取り上げられてきた²⁾。これらの論説は、基本的に中国の近代化問題をめぐる議論に終始しているため、「西洋の衝撃—東洋の反応」といった二元対立的、受身的歴史叙述を脱しきれておらず、また一方では、ラッセルの理論形成に大きな影響を与えたであろう、上記の各国訪問が有する位置についてはほぼ看過されている。また、もう一方での問題は、ラッセルの思想を受容した側の反応を含めた検討がまだまだ不足していることである。たとえば、ラッセルの日本滞在は2週間ほどと短いものであった。しかし、日本のメディアおよび知識人が、ラッセルに寄せた関心は、決して短期間のみのものではない。それにもかかわらず、東アジア近代思想史にお

ける一大「事件」としてのラッセル訪問を考える上で、日本側文壇の動向を一切度外視したままでよいのだろうか。

さらに、とくに中国における研究・訳書には、ラッセルのテキストを扱う上での基本的問題点も指摘できる。たとえばラッセルはその自叙伝で、1920年10月25日付で送られた山本実彦の来信³について、「Humbug is international (いかさまは国際的である)」と評した。しかし、商務印書館2003年版の『罗素自传(ラッセル自伝)』第2巻では、訳者がさらに「これこそ、ラッセルが「日本のやつ」からの書簡にあたえた評価だ」「这是罗素对这个日本佬的批语」⁴と、原文以上に皮肉めいた口調で訳注を加えている。周知の通り、ラッセルは戦闘的精神と熾烈な感情の持ち主で、その自伝をみれば必ずしも日本、あるいはロシアに対して「良い印象」を持っていなかった。それと対照的に、彼は中国についてはつねに同情の目を向け、中国に関する全てをほぼ絶賛一色で通している。こうした中国への愛着と日本への毛嫌いは、当然ラッセル自身の表現方法と問題意識に関連し、それを分析する際には、テキストがもつ歴史的コンテキストへの説明が必要となろう。こうした作業を欠いたままで、上記した例のように、翻訳者の感情を過剰に入れ込み、テキストの偏頗を助長させることは、読者の誤解を招きかねないと指摘しなければならない。

他方日本における、ラッセル研究は日本バートランド・ラッセル協会によって網羅的に進められてきた。たとえば早期の例として、『The problem of China』(1922)の訳者⁵である牧野力などの研究者が知られる。しかし、こうした経緯もあって、近年にいたるまでその研究は、ほとんど論理学、哲学の領域に集中しており、近代思想史の分野からの研究は、いくつかの単著——たとえば、関忠果等『雑誌『改造』の四十年』(光和堂、1977)、宮本盛太郎『来日したイギリス人』(木鐸社、1989)などで、ラッセルの訪問をエピソードとして取り上げている——を除けば、ほぼ見られないのが現状である。しかし、すでに述べたように、歴史的コンテキストを踏まえ、思想史的「事件」として「ラッセル」を、しかも一国史に止まらない視座から考えるためには、思想史的分析がきわめて有効であろう。

以上の問題関心と研究状況を受け、本章ではまず、ラッセルの訪問を一つの「思想史的事件」として研究する意義を明らかにする。そしてこの「事件」が当該期の日・中知識人のいかなる目的、そして、いかなるトランスナショナルなネットワークのもとで実現されたのかという経緯を追跡し、「ヨーロッパの戦争」たる第一次世界大戦後の東アジアにおける、国境を越えた社会思潮および共通的問題関心への考察を行う。

第1節 「思想史的事件」としての「ラッセルの訪問」

序章ですでに述べたが、日本思想史の領域で「事件」といえば、一般的に子安宣邦氏が『事件としての徂徠学』(筑摩書房、1990)において提示した、「言説＝事件」という方法論的視座を想起させられる。ここで繰り返すが、子安氏の概念体系は、自らを「言語論的転回」の系譜に位置づけ、ミシェル・フーコーの「知の考古学」を方法的に継承せんとし、

歴史事象としての「事件性」とディスコースとしての「事件性」を同時に取り上げる研究方法だといえよう。こうした手法の特徴は、前者の外部性および後者の内部性への考究を通し、「思想史的事件」という歴史事象の外縁の明確化とディスコース内部の連鎖と深化を図る一方、とりわけ後者、すなわち言説の事件性によって、「一度書かれてしまった言説（ディスコース）は、筆者の意図とテキストが乖離し、筆者によって生きられた有限な地平を逃れ出る。（中略）その言説が他の言説と関係を持つことを「事件・出来事」としてとらえ⁶ようとする点にある。かかる氏の方法は、まさに本論で考察しようとするラッセルの各国訪問とその言論が惹起した多岐に亘る議論をアプローチするのに適格な手がかりを与えてくれよう。そこで、こうした視点から、まずこの訪問の歴史事象としての「事件性」を確認しておこう。

ヴェルサイユ条約が結ばれて間もない1920年の10月、時の中華民国の思想啓蒙団体「講学社」の招聘を受けてラッセルは民国を訪れた。時間をやや遡れば、同年の5月から6月にかけてラッセルは、10月革命後初めての西洋訪問団体——イギリス労働党訪露代表団の随行観察員として、内戦と干渉戦争の渦中にある「労農ロシア」を訪問し、レーニン、トロツキー、ゴーリキーおよびメンシェビキのリーダー、ユーリー・マルトフと面会していた。その観察および分析を米国の「ネーション」誌に連載投稿し、のち『The Practice and Theory of Bolshevism』（London: George Allen & Unwin Ltd, 1920）という一冊の著書にまとめ上げた。このロシア訪問をめぐるのは、未だシベリア出兵論争が落ち着いていない日本でも、共時的な翻訳がいくつも出ており、例えば大蔵省理財局がその『調査月報』で「露西亜を訪ふの記」（1920年9月号）を掲載し、在野でも1920年10月号の『我等』誌の「労農ロシアを訪うて」（大山郁夫訳）、新聞『財政経済時報』の「ソヴィエト露西亜、1920」（田辺忠男訳）などが見られる。ほぼ同時期、同様のテキストは、民国期中国における「新文化運動」⁷の旗手・陳独秀が編集し、のち中国共産党の準機関誌となる『新青年』の第8巻第2号（1920年10月1日発刊）においても訳され（雁氷訳、「游俄之感想」）、両国の知識人より注目されていた。

この著作において、第一次世界大戦中に絶えず反戦平和を唱え、独立労働党の内部でもラディカルな左派の立場を貫いてきたラッセルは、ボルシェヴィキ政権の理論と実践を考察し、現地のルポタージュとともにマルクス主義への理論的批判を行った。このたった一冊の書物は、まるで爆弾のような力をもって、と直ちに東西の進歩的知識人の間に批判と論争の嵐を巻き起こしたのである。なぜならばそれは当時のヨーロッパにおいては、「ロシア革命を支持することは左派にとって必須であり、そうしなければ明らかに裏切りと見なされた」⁸からであった。ラッセル自身の回想によれば「この本は私の好きな人々から憎悪され、嫌いな連中たちに好かれていた」ほどのものであった。ロシアから帰国した直後の1920年6月、ラッセル邸に「中国講学社（The Chinese Lecture Association）」⁹から一通の書簡が届いた。この中国で一年間の講演・講義を要請する書簡に対して「ロシアで受けたショック」¹⁰を和らげたいためか、ラッセルは7月末頃に承諾を伝え、同年10月12日、

彼の一行¹¹は上海の埠頭にたどりついた。

この時期、ロシア革命とパリ講和会議の衝撃に激動していた中国思想界にとって、ラッセルの訪問は大きく待望されていたものであった。ラッセルが北京へ北上する途中、上海、杭州、南京、長沙で行った講演、北京について後、北京大学での哲学講義——「哲学問題」「心の分析」「物の分析」「数学論理」「社会構造学」——、そして「羅素学説研究会（ラッセル学説研究会）」¹²のもとで行った社会学・政治学講義は、「五・四運動」後の中国学界・思想界に文字通りの「ラッセルブーム」を引き起こし、その余韻は長年続いていく。その分析哲学における論理分析的方法論はのち1930・40年代の清華大学哲学系の教授たち——ラッセル思想の最大の伝播者である張崧年（申府）（1893-1986）、哲学・論理学者金岳霖（1895-1984）、新儒家の一人である馮友蘭（1895-1990）、哲学・哲学史家、崧年の弟である張岱年（1909-2004）など——の学問の方法に大きな影響を及ぼし、分析哲学の種を当時まだ幼少期にあたる中国思想界に蒔いたのである。のみならず、中国現代哲学そのものも基本的にラッセルの論理分析の方法によって構築されたという見解¹³もある。他方、ラッセルの政治・社会思想——あるいは「研究系」知識人らがその機関誌『改造』でラッセルの口を借りて宣伝した「ギルド社会主義」、梁啓超らの政治的主張である地方自治論は、民国20年代初頭の「ギルド社会主義」（張君勸）—「科学社会主義」（李大釗）間の「社会主義論争」、1923年の「科学」（丁文江）—「術学」（張君勸）間の「科学と人生観」などの論戦にも繋がっていく。このように、ラッセルの訪問は中国現代思想史に深く烙印したのである。

さらに、1921年7月、ラッセルは、中国からの帰国時、当時の「改造社」社長・山本実彦（1885-1952）の招聘で日本を訪問することになり、慶應義塾大学大講堂で「文明の再建」という講演を行った。そこには、3000人以上の聴衆が集まり、「場内にはいれぬ人が多かった」¹⁴という大盛況だったと山本が回想している。ラッセルはまた、民国滞在中の1921年1月より1923年にかけて、日本の『改造』誌に合計16本の論文¹⁵を寄稿していた。これを受容していた当時日本のマスメディアと知識人は、ラッセルの言論および来訪に熱いまなざしを向け、様々な議論を繰り広げた。のちの章で詳述するが、そのなかには石橋湛山、堺利彦のようにラッセルのロシア観に目を向けた論者もいれば、長谷川如是閑のように民国の立場に立ってラッセルの政治的主張を語る人もいたし、さらにラッセルの政治理論を変容させ、国内の「改造」に適用しようとした土田杏村のような人物もいた。彼らはそれぞれに、ラッセルの言論より各自の関心点を抽出し、これにより当該期国内外の情勢と問題に対する解決策を提供していく。これら日本における言論は、一部、民国にも翻訳・紹介され¹⁶、ラッセルとうい「事件」をめぐって一つの越境的な言論空間を形成していった。

以上見てきたように、「ラッセル来訪」という歴史事象は、当時の民国および日本の思想・言論界にとってまさしく一つ大きな「事件」だったといえよう。それでは、この越境的な「思想史的事件」が成立する背後には、いかなる経緯と言動があったのであろうか。

第2節 ラッセル来訪の実現——「講学社」と「改造社」の協働

ラッセルの招聘にあたった思想啓蒙団体「講学社」は、清末以来論壇の長老であった政治家の梁啓超（1873-1929）をはじめとする「研究系」知識人グループによって創立された学術団体で、梁たちがパリ講和会議に参加すると共に欧州列国を訪問したあとの、1920年8月に結成されたものである。前述したように、「憲法研究会」の名称にちなんで呼ばれたこのグループの前身は、北洋政府期の「進歩党」、さらに遡れば清末期の立憲派にまで辿ることができる。従来の研究では、彼らは、その政治的主張から、同時代の初期マルクス主義者に比べて「保守派」と見なされてきた。また、同時代の知識人も、西洋文化を批判的に捉え、それと中国文化との融合を目指すこの一群を「東方文化派」とも称していた¹⁷。ではなぜこの「保守派」たちによってラッセルの訪問が実現したのか。その背景と経緯を追跡してみよう。

第一次世界大戦後の1918年12月から1920年の3月にかけて梁啓超は、張君勱（嘉森）（1887-1969、国際公法・経済）、徐振飛（新六）（1890-1938、理学士・商学士・国家財政学）、蔣百里（方震）（1882-1938、軍事専門）、劉子楷（崇傑）（1880-？、外交・政治）、丁在君（文江）（1887-1936、地質・生物学）、楊鼎甫（維新）（？-？、政治学）らと共に、大戦後の欧州各国を一年間ほど遊歴した。およそ一年かけて温めてきたこの欧遊計画は、1917年末に第二次段祺瑞内閣（1917年7月17日-12月22日）の財政総長を辞めた梁からの提案であり、ヨーロッパの見聞所感を記録した梁の著述『欧遊心影録節録』（1920）¹⁸での回想によれば、彼はこの外遊の目的を、「第一に自らの学問を探求し、かつまた、この空前絶後の歴史劇はどのように幕を下ろすかをこの目で見て、視野を広くすることであり、第二に、目下まさに正義と人道に基づく外交舞台が繰り広げられており、…私人の資格で我々の無実の苦しみを世界の輿論に対して一言訴えることだった。それなりに国民の責任を尽くすことになる」¹⁹と考えていたようである。

おおよそ2ヶ月後の1919年2月11日、梁啓超一行はロンドンに到着し、一年あまりのヨーロッパ遊歴が始まった。のち彼はパリ講和会議の現場状況を中国国内に伝え、その電文が「五・四運動」の導火線ともなっていく。その後、梁は欧州各国を遍歴し、大戦後のヨーロッパを目の当たりにした。パリでは哲学者のアンリー・ベルクソンとも面会し、深く共鳴しかつ影響されてはいる。この歴訪は、梁が再び中国の伝統的思想文化へ回帰し、やがて師の康有為が唱えた「大同主義」²⁰と同じ系譜にある世界主義に再帰するきっかけとなっただけではなく、「後に教育改革に携わる起点」²¹ともなり、1920年前半におけるJ・デューイ（John Dewey、1859-1952、アメリカ哲学者）、B・ラッセル、H・ドリーシュ（Hans Adolf Eduard Driesch、1867-1941、ドイツ生物学者・哲学者）、R・タゴール（Rabindranath Tagore、1861-1941、印度詩人・思想家）など一連の講学・訪問が実現した契機でもあったといえる。梁の生涯を「維新運動期」（1890-1898）、「亡命鼓吹期」（1898-1912）、「民国従政期」（1912-1920）、「文化活動期」（1920-1929）と4期に分けた狭間直樹氏の視点を借りれば、1920年以降から梁の逝去までにあたるこの時期は、「政界から身を引き、研究執筆・

教育研究に大車輪の奮闘をした時期」²²であった。

清王朝末年から、中華文明の「伝統」と「近代化」の折衷方法を手探りした梁啓超は、当初、師の康有為に従って王朝内部の改革より君主立憲制を唱え、「戊戌の政変」後に日本へ亡命して、明治日本の国家主義に心酔していた。のち辛亥革命の翌年1912年に帰国して政党「進歩党」を組織し、日本型近代化の路線に沿って国会開設と立憲政治に関わるようになった。しかし帰国以来積極的に政治活動に関与し、北京政府の司法総長、財務総長を歴任した梁は、袁世凱の称帝、21か条要求をめぐる内外の軋轢、二回にわたる「府院の争い」²³、張勳復辟、護法戦争によつての南北内戦状態など、不毛な政争と戦争が繰り返される中、もはや政治に直接参与することによる変革に限界を感じていた。くわえて1918年9月に清末以来の同志である湯化龍が、バンクーバーで五国銀行団との借款交渉の際に同盟会会員によつて暗殺された後、梁は一層疲弊を覚えるようになる。彼は、戦後の欧州へと出発する前に、張君勳と黄遡初（1883-1945）と徹夜談話し、「今まで見てきた政治の迷夢から目覚め、悔い改めてきっぱり切り捨てようとお互いに約束した。これからは思想界に微力を尽くしたい。これらの話で我々朋輩に新たな命を得た」²⁴と回想している。

（1920年、筆者注）1月9日、先生（梁啓超）はドイツからパリに戻った。17日、パリからマルセイユに向かい、22日、マルセイユからフランス郵船に乗船して帰国の途につき、3月5日、上海に到着した。今回の帰国後、先生は国家の問題と個人の事業に関して全面的に旧来の方針と態度を改めた。これ以降、上層の政治活動をまったく放棄し、国民の実質的基礎を育成する教育事業に全力で従事することになった。この年に着手した事業には、中国公学の引き継ぎ、共学社の組織、講学社の発起、雑誌『改造』の刷新、中比貿易会社の発足、および国民動議制憲運動などがある²⁵。

帰国後の梁はその中国公学での講演の中で、自国文明に対する「悲観の観念が完全に払拭された」という心情を述べ、単純な欧州模倣の「この百年は、一種不自然な、あるいは病的な状態にあった」と指摘する。そして、奮発して自力で国の進路を模索していくべきことを青年学生たちに鼓吹したのであった。

欧州が現在のようになった理由を考えてみますと、その社会的政治的な固有の基礎を抛り所に、自然に発展して出来上がったからにはほかなりません。その固有の基礎が中国とは異なるものであるがゆえに、中国は欧州を模倣することができなかつたわけで、いわばこの百年は、一種不自然な状態にあった、あるいは病的な状態にあったともいえるでしょう²⁶。

ここからはすでに、梁が東西文明の優劣ではなく、両者の系統がもつ異質さに気付き始めていることがうかがえる。さらに彼は続いて、これまで中国の近代化の試みはなぜほぼ

失敗に終わったのかを論じ、両文明がまったく異なったものであり、無理に接ぎ木しようとしていたから失敗したのだと説明する。彼はまず、西洋政治制度の主流としての代議制はヨーロッパ社会に固有の階級に対応した制度であるのに対し、中国は古来、貴族や地主など中間階級がそれほど強力ではなく、御史制度など「民意政治の雛型」もあったことから、「集権は中国の国民性と最も相容れないものであり、それを強行すればその結果は反動を生じるのでなければ、必ず変態を生じる」と主張した。次に社会面では、中国の社会制度はそもそも互助精神に富んでおり、競争という概念はなかったし、無理に「他人の競争主義を真似る必要などない」とし、経済面においても不合理的な資本主義制度の代わりに、古来の小農制度を維持発展すればよいと、「中国に対して非常に楽観的になり」、「要するに我々は固有の国民性を発展させ輝かしいものにしていくべき」であることを説いた。しかし最も必要とされるのは、「消極を積極に切り換える」ことで、すなわち政治の民本主義が消極的反対に留まっていたものから、積極的な組織の段階に転換すべきであり、社会面の互助主義の伝統も家庭内から社会へと押し広げるべきだとした。レーニンの「刻苦の精神、主義に忠実なる精神」と共に、「行動面においては着実さ」をもって改革を行えば「前途はまさに無限に広がります」と力強く説いたのであった。

梁のこうした異文明接触の視座は、より発展した形でその観察記『欧遊心影録節録』(1920)に反映されている。全部で8篇の文章²⁷からなるこの冊子は、梁が本来構想した全体ではなかった。「欧州遊歴中、先生は機会あるごとに経験や観察、感想を書き留めていた。パリに滞在していた時、その一部を整理したことがあるが、帰国後は処理すべき事柄が山積みになっていたため、そこまで手をつける余裕がなかった。そのため、全篇を完成するには至らなかった」²⁸からである。『年譜長編』によれば、「上記の数篇の中で最も重要なのは第一の文章の下篇——「中国人之自覚」である。この文章を読めば、先生の思想や見解の転変の軌跡、および将来の政治、社会等の問題に対する主張がわかるからである」²⁹。ここで簡単に、この時期において彼の最も核心的思想を映し、その後の啓蒙行動にも繋がっている第1篇「欧遊中之一般観察及一般感想」につき触れておこう。

この文章の上篇となる「大戦前後之欧州」で梁は、まず歴史の大変局と今後の国際情勢不安、大戦後のヨーロッパ各国の財政破綻および社会革命の暗潮、それに伴って社会思潮における「科学万能の夢」の失墜や自然主義文学の無気力さ、さらに欧米に蔓延する「西洋の没落」という悲観主義を描いた。しかしそこで梁は筆鋒を一転して、西欧文明は必ずしもエジプト文明やローマ文明・ギリシャ文明のように凋落することはなく、それが民衆の力と自覚に基づくボトムアップ型の文明である限り、少数者の貴族文明よりはるかに堅実だと主張する。「だから私は、ヨーロッパの前途には万難あると見るが、それは墮落するものではない」³⁰と見ていた。なぜなら、彼によれば、強固な基盤を「大多数」に置く文明が最も生命力が強いからである。

欧州百年来の物質上、精神上の変化はすべて「個性発展」によってもたらされてきた。

今でも日々そのように働いている。その文明は古代、中世ないしは18世紀前の文明における根本的な相違点は、前者は貴族的、受動的文明であるのに対して後者は、群衆的自発的文明であるところにある。昔の文明は少数の特別に天才的で地位も高い人に維持されていた。したがってその特別者がいなくなればすぐに滅亡する運命から逃れられない。この世の文明は、全社会の個々の一般人が日々創造されてきた。質は前者より劣る場合はあるが、量的にははるかに豊かであるし、その力もより持続的である。今のヨーロッパは一言でいえば、万事万物は「群衆化」されつつある。(中略)現代のヨーロッパ人は依然と日々自我の発展をもとめている。外界の圧迫に挫けずに反抗し、日々精進している³¹。

かくして彼は、ヨーロッパ各国が財政物質的困難を抱えておることを認めつつも、精神面ではクロポトキンの互助的社会学や、哲学において人格唯心論を説くジェームズ、直覺的創造進化論を唱えるベルクソンなど新しい気運が育まれていることに着目し、必ずや新しい局面を開けるはずであると断言した。また、西洋文明におけるこういった「民衆の力」を最も重視し、かつ漸進的に啓蒙と分権を施してきた国はイギリスであると主張する。

昔の英国においてごく少数の貴族に専有された種々の権利は、徐々に中間層の人々に共有され、さらに中下層のないしは最低層の人にも享受されるようになった。物質上の権利に留まらぬ学問や芸術ひいては思想的権利も、上から下へ、集中から分散への趨勢をたどっていた。イギリスは最良のモデルであるが、他国でも同じ過程を歩んできた。即ちその文明は、大多数の人の心理に築かれている文明であって、基盤の強い家屋のように、どれほど狂暴な嵐に吹かれても簡単には動揺しないものである³²。

「文明」の持続を重視する立場から梁は、イギリスを西洋文明の最良モデルとし、その「権利分散」を強調する。こうした評価をみれば、梁は、すでに明治維新のような日本式近代化の道、すなわちトップダウン型の改革路線を放棄しており、下から漸進的に啓蒙改良するという自由民主主義的政治路線へ転換しつつあることがうかがえ、またそれが彼の最晩年にいたるまでの思想・文教活動に一貫性をもたらしたことが分かるであろう。そしてここで何よりも重要だと考えられていたのは、広大な国土に分散されている無気力、無関心な「民衆」を、「自治」の意識を持ち、主体的責任と実践を持つ「国民」の育成であった。

文章の最後に梁は、この欧州歴訪から得た観察を全体的に概観し、近い将来の国際情勢を予測している。

第一、大戦の結果として塙露瓦解、中東・東欧の小民族は相次いで建国するようにな

ったし、ウイルソンが鼓吹した「民族自決」に加えて、民族主義はますます勢いよく発達するだろう、19世紀後半期以来のヨーロッパ民族運動史はようやく一段落を終えたが、ヨーロッパ以外に拡散される可能性も大きいであろう。国際関係はますます天下多事で複雑になるが、人類の社会組織の一進歩ともいえなくはない。第二に、連合国は「互助」に頼って勝利を得たことによって頗る大きな教訓を得た。理想的な国際連盟は未だに完成されていないが、国家互助の精神は日々発達していく。一言でいえば、世界主義の始まりである。第三、連合国の「中央軍国打破」を旗に軍閥征討の十字軍によって、専制主義の四大本営（露独墮土）は根こそぎされ、民主主義は政治における絶対原則となるはずである。社会党の発展に加わって、「社会的民主主義」は最たる中庸的政治になる見込みである。第四、ロシア過激派政府は成立して2年も倒れていないから、いずれにしてもその精神は不滅なものになるはずである。馬鹿にされていた空想はしっかりした制度に結実された。その歴史的価値は、フランス革命に劣らないものとなるし、その影響も他国に及ぼし、前条の「中庸政治」と比べても勝負がつかないであろう。第五、各国は一面で国内の労資階級闘争に直面し、一面では国産を奨励する。こう行けば将来は国際間の産業闘争は激化の一途で、自由貿易主義は危ない。ここから見れば、急展開した社会主義はしばらく遮断されることになるだろう。第六、「科学万能」はかつてほどに猖獗しないが、その専門内で引き続き進歩していくであろう。今回の戦争では各種の発明は日進月歩したが、惜しいことに大半は殺人用に供されていた。この度の大病を経て、30余年の国際平和が望まれるであろう。よく利用すれば物質文明は必ずより何倍もの発達を遂げよう。第七、今回の戦争は人類の精神に莫大の刺激を与え、人生観においては自然と一大変化が起こる。哲学の再興、ないしは宗教の復活も意中のことである。以上はこの旅の観察の大概である³³。

ナショナリズムの拡散、世界主義の萌芽、社民主義の発達、ボルシェヴィズムの影響、ブロック経済の生成、科学技術のさらなる進歩、哲学および宗教の復興などの趨勢を予見した梁は、このような複雑極まる状況に、中国人が如何に対応していくべきかをさらに下篇の「中国人之自覚」で提案した。彼は「世界主義」「中国不亡」「階級政治と全民政治」「急がないこと」「尽性主義」「思想解放」「徹底原則」「組織能力と法治精神」「憲法における職業選挙と国民投票」「地方自治」「社会主義の精神を重んじ方法を提唱しない」「国民運動」「世界文明に対する中国人の大責任」という13条の原則³⁴を提出し、おおよそ啓蒙と世界主義・自由主義的立場から理想と実践の結合、そして東西文明の「化合」³⁵による新文化の創造を青年たちに勧めたのである。

このように、戦後欧州の頹廃との格闘から、自国文明の新たな価値と可能性を見出し、両者の「化合」を目指すに至った梁らは直ちに行動をとり始める。まず着手されたのは、新思想の輸入・翻訳を主務とする啓蒙学術団体「共学社」の設立である。共学社の主要活動は、1、新書の編纂・翻訳³⁶、2、図書館事業³⁷、3、雑誌の出版³⁸、4、留学生の選抜派遣事

業、であった。そしてちょうど「新文化運動」期の出版ブームに合わせて、共学社からも叢書を出すこととなる。すでに商務印書館との協力体制も整っており、これが商務印書館から出版されることも決まっていた。

つづいて、欧米の著名な学者たちを中国に招いての講学・講演を催す計画も徐々に進められていく。この件が史料上はじめて確認できるのは、1920年5月3日、梁啓超が商務印書館の経理・張元済に宛てた書簡³⁹である。ここで梁は、ベルクソン来華講演の招聘に関する具体的費用および諾否について問い合わせている。これにより梁たちが、当初招聘しなかったのは、フランスで直に面会したことのある哲学者アンリー・ベルクソンだったことが分かる。しかし、『年譜長編』では理由について触れられていないものの、ベルクソンは来華の招聘を断り、そのため新たな人選が求められることとなった。ここに、ラッセルの名が登場することとなる。7月30日付きで、梁啓超が梁伯祥と黄遡初に宛てた書簡からは、ラッセル招聘にかかるディテールの一部がうかがえる。

2か月前、搏砂が傅佩青を伴って天津を訪れた際、イギリスの哲学者ラッセルの講演招聘について話し合いました。当時ただちにラッセルに電報を打ったので、10月中には返電が届くはずですが、その費用は搏（王敬芳）、石（胡汝麟）の両兄がその大部分を負担する予定です。近ごろ手紙を寄越して、どういう名義で招聘するかにつき相談してきたので、私は返書の中で、中国公学⁴⁰の名前を使うのが一番良いが、新学会⁴¹と尚志会⁴²を加えても差し支えない、と答えておきました。これは同人たちが共同で提唱した事柄ですから、経費をいささかでも分担できれば、さらに望ましいでしょう（梁伯祥、黄遡初宛梁啓超書簡、1920年7月30日付き）⁴³。

「傅佩青」とは当時北京大学の哲学教授・傅銅（1886-1970）のことで、彼は、まさにロンドンのラッセル邸に転送された書簡の署名者であり、のちには北京大学「羅素学説研究会」の組織者ともなる。傅は1913年よりバーミンガム大学の哲学科に留学し、修士の学位を取った。その際の指導教官ミュアヘッド（John Henry Muirhead, 1855-1940）はラッセルの青少年時代からの友人であった⁴⁴。こうした経緯でこの招聘状はミュアヘッドを經由してラッセルに届いたのである。その内容は、ラッセルに一年間の任期での北京大学訪問教授（visiting-professorship）就任を要請するもので、報酬として2000ポンドにくわえ、往復の船賃も支給するという当時として極めて高額を提示するものだった。ちなみに、その招聘状には、数学、哲学の講義は勿論のこと、ラッセルの政治観点も「我々に大いに歓迎される」と書かれている⁴⁵。ちょうどこの時期「労農ロシア」の訪問を終えてイギリスに戻ったラッセルは、ボルシェヴィズムはただもう一つの「西洋近代」が生んだ「産業病児」であることを発見し、西洋文明にはもう救いようがないという幻滅に襲われていた。このような絶望と幻滅を癒すものは、もう一つの古い文明にあるのだろうか。ラッセルは新たな期待を抱いて7月の下旬に、承諾の返信をしたのである⁴⁶。

一方、8月8日、傅銅は梁啓超に宛てた書簡で、招聘団体を多めにした方がよいこと、また余った資金で団体を設立し、「国外名哲聘請団」などといった長期事業として発展させるべきであることを建議した。

招聘者の人数あるいは団体数は、多ければ多いほど結構です。これもまた一種の国民外交ですから。学校はもとより可、報館も可、商工界の人物や団体、たとえば張四先生（張騫）や南洋兄弟煙草公司なども可です。先ごろ教育次長（当時は傅嶽棻）にその話をしたところ、教育部もほぼ引き受けてくれるということなので、急ぎ公告を印刷して各所に分送してください。公告では、集めた金についても、もし足りなくなった場合には某人あるいは某団体がそれを補うこと、余った場合にはそれを使って他の人物、たとえば「国外名哲聘請団」といった名義を立てられるかも知れません（傅銅から梁啓超宛て、1920年8月8日付き）⁴⁷。

9月5日、梁啓超から張東蓀宛てに送られた書簡には、「講学社」の設立に関する事項がみえ始め、10日の書簡では、講学社の規約および董事会の名簿が添付して送られている。

入京して講演にかまけているうちに、みるみる半月も経ってしまいました。いま進めていることは以下の通りです。

一、恒常的な団体を組織して講学社と名づけ、毎年、名哲一人を中国に招聘して講演してもらうことにします。

一、講学社の董事（理事）は、とりあえず以下の諸氏とします。伯唐（汪大燮）、子民（蔡元培）、亮疇（王寵惠）、秉三（熊希齡）、仲仁（張一麐）、任公（梁啓超）、静生（范源廉、教育総長）、夢麟（蔣夢麟）、搏砂、陳小莊（陳宝泉、高師校長）、金仲蕃（金邦正、清華校長）、張伯苓（張寿春）。さらに範孫（嚴修）、季直（張謇）、菊生（張元濟）にも依頼するつもりです。まだ本人の同意を得ていませんが、たぶん喜んで就任してくれるでしょう。

一、経費は、3年を期限として政府が毎年2万元を補助してくれます。このほか、こまごまとした寄付金も1万元余り集まりました（梁啓超から張東蓀宛て、1920年9月10日付き）⁴⁸。

講学社の規約および董事会（理事）の名簿をお送りしますので、新聞に掲載してください。2年目に招聘する人物ですが、すでに董事会はオイケンに決めました。郭（秉文）、黄（炎培）の二君は、もともと二人とも董事会に名を連ねていたはずですが、ひょっとして前の手紙で名前を挙げるのを忘れてしまったのでしょうか（梁啓超から張東蓀宛て、1920年9月5日付き）⁴⁹。

以上の史料からも分かるように、「講学社」は、ラッセルの来華がほぼ決まった段階で設立された運営団体であり、その資金は各所からかき集められたものである。そして「名哲」の来訪も、梁をはじめとする一群の知識人が発起したものの、その趣旨は必ずしも自らの主張を宣伝するためだけのものではなく、むしろ新文化運動後期にある民国思想界の全体の進歩、そして青年学生や国民の啓蒙を企図するものであった。このことは、「共学社叢書」の出版書目からもうかがうことが出来る。「共学社叢書」は、商務印書館より、1920年9月から1935年7月までの15年間に渡って刊行されたが、その内容は、17部門の叢書、86種類の訳書からなり、思想的に分類すればマルクス主義、ギルド社会主義、アナキズム、改良主義、リアリズムなどであり、また内容的には文学、歴史学、政治・経済学、哲学、科学、教育など多岐にわたるもので、必ずしも特定の学問に偏る内容ではなかったといえる⁵⁰。

同じ頃、日本の「改造社」にもラッセル来訪の消息が伝えられていた。当時改造社の編集長を務めた横関愛造（1887-1969）の回想によれば、ラッセルが中国に到着する前の1920年9月頃にはすでに、雑誌『改造』（共学社機関誌・民国側）の主宰者蔣方震氏から連絡を得ており、これを受けた横関はラッセル招聘のために北京に赴き、直接ラッセルと面会している。

1920年9月だったろう。中国の雑誌『改造』の主宰者蔣方震（百里）氏から、今度北京大学の招待で、バートランド・ラッセル教授が、約半ケ年間、大学の講壇に立たれることになった。すでに英国を出発されて上海への船中におられるが、この機会に日本の大学で招待される所はないかと、私たち改造同人に連絡があった。好機逸すべからずと、私たちは二、三の大学に当たってみたが、何分にも社会改造論、非戦論などの看板を掲げた学者であつては、日本領土への上陸さえ許されぬだろうという見透しから、どこの大学でも敬遠されてしまった。こうなったら、いっそ我々（日本の）改造同人で招待しようではないか。勿論、創刊してまだ一ケ年半の一雑誌社がそんな企てをしてみたところで、とてもラッセル教授は承諾してくれまい。しかしこの機会をのがしては再び実現することはむつかしかろう、ということになり、直ちにその旨、北京の蔣方震氏に打電した。蔣氏からは折り返して返電が来た。しかもその文面には、「喜んで改造社の申し入れを取り次ぐ。われわれもむしろ大学よりは改造社の招待を希望する」ということであつた。ラッセル教授が上海に着いたという外電を新聞で見たその日、蔣氏から電報で、「教授は承諾してくれそうだ。詳しいスケジュールを知らせろ」という知らせである。我々は喜んだ。電報の往復ではらちがあかぬ。いっそ北京に行って直接談判しようではないかということになり、私が同人を代表して直ちに北京に向かった。1920年10月のことである⁵¹。

このように横関は日本の「改造社」を代表して北京に赴きラッセルと面談したのであつた。当時、日本政府による言論弾圧、検閲は厳しいもので、自由主義者と目されたラッセル

ルは上陸さえ許されない可能性がかなりあった。また戦中、ラッセルはイギリス国内で反戦的活動や講演を行ったため、一時ドイツのスパイではないかとイギリス陸軍省に疑われ、アメリカへの講学のためのビザ発給も阻止られたし、イギリス沿岸部への立ち入りも禁止されていた。したがってラッセルは日本の上陸が許されるかどうかを心配していた。これに対して横関は「日本に「当たって砕けろ」という諺があります。何事でも突き当たってみると案外開ける道がある」⁵²と率直に訴え、ラッセルもその場で日本の訪問を承諾した。くわえて当時の駐華公使小幡酉吉はこの件をめぐって、日英外交関係の不祥事にならぬようにといった内容の要望書を外務省本省に送った⁵³ため、ラッセルの日本上陸も講演も特に厳しい取り締まりには合っていなかった。

おわりに

本章では、「ラッセルの訪問」という一つの越境的な歴史事象を取り上げ、その意義および成立の条件と背景を追跡してきた。結論からいえば、第一次世界大戦後の東アジアという共通する状況を背景に、中日両国の知識人は各自の関心によって行動しつつも、互いの協働を通してラッセルの両国訪問を実現させたといえる。梁啓超をはじめとした「研究系」知識人は、ヨーロッパ遊歴後の体験より西洋文明への批判的考察から、「東西文明の化合」を企図し、青年学生・国民を啓蒙する目的でラッセルを招聘していく。一方、日本の改造社は、梁たちのグループとのネットワークを保持しているという前提のもとで、自らの総合インテリ誌としての地位を高め、また大正期日本の思想界に新思想を紹介するという目的を持ってラッセル招聘に動いた。「ラッセルの訪問」という一見孤立した歴史事件ではあったが、その背後には無数の人々の思惑と行動が交錯し、そのなかには、トランスナショナルなインタラクションがなくては決して成り立たないものもあったのである。

「歴史的存在」としての「B・ラッセル」という個体は、その経験と思想が故に深遠な問題意識と鮮明な個性を持っており、そしてその訪問先の「労農ロシア」、中華民国、帝国日本は同じく第一次世界大戦後の時点に立っていながらも、それぞれ内外の具体的な問題を抱えていた。各国の知識人が直面している問題もそれぞれに、普遍性と特殊性を包含したものであった。一方でラッセルの哲学・政治理論および国際時論は、日中両国のメディアと知識人によって咀嚼・伝播され、両国の近代思想史上に足跡を残していく。彼自身もこの一年余りの露・中・日訪問を通じて、「東西文明」ひいては時代自体に対しての思索を深め、それは著作としても結実している。

以上の検討から、本稿は二つの視点を導くことからできる。まず、この訪問が双方向的な効果を生んだことである。先行研究は、ラッセルの受容ばかりが語られるが、実際この訪問からラッセル自身も大きな影響を受けていた。よって「事件」としてのラッセル訪問を考える際には、こうした視点を見逃すわけにはいかない。次に、この「事件」が典型的なトランスナショナルな「思想史的事件」であったということである。とすれば、それを

論じる際には、越境的かつ共時的視点をもって行わなければならない。こうした点も諸先行研究においては看過されてきたといえよう。よって本稿は、この二点に特に留意して、ラッセルという「事件」を追っていくこととなる。

それでは、ラッセルは、より具体的にいかなる思いを持ち、何を求めて「遠東」に来たのか、また当時、「大正デモクラシー」期および「新文化運動」期における日・中の知識人は、この「名哲」の思想に何を求めていたのか、これらの点について、後章で論じることとしたい。

¹ カッコ内の日本語訳文は筆者による直訳である。邦訳著書の題名は刊行の年代、訳者によって様々であったため、それら具体的な書誌情報については、各著述の内容を紹介する際に説明をくわえた。以下同様。

² 例えば、馮崇義『羅素与中国——西方思想在中国的一次経歴（ラッセルと中国 中国における西洋思想の一つの経歴）』（三聯書店、1994）、胡軍『分析哲学在中国（分析哲学の中国受容）』（首都師範大学出版社、2001）、丁子江『羅素与中華文化（ラッセルと中華文化）』（北京大学出版社、2015）など。

³ この書簡は主に「ロシア過激派の前途」（『改造』1921年2月号掲載）という原稿への感謝および『改造』新年号掲載の「愛国心の功過」という一文の反響、そして日本現在の政治情勢について述べたものである。

⁴ 陳啓偉訳『羅素自伝』第2巻、商務印書館、2003、206頁。

⁵ バートランド・ラッセル、牧野力訳『中国の問題』、理想社、1970。

⁶ 子安宣邦『「事件」としての徂徠学』筑摩書房、2000、11頁。

⁷ 中国で1910年代中ごろから20年代初めにかけて広がった文化面での近代化を目指す運動であり、儒教等の伝統的思想・文化に対する批判と西洋近代の新文化・新思想の紹介・吸収という2本の柱があった。この運動の主な推進者は北京大学の教員たちで、雑誌「新青年」を中心舞台に論陣を張った。内容としては次の各項があげられる。1、陳独秀、吳虞らは帝制・封建制のイデオロギー的支柱としての儒教を批判し、守旧派に論戦を挑んだ。陳はまた〈民主と科学〉のスローガンを掲げた。これは新文化運動の総精神を表現したものといえる。2、西洋近代の思想・哲学方面の紹介としては、コントの実証主義、ミルの功利主義、ショーペンハウアー、ニーチェ、ベルクソンらの哲学、デューイのプラグマティズム、プルードン、バクーニン、クロポトキンらのアナキズム、ラッセルのギルド社会主義、マルクス主義などがあり、1920年代には社会主義をめぐる論戦が行われた。3、胡適は『文学改良芻議』などで言文一致の必要を提唱し、白話（口語）による新詩を発表した。陳独秀は胡の提案をうけて『文学革命論』を著し、近代文学の建設を呼びかけた。魯迅は封建礼教を鋭くえぐった『狂人日記』（1918.5）や『孔乙己』（19.4）、『薬』（19.9）などの小説とエッセイを発表した。4、西洋近代文学は、ツルゲーネフ、トルストイ、チェーホフ、イブセン、アルツィバーシェフ、タゴール、モーパッサン、オスカー・ワイルドなどが紹介された。新文化運動は全体として反封建的・民主主義的性格を帯びていたが、末期には社会主義的色彩が濃厚となった（斎藤道彦「新文化運動」、前掲安宇植等編『世界文学大事典』）。

⁸ ドラ・ラッセル、山内碧訳『タマリスクの木 ドラ・ラッセル自叙伝』リプロポート、1984、205-206頁。

⁹ The Collected Papers of Bertrand Russell, Volume 15: Uncertain Paths to Freedom: Russia and China, 1919-22, Edited by Richard A. Rempel and Beryl Haslam with the assistance of Albert C. Lewis and Andrew Bone, London and New York: Routledge, 2000,

p. xlviii. ここで用いたこの「バートランド・ラッセル著作集 (The Collected Papers of Bertrand Russell)」(別巻『著作目録』3巻を含めて総計全39巻、現在のところ、20巻はすでに出版された)は、カナダ・マックマスター大学の「バートランド・ラッセル研究センター (The Bertrand Russell Research Centre)」より編集・刊行された史料叢書で、ラッセルのケンブリッジ時代からの著作・論文・時論・書簡などを時系列・ジャンル別に分けて収録している、現在ラッセル研究の第一級史料である。日本語訳はないため、本稿での引用はすべて筆者によって訳したものである。全目録はホームページに掲載されている。<http://russell.mcmaster.ca/brworks.htm>.

¹⁰ バートランド・ラッセル、日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、理想社、1971、145頁。

¹¹ ラッセルの訪問に同行したのは、この後、1921年9月に結婚し、第二の妻となるドラ・ブラック (Dora Black, Countess Russell, 1894-1986) であった。ドラは作家、フェミニストであり、社会主義的活動家であった。著作には『The Right to Be Happy (幸せになる権利)』(New York and London, Harper & Bros, 1927.)、『In Defence of Children (児童を守護するために)』(London, H. Hamilton, 1932.)があり、自叙伝『The Tamarisk Tree: my quest for liberty and love (タマリスクの木 愛と自由に対する私の探求)』(New York, G. P. Putnam's Sons, 1975.) (『タマリスクの木 ドラ・ラッセル自叙伝』山内碧訳、リプロポート、1984)は日本語に訳されている。1920年にドラは、ラッセルを追いかけて違うルートからロシアに入国滞在していた。ボルシェヴィズムに対して同情的な立場を採り、ラッセルと論争になった。二人の論争を、「彼女(ドラ・ブラックのこと、筆者注)は、私がボルシェヴィキに反対しているのを、ブルジョア的で、老いぼれた考えであり、感傷的だと考えた。私は、彼女のボルシェヴィキ崇拜を、当惑と恐怖で眺めた」(日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、理想社、1971、145頁)とラッセルは自叙伝で回想している。のち民国と日本への訪問もラッセルと同行していた。1921年春に妊娠し、9月にラッセルと結婚、11月に長男ジョン・ラッセルを出産した。

¹² この会は、当時北京大学教授・傅銅(1886-1970)の主導で組織された研究会であり、ラッセルも同会に出席していた。同会から、ラッセルとドラの講演についての筆記や、知識人の解題などの文章を載せた『羅素月刊』(1921、全4冊)を刊行している。

¹³ 「本書は、中国現代哲学の構築方法は基本的に分析方法そのものであると主張したい。中国における分析哲学の受容に関して、ラッセルの来華講学はその主要な促進的要因であり、洪謙によってもたらされたウイーン学派の論理実証主義思想はそのもう一つのルートを成している。20世紀20年代は分析哲学が広がりつつある時代で、30、40年代になると、論理分析の方法によって構築された哲学思想体系、とりわけ張岱年の思想体系が現れていた」(胡軍『20世紀西方哲学東漸史 分析哲学在中国』首都師範大学出版社、2002、とくに「内容提要」部分を参照)。

¹⁴ 『出版人の遺文 改造社山本実彦』、栗田書店、1968、60頁。

¹⁵ ラッセルは1921年元旦より1923年にかけて、以下合計16本の論文を『改造』に寄稿している。「愛国心の功過」(改造編集部訳、『改造』3(1)、1921.1、3-14頁)、「過激派露西亜の前途」(改造編集部訳、『改造』3(2)、1921.2、2-17頁)、「現下の混沌状態の諸原因」(改造編集部訳、『改造』3(3)、1921.3、2-22頁)、「社会組織良否の分岐点」(改造編集部訳、『改造』3(4)、1921.4、179-197頁)、「工業主義の内面的傾向」(改造編集部訳、『改造』3(9)、1921.8、2-16頁)、「工業主義と私有財産」(改造編集部訳、『改造』3(10)、1921.9、71-80頁)、「文明の再建」(同上、205-211頁)、「ワシントン会議と極東の将来」(改造編集部訳、『改造』4(3)、1922.3、101-116頁)、「支那の国際的地位を論ず」(改造編集部訳、『改造』4(4)、1922.4、100-117頁)、「工業主義と国家主義との相互作用」(改造編集部訳、『改造』3(11)、1921.10、p.78-91)、「未開国における社会主義」(改造編集部訳、『改造』4(5)、1922.5、75-94頁)、「先進国における社会主義」(改造編集部訳、『改造』4(7)、1922.7、88-103頁)、「支那文明と西洋」(改造編集部訳、『改造』4(8)、1922.8、58-68

頁)、「相対性理論」(改造編集部訳、『改造』4(10)、1922.10、2-19頁)、「機械主義に対する抗議」(改造編集部訳、『改造』5(2)、1923.2、65-86頁)、「道徳的標準と社会的幸福」(改造編集部訳、『改造』5(9)、1923.9、155-174頁)。

¹⁶ 例えば長谷川如是閑の「ラッセルの社会思想と支那」(『読売新聞』1920年11月10日から12月6日まで連載)は1926年上海商務印書館刊行の『東方雑誌』23巻13号に抄訳されていた。

¹⁷ 1923年鄧中夏(1894-1933)が「中国現代的思想界(現在中国の思想界)」という文章ではじめてベルクソンの「生の哲学」を唱え、近代性問題を反省する梁啓超、章士釗(1881-1973)らに「東方文化派」の名を与えた(鄭師渠「反省現代性的兩種視角 東方文化派与学衡派」『北京師範大学学報』、2013)。

¹⁸ 梁啓超「欧遊心影録節録」『梁啓超全集第10巻 欧遊心影録』北京出版社、1999、2968-3045頁。北京出版社より刊行されたこの全集は日本で出版されておらず、ここで引用した「欧遊心影録節録」は、筆者が中国語から日本語に訳したものである。

¹⁹ 丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編 第四巻 1915-1922』岩波書店、2004、260頁。以下では『年譜長編』と略称する。

²⁰ 大同思想とは、中国的ユートピア思想で、階級的差別や搾取のない自由平等平和の社会を構想する。大同とは、『礼記』礼運篇に「権力を独占する者がなく平等で、財貨は共有となり生活が保障され、各人が十分に才能を発揮することができ、犯罪も起こらない世の中」と定義されているが、考え方としては、それ以前の文献にも、墨子の兼愛交利とか、老子の小国寡民とか、許行の君臣並耕などのように、断片的にはあるが数多く現れている。漢代以後は、消極的な現実逃避的な思想の描く理想郷、神仙の世界に投影されたものと、積極的に政治的な理想としての井田制の実現を企図したものが現れている。また歴史上しばしば発生した農民起義(叛乱)においても、大同的世界の実現がその目標となっていた。清末変法運動の指導者康有為は、礼運篇の説と春秋公羊学の三世説とを結び付けて大同世に至る段階を『礼運注』において、また現世における苦しみの状況とそこから大同世に至る道程および大同世のありさまを『大同書』(1935)において描いている。ちなみに、1919年の国際連盟の成立は、康有為には大同世の実現と映ったようである(有田和夫「大同思想」、『日本大百科全書』、小学館、1984-1994)。

²¹ 前掲『年譜長編』、234頁。

²² 狭間直樹編『共同研究梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999、iv頁。

²³ (第一次)府院の争いとは、1916年6月に袁世凱が死去し、後任大総統に就任した清朝旧官僚出身の黎元洪と北洋軍閥出身の安徽派軍閥、國務総理段祺瑞の間で、臨時憲法、対独参戦などをめぐって行われた政治闘争である。大総統の総統府と國務総理の國務院の間の闘争であることから「府院の争い」と呼ばれている。1917年5月に黎元洪は一旦段祺瑞を罷免していたが、清朝に尽忠する安徽督軍の張勳が立憲君主制を目指す康有為を呼び寄せ、廢帝溥儀を復位させると、事態は自前の兵力を持たない黎元洪の手に負えなくなり、黎は日本大使館に逃れた。ここで段祺瑞は日本の支援も受けて天津で5万人ほどの「討逆軍」を組織し、7月12日北京を再び奪い返し、第二次内閣を組閣することで、権力の座を取り戻した。

²⁴ 前掲『年譜長編』、257-258頁。

²⁵ 同上、292頁。

²⁶ 同上、299-300頁。

²⁷ 「欧遊中之一般觀察及一般感想」(上篇「大戦前後之欧州」、下篇「中国人之自覚」)「欧行途中」「倫敦初旅」「巴黎和会鳥瞰」「西欧戦場家形勢及戦局概観」「戦地及亜・洛(アルザス・ローヌ)二州紀行」「国際連盟評論」「国際劳工規約評論」の8篇である。

²⁸ 前掲『年譜長編』、290-291頁。

²⁹ 同上、291頁。

-
- ³⁰ 前掲『梁启超全集』、2977 頁。
- ³¹ 同上、2976 頁。
- ³² 同上。
- ³³ 同上、2978 頁。
- ³⁴ 同上。
- ³⁵ 同上。
- ³⁶ 1920 年 9 月から 1935 年 7 月の 15 年間にかけて商務印書館より出版された「共学社叢書」のことである（孫増徳「梁啓超と共学社叢書」（『滄桑』6、2011、81-83 頁）、82 頁）。
- ³⁷ 蔡鏗（1882-1916、清末民初の軍人・政治家）を記念して創設された「松社」を、北京へ移転すると共にその規模を拡充し、「松坡図書館」と命名して、梁啓超は自ら館長を担当することになった（同上）。
- ³⁸ 1919 年 9 月より発行された雑誌『解放と改造』を、1920 年に『改造』（1919 年 9 月-1922 年 9 月、計 4 卷 46 期）へと改名し、「共学社」の機関誌にした（同上）。
- ³⁹ 前掲『年譜長編』、310-311 頁。
- ⁴⁰ 1905 年 11 月に文部省より頒布された「清韓日本留学生取締規則」を受けて帰国した留学生たちが「留日学生総会」のもとで発起し、翌 1906 年に設立した大学である。1932 年第一次上海事変の際に中止となるが、のち 1949 年重慶で大学として復活。1953 年に四川財經学院（現在の西南財經大学）に編入された。
- ⁴¹ 新学会は 1918 年秋に張東蓀、梁啓超、蔣百里、張君勱ら 20 余名の知識人によって発起された学術団体で、趣旨は学術思想における「根本的改造」をもって「新中国の基礎」となすことある。機関誌は『解放と改造』（1920 年 5 月に『改造』へ改名）（左玉河「上海：五四新文化運動不容忽視的另一个中心——以五四時期張東蓀在上海的文化活動為例」（『安徽大学学报（哲学社会科学版）』2013、105-113 頁）、109 頁）。
- ⁴² 「尚志学会」のことを指している。同会は同じく「研究系」知識人によって結成された学術団体で、「尚志学会叢書」を刊行している。
- ⁴³ 前掲『年譜長編』、319-320 頁。
- ⁴⁴ Rempel and Haslam, *op.cit.*, p. xlvi.
- ⁴⁵ *Ibid.*, p. xlviii.
- ⁴⁶ *Ibid.*, p. xcii.
- ⁴⁷ 前掲『年譜長編』、327 頁。
- ⁴⁸ 同上、328-329 頁。
- ⁴⁹ 同上。
- ⁵⁰ 前掲「梁啓超と共学社叢書」、82 頁。
- ⁵¹ 横関愛造「日本に来たラッセル卿」（『ラッセル協会会報』2、1965、5-8 頁）、5 頁。
- ⁵² 同上。
- ⁵³ 同上。

第2章 「文明」を守護する異端者——B・ラッセルが求めたもの

はじめに

1920年代初頭、イギリスの哲学者B・ラッセルが、時の民国および日本を实地訪問するまでに、両国のメディアにおいては彼のことはしきりに取り上げられたが、そこでは一個の難解な数理論理学者、また「平和主義者」や「自由主義者」などというイメージが植えつけられていたといえよう。たしかに、個体の「自由」を説き、国家権力の分散を主張するラッセルは一見して自由主義的に見える。しかし彼は、「自分自身のことを順次に、自由主義者であると想像したり、社会主義者であると想像したり、平和主義者であると想像したりした。しかし私は、深い意味において、それらのいかなる存在でもなかった。懐疑的な知性 (sceptical intellect) はいつも、(中略) 荒涼たる孤独に私を追いやった」¹と述べているし、さらに同時代の学者においても、彼をH・ラスキおよびG・D・H・コールと一緒に「政治的多元論者」²という思想系譜に分類する意見もある。こうしたラッセルはいくらでも貼れようが、重要なのは、具体的に、彼の生い立ちや思想的転換点となる第一次世界大戦の前後における彼の倫理学の核心、またその政治学が拠った観点を考えることではないか。そうでなければ、その思想がもつ個人的および歴史的コンテクストも分からないし、彼が主張しようとするものが見えなくなってしまう。それだけに限らず、当該期の日中知識人たちと彼との間に成り立ったインタラクションにアプローチする道も遮られるであろう。

そこで本章では、ラッセルの生い立ちを簡単に振り返りつつ、第一次世界大戦中における彼の思想的変遷、とりわけその後の「露・中・日」訪問と密接に関わっていく、その倫理学・政治学の核心概念を、戦中の著書・文章・インタビューなどを通して検討する。こうした考察を通して、ラッセルが各国を訪れる以前に抱えていた問題関心とそれに対する模索および解決案を明らかにし、のちに彼と交差する日・中知識人との間における共通の問題関心と、すれ違いを考察するための前提作業としたい。

第1節 「神の死」より再び世間へ

その自叙伝³によれば、2才の時に母を亡くし、4才にして父を亡くしたラッセルは、兄とともに祖父母のもとで青少年時代を過ごしたという。彼は、厳格なピューリタン貴族で道徳家の祖母よりも、ヴィクトリア朝時代で首相を2回務め、大胆な改革を推進し、晩年には歴史書など文筆生活を送っていた祖父ジョン・ラッセル(John Russell, 1st Earl Russell, 1792-1878)のほうに精神的に繋がりを持っていたようである。少年ラッセルは祖母に対する抵抗心から早いうちにキリスト教とその「偽善の説教」より脱出し、「確かなもの」を求めて人間の理性へと関心を向ける一方、ホイッグ党の主要支持者の一つであるラッセル

家の伝統より社会と政治改革に対する情熱、そして「フォックス式ホイッグ党の伝統」、すなわち古典的自由主義の伝統を受け継いだのである。1890年に彼は18才にしてケンブリッジ大学に入学し、数学と哲学を専攻するが、しばらくして最初の妻であるアリスの紹介で社会主義者のウェッブ夫妻と知り合い、フェビアン協会のメンバーともなった。初めての単行本『German Social Democracy (ドイツ社会主義)』(London, New York, Bombay, Longmans, 1896.)は、フェビアン協会が設立したロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)のための講義であった。当時まだ自由党(Liberal Party) 4 党員でありヘーゲル主義者であったラッセルは、すでにマルクスの『資本論』を通読したうえで批判を加え、またそれを信条に組織されたドイツ社会民主党(Sozialdemokratische Partei Deutschlands, SPD)を「たんなる一つの政党ではなく、たんなる一つの経済理論でもない。それは、世界と人間の発展についての完全に自己完結的な一つの哲学であり、一言でいえば、一つの宗教、一つの倫理学だからである」⁵という認識に到達したのであった。そしてこの初めての著作を執筆する途中、彼は一つの決心をも下している。「二種類の本——一方は数学のような抽象的な問題から説きおこして次第に具体的になっていく本を、他方では政治学や経済学のように具体的な問題から始まって次第に抽象的になっていく本を、生涯を通して書いていこうという決心」⁶であった。この理論と実践を行き来する志向は、ラッセルの理論体系を理解するのに重要な手がかりを与えてくれる。前者の「抽象的な問題から説きおこして次第に具体的になっていく本」に関しては、特に彼の哲学・論理学の業績が、前期ホワイトヘッドとの共著でなされた、数学の論理学的基礎づけを試みる三巻本大著『Principia Mathematica (数学原理)』(Cambridge, Cambridge University Press, 1910, 1912, 1913.)以降、啓蒙的性質のものが多いことが注目されよう。また後者の「具体的な問題から始まって次第に抽象的になっていく」という方法は、のちのボルシェヴィズムの分析や中国問題の考察などに応用され、その文章の一つの大きな特徴となった。論理学者の特長である理論分析、歴史家において見られる時間的変遷への感性、そしてジャーナリストのもつ鋭い観察力を融合した彼独自のスタイルは、その文章を透徹性と説得力を共に備えるものとした。

実は(第二次)ボア戦争(1899-1902)までに「自由主義的帝国主義者(a Liberal Imperialist)」⁷だったラッセルは、1901年春にある「真つ暗な絶望の闇」⁸をもたらす「事件」⁹を体験し、それまでの立場を捨て去り、「突如として、人間一人一人の魂は孤独であるという感情が私を圧倒した。(中略)突然足下の大地が崩れたようになり、完全に違う世界にいる自分がいることに気付いた」¹⁰と、大きな「宗教的回心」体験を経験したのである。

5分間に以下のような内省が私の頭を駆け抜けた。人間の魂は孤独に耐えられないものであり、宗教家が説いた種類の「愛」を最高度に達さない限りこの孤独を破ることはできない。この動機から発するもの以外のすべてのものは有害か、無用かである。

続いて、戦争は誤りであり、（英国の）パブリック・スクールの教育はひどいもので、暴力の行使は非難されるべきであるという考え方も湧いてきた。また人間関係において、一人一人の人間の内なる孤独の核心にふれあうべきであり、語りかけるべきである¹¹。

長年の間、ただ「精確さ」と「分析」をのみ好んできたが、美に対する半ば神秘的な感情、子供に対する強い関心、また苦しい人生を堪える何らかの哲学を見出したいという、「釈迦」と同じような深い望みを抱く自分を発見した¹²。

他者の苦しみと孤独を共感できるようになり、かかる「苦しい人生を堪える何らかの哲学」、乃至「釈迦」のような宗教的救済の願望を抱き始めたラッセルは、その後徐々に植民地問題を始め、国内のマイノリティ問題、例えば婦人参政権および児童教育問題、有色人種労働問題に関心を抱き始め、政治的左派へと傾くようになった。そしてついに1914年イギリスの対独宣戦をきっかけに先祖代々が尽力してきた自由党と決別¹³し、また労働党（Labour Party）とその母体となる労働組合会議（Trades Union Congress、TUC）が戦争支持を表明するにしたがって、議会や政党政治にも愛想を尽かし、様々な議会外の政治活動を従事する「異端者」へと転身していく。1914年8月よりラッセルは、民主的外交政策を擁護する圧力団体「民主的統制連合（Union of Democratic Control、UDC）」に参加¹⁴し、のちの1916年4月から1917年までには反戦平和・反徴兵組織「徴兵反対協会（Non Conscription Fellowship、NCF）」に参加し、「良心的徴兵拒否者（conscientious objectors）」のために奔走した¹⁵。そして1917年の7月に、当時の独立労働党（Independent Labor Party、ILP）に入党の決意を固めた¹⁶。周知のように彼は、戦中、こうしたラディカルな政治活動と言論が故に、罰金、講演禁止および図書発禁、在職していたケンブリッジ大学からの追放などに遭遇し、遂に1918年に逮捕され監禁されるにいたる。ラッセルは一体何を守るためにかかる巨大な代価を支払わなければならなかったのか。彼の具体的な著述と経歴を通して確認しておきたい。

第2節 「西洋の没落」——「メフィストフェレス」たる第一次世界大戦

1901年春に他者との共感によって「回心」を体験したラッセルにとって第一次世界大戦は、ヨーロッパ文明の凋落を予感し、さらに人間の快樂と苦痛を思い知らせる「メフィストフェレス」となった。大戦は、当時人生の中盤に近づく（1914年から1918年にかけては、42-46才）ラッセルにとっては、「論理学から政治学へ」¹⁷の学術的転換点となっただけではなく、その世界観・人生観・価値観を含めた全体的な認識論における「コペルニクスの転回」をとげる思想的分水嶺ともなっている。

前者に関してラッセルの著作目録から追跡してみれば、1914年8月に第一次世界大戦の

開戦当初より 1918 年の終戦に至るまで、ラッセルはほぼ戦前における数理哲学の関連作業から離れ、大戦の原因また戦後の秩序再建問題などといった政治・社会問題へと、その関心が向けられていったし、また政治学関連の著作¹⁸も主にこの時期を中心に刊行されていたことが分かる¹⁹。とりわけロシア革命が勃発した 1917 年が、戦中期において最もその論説が多かった年であったことは興味深い²⁰。後者の認識論的転回に関しては、ラッセルはその自伝の中で、自分にとって第一次世界大戦の意味重大さについて繰り返して強調していることから証明されるであろう。

事実第一次世界大戦は、私の偏見を振り落とし、多くの根本的な問題についてあらためて考え直させてくれた。第一次大戦はまた、私に新しい種類の活動も与えてくれた。この新しい活動に対しては、数理論理学の世界に戻ろうとするときに何時も私につきまとった、あの味気なさを感じなかった。それゆえ私は、いつも自分自身を超自然でないファウスト博士であり、メフィストフェレスに相当するものは、第一次世界大戦であるとする習癖が身に付いた²¹。

1914 年から 1918 年までの第一次世界大戦は、私のあらゆるものを変えてしまった。私はアカデミシャンをやめ、新しい種類の本を執筆し始めた。人間性についての理解も一変した。ピューリタニズム (Puritanism、厳格主義) は人間の幸福のためになるものではないと、初めて心から確信するようになった。大量死 (the spectacle of death) の光景を通して、生きとし生けるもの全てに対する新しい愛を手に入れた。また、ほとんどの人間はただ自身の破壊的な怒りに、はけ口を見出そうとする根本的な不幸にとりつかれていること、そして、本能的な喜びを広めること (the diffusion of instinctive joy) によってのみ良い世界が実現できることについて深く確信するようになった。現代世界の改革者も、反動主義者と一様に、残虐さによって歪められていることを見た。厳しい規律を要求するあらゆる目的や意図に対して疑いを持つようになった。私は共同体のあらゆる目的に反対する立場に立って、そして日常の美德がドイツ人殺戮の手段として利用されているのを発見したため、徹底的な無律法主義者 (Antinomian) にならないことの困難さを経験した。しかし、世界の不幸に対する深い同情によって、私はこの危機から救われた²²。

第一次世界大戦が終わった時、自分がそれまでやってきたことは、自分自身に対して以外、まったく何の役にもたたなかったことがわかった。私はたった一人の人間の生命を救うことさえも、また戦争を一分たりとも短縮することもできなかった。ヴェルサイユ条約をもたらす原因となった敵意 (bitterness) を減らすために何事もできなかった。しかしともかくも私は、すべての交戦国が犯した罪の共犯者ではなかったし、また自分自身のためには、「新しい人生観 (a new philosophy)」と「新しい青春 (a

new youth) 」を得た。私は、「大学教師」であることと「ピューリタン (厳格な人間)」であることから解放された。以前はまったくもっていなかった本能的なプロセス (instinctive process) を理解することについて学んだ。また、非常に長い間孤立していたことから、ある種の落ち着き (poise) を身につけた。休戦期間中、人々はアメリカのウイルソン大統領に大いに期待を抱いた。他の人々は、ボルシェヴィキ・ロシアに靈感を見出した。しかしこれら二つの楽観主義の源のいずれも、私にとって何の役にも立たないことがわかった時に、それにもかかわらず、絶望に陥らないでいることができた。今後、最悪の事態がやってくるだろうということは、慎重に検討した上での私の予想である (ラッセル注：この部分は、1931年に書いたものである)。しかし、私はそのことを理由に人間は、究極的には、本能的な喜びの単純な秘訣を学ぶだろうという信念を捨てることはしない²³。

中年にさしかかったラッセルは、それまで彼が属していた貴族階級かつ「アカデミシャン」でゆえに「厳格な人間」のあり方から離れ、「万人の万人に対する闘争」ともいうべき総力戦と種々のイデオロギー闘争の残酷非情を通して、「人間」という存在の不条理を理解し、そこから慈しみを学んだ。そして、諸国の傲慢と国民の偏見、プロパガンダによって人々の無意識に釘付けられた「身に迫る危機感」、それに駆り立てられた人間の焦燥と闘争本能の衝突を見て、あらゆるロマンとドグマに対し冷静さと懐疑をともに持ちながらも、「犬儒」と虚無にも陥らない姿勢を保つことを覚えたのであった。「極端な時代」の幕開けには、すでにラディカリズムの危うさを敏感に捉えていたラッセルはその後の生涯においても、あらゆる種類の「極端」さと戦って、過熱する時代思潮にブレーキをかける一知識人の役割を果たしていったといえる。

私は生涯を通して、熱狂的な群衆のメンバーたちによって体験される場所の人間の大集団との一体性を感じたいと切望してきた。この願望はしばしば、私を自己欺瞞におとし入れるほど強烈であった。自分自身のことを順次に、自由主義者であると想像したり、社会主義者であると想像したり、平和主義者であると想像したりした。しかし私は、深い意味において、それらのいかなる存在でもなかった。懐疑的な知性 (sceptical intellect) はいつも、私が黙っていてほしいと最も望んでいる時でさえ、私の耳元で疑い (doubts) をささやき、他人の皮相な熱狂から私を切り離し、荒涼たる孤独に私を追いやった²⁴。

ムーア²⁵と私がカントにもヘーゲルにも反対するにいたったのは1898年の終り頃であった。(中略) ムーアは何よりも観念論をしりぞけることに熱心であったと思うが、私は何よりも一元論をしりぞけることに関心していた²⁶。

あらゆる絶対主義に対抗する「懐疑的知性」＝多元論と可謬主義の立場は、単にラッセルの政治・倫理思想のみに見えるスタンスではなく、その哲学体系の展開過程を見ても、一貫して貫かれている立場といえる。1959年ラッセルは、その哲学的遍歴を回顧する著述『My Philosophical Development (私の哲学の発展)』²⁷の中で次のように述べている。

この若かった時代以来、私はさまざまな問題について自分の意見を変えたけれども、当時極めて重要だと思った点については、今に至るまで意見を変えていない。私は今でも、外面的関係 (external relations) の学説と、それに結びついているところの多元論 (pluralism) を信じている。私は今でも、ひとつの孤立した真理が、完全な意味で真でありうる (an isolated truth may be quite true) 、と信じている。私は今でも、分析する (analysis) ことは、ものをゆがめて見ることにはならぬ (is not falsification) 、と信じている²⁸。

ラッセルと分析哲学および西洋哲学史の関係を論じ、『羅素与分析哲学——現代西方主導思潮的再審思 (ラッセルと分析哲学 現代西方における主導的思潮への再考)』(北京大学出版社、2017)をまとめた丁子江氏は、上述した多元論・外在関係説・分析的方法は互いに緊密に結合され、ラッセル哲学の主脈とその世界観・方法論の具現となっていたことを指摘している²⁹。ラッセルはつねに自然科学と社会問題の最新動向とを追跡し、その分析哲学は、ついにのちに見られることとなる現代分析哲学の両翼——経験主義と形式主義——の極端化＝実証主義と言語・論理中心主義の傾向に陥らなかった。彼はまた道徳・倫理など人間存在の問題に目配りし、「分析哲学において最も形而上学的哲学者」³⁰と呼ばれるほどだったのである。

第3節 「本能」対「文明」の格闘——「文明」への反省と再生

話がやや逸れてしまったが、本稿の関心に沿い、この時期のラッセルにおける政治的立場と思想に焦点を絞れば、その大戦前後の政治的主張を表す4冊の政治論著述および、ロシア訪問後に刊行した『The Practice and Theory of Bolshevism』(1920)を繙くことから始めよう。

1914年8月4日の第一次アスキス内閣の対独宣戦を、自由主義的基本原則の背離と見なし、また当初、愚かな官僚と強権政治にその責任を帰したラッセルは、路頭の宣戦擁護のために歓呼する群衆を目撃してさらに大きな衝撃を覚えた³¹。くわえてホワイトヘッド夫婦を始めとしたかつての友人で知識人たちや、彼と同じ「正義」を担っていたはずのジャーナリストたちが次々と戦争擁護へと走る³²につれて、彼はそれまで人間感情の見方に対する修正を迫られた。

しかし私をより恐怖で満たしたのは、戦争による大虐殺の予想は、英国民のほぼ90パーセントにとって快いものであるという事実であった。私は人間性についての見方を修正しなければならなかった³³。

そして彼自身も含めて、時には愛国心に責め立てられた。「マルヌの戦いの前に、ドイツどんどんと成功を収めて行くのには、ぞっとさせられた。(中略)英国を愛する情は、わたくしのもっている感情のうちでも最も強烈なものといってもいい」³⁴。しかし彼は自分の感情を正視する勇気があったし、「やるべきことについて、一瞬たりとも疑いをはさむことがなかった」³⁵。彼は戦争の原因と、なぜ「文明人」たちは理性を捨て去り、こうも好戦的な感情に駆られたのかということ問い続け、戦中初めての著述『Justice in War time』³⁶を1916年に仕上げた。彼は冒頭の章、「An appeal to the intellectuals of Europe (ヨーロッパの知識人に訴える)」の中で、まず相手国の汚名化によって戦争の理由を政府と新聞、そして主に国民全体の集団的感情 (collective emotion) が共謀してでっち上げた、「偽りの神話体系 (a whole mythology of falsehood)」³⁷を暴いた。各国の戦争行為は、はじめは機械生活に抑圧されたホモ・サピエンス種の雄性における原始的闘争と殺戮の衝動を解放する一つの手段³⁸として召喚され、次に人間の群居本能に起源し、宗教的感情に近い (almost religious) 愛国主義 (patriotism) によって正当化ないし神格化される³⁹。最後に政府とメディアと国民の自己欺瞞によって作られた神話を信じ込んでいる集団間の宗教戦争が遂に勃発する。相互恐怖と相互憎悪の循環が相互殺戮の結果をもたらし、早期の終戦が実現しなければ、ヨーロッパ文明の消滅は避けられない⁴⁰とラッセルは見ている。そして今回の戦争がその不正義の本質にも拘らず、科学技術の発達に伴って、動員された人口および残忍の程度で言えば、人類史上初めての大戦争である⁴¹とも、指摘されている。そこでラッセルはヨーロッパ中の知識人の良知に訴え、人類全体が共有すべき「運命」の自覚のもとで国の隔たりを越えた知識人の連合を呼びかける。

物理学者はより速い飛行機を作り、化学者はより致命的な爆弾を作り、そしてすべてのできる人間は一生懸命、殺人労働に尽力している。(中略)人類の進歩をもたらす主要な方法は、知識と高尚なる心との協働 (knowledge with elevation of mind) である。高尚な心を捨て去った知識は容易に邪悪さに変わり、また人間同士の闘争をさらに激化させる要素となる⁴²。

知識人は人間の精神が生まれる暗闇を照らす一つ一つの聖火の守護者たるべきである。公正な思想、私心なき真理の探究、もしもっと範囲を広げれば、眼前の危機を単独で阻止することを通して守るべきである。このような理想に奉仕するのは、(中略)知識人の指導者たちが政府と一緒に憎悪を助長し、世界の未来となるべきだった青年たちを殺戮するのに比べて、よほど価値がある。今はわれわれが各自のドイツ、オース

トリア、ロシア、フランスそしてイギリスと繋がるそれらの義務を忘れて、人類全体というより高い義務において、われわれは一体である⁴³。

ラッセルはこの大戦の原因を、当時にあつて主流であつたマルクスの経済・政治学理解に基づく解釈を顛倒して、人間の個体および集団の感情・生理・心理的分析によって解釈しようとする。この時点でラッセルはまだ精神分析学に接触していなかったが、「当時私は精神分析については全く無知であつたが、人間の「情念」について、精神分析家の考えに似通つた見方に独力で到達した」⁴⁴とのちに回想している。人間の闘争本能 (instinct of pugnacity) は普段、群居のために潜伏あるいは抑圧状態にあるが、あるときそれが刺激されれば、闘争と殺戮によって快感をも得られるようになる。だからこそ、人類の歴史には、戦争が繰り返し発生してきた。しかし、彼は今回史上未曾有の大戦争をもたらした原因に、偏狭な愛国主義と共に科学技術の発達とその非倫理的濫用も加味していることにあると見る。前者の愛国主義は、抑圧的都市生活と宗教の消滅、さらに科学が宗教に取って代つたことによって倍増されていた。こういった地域に向けられた集団感情に抵抗するには、より広く、人類普遍主義を唱えるある種の宗教 (a wider religion、 extending the boundaries of one 's country to all mankind) が必要となるが、人間の群居本能に反するためごく一部博愛を重んじる人を除けば、非常に力の弱いものとなつてしまい、これこそ平和主義が敵視されるわけでもあるとした⁴⁵。後者に対してラッセルは、知識人の「良知」が無くなりつつあり、「真理の宗廟の守護者はすでに裏切り、偶像崇拜者 (idolaters) に転身していた」⁴⁶ことに帰因する。これはまさに20年後の1936年に、E・フッサールが提起した「ヨーロッパ諸学の危機」という問題意識⁴⁷と通底し、科学至上主義における倫理の失範といった、「近代」自体に孕まれている宿痾に対しての反省と批判であつた。そして同年に刊行された『Principles of Social Reconstruction (社会改造の原理)』(1916)⁴⁸においてラッセルは、さらに集団的無意識の深層構造に潜り込み、「人間行動の諸源泉」たるものへの生理・心理的分析を深め、その倫理・政治学説の核心的概念である「衝動理論 (impulse theory)」を打ち立てた。かくして彼は、人間をある行動に駆り立てる動機は、人間が自ら意識することができる「欲望 (desire)」と、ほとんど意識することができない、つまり無意識的な「衝動 (impulse)」という二つの根本的要素にあると見定める。

あらゆる人間活動は、衝動と欲望という二つの源泉から派生する。欲望というものが果たす役割は、従来から十分に認められてきた。(中略)あらゆる欲望には、ある欲求の意識とそれを満たす機会とのあいだの時間間隔が介在している。(中略)これまでの政治哲学はほとんどまったく、人間行動の源泉としての欲望観に基づくものであつた。しかしだから欲望というものは、人間行動の一部を支配しているにすぎないし、しかもその一部は、もっとも重要な部分ではなく、より意識的で顕在的な文明化された部分にすぎないのである⁴⁹。

われわれの本性のよりいっそう本能的な部分においては、ある目的を求める欲望ではなく、ある種の活動へ向かう衝動によって支配されている。子供たちは走り回り叫び声を上げるものだが、それは何か善いことを実現しようと期するからではなく、走ったり叫んだりすることへの直接的な衝動があるからそうするのである。(中略)衝動なるものは、通例の望ましい結果が生ずるはずがない場合でさえ、しばしば強烈に働いてくる⁵⁰。

目的意識を持つ「欲望」よりは、特に利益や満足をもたらさない無意識的な行動を促す「より本能的な部分」には、「衝動」が強力に働く。こういった「衝動」を無意識的に隠蔽する時、そこにある欲望が生成し、われわれを間接的にその衝動を満たす方向へと自らを導くし、自分もまた、それが本当に成したいことであると自己を説得する。しかし「衝動」は移り気で無秩序であり、子供あるいは芸術家によく見られているように、うまく制御できない性質があるため、秩序と安定を求める社会においては、「狂気」とみられるか、抑制されるべき対象として、ほとんどの場合否定的に見られていた。しかし、ラッセルは「衝動」は、倫理的な価値判断とは無関係に、活力の表現であって「本質的に盲目である」とみる⁵¹。

盲目的な衝動は、戦争の源泉ではあるが、またそれは科学や芸術、恋愛、といったものの源泉でもある。望ましいのは衝動を弱めることではなくて、衝動の方向が死と衰退へ向かうよりは、生命力と成長の方向へと向かうことなのだ⁵²。

「衝動」は、欲望よりも「はるかに大きい度合でわれわれの活動の基底を成し」⁵³、それを抑制すると、居心地の悪さあるいは激しい苦痛を感じる場合があるし、また、抑圧された衝動は、ゆがめられた形の欲望となり、それが行動として表現されることで、突破口を求める場合がある。「意志による衝動の完全な統御」⁵⁴といった社会の強要、あるいはモラリストの説教に迎合し、自らの衝動を強制的に圧制すれば、逆に破壊の衝動が生じやすいし、それを完全に排除し、合理的目的あるいは欲望に転化した場合は、人々の活力は消耗され、虚弱に陥いてしまう。とりわけ、

工業生産体制と社会的組織化とは、文明国民がよりいっそう衝動より目的意識によって生活する、という方向へ間断なく強制力を加えつつある。長期的にそのような生存様式がつづく、生命力の諸源泉がたとえ枯渇しないとしても、新しい種類の諸衝動、つまり従来とは違って意志が習慣的に統御し得ないような、あるいは思考が意識し得ないような種類の諸衝動が生み出されてくる。(中略)行き過ぎた規律というものは、ことにそれが外部から強要される場合には、しばしば残酷と破壊の衝動を生み出すも

のだ。(中略)自然発生的な衝動がはけ口を見出し得ないとすれば、ほとんどつねに活力の枯渇か、あるいは抑圧的で生命力に逆行する衝動のいずれかが、結果として生じるであろう⁵⁵。

ここに至ってラッセルは、人間の本能である「衝動」が、現代の工業体制と組織的生活によって扼殺、または捻じ曲げられてきた結果として、それが理性によって制御できないほどの、巨大な社会的無意識の時限爆弾として膨らんできたと論じる。歪んだ「衝動」はさらに群居本能に基づく自民族中心の考え方を亢進せしめ、帝国主義・軍国主義とそれらに対する強い反発とに現れ、最終の大戦に至らしめたとラッセルは見ていた。すなわち、人間の本能的「衝動」を無視ないし抑制しようとする社会制度と生活様式が、根本的な問題の所在であると主張するのである。しかしラッセルは、来るべき理想社会を語る際には、極めて現実的に、かつ控えめな態度を保ち、すぐに地上の「千年王国」を約束するような主義主張とは一線を画そうとした。彼はむしろ、その実現の困難さと、その困難を乗り越えるために必要な各人の努力を強調したのであった。

人間は樹と同じように、成長するためには然るべき土壌と、抑圧からの十分な自由とを必要とする。そしてこれらのものは、政治的諸制度によって助長することもできるし、また阻害することもできる。しかし人間の成長に必要な土壌と自由とは、樹の場合よりも、それを発見し獲得することが測り知れないほどより困難である。しかも望みうる充実な成長というものは、定義することも論証することもできないのである。それは微妙で複雑なものであり、ただ繊細な直観によって感得し、また想像力と敬意とによっておぼろげに把握することができるだけなのだ。その充実な成長なるものは、主として物理的な環境に、あるいはその環境にのみ依存するのではなくて、さまざまな信念や愛情 (beliefs and affections)、また行動のためのいろいろな機会 (opportunities for action) に、さらに共同社会の生活全体 (whole life of the community) に依存するものなのだ。人間の型がより発展しより文明化したものなるにしたがって、人間の成長の諸条件はより念入りなものとなり、当人が住む社会の一般的状況 (general state of the society) により多く依存するものとなる。ある人間の必要や欲望というものは、当人自身の生活に局限されてはいない。当人の頭脳がもし包括的なものであり、その想像力がいきいきとしたものであるとすれば、当人の属する共同社会が犯すいろんな失敗は、彼自身の失敗となり、その共同社会の成就するいろんな成功は、彼自身の成功となってくるのであり、共同社会が成功するか失敗するかにしたがって、当人自身の成長が助長されるか阻害される、ということになってくる⁵⁶。

ここからはラッセルの人間観と社会観がよくみえる。彼は、個人が成長するための物質

的、精神的基本条件と、いわゆるバーリン的「消極的自由」が保障されるという大前提の下に、個々人が「積極的自由」という主体的責任を引き受けることによって、社会との連帯と共生をより重んじる間主観的・社会連帯主義的立場に立つ。すなわちラッセルの言っている「自由」とは、常に「連帯的自由」を意味するものである。そして同時に、ラッセルは、他者との連帯を無視した独我的個人主義を猛烈に批判し、その極端な発達のために形成されたのはまさに、ナショナリズムの衝突、極端な労資闘争、まだ「胎動期にある男性と女性の紛争」⁵⁷などであったという。これら争いの主体双方が、相手の利益と立場を無視することで暴力の闘争形式を採ったのであった。また闘争のエスカレーションに伴い、彼らは、その当初の目的あるいは最初の原理原則を忘れ、自己主張の泥沼に陥ってしまっている。この局面に対し、ラッセルは、互いに連帯できるような「正義」の原則を基本に思考かつ行動すべきであると強調した。すなわちラッセルは、大戦の教訓から、「共同社会」の再建⁵⁸を常に念頭においているわけである。

こういった他者連帯的「自由」と「正義」原則以外に、ラッセルは「本能」の問題に立ち戻り、より良い共同体あるいは組織の形成のために、二つの条件を提出する。

さまざまな個人のあいだに良い関係を成立させる主要な二源泉は、本能的に好む (instinctive liking) ということと、共通の目的 (common purpose) を持つこととである。これら二つのうち共通の目的の方が、政治的にはより重要であるように思われようが、実際にはしばしばそれは、本能的に好むことあるいは本能的に嫌うことの結果であって、その原因となるのではない。家族から国民にいたるまでさまざまな生物学的諸集団は、度合いの大小こそあれ本能的な好みによって構成され、その基礎の上にそれぞれ共通目的を築くのである⁵⁹。

1887年にF・テンニース(1855-1936)により提起された対概念、人間集団における「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」を想起させるラッセルの社会観では、機能的集団よりはむしろ本能的な「共同体」、つまり彼の言葉でいう「共同社会」の形成に向けた傾斜が大きく、目的意識あるいはなんらかの共通利益を前提とした人間集団、すなわち功利性組織への抵抗が見られる。これは、工業社会が生んだ様々な功利性組織は、人間性を歪め、戦争を間接的に加担するものと見ている、この時点における彼の立場であったろう。一方、彼は人間組織の構成単位となる個々人の「人間性」は変わらないという一般論を退け、「生得的潜在性向」は認めつつも、それが外部環境と協働することによって、特定の性格を創り出してゆくことをより重視する⁶⁰。これによれば、長期にわたる社会・個人への「本能的嫌悪」は人の悪意と性格の歪曲を増大させることとなり、「できるならば、世界における本能的好みの量を増大させ、本能的嫌悪の量を減少させよう」⁶¹という原則を樹立したのである。そしてそれは、「人間の自然な成長」が促されるようなより良い政治制度の模索へと行き着く。功利的原則および価値的原則を統合した、「できるかぎり共通の目

的を具現し、本能的に好むという性向を助長するもの」⁶²への探求である。しかし、現実の諸制度は、産業革命以来の根本的変動により発達してきた人間の本能、性格、信念にうまく適合できておらず、抑圧的なものになってしまっている⁶³。だからこそ、現に「社会の政治的改造」が人々から要求されているのだ。この点においては、まさに、人の幸せをすべて経済的要因に帰する当時流行の社会主義理論が犯した誤りであると、ラッセルは指摘する。

社会主義が、より良い経済的諸条件はそれ自体で人々を幸福にさせるであろう、などとあまりにも速断しているからである。人々が要求しているのは、より多くの物質財ばかりではなくて、より多くの自由、より多くの自主性 (self-direction)、創造性のためにより多くのはげ口、人生の歓喜のためにより多くの機会、より多くの自発的協力と、不本意の屈従の減少である⁶⁴。

それではより良い政治を実現するために、現存の諸政治的スペクトルの中から、ラッセルはいかなるものを支持したのか。当時彼が注目したのが、協同組合主義 (サンジカリズム) である。それは、社会主義が私有財産の減少を支持する一方、国家権力の増大は支持する傾向があるのに対して、サンジカリズムがその双方に対して批判的であるためであり、この点において彼は後者をより支持していると声明した⁶⁵。ラッセルによれば、「近代世界の最も強力な二制度である私有財産と国家とは、権力の過剰によって人間生活に有害」⁶⁶だけでなく、またそれが経済と政治制度の両方に抑圧的な悪制となり、人々の活力を消耗しあるいは歪めてきたのである。

まず政治制度、すなわち国家への権力集中の問題である。彼は、国家の主要な対外機能である国土防衛を、「世界国家もしくは諸国家連合組織」⁶⁷の国際法といった秩序系統の発効によって暴力 (戦争) を排除することで解消し、また国内秩序の保持という対内的機能を国内の「自発的諸組織」⁶⁸に移譲することで、国家権力を最小限にすることを主張する。すなわち、国家権力は、基本福祉、科学研究、経済不正義を抑えるために独占企業を所有するなどの機能に抑えられるべきだ⁶⁹というのである。権力の適切な配分という「正義」原則からだけでなく、個人の自由と組織化を共に重視する、「連帯的自由」の原則をより重んじるラッセルは、そこで、サンジカリズムにおける地域別および職種別の局部行政組織 (ローカル・ガバメント) という発想に注目する。各地域・各階層の世論を具現した諸団体は、独裁の抑止に有効的で、また漸進的政治権力の移譲によって、「国家というものを連合体本部、あるいは調停裁判所のような地位へ格下げ」⁷⁰すべきであると説いている。また「主権内の主権 (imperium in imperio)」、すなわち「二重主権論」、といったありがちな批判に対してラッセルは、それが「圧政者の嫉妬にすぎない」⁷¹と一蹴し、ラディカルな反権威的態度を示した。

次に経済制度面における私有財産問題、およびそれに関連している経済要因の過度重視・

資本主義の問題に対し、ラッセルは、その背後にある金銭崇拜 (worship of money) という信仰にメスを入れる。彼は、金銭至上主義は生命力の減退の結果であり、かつ原因でもあると説明した。また工業主義も、労働の価値を金銭と置き換え、人々の歪んだ欲望をさらに奨励することによって事態を一層破壊的なものにしてしまったという。そこで、こうした状況に対し彼は、1、最大量の生産、2、分配における正義、3、生産従事者たちにとって我慢しうる生活、4、可能なかぎり最大の自由と、活力や進歩に対する刺激という4点の原則⁷²を提示し、ある工業体制が合理的であるか否かの判定基準として設定する。このうち現存の体制は、大量生産の狂執から第1項だけを狙っており、非正義的かつ抑制的、人的・物的資源をも浪費するものになっている。対して、社会主義の目標は第2と第3点まで包括しているが、最も重要な第4点が、現存体制はもとより社会主義からも無視され、ないしは破壊されていることを、ラッセルは指摘している。彼からみて問題は、われわれの深層にある衝動と欲求が、現在の経済体制と一部しか重ならないところにあった。このような体制が長期間存続すると、労働従事者の健康と能率を損傷する一方、最も有能な労働者が家族数を少なくし、最終的に民族・文明衰退の結果をもたらすとラッセルは断言する⁷³。したがって彼からみて私有財産は制限を加えられるべきで、とりわけ土地私有はいかなる正当性、有益性をも持たないことになる。だが彼は単に、それを禁止するよりは、むしろ地代を公共事業に転用することによって発展的に解消することを提言したのである。

こうした理論分析のあとにラッセルは、現実の政治・経済制度の改造、すなわち現に行われている諸々の労働運動を見て、正義の原則のみを是とする社会主義運動と比べて、正義と自由の両原則を同時に斟酌する「生活協同組合運動 (co-operative movement) と、産業協同組合主義 (syndicalism) 」⁷⁴に、不満足でありながらもある種の可能性を見出している。

現在の体制が持つ諸弊害は、消費者、生産者、資本家といういくつかの立場の利害が、分断されていることから派生している。これら三つの立場のいずれの一つをとってみても、その利害は共同社会全体の利害、あるいは他のどの立場の利害とも同じではない。生活協同組合の組織は、消費者と資本家の利害を融合させており、産業協同組合主義は、生産者と資本家の利害を融合させようとする。いずれも、さきの三つの利害をすべて融合させるものではなく、また産業を牛耳る人々の利害を、共同社会の利害にまったく同一化させようともしていない。したがってこの二者はいずれも、産業界の闘争をまったく防止しうるわけではなく、調停者としての国家の必要性を、無くしてしまうわけでもない。しかしそのいずれにしても、現在の体制よりはましであって、おそらく両者のある折衷形態が、現存する工業体制がもつ諸弊害を大部分、癒すことになるであろう⁷⁵。

さて、書作の最後にラッセルは、その倫理的核心理念「衝動」を2種類に大別し、「創

造的衝動」および「所有的衝動」という価値基準を付与する。「所有の衝動」における主要な政治的体现は、国家、戦争、私有財産であり、「創造の衝動」の体现は教育、婚姻、宗教にあるとした⁷⁶。そして二方向に分かれる「衝動」に基づく倫理観および制度観を以下のようにまとめ上げた。「最良の生活とは、創造的諸衝動が最大の役割を演じ、所有的諸衝動が最小にしか働いていない、といった生活のことである。最良の制度とは、できるかぎり最大量の創造性を産むとともに、自己保存と両立しうるかぎり、最少量の所有欲しか産まない制度のことである」⁷⁷。

しかし、翌1917年に上梓された『Political ideals (政治理想)』⁷⁸においてラッセルは、サンジカリズム運動が導くビジョンには、強力な労働団体、例えば石炭や輸送業のそれが、弱い団体への実力行使という可能性が潜むし、またゼネストの方法は新たな暴力を招くため、経済不正も、集権問題も結局解決できないと主張するようになり、良き社会を実現する方法としてのサンジカリズムを、実際に放棄していく⁷⁹。かわりにラッセルが目にしたのは、A・R・オレージ (Alfred Richard Orage, 1873-1934)、S・G・ホブスン (Samuel George Hobson, 1870-1940)ら、フェビアン協会左派からの脱退グループが『新時代 (The New age)』誌で提出した「ギルド社会主義」という理論であった。サンジカリズムの労働運動および産業自治論をほぼ継承し、かつ真正面から国家権力と対立しない、イギリス社会主義者の左派たちが樹立した「ギルド社会主義」理論に対して、この時点のラッセルはさほど情熱を示してはいなかったが、その労働・仕事における「興味と独立心と、創意への配慮 (interest and independence and scope for initiative)」⁸⁰という主張には魅かれていた。

対して、ラッセルが当初、情熱的かつ楽観的視線を注いだのは、この年の3月および年末、帝政ロシアで連続的に勃発した二つの革命と、その後の臨時政府の執政理念であった。ロマノフ王朝の倒壊およびロシア臨時政府が3月初頭に打ち出した宣言、とりわけ「政治・宗教犯の完全釈放」「言論出版結社の自由」「社会・宗教・民族的差別の廃止」「普通選挙権による国会の召集」⁸¹といった諸条項を、ラッセルは「新しい希望 (new hope)」と見て、社会主義的正義と民主主義的自由の結合において「ロシアが先行している (Russia leads the way)」⁸²と讃えたのである。しかし、のちの10月革命後ボルシェヴィキ政権の一連の行為、すなわちケレンスキー臨時政府の倒壊、1918年1月に立憲会議がレーニンによって解散されていたこと、3月にトロツキーが「ブレスト＝リトフスク条約」⁸³に参加したこと、そして何よりもボルシェヴィキ政権の異見者迫害などを受け、ラッセルの情熱は一気に冷却する。

翌年1918年に出版された『Roads to freedom: socialism, anarchism, and syndicalism (自由への道: 社会主義、アナキズムそしてサンジカリズム)』⁸⁴という著作においては、戦後再建の問題が身近に迫りつつあるなかでラッセルは、実践の問題をより重視した立場からこれまでの諸社会運動の歴史と変遷を追跡しながら、戦後のイギリスないしはヨーロッパ文明の再建に、実践可能な方法を探っている。その序言で彼は断言する、

わたくしの意見では、純粋なアナキズムは、最終の理想として、社会がそれに無限に近づけるべきものではあるが、現段階では実現不可能である。もし採用されたとしても、1年か2年で崩壊するであろう。一方、マルクスの社会主義およびサンジカリズムには、たくさんの欠陥を抱えながらも、今の世界より良い世界を作る可能性が有する。ただわたくしはそのいずれも、最善の実践体系として見ないが、マルクスの社会主義は、国家に過大な権力を渡し、サンジカリズムは国家廃止を目指す、やはり労働団体間の対立を調停するために何らかの中枢権力機構を作らなければならないと、心配している。最良の実践体系は、わたくしの考えているところ、ギルド社会主義である。それが団体間の連邦主義的体制 (a system of federalism among trades) を採ること、国家社会主義者の国家擁護と労働組合主義者の国家恐怖を調合出来るからである⁸⁵。

ここからは、ラッセルにおける「ギルド社会主義」の位置はたしかなものとなりつつあった。「ギルド社会主義」は主に、それまでフェビアン協会、主にはウェッブ夫妻が唱える画一的集産主義および官僚国家への理論的傾向に異議申し立てた若手知識人らの思想運動である。しかしこれは思想面でのみの潮流に留まらず、1915年に、G・D・H コール (George Douglas Howard Cole, 1889-1959) の主導で「National Guilds League (全国ギルド連盟)」にまで実体組織化されていた。W・モリス (William Morris, 1834-1896) と J・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の思想を汲んで、労働の尊厳と、労働者の待遇を強調するこの学説は、第一次世界大戦後の安定期において下火になるが、リバタリアンの社会主義 (Libertarian socialism) の一支流を成していく。「ギルド社会主義」の主唱者らには二つの支流が見られ、まず中世のような小規模的、一地域に限定された熟練工集団・ギルドへの復帰を唱える「ローカル・ギルド派」には、『The Restoration of the Gild System (ギルドシステムの復興)』 (1906) を著した建築家ペンティ (Arthur Joseph Penty, 1875-1937) や、『The Guild State (ギルド国家)』 (1919) の著者テイラー (G.R. Stirling Taylor, ?-?) が含まれている。次に、かかるローカリズムにおけるロマンテックな傾向に不満を抱き、あくまで現代産業社会におけるギルド制度の可能性を重視する「ナショナル・ギルド派」がもう一つ、そしてより重要な支脈を成した。そのメンバーには、ラッセルもその著書で引用していた、『新時代』誌の編者オレージヤホブソン、そして G・D・H コールがいる⁸⁶。1915年、コールは「National Guilds League (全国ギルド同盟)」を結成し、それまで思想集団に留まっていた「ギルド社会主義」を運動組織化することに成功した。前述したように、ギルド社会主義は一方でマルクス主義およびサンジカリズムの「階級」概念を受け継ぎ、ゼネストによる権力の移譲および「産業自治」を認める一方、とりわけ政権掌握後の実践活動を重視し、前兩者における産業労働者単一立場の視点をさらに広めることを意図した。すなわち彼らは、消費者、組織教会、チャリティ組織、スポーツ団体および学術団体まで包括する機能組織・アソシエーション (ギルド) の創設によって、

各階層・身分の利益を代表・調合しようと試みる。一方、国家に対しては、団体間の中央調停組織の地位を認める一方、財政政策、防衛外交などについては、限定的権力しか認めない⁸⁷。ラッセルは、この時点で、「連帯的自由」および「分配における正義」という原則のもとで「共同社会」の再建という立場から、「産業自治」と「階層融合」を打ち出す「ギルド社会主義」に同調していたのである。実際、1917年3月『Labour Leader（労働者リーダー）』紙のインタビューにおいてラッセルはすでに、「自分は一ギルド社会主義者（I call myself a Guild Socialist）」⁸⁸と称し始めた。そして1918年の前述した著書において彼は、「純粋なサンジカリズムがあまりにも革命的で無政府的であるため、イギリスの性質からには、大きく受け入れられないと思う。CGTやIWW運動の思想を抽出しかつ穏和化した形でのギルド社会主義は、成果を収めるように思われる」⁸⁹と、ギルド社会主義の相互妥協的・穏当的政治理念を支持したが、ここで注意しなければならないのは、ラッセルはあくまでイギリスの産業状況を念頭において論じているという事実である。そして大戦後の1919年9月に出された文章、「Why I am a Guildsman（わたくしはなぜギルズマンなのか）」でラッセルは、ほかの政治理念と比べ、再びギルド社会主義のメリットを強調している。

国家社会主義は貧困を治療し、経済的公平を保証できるといえ、それはすぐ固まって陰謀だらけの体制となってしまうだろう。現在の体制よりも個人の創造力を敵視し、資本主義のメディアよりも世論操作を好むだろう。無政府主義は上述の邪悪行為から遠いが、社会的悪行を阻止する能力を有せず、軍事的暴政の結末がそこで待っている。これらと比べては、ギルド社会主義は…貧困と経済的不正を終わらせることができるし、何よりも、人間の自由と創造の天性により良い環境をもたらすから⁹⁰。

「国家悪」と「無政府」の両極端へ走る社会風潮に常にアラームを鳴らし続けるラッセルは、こういった理念を抱きつつも、「ロシアの状態、ロシアの統治方法」⁹¹、とりわけイギリスの政治改革に示唆を与えるような「代議制政府の新形態についての興味ある実験」⁹²であるソヴィエト体制、そしてこの「ソヴィエト体制が議会主義よりも本当に優れているかどうかという問題」⁹³を直に確認すべく、独立労働党の訪問代表団の随行者として、内戦および列強による干渉戦争の混沌にある「労農ロシア」を訪れたのであった。

おわりに

本章では、第一次世界大戦の戦中および終戦直後（1914-1918）における、哲学者B・ラッセルの政治行動、および期間中に刊行された4冊の政治論著述を主な分析対象に、その思想遍歴を検討し、とりわけ本論の考察対象となる「露・中・日訪問」と直接に関連し、また日中の知識人より最も注目されていた、ラッセルの政治論を支える倫理的核——「衝動理論」の形成過程を辿ってみた。

大戦が「文明諸国」の相互虐殺を通して「ヨーロッパ文明の消滅」をもたらすものとして危惧していたラッセルは開戦当初より、反戦の立場を取っていた。史上未曾有の大戦を作ったのは、「衝動」を抑えかつ歪めてきた経済（私有財産制）・政治（国家の集権）制度にある一方、科学における倫理的価値の没却と政府・メディアの煽動によったものだとラッセルは諸著作において分析する。そしてこういった抑えきれない人間の「衝動」を、まずできるだけ抑圧せず、さらにそれを、歪んでいる「所有的衝動」から、良性的な「創造的衝動」へと導くような教育と制度の改革、ならびに共同体の再建に可能性を見出している。

こうして戦中の1916年までにはラッセルが選んだのは、「産業自治論」と「労働組合」の政権掌握による国家の廃滅を目指したサンジカリズムであった。しかしその後、労働者階層の利益のみを強調し、組合団体間の権力闘争も避けられないと見て、サンジカリズムを放棄していた。1917年より戦後に至っては、「産業自治論」を継承しかつ社会の各階層の利益を調合する、国家権力にも一定の協調性を示す「ギルド社会主義」を擁護するようになった。彼はギルド社会主義を、（国家）社会主義、無政府主義とサンジカリズムとに比較し、国家権力の分散と社会秩序の維持に最もバランスのとった思想として、また現代の産業システムがもたらした個体の疎外を治療できる、自治のもとで個人および地方共同体に再び活力を与えられる主張として、擁護する立場を打ち出した。「我々擁護しているのは、ギルド社会主義のある種の形式、すなわち公式のギルズマンの主張したそれよりは、無政府主義に傾いたものである」と、戦後の秩序回復と国家権力への警戒という現状と時勢に柔軟に対応した態度を表した。

こうしてラッセルは、その依って立つ組織原理を求め転々としたように見えるが、彼の探求は一貫して、個人およびその共同体の「消極的」自由と共存、ひいては人類諸文明の多様性の持続と保存という、「多文明」的立場によるものであった。これもまた彼の倫理学の核心的価値の所在であると確認できよう。人間の衝動を抑圧せずに、創造的方向へと導くためには、「自由」、すなわち干渉されない「消極的」自由が必要である。したがってその政治理想もこの延長線にある戦争・暴力の反対、集権・欺瞞政治の指弾、個人教育と権利の保証、共同体の構成と共存など一連の倫理的信条に基づかれている。彼の戦中および戦後の政治的スペクトルの中から、最初にアナルコサンジカリズム、次にギルド社会主義を選んで擁護するが、その基底に流れている信念は一貫していたものであったと言えよう。このような信念を抱えていたラッセルは、1920年の5月に、「労農ロシア」へと出発したのであった。

¹ 日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、理想社、1971、39頁。

² Contemporary political thought in England, By Lewis Rockow, London, Leonard Parsons, 1925, p. 130-166.

³ B・ラッセルの自伝 (The Autobiography of Bertrand Russell, 3 vols, London, Allen & Unwin, 1967-1969) の日本語訳として、2018年現在、日高一輝氏による『ラッセル自叙伝』(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ) 全3巻 (理想社、1968-1973) と日本バートランド・ラッセル協会のオフィシャルサイト「Portal site for Russellian in Japan」に載せられている、松下彰良氏的全訳 (<http://russell-j.com/beginner/AUTOBIO.HTM>) という二種類がある。とりわけ後者は、前者において見られた多くの誤訳などを訂正した形での再訳であるが、なおミスと不適切な箇所が多い。このため本稿で用いる訳は、出版された日高氏の訳をベースに、英文原著を参照にしつつ、筆者個人で修正を加えたもので、所々に日高訳とは異なる部分がある。なお、読者の便宜のため、ラッセル特有の表現・概念には、カッコをつけて英文原文をも添付している。

⁴ 「私はこの本を、一人の正統な自由党員の観点から書いた。私は労働党に入党するのは、1914年になってからのことである。(中略) 私はそれを、過去の筆者が過去の世界について批評した歴史的文書として残しておいた」とラッセルは「1965年版への序文」(バートランド・ラッセル、河合秀和訳『ドイツ社会主義』、みすず書房、1990、1頁) で書いた。

⁵ 前掲河合秀和訳『ドイツ社会主義』、9頁。

⁶ 同上、179頁。

⁷ 日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅰ、理想社、1971、170頁。以下では『自叙伝』Ⅰ(第2巻は『自叙伝』Ⅱ)と略称する。

⁸ 同上、183頁。

⁹ 『プリンキピア・マテマティカ』執筆のため、ラッセル夫妻は当時、ホワイトヘッド夫妻の家に二人と同居していた。ある日ラッセルは、ホワイトヘッド夫人 (Evelyn Whitehead) が持病の心臓発作を目撃していたが、助けることもできなく、人間ひとりひとりの孤独さに気づいて衝撃を受けていた。『自叙伝』Ⅰでラッセルは当時の状況と心境を以下のように回想している。「ホワイトヘッド夫人 (Evelyn Whitehead) は、当時しだいに病弱になりつつあり、心臓病のために常にはげしい痛みを感じていた。ある日、(中略) 私たち夫婦が帰宅した時、ホワイトヘッド夫人は、これまでにない激痛の発作に苦しんでいた。彼女は、苦悶の壁によって、全ての人や全てのものから遮断されてしまっているかのように見え、突如として、人間一人一人の魂は孤独であるという感情が私を圧倒した。結婚してから、私の情緒生活は穏やかであるとともに、浅薄であった。深遠な問題はすべて忘れており、軽薄な如才なさに満足していた。(しかし) 突然、大地が私の足下で崩れ去るように思え、そうしてそれ以前と全く異なった世界に自分がいるのを発見した」。その後、のち史料で引用したとおりのラッセルの内省が始まったが、最後に「不思議な興奮が私を捉えた。それには、大きな苦痛が内に含まれてはいたが、また同時に、自分は苦痛を支配することができ、その苦痛を「叡智への門 (a gateway to wisdom)」とすることができる——私はその時そう思ったのであるが——、という事実ゆえに、一種の勝利感すら含まれていた。その時たしかに自分は所持していると思った「神秘的な洞察力」もその後かなり色あせ、分析の習慣が再び自己主張し始めた。しかしあの瞬間に確かに自分が悟ったと思うこ

との幾つかは、いつも心の底に残り、それが、第一次世界大戦中の私の態度、子供への興味、小さな不幸に対する無頓着、及び、私の人間関係すべてにおけるある「感動しやすい情的な傾向」を、私にもたらしたのである」と述べている（『自叙伝』Ⅰ、183-184頁）。

¹⁰ 同上、184頁。

¹¹ 同上。

¹² 同上。

¹³ 宣戦当時のイギリス政府内閣は第1次アスキス内閣（1908-1915）であり、与党は自由党であった。ラッセルの正式脱党は1915年4月26日以降である。

¹⁴ *The Collected Papers of Bertrand Russell, Volume 14: Pacifism and Revolution, 1916-18*, Edited by Richard A. Rempel, Louis Greenspan, Beryl Haslam Albert C. Lewis, Mark Lippincott, London and New York, Routledge, 1995, p. xxiii.

¹⁵ *The Collected Papers of Bertrand Russell, Volume 13: Prophecy and Dissent, 1914-16*, Edited by Richard A. Rempel with the assistance of Bernd Frohmann, Mark Lippincott, Margaret Moran, London, Boston, Sydney, Wellington, Unwin Hyman Ltd, 1988, p. li.

¹⁶ 1915年7月に独立労働党の入党要請を一度断っていた。Ibid, p. xxv.

¹⁷ 金子光男『ラッセル』清水書院、1968、80頁。

¹⁸ 『Justice in War Time (戦時の正義)』(London, Allen & Unwin, 1916)、『The Principles of Social Reconstruction (社会再建の原理)』(London, Allen & Unwin, 1916)、『Political Ideals (政治理想)』(New York, Century, 1917)、『Roads to Freedom; socialism, anarchism and syndicalism (自由への道;社会主義、アナキズム及びサンジカリズム)』(London, Allen & Unwin, 1918)。

¹⁹ *The Collected Papers of Bertrand Russell, Bibliography of Bertrand Russell, Volume II: Serial Publications, 1890-1990*, By Kenneth Blackwell and Harry Ruja with the assistance of Bernd Frohmann, John G. Slater and Sheila Turcon, London and New York, Routledge, 1994, p. 3-45.

²⁰ Ibid.

²¹ 前掲『自叙伝』Ⅱ、11頁。

²² 同上、40頁。

²³ 同上、41-42頁。

²⁴ 同上、39頁。

²⁵ G・E・ムーア (George Edward Moore、1873-1958、イギリスの哲学者) のことである。

²⁶ バートランド・ラッセル、野田又夫訳『バートランド・ラッセル著作集別巻 私の哲学の発展』、みすず書房、1963、67頁。

²⁷ なお、ここでの日本語訳は前掲『バートランド・ラッセル著作集別巻 私の哲学の発展』(みすず書房、1963)における野田又夫氏訳を用いている。

²⁸ 同上、82頁。

²⁹ 丁子江『羅素と分析哲学 現代西方主導思潮的再審思』北京大学出版社、2017、11頁。

³⁰ 同上、299頁。

³¹ 前掲『自叙伝』Ⅱ、12頁。

³² 同上。

³³ 同上、13頁。

³⁴ 同上、14頁。

³⁵ 同上。

³⁶ 日本語訳には『正義と闘争』（時国理一訳、日本評論社出版部、1920）および『戦時と

正義』（『ラッセル論集』所収、松本悟朗訳、日本評論社出版部、1921）の2種類あるが（牧野力編著『ラッセル思想辞典』早稲田大学出版部、1985、「ラッセル原書目次一覧」9頁）、いずれも出版の時代が早く、現代日本語に使われない表現も多いため、本稿で使うこの著作に関する日本語テキストはすべて原著（Justice in war time, by Bertrand Russell, Chicago, London, The open court publishing co, 1916. 5.）に基づいて筆者が訳したものである。

³⁷ Ibid, p. 4.

³⁸ Ibid, p. 15.

³⁹ Ibid, p. 64.

⁴⁰ Ibid, p. VII.

⁴¹ Ibid, p. 13, p. 17.

⁴² Ibid, p. 18-19.

⁴³ Ibid.

⁴⁴ 前掲『自叙伝』II、13頁。

⁴⁵ Bertrand Russell, op.cit., p. 64-65.

⁴⁶ Ibid, p. 3.

⁴⁷ 現象学の父であるE・フッサール（1859-1938）がその最晩年の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie, 1936）において、第一次世界大戦以来の「ヨーロッパ諸学の危機」は、プラトン・アリストテレスによって彫琢された、理性的な認識だけでなく、また倫理的行為や、歴史の目的論をも内包した「理性」（logos）が近代になって、数学的自然科学を範型として構成される「理性」（ratio）概念によって解体された事態に由来しているとの見解を提示した。

⁴⁸ 日本語訳は近年に出た市井三郎氏（ラッセル『社会改造の諸原理／数理哲学入門 その他』市井三郎訳、河出書房新社、2005）のバージョンを参考している。

⁴⁹ 前掲市井三郎訳『社会改造の諸原理』、12-13頁。

⁵⁰ 同上。

⁵¹ 同上、15頁。

⁵² 同上。

⁵³ 同上、14頁。

⁵⁴ 同上、15頁。

⁵⁵ 同上、16頁。

⁵⁶ 同上、19-20頁。

⁵⁷ 同上、24頁。

⁵⁸ 同上。

⁵⁹ 同上、25頁。

⁶⁰ 同上、28頁。

⁶¹ 同上、26-27頁。

⁶² 同上、28頁。

⁶³ 同上、30頁。

⁶⁴ 同上、31頁。

⁶⁵ 同上。

-
- ⁶⁶ 同上、33 頁。
- ⁶⁷ 同上、45 頁。
- ⁶⁸ 同上、46 頁。
- ⁶⁹ 同上、46-47 頁。
- ⁷⁰ 同上。
- ⁷¹ 同上、50 頁。
- ⁷² 同上、77 頁。
- ⁷³ 同上、79 頁。
- ⁷⁴ 同上、89 頁。
- ⁷⁵ 同上、90 頁。
- ⁷⁶ 同上。
- ⁷⁷ 同上、146 頁。
- ⁷⁸ 本書に関する日本語テキストは、バートランド・ラッセル、牧野力訳『政治理想』（理想社、1975）による。
- ⁷⁹ 前掲牧野力訳『政治理想』、36 頁。
- ⁸⁰ 同上、55 頁。
- ⁸¹ Rempel et al, op.cit., p. 117-118.
- ⁸² Ibid, p. 117-118, p. 127-128.
- ⁸³ 「ブレスト＝リトフスク条約」によって、ロシアは賠償と合併を条件にドイツと講和し、これは臨時政府が最初に承認していた無賠償・無併合原則への裏切りと見られた。
- ⁸⁴ この著作に関していくつかの日本語訳は出ているが、本稿で用いた日本語テキストは筆者が原著 (Roads to freedom: socialism, anarchism, and syndicalism, by Bertrand Russell, London, Allen & Unwin, 1918.) より訳したものである。
- ⁸⁵ Bertrand Russell, op.cit., p. 12-13.
- ⁸⁶ 福地潮人「古典的アソシエーションリズムの現代的再生——P. Q. ハーストの G. D. H. コール解釈をめぐって」『立命館産業社会論集』37 (4)、2002、103 頁。
- ⁸⁷ 同上、107 頁。
- ⁸⁸ Rempel et al, op.cit., p. 468.
- ⁸⁹ Bertrand Russell, op.cit., p. 91.
- ⁹⁰ The Collected Papers of Bertrand Russell, Volume 15: Uncertain Paths to Freedom: Russia and China, 1919-22, Edited by Richard A. Rempel and Beryl Haslam with the assistance of Albert C. Lewis and Andrew Bone, London and New York, Routledge, 2000, p. 81.
- ⁹¹ バートランド・ラッセル、河合秀和訳『ロシア共産主義』、みすず書房、1990、24 頁。
- ⁹² 同上、39 頁。
- ⁹³ 同上。

第3章 「新しい宗教」とロシアの失敗——ラッセルのボルシェヴィズム論とそれが惹起した波瀾について

はじめに

1920年5月11日から6月16日にかけて、B・ラッセルは、イギリス労働者代表団(British Labour Delegation)¹の随行観察員(observer)として、内戦および干渉戦争の渦中にある「労農ロシア」を訪れた。訪問途中、彼はロシアの現地ルポおよび観察を記して、イギリスおよびアメリカで刊行された週刊誌『Nation(ネーション)』に寄稿²し、さらに訪中の直前、ボルシェヴィキ政権の理論と実践に関して一冊の著書を書き上げた。1920年10月12日、上海に到着した彼は、長沙で「湖南省教育会」が主催した講演会において、この著書に基づき「ボルシェヴィキと世界政治」の題名で4回の講演を行う。そして、1920年11月、彼が長沙から北京に到着して間もなく、前述の著書『The practice and theory of Bolshevism(ボルシェヴィズムの理論と実践)』³は正式に出版された。大戦中に勃発し、戦争の情勢はもちろん世界史にすら影響を及ぼす「ロシア革命」と、その後に成立した「共産主義国家」がもたらした地殻変動を観察・分析したこの著述は、欧米に留まらず、日本および中国の知識人からも注目され、議論されていくこととなる。

こうしたラッセルのボルシェヴィズム論について、既存の研究においては、主に当該期の民国知識人とりわけ初期マルクス主義者たち、例えば陳独秀、李大釗および青年毛沢東の批判的議論を中心に検討されてきた。そこで展開されたのは、ラッセルが主張した「ギルド社会主義」は、やがてマルクス主義の伝播によって消滅するに至ったという単線的、目的論的な叙述である。それにくわえてこれらの研究は、ラッセルのボルシェヴィズム論がいかにかに翻訳されたのかという書誌的研究を欠き、また当該期の日本知識人がこれをいかに受容したのかという観点も欠落している。そのため、前記書物が日中両国の初期マルクス主義者の間にもたらした連動への分析もほとんどなされることはなく、ラッセル自身におけるボルシェヴィズムに対する態度の変化に関する検討も十分になされてこなかった。

そこで本章ではまず、ボルシェヴィズムおよびその実践形式としての「革命」「ソヴィエト体制」について、ラッセルの分析を見ることにする。次に、かかるラッセルのボルシェヴィキ観を受けた日中の知識人が、それぞれにおける内外の矛盾と向き合いつついかなる議論を交わし、それを変容していったのかを追跡していく。

第1節 「新しい宗教」とロシアの失敗——ラッセルのボルシェヴィズム論

私は社会主義者としてロシアへ行った。しかし疑いを持たぬ人々と接して私自身の疑いは千倍にも強くなった。社会主義そのものにたいする疑いではなく、信条を固く抱いてそのために広く不幸をもたらすのは賢明なことかという疑いである⁴。

ラッセルがロシアの「ペトログラード」(今のサンクトペテルブルク)についたのは、

1920年の5月12日であった。ペトログラードに滞在していた最初の5日間に、ロシア哲学協会を訪問して知識人と談話し、また病床についたマクシム・ゴーリキーとも面会した⁵。そして5月17日から26日までモスクワで過ごし、トロツキー、レーニン、当時メンシェヴィキのリーダー、ユーリー・マルトフ（Yuliy Martov, 1873-1923）らとも会談する。さらに代表団成員の「農民と接したい」⁶という希望が受け入れられ、5月27日から6月12日までヴォルガ川に沿って船行し、「ニジニ・ノヴロドからサラトフにかけてヴォルガ河を下り、多くの場所に止まって住民と自由に話し」⁷あった。6月12日以降は鉄道でモスクワに戻り、6月16日に出国し、6月28日、イギリスのニューカッスル港に帰還する⁸。彼は、これらの経験を文章にまとめ、まずロンドンとニューヨークで発行されていた週刊誌・『The Nation（ネーション）』に寄稿した。これらの文章はのちの『The practice and theory of Bolshevism』の第一部「ロシアの現状」⁹となったものである。そして第二部「ボルシェヴィキの理論」、すなわち、マルクス主義およびその「労働階級独裁論」を発展させたボルシェヴィズムに対し、根本的な批判を展開する部分は、中国へと出発する前のパリ滞在時に執筆されたものであった。実際、この著述が引き起こし得る大きな波瀾を予見していたラッセルは、一時期この本を執筆し続けるべきかどうかについてかなり悩んでいた。何と云っても当時のイギリスの左派知識人たちは、みなロシア革命に同情的であったし、またこのような反対意見は必ず議会政治・党派闘争に利用されるであろうという自覚を、ラッセルはもっていたからである。

ボルシェヴィズムに対する反対意見を述べるのが、それにたいする反動に都合のいい行動をすることになるのはもちろんであったし、わたくしの友人たちの大部分が、ロシアに関しては、賛成意見をもつのでなければ、決して自分の考えを口外してはならないという見方をしていた。しかしながらわたくし自身は、第一次世界大戦に際して、愛国者たちからこれと同じような議論を浴びせられたけれども、別にどうとも感じなかった。それに、沈黙を守ることは、長期にわたると決していい結果にはならないようにわたくしには思われた。そしてわたくしにとって、ドラとの個人的関係の問題¹⁰が、事情をより一層複雑にしたことはもちろんである。或る暑い夏の夜、（中略）わたくしは起き出でて部屋のバルコニーに坐り、星をじっと見つめていた。わたくしは、熱した党派的感情からはなれて、冷静に問題を凝視しようと試みた。そして、カシオペア星座と語り合っている自分を想像した。もしわたしが、ボルシェヴィズムについて考えたことを発表するならば、そうする方が、しないよりもはるかに星との調和を保つことになるように思われた¹¹。

こうして「我が上なる星空と、我が内なる道德法則」と対話し、あえてこの著述を公に送ろうとしたラッセルは、マルセイユ港から中国へと出航する前夜に、原稿を仕上げ、出版社に送った。すでに発表されたいくつの章をベースにして書き下ろされたこの本は、まずイギリスを中心に言論の嵐を呼んだ。「ディリー・ヘラルド新聞ではジョージ・ランス

バリーとジョージ・ヤングが攻撃を加え、H・N・ブレイルスフォードが腹を立てて書いた。ニューヨークのリベレーター紙ではマックス&クリスタル・イーストマンが嘲笑の記事を書いた。パーティ（ラッセルのこと、筆者注）は彼らの理解不足と、彼のホイッグ党の先輩に対する彼らの愚弄に対して心を痛めた¹²。こうまでも攻撃を浴びせられたのは、左派内部の「一致団結」はもちろんのこと、ラッセルがこの著述の序言の冒頭部で、ボルシェヴィズムを一種の「新しい宗教」であると喝破したからであった。

ボルシェヴィズムは、たんに一つの政治理論であるだけではない。それは精緻な教義と靈感のこもった経典をそなえた一つの宗教でもある¹³。

私は、ボルシェヴィキとエジプトの世捨て人の両者をともに悲劇的妄想の所産——世界に何世紀もの暗黒と無益な暴力をもたらすかもしれない悲劇的な妄想の所産と見ている。キリスト教の「山上の垂訓」の教えは立派なものだが、それが平均的な人間に与えた影響は意図されたものとは大いに違っていた。キリストに従った人々は敵を愛したり、もう一方の頬を向けることを学ばなかった。それに代わって宗教裁判や焚刑の使い方、人間の知性を無知で狭量な僧侶たちの言いなりに従属させること、一千年にわたって芸術を墮落させ、科学を絶滅させることを学んだのであった。それは教えそのものではなく、教えを熱狂的に信じたことの不可避的な結果であった。共産主義を呼び覚ました希望は、概して山上の垂訓が教え込もうとした希望と同じく立派なものである。（中略）我々の本能には残酷さが潜んでおり、狂信は残酷さをかくすカモフラージュである¹⁴。

実際類似した観点はすでに、1896年彼の初めての単著である『German Social Democracy（ドイツ社会民主主義）』¹⁵に現れていた。マルクス主義、とくに「史的唯物論」を思想的バックボーンとしたドイツの「社会民主主義は、たんなる一つの政党ではなく、たんなる一つの経済理論でもない。それは、世界と人間の発展についての完全に自己完結的な一つの哲学であり、一言でいえば、一つの宗教、一つの倫理学だからである」¹⁶、と。マルクスの一見「科学的」である哲学・経済学的言説の深層にある、その時代の最も大きな不正である、労働の疎外がもたらす人間性の疎外に対する強烈な憎悪と、その憎悪に孕まれている歴史を動かす偉大な力を、当時まだ青年であるラッセルは見つめていた。哲学の視点から見たときマルクスは、ヘーゲル哲学の弁証法を継承しながらも、その形而上学における客観的唯心論を完全に転倒し、フォイエルバッハおよび同時代のフランス哲学者から情念を完全に退けた唯物論を取り入れた。「マルクスは論理的には弁証法的合理主義者であり、同時に形而上学的には独断的唯物論者である」¹⁷と指摘したラッセルは、まずその「史的唯物論」の特徴を分析し、その政治実践における宗教的力の根源をたどる。

マルクスがヘーゲル哲学から継承した弁証法を歴史学・歴史解釈に転用した「史的唯物論」には、相互否定の原則からきた非連続的・段階的の革命論、すなわち暴力革命の形式と、

弁証法のダイナミックなロジックからきた、革命の不可避を説く宿命論の二つの特徴が現れてくる。この二つの特徴が相互補強・相互牽制し、「理論的な意味では世界についてのそれ以前のいかなる理論にもまして革命的」¹⁸となっている一方、「社会民主主義にその宗教的な信念と力を与えている（史的唯物論の宿命論的特徴、筆者注）が忍耐力を養い、暴力革命への自然な傾きを抑制する」¹⁹ことにもなる。こうしてマルクス主義は、最もラディカルな変革者の一群を引き込み、正義と必勝の教義を教え込んで団結させる。こうした宗教的な力は、マルクスの叙事詩的文筆によってさらに高められ、『共産党宣言』²⁰へと結実する。

こうした流れを、「これらの特質は、ある程度まで、すべての新興宗教に共通している」²¹と指摘したラッセルはさらに、マルクスの経済学理論における論理的誤謬・矛盾を摘出する。D・リカード（David Ricardo、1772-1823）とその弟子たちの「労働価値論」に最も啓発されていたマルクスは、イギリスの都市産業の分析を通して、その「資本論」の中心理論となる「剰余価値論」と「資本集中論」を打ち出したが、前者の剰余価値論には、概念的・方法的誤謬²²が内在しているだけでなく、両理論が互いに論理的に矛盾²³しているとラッセルは指弾している。地代理論の誤り²⁴および経済動力としての「需要」を無視したマルクスの経済理論は、産業プロレタリアート以外の階級利益の無視、労働組合などの方法への敵視、ナショナリズムへの無理解を招致し、普遍的法則としての理論自体が破綻²⁵せざるを得ない。しかし、理論自体の破綻は決して人心の離散を意味するものではない。むしろ、理論への反発は、広範な敵意を革命の前提として織り込んでいるマルクス主義理論の想定内にあるし、むしろその組織と動員の力となるだろうとラッセルは見込む。

資本集中の法則は、すべての都市労働者に訴えかけた。彼らは日々の生活の中で大工業の急速な発展と手工業の急速な崩壊を目にしていたからである。この法則がそれに内在する運命的な必然性によって集団主義的国家の出現をもたらすという理論は、マルクスの弟子すべてに究極の勝利への自信を湧き立たせ、彼らが求めているものに——これまでのようなでたらめの夢想のユートピアと違って——証明済みの科学的事実であるかのような雰囲気を選びさせた²⁶。

このような見解は、ボルシェヴィキ政府とロシアの現状への観察を通して一層強められた。人々には、時代の混乱と不正義から生み出された新たな「千年王国」への熱望が、ボルシェヴィキによって実現されたかのように見えたのだ、と。

第一次世界大戦は全ヨーロッパに幻滅と絶望の機運を残した。その機運は、人々に元氣よく生きていくエネルギーを与えることができる唯一の勢力として、新しい宗教を声高に求めている。ボルシェヴィズムはこの新しい宗教を提供した。それは素晴らしいこと——貧富という不正の終わり、経済的隷従の終わり、戦争の終わりを約束する。政治生活に毒を流し、産業体制を破壊させかねない階級間の分裂の終わりを約束する。

商業主義——すべてのものを金銭的価値で評価させ、そして金銭的価値をしばしば怠け者の富豪たちの気まぐれでけっていさせるよう仕向けていくあの巧妙な虚偽の終わりを約束する。すべての男女が労働によって健全に暮らし、すべての労働が少数の富裕な吸血鬼のためだけでなく社会全体にとって価値があるような世界を約束する。それは、無関心と悲観論と倦怠、そして境遇のせいで怠惰な暮らしをしていて、何かの活動をするにはエネルギーが足りないといった人々の複雑な悲惨さのすべてを一掃しようとする。宮殿とあばら屋の対比、無用な悪徳と不必要な悲惨さに代えて、健全な労働——充分ではあるが過重ではなく、すべてが有用で、悲観論にさく時間や絶望する閑などない男女の健全な労働を対置しようというのである²⁷。

一方、資本主義およびその付随物としての古典自由主義の価値が、第一次世界大戦の勃発によって完全に失墜したと見るラッセルは、新たな価値、すなわち社会主義が承諾した「正義」は必ず力を発揮すること自体は信じていた。ただし、階級闘争と独裁の方法で富の均等配分を実現しようというボルシェヴィズムの方法が、「権力悪」に陥りやすいためその目的にある「共同社会」の実現には繋がりにくく、西欧各国の社会改革に向いていないと判断したのである。

現在の資本主義体制の運命はすでに決まっている。その不正ぶりはあまりにどぎつく、賃金労働者は無知と伝統によってようやくそれを許している。(中略) 根本的に新しい社会秩序が出現するであろうということについては、私は何の疑いも感じていない。そして、その新しい秩序が何らかの形態の社会主義であり、(中略) 私は何の疑いも感じていない²⁸。

ボルシェヴィキ理論は一つの悪、つまり富の不平等が他のあらゆる悪の根底にあると考え、それに注意を集中している点で誤っていると、私は思う。私は、どれか一つの悪をこのように一つだけ切り離すことはできないと思うが、しかし政治的諸悪の中で最悪のものを一つ選ばねばならないとすれば、むしろ権力の不平等の方を選ぶに違いない。そして、この悪は階級闘争と共産党の独裁によっては治癒できないと主張するであろう。平和と長期にわたる漸進的な改良だけが、それをもたらすことができるのである。(中略) 個々人の間の良好な関係、憎悪と暴力と抑圧からの自由、教育の一般的な普及、合理的に利用される余暇、芸術と科学の進歩——(中略) このようなものが——きわめて例外的な場合を除いて——革命と戦争によって増進できるとは、私は信じない。(中略) 私はロシアにおけるボルシェヴィズムの必然性、さらには有効性を承認するが、他方で以上のような理由で、それが広がることを願っていないし、また西欧諸国の進歩的政党にその哲学を採用するよう提唱したりはしない²⁹。

さらにラッセルは、革命のリーダーたち、とくにレーニンとトロツキーとの接触を通じ、

そして「ソヴィエト」の選挙過程を見てその確信を一層固めた。レーニンの階級闘争論への執着と教条主義³⁰、トロツキーのナショナリズム³¹への迎合、選挙の不正³²、そして民衆への強制労働・徴用などから、ボルシェヴィズムがもたらすのは、欧米の資本主義的社会をはるかに越えた、高度な組織的、抑圧的体制となるという予感を、ラッセルは抱かずにいられなかった。ゴーリキー³³のような民衆階層に真摯な感情をもち、ロシアの文明・芸術を守ろうとする文化人もいたが、それは強権と暴力の前ではあまりにも無力なものであった。「労農ロシア」が当面した諸々の困難は当然、内戦と干渉戦争によるものでありながらも、本質的には、マルクス主義理論の哲学的基礎に由来している独断的性質、またそれを具体的な人間生活に押し付ける理論と権力の濫用にあると、ラッセルは分析している。そこでラッセルは一方で連合軍からの干渉戦争の終結および早期講和を呼びかけ、もう一方で西洋文明に潜む根本的な病巣に気がつき始めた。それはまさしく、他者との共感と連帯を無視した「主体的暴力」であった。

西洋の考え方の中に宿る病根がいかに根深いものであるかを、私が初めて実感したのは、1920年の夏、ヴォルガ河を航行した時であった。日本と西欧諸国が中国で現在行っているのと、そっくり同じように、ボルシェヴィキは本質的にはアジア人種である人々に西洋流の考え方を押し付けていた³⁴。

すべて政治とは、富か権力か理論のために隷属民族を苦しめる術策を活発で頭の回転の早い者共に教え込み、蔭でニタニタ笑う悪魔共に動かされているものだ、とやっと私は感じ始めた。農民から徴発した食糧を食べ、農民の子弟から徴募した軍隊に護られて、われわれ一行が旅を続けていく時、われわれは彼らに何をしてお礼として与えるべきかと、私は自問した。しかし、何の答えも思い浮かばなかった。時々私は彼らの悲しい歌をきき、バラライカの妙に心に沁みて離れない調べを耳にした。その調べは大草原の深い沈黙にまじり合い、そして私の心に西歐的希望に対する恐ろしい疑念が湧き、心痛み、その希望が次第に色あせてゆく思いが心に残った³⁵。

第2節 翻訳と伝播——ラッセルのボルシェヴィズム観が惹起した波瀾、その一

「人間に必要なものは「合理化された資本主義かソヴィエトの国家計画」のどちらかによって満たされうると理解」されていた³⁶20世紀前葉の世界では、ラッセルのこれらの文章はただちに東西のメディアによって広く伝播された。それは欧米にとどまらず、「遠東」にある日本および民国の新聞雑誌にも翻訳・注目される。早い時期では、日本側において、大蔵省理財局が翻訳した「露西亜を訪ふの記」（大蔵省理財局『調査月報』10（9）、1920年9月、67-97頁）があるように政権側に重視された一方、民間でも大山郁夫の手による「労農ロシアを訪うて」（『我等』2（10）、1920年10月、163-189頁）、田辺忠男による「ソヴィエト露西亜、1920年」（『財政経済時報』7（10）、1920年10月、45-53

頁；同上7(12)、1920年12月、43-45頁)といった翻訳があった。これに対し、民国側の翻訳として、雁氷の訳による「游俄之感想」(『新青年』8(2)、1920年10月1日、1-22頁)³⁷と胡癒之による「羅素の新俄観」(『東方雑誌』³⁸17(19)、1920年10月10日、37-50頁；同上17(20)、1920年10月25日、53-66頁)がある。とりわけ民国期中国における「新文化運動」の旗手を果たす陳独秀(1879-1942、民国革命家・政治家・ジャーナリスト)が主宰し、「五・四運動」前後マルクス主義を宣伝し始め、のち「中国共産党の機関誌」³⁹となる『新青年』誌では、まもなく訪中するラッセルの思想を紹介・宣伝するために、ラッセルの全体的な思想紹介(張崧年執筆)および、五つの文章の翻訳を載せた「ラッセル特集号」⁴⁰が生まれ、「游俄之感想」はその中の一篇であった。同誌の特集号は、1915年の『新青年』誌創刊以来、「イプセン号」(4巻6号、1918年6月15日発刊)、「人口問題号」(7巻4号、1920年3月1日発刊)、「労働節記念号」(7巻6号、1920年5月1日発刊)に次ぐ4回目であった。これは「新文化運動」の主要拠点であり、当該期の民国知識人および青年学生の必読雑誌『新青年』が、ラッセルの来訪をいかに重視していたかを物語るものであり、当時民国の思想界が挙げてラッセルの訪問を歓迎している証拠でもあったといえよう。

これら日中両国の共時的翻訳は、既述したように、英米両国のネーション誌に掲載された、ラッセルの文章の翻訳・抄訳であり、こうした訳書があふれたのは、ロシアの現状への事実的関心がまず強かったことと、ラッセルの来訪と相まってその思想の紹介という意味も含まれていたためと考えられる。翻訳とともに、ラッセルのボルシェヴィキ観についての論説も両国の知識人たちによってなされている。これらの論説は、単純なラッセルのボルシェヴィズム観への論評というより、日本と民国の「改造」の現実に立って、両国の「近代化」過程と深く関るものであった。

まず、当時日本の経済専門雑誌『東洋経済新報』の編集長・石橋湛山による観点を見ておこう。「ラッセルの露国観」ほか⁴¹と題されているこの短い評論は三つの部分、——「ラッセルの露国観」「露国の真相」「対露干渉の危険」よりなっている。

英国の学者バートランド・ラッセル氏が、米国の雑誌『ネーション』の7月31日及8月7日号に掲げた労農露国視察記は、内外に、非常な評判となった。既に我国にも、今月其翻訳を出した雑誌が一、二ある。蓋しラッセル氏が、社会評論家として此頃の売れっ子である為めでもあろうが、又其記す処が、氏の人物から判断して、可成り信ずるに足る為めであらう。米国にある労農政府機関誌も、之に対する批評を掲げておるが、意見は兎に角、事実に於てラッセル氏の記事を、間違っておるとは云うていない⁴²。

ラッセルの現地報告の信憑性を肯定した上で石橋は、ラッセルの文章はボルシェヴィキ政府の腐敗と非効率の単純な事実を叙述しているだけで、かえっていかなる罵詈雑言よりも力強い批判となることを評価した。というのは、石橋はボルシェヴィズムの政治実践に

対しては、やや保留・保守的立場を取っている。石橋はさらに、ラッセルは、ボルシェヴィキ政権・政治を擁護しないながらも、干渉戦争の早期停戦と、平和と貿易の回復を呼びかける主張について、大いに賛同の意を表して、

前陳せる如く、今日の過激派政治は少数独裁の政治であるから、其少数者の性質に依っては、何時でもナポレオン帝国を実現し得る。幸にしてレーニン、及今日の過激派は、共産主義の真面目なる信者であるから、絶大の権力を握りながら、之を自己の私益に利用しようとは思わない。けれどもレーニンは何時倒れるか、わからない、連合国が露国に干渉して、何時までも平和と貿易とを与えぬならば、或は恐る、露国は第二のナポレオン帝国となり、最近の欧州戦争は、更に大なる世界戦争の前幕となることを、と。之がラッセル氏の視察記の結論である。吾輩は、氏の此結論をば是非我国民の含味せんことを求めて已まぬ⁴³。

と、外からの干渉戦争がさらにロシアの軍事化を促す危険を説いた。これには当時シベリア派兵に乗じて大陸への勢力拡張を意図する帝国日本の冒険的外交政策に対して、国民の警戒を喚起する意図がうかがえる。石橋は、1915年の対華21か条の批判を始め、第一次世界大戦中において日本のシベリア出兵策に対して「速に西伯利より撤兵せよ」⁴⁴「労兵政府と妥協せよ」⁴⁵と呼びかけ続けており、また大戦後の「三・一」運動、「五・四」運動とともにアメリカの排日移民策を見て、自ら「袋叩き」⁴⁶の現状を招致した日本の軍国的・差別的な外交政策を批判してきた。ラッセルの受容も、こうした石橋の一貫した立場からなされたものといえよう。それでも石橋の観点は、おおよそ現実的・政治的立場から出発したものであって、ボルシェヴィズムの理論およびそれに対するラッセルの分析についてそれほど深く論じていなかった。

ラッセルの主張に同調して自分の議論を展開した石橋とは対照的に、のち日本社会主義同盟の機関誌『社会主義』⁴⁷に論陣を張った一群の知識人は彼に対して猛烈な批判を展開した。『社会主義』の第2号（1920年11月）、第3号（1920年12月）、第6号（1921年3月）、第9号（1921年9月）に、堺利彦、山川均、近藤栄蔵、高津正道がそれぞれ、外国誌の論評抄訳、論説、書評などといった形でラッセルのボルシェヴィキ観を批判している。中でも最も早かったのが「お上品学者ラッセル」⁴⁸と題する堺利彦の批判であった。堺はいくつかの外国雑誌の論説を抄訳し、ラッセルの「平和主義」と「人道主義」を大いに皮肉ってみせる。

革命的大混乱の四辻に立って、「ロード・ツー・フリーダム（自由への道）」はあちらだよと、柔和忍辱のお姿をもって無事平和の大道を衆生に指さして下さる地藏尊を、バートランド・ラッセルと申す。この地藏尊の熱心な信者が、善男善女の間におびただしいことは、西洋でも東洋でも変りがない。ところがこの地藏尊先ごろロシヤに参られ、過激派のやり口をご覧あって、きんざんにごきげんを損じ、めっそうもないこ

と、自由の道は決してあのような方向ではないと、いよいよもって無事平和の大道を説き諭された。それがこのごろ有名なラッセル教授の「労農ロシヤ視察記」である。その日本訳は『我等』と『解放』との10月号に載っている。そこでわたしは、その「視察記」に対する二、三の批評を西洋雑誌から拾い集めて、少しばかりその内容をここに摘録してみる。地蔵尊のお指ざしに間違いはないはずだが、外道の言うことも少しくらい、聞いておいて損にはなるまい。しかし外道の言分はとかく乱暴で、そのままお取りつぎしかねるところもある。その辺には少々さじ加減もあるものご承知を願う⁴⁹。

つづいて堺は、アメリカ発行の『ニューヨーク・コール (New York Call)』誌の「世間並みのブルジョア自由主義」、『ソヴィエット・ロシア (Soviet Russia)』誌に掲載されている「太陽にすらも黒点がある」「いかなる革命もお気に召すまい」、そして『リベレーター (The Liberator)』誌からの「人道主義のブルジョア学者」という4つの外刊論説を抄訳して掲載した。この4つの論説において、ラッセルは基本的に、そのブルジョワジーの身分、貴族出身という出自から、労働者階層との共感を欠いていると批判される。これらの批判は、すでに述べた通り、外国雑誌からの抄訳に基づくが、堺がこれらの論説を訳したこと自体、彼が基本的にこれらの観点に同意していたことを意味するといえよう。

ラッセルは言っている。わたしは代議政体の新形式の興味ある実験を見るべく、ロシヤに行くのだと思っていたと。それがすでに間違っている。彼は、イギリスのギルドメンの穏かな空想と、ロシヤの過激派の現実の戦いとを混同している。彼は新案代議政体の、面白い模範的実験室を見物するつもりであった。しかるに行ってみると、猛烈な階級闘争の形相が赤裸々に露出されていた。それが彼の温和な性情を痛ましめた。彼がレーニンと語った時、レーニンはけだしこう感じたであろう。英国の貴族ジョン・ラッセル卿の孫たるこの人は今、自分一人の気むつかしい好みに適合するような労働者革命をたずねているのだと⁵⁰。

英国の実生活は決して知識階級の間における温和な討論のようなものでない。英国の実生活にはずいぶん強い憎悪もあり、ずいぶん烈しい腕力ぎたもある。お上品なラッセル氏は、自分を全く国人から切り離して、イギリス生活を誤表しているが、実際のイギリス生活は「親切と寛容」からずいぶん遠い、粗野剛健な調子を持っている。(中略)ラッセル氏にとっては、恐らくいかなる革命もお気に召さぬであろう。平生から上品な人々とばかり交わり、相互の間に大した利害の衝突もなく、上品な事ばかりやっている人が、たちまちにして問題にブツつかっている平民の間に投げこまれたとしたらドゥだろう。そしてその平民らは問題の解決に一生懸命になって、そのやり口の乱暴な事などには頓着しないとしたならドゥだろう。ラッセル氏の場合はまさにそ

れである。(中略)我々はラッセル氏ほどの人物を小ブルジョアと呼ぶことを好まないが、しかしゴルキーの本の中にはいかにもラッセル氏を小人物に見せる個所がいくらかもある。それによればラッセル氏は、上品な人々と楽な談論をすることばかりに興味を持って、熱烈なる創造の呼吸、社会変革の大爆発には興味を持たない小人物である⁵¹。

過激主義に対するラッセルの反動の真意義はこれだと思う。彼がメンシュビキのおきまりのプロパガンダをまるのみにしたその態度には、いかにも欺されやすい、お人よし学者のふうが見える。(中略)労働者は恐らくラッセルに対してこういう批評をするであろう。彼は元来支配階級の一員として生まれている。そして職業上からは、その階級の学者、弁護者の一員である。ただ彼はデモクラシーの偽者に対し少しばかり神経過敏であったがために、労働階級の学説を抽象的に受け入れるだけの知力的大胆さを持っていたのである。だから我々は、彼が自分の階級から脱出して、具体的急場に立って堂々と名乗りあげる者とは、初めから予期していなかった。彼は頭の中に何を持ってしようとも、胸の中に労働者のインテレストを持っていなかった。それがすなわち、彼がロシヤから失望して戻って来た理由である⁵²。

ラッセルはレーニンを好まなかった。レーニンの高笑いの中には恐ろしいすごみがあることを感じた。思うにレーニンはラッセルの柔しい情緒に対して何らの食物を与えなかったのであろう。レーニンがその歴史観の中から、およびその「自由への道」に達する計画の中から、全く倫理的な神聖を除外したところが、すなわちラッセルにとって「恐ろしいすごみ」であったに相違ない。レーニンがマルクス説を信奉するのと、ラッセルがキリスト教的デモクラシーに帰依するのと、熱心の程度において何らの相違はない。むしろレーニンの方に融通がついている⁵³。

しかし、堺が依拠した媒体を見てみれば、いずれも官用宣伝か急進左翼系の雑誌であることが分かる。『New York Call (ニューヨーク・コール)』は当時アメリカ社会党 (Socialist Party of America, SPA, 1901-1970) の機関誌であり、『Soviet Russia (ソヴィエト・ロシア)』は駐アメリカのソヴィエトロシア政府局 (Russian Soviet Government Bureau) ⁵⁴の機関誌であった。そして『The Liberator (リベレーター)』誌は社会主義系の月刊誌で、1922年よりアメリカ共産党 (Communist Party of America, CPA) の機関誌となった。これらのメディアは、それぞれ立場を別としても、その論点はいずれも論理上からの反駁ではなく、階級的価値判断を先行させているものであることがうかがえよう。

堺の翻訳以外に、山川均が「無産階級の独裁か 共産党の独裁か」⁵⁵という論説文で「小ブルジョワ的無政府主義の学者ラッセル」と評し、高津正道もその書評「ラッセルを読みて」⁵⁶のなかで、「彼はこの書に於いて来るべき英国の革命を阻止する為に大いに努めている。彼が初めから労働ロシアに対して一の偏見を以ていた事はさきに堂々と資本主義制

度を攻撃しながら是れがボルシェヴィキに依て完全に顛覆されている事実に対して書中一言の賛辞を呈していないのを見て明らかである⁵⁷と、ボルシェヴィズムの歴史的・地域的必然性を認めたラッセルの観点を無視し、彼の批判はすべて「偏見」からきたものだと結論している。実は1920年の秋から1921年の春にかけて、大杉栄・近藤栄蔵が上海の朝鮮人共産主義者グループの要請に応じて、上海で陳独秀や、コミンテルンの幹部たちと会合していた⁵⁸。コミンテルンの極東政策における「極東共産党同盟」⁵⁹という構想のもとで、その働きかけを受け、アナキストとボルシェヴィストなど社会主義者の「統一戦線」を目指して、1920年12月に「日本社会主義者同盟」が組織されるが、『社会主義』誌はまさにその機関誌であった。とすれば、こういった『Soviet Russia』誌への同調も想定内のことであったといえよう。

一方、同時期の民国メディアでは、前述したように、『晨報』⁶⁰『新青年』『東方雑誌』によって一部の翻訳はなされていたが、『晨報』と『東方雑誌』以外では同時期のオリジナルな、あるいは深い視点を有する論説はまれであった。『晨報』に初出し、『東方雑誌』に転載された評論、「評論羅素游俄之感想(ラッセルの露西亜遊歴の感想についての評論)」(作者は潁水という人物)⁶¹では、基本的にラッセルの実直さを評価し、その観点到「賛同」する立場をとる。

われわれは、ラッセルのロシアに対する評価は驚くべからざるものと見て、(中略)完全にわれわれの意見と同様である。(中略)各種の工業を、社会に共有できるような性質までに漸進的に改造し、そのほかの数種類の工業を国家経営にするという方法は、われわれの求めている進歩的方法である。われわれはいまのロシアの偉大なる経済国家を欲せず、ただ社会の各方面は同時に発展していくことを欲している。資本家と産業労働者が工場管理事務において互いに協力できるような開明的資本主義を発達させていく⁶²。

しかしラッセルは基本的に、人間の創造力を破壊し、労働の価値をすべて金銭で計る欧米式の「資本主義」という経済様式について真正面から反対している立場であって、またいわゆる「開明的資本主義」とも、もしそれが植民地開拓を目指す自由帝国主義を意味する限り、大戦以来とつくに決別していた。もちろんラッセルは、民国の完全なる植民地化を避けるためには、列強に抵抗できるような実業の発達は必要不可欠だと明確に指摘したことはあるが、それはあくまで各国の実際状況に基づいての発言であった。しかし、この論評を含めた「研究系」側の論説は、いかにも常識レベルのものであって、プロパガンダ戦を念頭におく組織的、集中的宣伝には敵わなかった。この論評もまた同じように、一方で「階級」理論の視点と概念を借りながらも、対立者を協力させるといった曖昧な改革ビジョンしか持っていない。ラッセルの立場についても「開明的資本主義」と誤るなど、用語を含む不注意が目立ち、こうした点からも立場の違うものからの批判、あるいはプロパガンダ戦の意図的攻撃からは免れられなかった。

これに対し、同時期の『新青年』誌は、『Soviet Russia』誌掲載の批評を三つ翻訳して載せた⁶³が、大意は日本側の『社会主義』誌の訳と同様で、ラッセルの現地報告は偏見だらけのものだという批判であった。

第3節 咀嚼と議論——ラッセルのボルシェヴィズム観が惹起した波瀾、その二

ようやくラッセル本人が民国に来た1920年10月下旬以降、とりわけ10月26日から27日にかけて長沙での、湖南省教育会が主催した講演会で、「ボルシェヴィキと世界政治」⁶⁴の題名で4回の講演と、11月19日に北京女子高等師範学校自治会で、「ボルシェヴィキの思想」⁶⁵と題する講演を行ったあと、ラッセルのボルシェヴィズム観について民国知識人の言論が徐々に増えるように見える。なお、1921年7月下旬ラッセルが北京を離れて日本を訪れ、日本の知識人と対面して交流した後、彼のボルシェヴィズム観に対するやや中立的な論説が出されるようになった。1921年9月に刊行された『改造』誌の増大号で組まれた「ラッセル印象記」⁶⁶で、その一部を確認することができよう。西田幾多郎の「学者としてのラッセルについて」、土田杏村の「ラッセル氏と露国及日本を語る」、桑木彥雄の「文明は寧ろ一様性」、北澤新次郎の「ラッセル及其一行」、大杉栄の「苦笑のラッセル」、桑木巖翼の「鋭角的人物」という6篇の「印象記」の題名からも分かるように、とりわけラッセルのボルシェヴィズム観に注目したのが、土田杏村であった。

まず、ラッセルの民国での二つの講演とその反響を確認していこう。

この二つの講演でラッセルは、著書において見られたような、苛烈な批判的言辞をやや控えめにし、事実の紹介および自らの観点を中心に話している。長沙での講演においてはまず、中国の状況には疎く、ヨーロッパの状況に限定して話すことを予め断ったうえで、ボルシェヴィズムの紹介に入った。彼は自らがあまりボルシェヴィズムの主張に同意しないと断りつつ、もしそれを一種の宗教として見るならば、その主義主張における、正義に対する要求が社会にメリットをもたらし、末路に瀕する資本主義を牽制することができる」と述べる。さらにラッセルはロシアについての所見を述べて、ボルシェヴィズムの背後に隠されている帝国主義的野心について、中国人の警戒を喚起した。

諸君に警告する。ボル党は東方の従属国家に対して自由権の伸長を助けてあげると言っているが、実はただの綺麗事で、自らの勢力を伸長させようとしているのではないかと心配している。ロシアに住んでいる諸民族に名目上の自由を許しているが、実質的にはやはり自らの統治下に置いている。ヨーロッパ人の外交手段は常にそうであって、ボル党はただ名前を変えただけであった⁶⁷。

これは『The practice and theory of Bolshevism』ですでに現れていた観点であった。書中、前述した赤軍のナショナリズムの高調を見て、さらに1920年7月に開催されたコミンテルンの第2回大会で採択された「民族・植民地問題に関するテーゼの最初のスケッ

チ」への分析においてラッセルは、「この政策が宣伝の装いのもと、帝国主義的進出の機会を与えているのは明白」⁶⁸であると警戒を喚起している。

そして長沙講演の最後に、大戦後の国際情勢に合わせてボルシェヴィズムの将来を展望する。彼は、今回の大戦ではロシアが最も損害を被った国であり、内外の矛盾が最も深刻であったからこそ、階級闘争を説くボルシェヴィキ政権の確立ができたのであり、ドイツの状況もほぼ類似したものであったという。それは、戦争から最も利益を収めたアメリカで共産主義が実施されない限り、世界中にボルシェヴィズムが広まることは困難であると予測するものであった。そして、社会主義は必ず資本主義に取って代わるが、それは憎悪と闘争を挑発する方法によってではなく、社会の共存と幸福に基づく方法で実現すべきであると結んだ。

11月の北京での講演でラッセルはさらにその調子を和らげ、むしろボルシェヴィズムの長所を挙げ、ロシアの危機的状況を助長しないように、広く諸国の同情と協力を呼びかけている。

いまロシアの情勢は、よいとは言えないし、そしてこの主義（ボルシェヴィズム、筆者注）は失敗する可能性もあるが、それは長期の戦争、科学知識の欠乏、経済上の困難、実業の困窮からきたものであった。また外国の反対と封鎖が、彼らに苦痛を与え、その内部に分裂をきたし、この主義はついに破綻することが狙われている。したがってわたくしは世界の文明諸国は、彼らの良い面を補助して頂きたい。このようにして古来の文明を守護することができるし、また文明諸国も積極的にこの主義を実験してほしいと願っている⁶⁹。

上海から揚子江に沿って遡り、沿岸の南京、漢口、長沙まで実地考察するラッセル一行と同行した「研究系」の知識人・張東蓀（1886-1973、民国哲学者・政治家・ジャーナリスト）は、のちにラッセルの口を借りてその主張を表している。

一部開港場に住んでいて、目にしたのはすべて西洋の物質的文明と工業状態の人は、西洋人が西洋の物質的文明を攻撃する話を、そのまま東洋に移ってもいいと思い込んでいる。しかし、内地（中国大陸）の状態は、ヨーロッパといかに異なっているのかを忘れている。

この度まだそれほど深入りしていないが、各地に旅をし、中国を救うのにひとつの道しかないことを思い知らされた。ひとこと言えば、富力を増すことだ。富力を増したいなら、実業を発展させるのだ。中国の唯一の病症は貧乏で、しかも今は究極の貧乏状態に陥っている。ラッセル先生は各地の事情を観察した後も、実業を発展する以外、自立する方法がないとも仰った。痛いほど適切だと思う。舒新城君かつて私にこう言っていた。「今の中国は、なんの主義を議論する資格もないし、なんの主義を取る余

裕もない。すべてが欠けているから」と。これもまた痛いほど適切だ。開港場と都市に住んでいる極少数の一部を除けば、今の中国の人々は未だ「人間の生活」を体験したことがない。…もし大多数が人間の生活状態になっていないのに、ここで「主義」ばかりを空談しても、意味も結果もないだろう。言い換えれば、我々が主張したい主義は、中国人をすべて「人間の生活」にさせようようなものであり、既製の欧米のなんとか主義を取らないし、なんとか国家主義、無政府主義、多数派主義も取らない。今我々の努力すべき方向は、ほかにある。これは非常に切実な教訓である。高望みの人たちは三思してほしい⁷⁰。

これは明らかに、欧米の歴史的・地域的条件のもとで発達してきた主義主張をそのまま移植しようとする動き、とりわけ反資本・反工業を高唱するマルクス主義者たちがそれを鵜呑みにしようとしていることに対する批判であった。中国自らの最も喫緊の問題、すなわち「自立」問題を優先させ、解決すべきとするその立場は、梁啓超と共通の問題意識を有していたといえよう。主権の独立と国民の生活を「人間」レベルまで高め、実業の発展を優先すべきとするその主張は、のちに社会主義者からの猛烈な異議と批判を呼び寄せる。

かかる張東蓀の議論を受けて、初期マルクス主義者であり、のちには共産党の創立者の一人となる陳独秀は、12月1日発刊の『新青年』雑誌第8巻第4号で「關於社会主義的討論（社会主義に関する討論）」⁷¹という複数作者の文章を掲載した。これはまさに、民国思想史上における著名な「社会主義論戦」の口火を切るものであった。「（1）東蓀先生「由内地旅行而得之又一教訓」、（2）正報記者愛世先生「人的生活」、（3）望道先生「評東蓀君底「又一教訓」、（4）力子先生再評「東蓀君底「又一教訓」、（5）東蓀先生「大家須切記羅素先生給我們的忠告」、（6）独秀致羅素先生底信、（7）東蓀先生「答高踐四書」、（8）東蓀先生「長期的忍耐」、（9）東蓀先生「再答頌華兄」、（10）東蓀先生「他們與我們」、（11）楊端六先生「與羅素的談話」、（12）東蓀先生致独秀底信、（13）独秀復東蓀先生底信」という13篇の文章は、前述した張東蓀が主張するところの、主義主張の宣伝よりも先に基礎的「実業」と「教育」を発達させ、「階級」を分明にすべきだという改造方法に対しての集中砲撃ともいえるべきものであった。最後の「独秀より東蓀先生に宛てた書簡」では、陳は以下のように疑問を呈した。

現にわたくしは先生（張東蓀のこと、筆者注）にいくつかの質問を問いたい。今の社会は改造を必要としているかどうか？社会の改造は、現状に追随していくのかそれとも現状を打破するのか？現状を打破するのは自らの努力に依存するのか、それとも他人が作ったものに依存するのか？先生の議論を通観するところ、あらゆるところにおいて「他力本願」と「短期間でできないなら方針を変える」という二大間違いを犯しているのではないか⁷²？

これらの文章は、単なるラッセルのボルシェヴィズム観、あるいは張東蓀の「改造」方

法についての評論ではなく、中国の「改造」をめぐるボルシェヴィズムの正当性を主張する内容であった。この号のほかの内容を見れば分かるが、前述した陳の檄文とともに、『Soviet Russia』誌より転載・翻訳した二つのラッセル批判も載せられ、また「ロシア研究」と題しながらも、急進左翼系メディアからの訳文を組み合わせた「特集」⁷³も組まれていた。実は1920年の春に、コミンテルン遠東支局の副局長、G・ヴォイチンスキー（Grigori Naumovich Voitinsky、1893-1953）はすでに上海に到着し、そしてその働きかけを受けて5月前後に、陳独秀が「マルクス研究会」を発起し、結党の準備に入っていた。そして同年9月1日に刊行された8巻1号より、『新青年』雑誌は、完全に党組織の機関誌となったのである⁷⁴。このように『新青年』誌は、創刊以来、広範な学理・学説の紹介を中心とする総合的啓蒙雑誌から、党派性の強い雑誌へと転身したといえよう。

こうしたマルクス主義者からの強い反発を受けて、張はさらに自らの主張を「現在与将来（現在と将来）」⁷⁵「一個申説（一個の申し出）」⁷⁶などの文章で展開する。

ラッセル先生は言った。「私は社会主義者としてロシアへ行った。しかし疑いを持たぬ人々と接して私自身の疑いは千倍にも強くなった。社会主義そのものにたいする疑いではなく、信条を固く抱いてそのために広く不幸をもたらすのは賢明なことかという疑いである」と。彼もまた「西洋人の懐疑的態度を感激する」と言った。私はラッセル先生の議論を聞いてから、夙に心底に潜伏していた懐疑の態度が現れてきた。『時事新報』で時評を書いて、自分の懐疑を表明したが、その旨はラッセル先生が北京での講演の内容、つまり社会主義の即座実行を中国に勧めない、あまり良い結果が生まれると思えないといった観点と同じようなものである⁷⁷。

ボルシェヴィズムの無条件擁護を疑った張は、「第一の問題は、中国の現状は何なのか。第二の問題は、今の潜在的趨勢から未来を推測すればそれがどのような状況になるのか。第三の問題は、われわれの使命とは何なのか」⁷⁸という三つの問いを打ち出して、中国で人為的に「ロシア革命」を実行することの可能性を分析する。彼は現段階の民国の危機的状況は、四つの「病」からきていると診断する。まず、大多数の民衆が「文盲」である「無知病」、次に最低限の生存も維持できない「貧乏病」、第三に、民国建国以来連年の戦禍がもたらした「兵匪病」と、最後には、清末から外国の侵略がもたらした「外力病」である⁷⁹。張はそこで、現在の中国においては、原始的生活に留まる農民と、変態的人間である「兵匪」以外には、近代的市民や、産業労働者あるいは商人などといった身分の人は極少なく、「階級」として存在していないと分析する。そして、一種の政治的主義の後ろには必ず、一つの階級の訴求が結束しているが、何ら階級的背景をもたないイデオロギーは、根拠のない空論と偽物であるだけにとどまらず、その旗印を借りて自らの利益あるいは権力を求めるものたちに利用される危険性すら孕むと指摘する。彼からみてこれもまた民国建国以来あらゆる政治的失敗を招致した原因であった。また彼は、中国において最も奇観とすべきは、階級が生まれる前には必ず政治家主導の政党組織が蠢くことであるという。

前年では市民階級が生まれる前には何とか国民党、進歩党とかがあったし、近来、労働階級が未だに生まれていないのに、社会党が組織されようとする。党の奮闘は、階級の自覚と分離できないものである。一つの主義による運動は、おおよそ党の奮闘を先鋒とし、階級的自覚を後ろ盾としているに違いない⁸⁰。

中国の「市民階級」はもうすぐ自覚を持つようになり、一つの「階級」を形成しはじめる前夜にあると見る張は、数少ない中国の埠頭・工場の労働者は何ら階級的意識も自覚もないので、一つの政治勢力として結束するのに相当時間がかかると断言する。

中国は今、労働階級の完成と自覚までにはまだ程遠い段階にあって、運動自体に熱心なものがいても、それまでの道を縮めることはできるが、いっぺんで成功することはできない。すなわち、真正の労働者国家の組織には時期尚早である⁸¹。

そこで張はさらに、プロレタリアート独裁に反対し、中国の歴史と国民性からは、一階級独裁の可能性が極めて低いと論じている。こうした真の労農制度の短期実現の不可能性の指摘にもかかわらず、「偽労農革命」の発生は依然と可能であるという。

わたくしのいわゆる偽とは、二つの意味においてである。一つは破壊の意味、もう一つは名ばかりの意味である⁸²。

民衆の名義を借りた「偽労農革命」が発生しても、民衆には真の幸福は絶対にもたらされず、「すでにあった諸々の内乱の上に、もうひとつの内乱を加えることしかない」⁸³。ゆえに混乱と災禍をもたらす「偽労農革命」をやるよりもむしろ、先に資本主義を発展させ、「紳商（市民）階級」をまず作ると同時に、労働階級をも作ることが重要となる。すなわち階級の分化・分明が生じてから、政党政治をはじめべきというのが、張の意見であった。

また彼は、農民について、その保守性のために、急激な改革よりは、漸進的教育に頼るしかないと述べる。そのため、より明確なビジョンを持つ知識人としては、新思想の紹介に基づく「文化事業」、学校制度かほかの制度の形を取る「教育事業」、各種の主義主張への「切実なる研究」と、「消費、生産、農業などの協同組合の実行」⁸⁴を、現段階の実務として取り組むべきだと主張する。空転する主義主張をそのまま移植するよりも、中国の実情に基づいた基礎作業から漸進的發展こそ、張の主張したいところであろう。彼もまた資本主義を、社会主義を実現するための、ある必要な段階として忍耐すべきものとする「段階説」を、「一個申説」で表明している。

わたくしの段階説とは何なんだろうか。簡略的に言えば、資本主義は必ず倒れる、社

会主義は必ず起こるということである。いわゆる社会主義は、その内容は多少の変化が生じるかもしれないが、今の欠点だらけの社会主義（現在のあらゆる社会主義は欠点を抱いているが、私が見た限りでは、ギルド社会主義は比較的円満なものである）ではない。あらゆる社会主義は欠点を有するが、人智の進歩によって、今の社会主義の発達の趨勢に沿っていけば、ついに比較的満足のいく社会主義を見つけることができると信じている⁸⁵。

すなわち、主義主張は現実に応じて変化すべきものであり、「ギルド社会主義」は社会主義諸流のなかで問題の少ないほうだという認識である。そこで張は、ラッセルがもしギルド社会主義をさらに研究・修正したいのならば、中国の隋唐期に起源し、宋代以降最も発達した「同業公（行）会」組織の研究を勧めている。

ギルド社会主義はイギリスの産物であるが、多少の変化を来せばその根本的原理は普遍的に応用することができる。『時事新報』で一つの意見を発表したことがあるが、それはラッセル先生に実地的に中国の同業公会を研究することを勧めているものであった。ヨーロッパ中世のギルドはすでに存在していなく、中国にその遺跡を見つけないといけない。この遺跡から何らかの発見があるかも知れない。すなわち、ギルド社会主義だけにとどまらず、ほかにすべての社会主義はみな研究修正の途中にある⁸⁶。

最後には張は、自らの観点をまとめて、以下の二点に要約した。

- 1、われわれは社会主義を最後の標的として、各民族との共同研究のもとで努力して創造する。
- 2、われわれは、余計な propaganda を、避けるべきであると思う⁸⁷。

こうしてボルシェヴィズムも、ギルド社会主義も、改造の手段として不断に研究改進すべきだという張の議論は、ラッセルの立場にかなり近いものであったといえるが、具体的に、中国の政治改革における「ギルド社会主義」の可能性について、ラッセル自身はほとんど主張したことがなかったし、最終的にはむしろ否認していることは注目されよう。このような、両者の主張におけるズレに関して、初期のマルクス主義者が気づいていなかったのか、あるいはわざと看過したかについて、今の我々は確かめる術をもたない。しかし、内外の危機に駆り立てられ焦燥する人々に、一つの学説をきちんと理解・研究しようとするような環境と精神的余裕はあったのだろうか。彼はあくまで自らが信じようとする道をゆくのが、常であった。

前述長沙の講演会では、当時 27 才の青年毛沢東が『大公報』に雇われて会議の記録員を務めていた。講演を直に聴講した毛は、ラッセルの観点をいかに評価したのか。実は

1920年前後における「聯（連）省自治」運動⁸⁸の風潮の中、湖南省の独立運動に携わってきた毛は、腐敗した中央軍閥政權から地方行政の自治と独立を目指し、独立憲法のもとで「湖南共和国」を建てようと呼びかけてきた。しかしこれらの活動と呼びかけはいずれも反響が小さく、1920年11月25日向警予（1895-1928、民国の革命家・フェミニスト）宛ての書簡の中では、「最近何ヶ月において事態はすでに明瞭であった。政治界は老朽のあまり、腐敗を極めているため、政治的改良という途は、まったく希望がなくなっていると言ってもいい。吾人はただ一切を切り捨て、新しい道を切り開き、新しい環境を作る方法しかないのだ」⁸⁹と、漸進的改革の道を放棄していたように見えた。同月、陳独秀との書簡のやり取りでは、長沙での共産主義組織を創立することを承諾している⁹⁰。また12月1日に蔡和森（1895-1931、民国革命家）宛ての書簡において毛は、正式的にマルクス主義を受け入れ、ロシア十月革命の路線に沿っていく決意を表した。

教育の方法はダメだと思う。ロシア式の革命は、よりよい方法が外にあるのに取らない、この恐怖の方法をわざと採ったのではなく、どうにもならない窮地からの苦肉の策だったと思われる。（中略）歴史的経験から見れば、専制主義者、あるいは帝国主義者、軍国主義者は、人から倒されない限り自ら退くことは決してない（毛沢東より蔡和森宛て書簡、1920年12月1日付）⁹¹。

したがって「平和的方法で共産の目的に達せない」。毛はここであって信仰していたアナキズムや西洋の民主主義的立場からの離脱を表明し、「わたくしは絶対的自由主義、無政府的主義およびデモクラシー主義、いずれも理論的には聞きの良いものであるが、事実上できないものだと思う」⁹²と述べて、マルクス主義への完全な傾倒を表明している。翌1921年1月2日の「新民学会」⁹³の新年大会では、臨席のメンバーたちが「改造の方法」について討論するが、それは毛沢東を含め「中国および世界の改造」を主張する者と、「世界の改造」を擁護する者、「社会の進化を促す」を主張する者という、三つの意見に分かれた。そこで毛沢東は発言した、

世界範囲で社会問題を解決するのに、大体五つの方法がある。第一、社会政策、第二、社会民主主義、第三、激烈な方法を取る共産主義（レーニンの主義）、第四、温和的方法を取る共産主義（ラッセルの主義）、第五、無政府主義。…まず社会政策は、補うための政策であり、方法とは言えない。社会民主主義は議会の改造を手段としているが、事実上、議会の立法はいつも有産階級を保護する立場に立っている。無政府主義は権力自体を否認している。このような主義は、恐らく永遠に実現されないと思う。温和的方法を取る共産主義、例えばラッセルが主張したような極端の自由、資本家を放任する主義も、永遠に実現されないだろう。激烈な方法を取る共産主義、すなわち労農主義、階級専制なら見通しもついでいて、最も適切だと思う⁹⁴。

会議の最後における表決の結果、ボルシェヴィズムの方法を賛成する者が半分以上の多数を占めていた。

もし自分の主張が「極端の自由、資本家の放任」と理解され、あるいは誤読されていることを知ったならば、ラッセルはおそらく苦笑するしかなかったであろう。ラッセルはそもそも、二つの講演においては、「ギルド社会主義」について、一文字も触れなかったし、民国において「ギルド社会主義」をスローガンとする政治実践には当初からあまり賛成していないように見える。なぜなら、当時民国内部では軍閥の混戦状態に陥り、外的には植民地化されつつあり、しかも中華民国は産業社会には程遠い小農社会である以上、労資の矛盾は第一要務ではないし、むしろいかに内戦状態を終結するか、あるいは外国の侵略を排除するかという、政権の確立と主権の独立問題がより緊急であるとみただからである。のちの章であらためて詳述するが、ラッセルは中国の複雑な現実問題に対し、常に自分の知識の浅薄さを強調したうえで発言していたし、伝統への盲従と、西洋発の主義主張の拙速な移植に、ともに反対する立場であった。主義主張を一種の思想的資源として、その要点を抽出し、現実の需要に合わせて折衷融合すべきというのが、ラッセルの眼目であろう。それは自身の要求と周りの環境への深刻な理解なくしては、混乱を招きかねない至難の任務であるため、彼は中国人に、自らの力を信じるしかないと常に勧めている。

そもそも、前述したように、中央からの分権を求め、さらには連邦制国家を指向する「聯（連）省自治」運動の最中に来華したラッセルの政治的主張のなかに分権思想の文脈を見出したのは「研究系」グループの人々であり、ラッセルが向けられた「ギルド社会主義」を「宣伝」するものという見方も彼本人ではなく、とりわけ先に「偽労農革命」をやるよりは、「資本主義」を必要段階として忍耐すべきだと主張した張東蓀の主張に基づくものであった。交錯する双方の論争は、ラッセルの誤読に基づく彼の「不在」を介在して交わされたのである。しかもこの時期マルクス主義者と研究派の分岐は、すでに水火の勢いを呈するようになっていた。この意見の分化を象徴するかのようになり、同じ1921年1月2日に、「新文化運動」以来の同志である胡適（1891-1962、民国学者・思想家・政治家）と陳独秀の分裂と、『新青年』誌の内部分裂を予兆する一つの事件が起こった。1月2日、胡適は陳独秀に宛てた書簡のなかで、総合雑誌であるはずの『新青年』誌が最近、「ある種の特色があまりにも鮮明すぎる」⁹⁵状況にあることに対して不満を漏らし、これを解決するため三つの解決法を提案した。

- 1、『新青年』誌は特定の色彩を帯びる雑誌となってもいいが、別に哲学と文学を中心とした新しい雑誌を作るか、2、もし上海の情勢で『新青年』は「政治話を止める」ことができないなら、北京に移したらどうか、3、停刊すること⁹⁶。

この書簡を受けて陳は激怒し、胡適らが「研究系」グループの教唆を受けているのではないかと疑った⁹⁷。そこで胡適・魯迅らとりわけボルシェヴィズムを擁護しないグループは徐々に、かつて共に戦ってきた、「新文化運動」の拠点である『新青年』雑誌を離脱し

ていくようになる。さらに『新青年』誌自体も1922年7月に9巻6号をもって事実上停刊することになった。ここに至っては、「徳先生」（デモクラシー）と「賽先生」（サイエンス）の両面大旗を掲げる思想啓蒙運動——「新文化運動」の分裂は明らかとなり、民国思想界における「三足鼎立」といった路線の分裂も明確な形となった。かくして、清末以来立憲派の系譜を汲んできた梁啓超らをはじめとする「研究系」グループと、1915年「新文化運動」を唱え、儒教伝統をすべて破壊し、「五・四」運動後にマルクス主義へと転身する陳独秀・李大釗ら、そしてアメリカ留学を経て、J・デューイの弟子としてプラグマチズムを主張し、基礎的な学問から構築する路線を提唱する胡適らといったように、中国の近代化をいかに実現すべきかをめぐって、知識人たちはそれぞれ信じている道へと突き進んでいくことになる。

1921年7月、ラッセルは北京を離れる前の講演「中国到自由之路（中国の自由への道）」で、中国のみならず世界の改造を根本的に実現しようとするならば、「教育」に頼るしかないが、その前提となる安定した政治と実業の発達は、現段階の中国にとって長い年月におよぶ努力が必要だと講じた。しかも植民地化されつつ情勢の中では、配分の権力は中国人の手中にないため、「経済的問題から着手するのが無駄であり、政治の問題を先に解決しなければならない」⁹⁸と、先に資本主義を発展させる可能性を否定した。そして安定した政治をまず樹立するためならば、ボルシェヴィズムにおける不適切な農業政策であっても、ある程度修正したうえで実施することが、近代化の基礎がほぼない中国にとっては、最も適切な道程であると説いた。

中国の政治改革は、かなりの年を経たない限り、西洋のモデル、すなわちデモクラシーの体制を模倣採用することができない。デモクラシーは、国民の読書識字能力と一定の政治的知識を前提にしている。中国の国民は、公共的幸福を図るような政府が成立してからの一世代を待たないと、これらの条件を満たすことはできない。われわれは、ロシア共産党の専制のような路程を経なければならないと見るが、このような方法でしか、人民の教育が普及されないし、資本主義的色彩が帯びない実業の発達が成就されない。ロシアのボルシェヴィキは、開拓者であるため、間違いだらけのことをしでかしたが、とくにその農民への反対手段は甚だしいものであった。同じ道路を行くならば、それを前車の鑑としては、極めて有益だと思う。（中略）人民が教育を受けていない、実業の発達方法も通達していないロシアと中国のようなところでは、ロシア式の手段は、最も適宜で可能な方法である⁹⁹。

7月11日、ラッセル一行は天津港より出航し、日本へ向かった。

そして、7月16日から7月30日にかけての日本訪問はラッセルにとって、のちの章で詳述する通り、あまり快いものではなかったようである。第一章で述べたように、この訪問は「改造社」の招聘によるものであり、したがって『改造』誌はラッセルの論文掲載権を独占していた。これにより『改造』では合計16本の論文が掲載されたほか、ラッセル

が離日した後の1921年9月増大号において、先述の「ラッセル印象記」という特集が組まれる。西田幾多郎をはじめとする、大正期の思想・学术界における一流の知識人がラッセルと面会したあとの感想文か、あるいは、ラッセルの思想紹介を中心とする特集であった。そのなかで、とくにラッセルのボルシェヴィズムに対する興味を示したのは、土田杏村である。それとは対照的に、師の西田幾多郎は極めて冷淡な態度を示したのも興味深い。「学者としてのラッセルについて」と題するこの短い文章において西田は主に、ラッセルの認識論における位置づけを中心に紹介し、この時期の西田の学術的関心と一致していることが確認できよう。しかし、ラッセルの「社会改造論」に関連する著書については、「学問上の著述として価値を論ずべきものではない」と軽く一蹴した。

ラッセル氏が我国一般に有名となった社会改造についての著述によってであろうが、私は氏の Principles of Social Reconstruction や Roads to Freedom などは学問上の著述として価値を論ずべきものではないように思われる。私は唯、純学究としてのラッセルについて一言したまでである¹⁰⁰。

また大杉栄もラッセルと面談し、大杉が関心を抱いた二人のロシア人アナキストについて短い談話を交わしたが、彼もまたラッセルの政治主張は理想論に過ぎないと見た。

さあ、別に印象という程の事ありませんな。向い合って話した時間もせいぜい5分間位なものでしょうからね。

それに僕は、実ははじめてあの帝国ホテルという建物にはいったので、ちょっと面喰ってもしましたよ。こわごわ玄関にはいって行くと、とっつきの広いホールのあちこちに、日本人だか西洋人だかがごちゃごちゃいるんでしょう。おや、ここなのかな、と思って暫く大きな眼をうろつかしていたんですが、誰も知ったような顔は見えませんしね。仕方なしに、すっとはいって行って見たら、改造社の誰れだかにつかまったのですよ。

そして其のすぐ隣の室に案内されて行くと、ラッセルは誰れだかに紹介されている際中でした。写真で見たあの通りの顔ですね。頬というよりは寧ろ、口の両角のすぐ上のあたりが、神経質らしく妙に痩せこけているのが、病後のせいかな猶目立って見えましたがね。あれは、あの人の顔の中で一番いやなところですね。

と思っているうちに、僕がもう紹介される番になっていました。そして「ミスタア大杉、エ、ジャパニイス、バクウニン、…」なんて、妙な紹介をされたので、ラッセルが何をいっているのかちっとも分らなかったほどに、又面喰ってしまいました。そしてぼんやりしている間に、「どうぞあちらへ」と、一つの椅子のところへ導かれて、そ

ここでラッセルと向い合いになって、あちこちの新聞の写真をとられたのです。前にいった5分間というのは此の時の事です。

座ると直ぐ、十幾人かの写真屋が代る代るポンポンやるので、ラッセルは例の口の両角の上に濃いくまを見せて、「堪りませんな」というような意味の事を、其のポンポンのたびに目をつぶってはしていました。そして、『いくら我々がアナアキストだって、こんなに爆弾のお見舞いを受けちやね・・・』なぞとふざけながら苦笑いしていました。あの人は、笑うときとそれが苦笑いになってしまうのですね。

「エマ・ゴールドマンを知っていますか。」

「其の著書で。」

「ベルクマンは？」

「ええ、やはり其の著書で。といっても『一無政府主義者の獄中生活』しかないようですがね。」

「そうです。しかし大変面白い本ですね。」

「二人は今ロシアでどうしています？」

「二人とも昨年モスクワで会いましたがね。別にする事がないんで、革命博物館の爲めの何にかのコレクションをしていましたよ。ボルシェヴィキ政府からの待遇に就いては、十分満足しているようですが、政府のいろんな施設に対しては勿論大いに議論があるようでした。」

こんなほんのちょっとした問答をしているうちに、ラッセルは又新しく来たほかの人達への紹介で忙しくなりました。そして僕は暑いんでヴェランダの方へ行ってしまいました。

要するにただこれだけの事です。印象という程の事のある筈がないじゃありませんか。

あの人の社会改造論についてですか。そうですね、一言でいえば、一種のアナアキスト・コンミュニストでしょうな。が、あまりにどうもインテレクチュアル過ぎるようですね¹⁰¹。

それと対照的に、「ラッセル氏と露国及日本を語る」という長文の論説を書いたのが土田杏村である。7月21日から23日京都に滞在したラッセルと終始同行していた土田は、なるほどほかの知識人より長くラッセルと交流の時間を持ったし、また初日の7月21日の午前中から午後になつて、ラッセルと4時間ほどの面談時間を得たこともあってか、その論説もかなり丁寧にまとめられている。

ラッセル氏は見るからに哲人らしい、瀟洒な姿をして居る。社会評論家として見ても、情熱の力を以て民衆を煽動するという側の人ではない。ただすべての慣習や権威に誤魔化されないで、自己の学的良心の命ずるままに正義と自由との声を挙るという人だ。

(中略) 私は氏の著書で読んだと全く同じい感じを其の風采の中に見た。哲人というよりは科学者という方が寧ろ適当して居るかも知れぬ。氏と会見して三日間を通じて、氏はどんな所でも他人に無意義なお上手を言わなかった。換言すれば、氏は少しも外交家としての交際振りを見せなかった。其の論ずる問題が日本のものであれ、英国のものであれ、全てに通じて至極公平冷静な、インタナショナルの態度を取って居たのである¹⁰²。

まずラッセルの認識論における立場と社会哲学における立場の関連性を尋ねた杏村に、ラッセルは熱心に回答した。「従来疑問にして居た氏の倫理学と社会哲学との関係に就き幾分の解明を与えられた事を悦んだ」¹⁰³杏村に対し、今度はラッセルから質問しだした。「日本で私の労農露国観の評判が悪いというのは、如何なる点に就いてであるか」¹⁰⁴と問うラッセルに、杏村は、世に出た評論は、ラッセルの訪問記における事実誤認があると指摘し、とくにソヴィエト選挙への政府側の干渉についての話は、ランスベリー (George Lansbury、1895-1940) の記述と違っていたと書いた、と答えた。ラッセルは自らの記述が間違っていることを否認し、ランスベリーの立場上、そう書かざるを得なかったことを述べて答えた。

自分の観察は決して誤って居るとは思わない。自分は確実なる露国の実情を正直に叙述したと信じて居る。其の事はランスベリー君自身よく知って居る筈である。自分等兩人の間には其の点では可成り諒解が出来て居る。ただランスベリー君の立場としてはああした誤謬の記述を書くより外は無かったのだ。其れは我々兩人はよく分かって居る事である。ランスベリー君は余の叙述に対して懇切な批評を書いて居るが、君は其れを読まなかったか¹⁰⁵。

G・ランスベリーはのち30年代初頭(1932-35)に労働党の党首を務めた、イギリスの政治家・社会改革家である。1912年、ランスベリーは「デイリーヘラルド(Daily Herald)」紙の創立に尽力し、自らその編集者となった。1914年から22年まで同紙を主導し、反戦平和とロシア革命擁護の立場を打ち出している。実は、ラッセルらの「イギリス労働者代表団」に先んじて1920年2月に、ランスベリーは「労農ロシア」を訪問し、レーニンやほかのボルシェヴィキ幹部とも面会した。帰国後に観察報告「ロシアで見たこと(What I Saw in Russia)」を刊行するが、その影響力は、「デイリーヘラルド」紙がボルシェヴィキからの資金援助を受けたとの不祥事により減殺されたという¹⁰⁶。

この時点で杏村は、ランスベリーとラッセルのやり取りについては知らなかったようで

ある。しかし「今にも此処へ直ぐにランスベリー君を引っ張り出して来て両方の対決をしたい様な感情になった。(中略)私は何にせよ、此等訪露見聞者の一々の記述がお互いに違って居るのは、随分怪しい事だと思った」¹⁰⁷杏村は、そう簡単にラッセルの話信じていなかった。ラッセルは更なる弁明をせず、ボルシェヴィキ政権の過去よりは、その将来がより重要であると説いた。杏村もこれに同意して、レーニンとカウツキーの論争に対して、ラッセルはどれを支持するかを質すとラッセルは次のように答えたという。

何れにも賛成し得ない。何れもそれぞれ都合の良い様にマルクスを理解して居ると思う。元来彼等はマルクスの言葉を、「天よりの声」の様に大事がって、絶対の權威あるものとして取り扱って居るが…¹⁰⁸

両者の主張のいずれにも賛同できないが、マルクス理論の忠実度から言えば「カウツキーの方がより正当だと思う」¹⁰⁹と答えたラッセルの解答に対し、杏村はさらに聞きたいと願ったが、ほかの者からの質問もあったので、ボルシェヴィズムに関する話はここで一旦打ち切られた。実際、杏村がラッセルに向けた関心は早い時期からのもので、またラッセルに関する直接的な言及は、「大正7年(1918)に提出した卒業論文のなかでも、彼の新实在論的立場を論じている」¹¹⁰。また同年、ラッセルの大戦以来4年ぶりの哲学著述——『Mysticism and Logic (神秘主義と論理)』(1918)の刊行について、書評「ラッセル氏の新著たる『神秘主義と論理学』について」を、ほぼ同時に発表していたことを鑑みれば、かなりタイムリーにラッセルの思想と動向を追跡していたはずであった。

そして1920年1月1日、まだ京都帝大の大学院に在学していた杏村は、個人雑誌『文化』を発刊し、アカデミズムとジャーナリズムをつなぐことを志していた。そして早くもその第二号に「マルクス、ラッセルおよび文化」¹¹¹という一文を掲載し、また第四号にラッセルの「自由人の崇拜」と「哲学の価値」¹¹²を翻訳して載せ、「ラッセルの思想の根本的立場(上)——ラッセル研究の第一」¹¹³をものにするなど、本格的にラッセルの思想を研究し始めたのである。

1921年7月、ラッセルが日本に来る直前、杏村は『改造』に「ラッセルの哲学」¹¹⁴という一文を寄せた。ここで彼は、ラッセルの主知論と経験論を融和した理想的な人格像、およびそれに基づく総合的業績の創出を高く評価する。

ラッセルの哲学的企図は、論理と情熱との調和の人格的基礎の上に立てられた。即ち其れは哲学上の主知論と経験論との統一の事業であった。ラッセルは此の企てをば其の哲学の三部門の中に等しくプロジェクトした。此れが結果は第一の数学の哲学に就ては『数学の原理』に、第二の一般認識論に就ては『哲学の問題』に、第三の社会哲学に就ては『自由への途』に、何れも学界を驚嘆せしむる名著となって品化せられたのである¹¹⁵。

彼は、理想的な人格像および、それに基づく哲学研究の展開をラッセルに見出したのである。このように、ラッセルの人格と思想に常に共鳴しつつも、その当否はあくまで本人の話を確かめようとし、それをしてもなお安直にこれを信じない杏村の分析・批判的態度は、まさにほかの知識人に足りないものであったといえよう。この態度もまた、彼が個人雑誌『文化』でラッセルの思想研究を展開し、著述『文化主義言論』を刊行してその政治理論の変容と在地化、さらにそれを実践活動として試みた思想的素地でもあった。かくして「杏村は彼（ラッセル）の来朝に最も大きな期待をよせる者の一人であった。そして、ラッセルが京都に滞在した三日間、いな日本滞在中の全期間を通じて、ある意味で杏村ほど彼に近づき、彼から多くを引き出した日本人は他に」¹¹⁶いなかったものであった。

おわりに

本章では、哲学者B・ラッセルの訪露後の著作『The practice and theory of Bolshevism（ボルシェヴィズムの理論と実践）』（1920）の論点をまず分析し、さらにこのテキストの伝播・受容過程を考察しました。時代の核心的議題であるロシア革命後の政権様式を実地で観察し、そして革命の理論構造を分析した彼の論説は、たちまち世の関心と知識人の議論を惹起した。具体的にいえば、前記著述においてラッセルは、ボルシェヴィズムに対して、まず自らの倫理的信条と完全に反するため擁護できないことを説明し、次に史的唯物論・マルクス主義経済学への論理的分析を通して、マルクス主義ひいてはボルシェヴィズムが論理的誤りを内包しているにも拘らず、弁証法のロジックから発達した宗教的な力を梃に、強く人心に訴えられるという一種の「新しい宗教」とであると論断した。それは、ロシアという特殊条件のもとでは、その歴史的必然性と意義を評価され得る一方、西欧の政治改革者にとって採るべき方法ではないと結論している。

前章でも触れたように、この時期ラッセルの倫理学・政治学の理論は、戦後に共同社会を再建に導くための「連帯的自由」の原則に基礎づけられ、その上に「配分における正義」という原則で各共同体・機能的組織間の権力・利益の均衡を図るという体系からなっていた。とりわけ前者の「連帯的自由」においては、個人およびその共同体は不当に干渉されない消極的方向を志向する「自由」と、個人および共同体の連合・協力をもたらす積極的方向を志向する「自由」という、二つの志向が内包されている。かかる「連帯的自由」および権力・富の「配分における正義」が導く「幸福社会」の実現を目的とするラッセルにとって、諸々の社会運動とその指導原則であるイデオロギーはただの手段であって、それ自体をあえて固持すべきものではなかった。否、むしろそれは随時修正されるべきという、可謬主義的立場を彼は採ったのである。

これに対し、彼からみてマルクス主義は、論理学における弁証法的合理主義の傾向とその形而上学における完全な唯物論的傾向が強力かつ同時に働くことで、論理的独断主義と人間の本能と感情に対する無視を招致するものであった。しかもそれは、その政治学・経済学理論の反作用として、ナショナリズムへの無理解と、リカード学説の拡大解釈をもた

らし、その農産業への誤用まできたした。かかる政治学・経済学の概念と論理的誤謬の内
在にもかかわらず、それに対する懐疑と自由討論の余地を認めないのは、いくら「科学的」
といったところで所詮「疑似科学」であり、一種の「科学」的外皮を被った「新宗教」で
あるというのが、ラッセルの批判点であった。

また倫理的見地から見れば、実地調査と経済学の研究からくる「科学」的言説は、そ
の唯物論的傾向を助長し、「人間的価値」の完全な没却をもたらした。こういった理論構
造を抱えるマルクス主義は、その倫理学・政治哲学において高度な動員力を発揮する一方、
他者への強烈な暴力性を孕まざるを得ないことになる。まず、その強烈な目的意識、ある
いは独断的主体性の働きによって「消極的自由」の原則を侵害し、次に、そのアプリアリ
な「階級闘争論」は、各階層間の利益・権力の完全対立を扇動し、共同体間の闘争と殺戮
を誘発することによって「積極的自由」による連帯をやがて破壊してしまう、と彼はみた。
実際、理論としてのマルクス主義をさらに発展させたボルシェヴィズム（レーニン主義）
は、国家権力と結合した形で、「階級闘争」と「プロレタリアート独裁」の諸刃を持って
社会の共存関係をばらばらに切り裂いてみせた。ロシア民衆への強制労働とあらゆる異見
を暴力で圧服する傾向は、一部はたしかに内戦と干渉戦争に起因ものとしても、より深層
的には、その理論自体からきた本質的な特徴だと気づいたラッセルは、「ロシア滞在中は、
つる一方の悪夢の連続であった。わたくしは、自分で回顧してみて、真実であると思う
ことを率直に印刷にふして述べてある。けれども、ロシア滞在中にわたくしを捉えた、あ
の全く恐ろしい、慄然とした思いについてはふれなかった。残虐、貧困、嫌疑、迫害が、
われわれが呼吸させられた空気そのものであった」¹¹⁷と回顧している。しかも彼はさらに
進んで、こうした他者への暴力とそれがもたらす憎悪と殺戮の循環という特徴は、そもそ
も、単にマルクス主義やボルシェヴィズムのみにはなく西洋文明自体の病根と宿命では
ないかという、深い絶望の淵にまで陥ったのである。

この哲人は著書の中で、ボルシェヴィキ政権に鋭い分析と批判をくわえるとともに、干
渉戦争の早期停戦と、ボルシェヴィズムに対する不必要な罵倒を控えるべきことも呼び掛
けていた。「彼らは崇拜すべき天使でもなく、絶滅すべき悪魔でもない。大いに技能をこ
らしてほとんど不可能な課題に取り組んでいる大胆で有能な人々でしかないのである」¹¹⁸
というラッセルの真意には、おそらくボルシェヴィズム、あるいはその根底にある「他者
への暴力性」に対し、「本能的」に反抗・嫌悪する感情を有しながらも、その理智面では、
ロシア文明の持続そして、人間同士の相互憎悪の循環を切ろうとする矛盾的心理が孕まれ
ていたのであろう。もっとも、「有望な国土をみいだすことをねがいながら、ロシア旅行
に出かけた」¹¹⁹というように、不確かでありながらもある種の期待を抱いての旅であった
からこそ、失望も大きいものになったと考えられる。換言すれば、この時期においてラッ
セルのボルシェヴィズム観は、それほど固まったものとは言えなかったが、彼はまず自分
の率直な考えを世に送って、読者との対話と討論を期したのであろう。

しかし世に問うたこの著作に向けられたのは、冷静で本質にふれた対話ではなく、巨大
な世論の嵐だった。しかもそれは、激烈な道徳的・人格的攻撃であるか、さもなくば曲解

に基づく付和雷同の声が主であった。それは当時のロシアを実際に訪れた人があまりにも少なかったからであったし、人々が自らの立場と自分の理解している「ロシア」「ボルシェヴィズム」像を念頭に彼の文章を読んでいたのであった。そしてそもそも、ボルシェヴィズムに対する異見か疑問を抱えた人々は、口を噤むことにしたからでもあった。

ラッセルはこのような反響を受けて、やや自分の意見を修正し、あるいは少なくとも、激烈な批判的言辞を和らげていったように見える。とりわけ民国での講演では、かなり批判の調子を和らげていた。そこではむしろ、ロシアへの同情と協力、そしてボルシェヴィズムにおける、経済的正義の要求を重視する立場の紹介が中心となった。しかし、彼の理解者はほとんどいなかった。四方からの批判か、あるいは彼の主張と言論を歪曲して自らの立場を喧伝する者がほとんどであった。独立労働党内では裏切り者と見られ、かつての友人からも政治上のライバルからも批判と嘲弄の対象となった。

ラッセルの訪問を待ち構えていた「遠東」の日本と民国の知識人の間においても、その反応は当初上記したそれとほぼ同様であったといえよう。ラッセルの文章が両国において共時的に翻訳・紹介されたのは、その議題が時代の核心を突いて、大きな関心を惹起したからであった。かかる関心から、彼の文章・観点は議論・批判の的となったのである。

結論からいえば、ラッセルのボリシェビズム論に対して、日中両国における反応は、おおよそ二つの段階に分けてみることができ。第一段階においてラッセルの文章と著書に最も敏感に反応したのは、マルクス主義者たちであった。これら初期の反響はほぼ学理ぬき、階級的立場を先行した批判・嘲弄一色のものであった。これは一方で時代状況によるが、他方でコミンテルンの極東工作と密接に関わっていた。当時において一般的であったロシアの実情に対する無知と左派内部でのロシア革命への同情がまずあって、またコミンテルン極東支局から両国への働きかけによって、最初の段階で見られた論評はほぼ階級的視点からの批判となったのである。しかしラッセルが両国を実際に訪れ、両国の知識人が彼とじかに接触し交流を持ったことにより、より価値中立的な、あるいは学理的な論説も見られる第二段階へと入る。これらは主にラッセル本人と直接接触し、また党派闘争やプロパガンダ戦から相対的に距離をとっていた知識人によって担われた。民国では「研究派」に属していた張東蓀、日本では在野の知識人・土田杏村がその代表であったといえよう。両者にも、もちろん自らの立場による先入観はあったものの、いずれもラッセル自身の考えに積極的に接近し、相手の話を先に受け入れ、相互的対話を行おうとしていた。そして両国における議論は、マルクス主義あるいはボルシェヴィズムをめぐる理論的論戦よりは、自国の政治実践および近代化の過程と方法と密接に関わっていることは確認できよう。

¹ イギリス労働者代表団は、ロシア革命後のはじめての西欧代表団であり、ボルシェヴィキロシアに対する連合国の軍事干渉と経済封鎖を受けたイギリス労働党 (LP) および労働組合会議 (TUC) の抗議キャンペーンによって誕生した。ラッセルを除いた 11 人のメンバーには、主席を務め団員を率いる労働組合員 (労働党员) Ben Turner、もと自由党员である

Charles Roden Buxton、医療係兼次官補 Leslie Haden Guest ほか、労働党 (LP) 員代表 3 人、労働組合会議 (TUC) 代表 2 人、そして独立労働党 (ILP) 代表 2 人がいた。

² 最初に発表されたのはロンドンのネーション誌に連載されている「Impressions of Bolshevik Russia (ボルシェヴィキロシアへの印象)」であり、「Impressions of Bolshevik Russia」(The Nation, London, 1920. 7. 10, p. 460-462.)、「Lenin, Trotsky, and Gorky」(Ibid, 1920. 7. 17, p. 493-494.)、「Communism and the Soviet Constitution」(Ibid, 1920. 7. 24, p. 520-521.)、「Town and Country」(Ibid, 1920. 7. 31, p. 547-548.)、「Bolshevism and the International Situation」(Ibid, 1920. 8. 7, p. 576-577.) という五つの文章からなっている。のちニューヨークのネーション誌にも「Soviet Russia-1920 (ソヴィエトロシア、1920)」という題で再掲され、加筆修正されて 6 つの文章となっている。

³ 本論で用いた日本語テキストは、河合秀和の訳 (バートランド・ラッセル、河合秀和訳『ロシア共産主義』、みすず書房、1990) を用いた。

⁴ 前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』、36-37 頁。

⁵ ラッセルらの具体的な滞在日程は、付表 1、付表 2 をご参考ください。

⁶ 日高一輝訳『ラッセル自叙伝』II、理想社、1971、25 頁。

⁷ 同上。

⁸ Rempel and Hasla, op.cit., p. xcii.

⁹ 前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』の目録は以下である。

第二版のための序言的なノート

序言

第一部 ロシアの現状

ボルシェヴィズムの約束するもの／一般的特徴／レーニン、トロツキー、ゴリキー／共産主義とソヴィエト憲法／ロシア工業の失敗／モスクワの日常生活／都市と農村／国際政策

第二部 ボルシェヴィキの理論

唯物史観／政治を決定するさまざまな力／ボルシェヴィキの民主主義批判／革命と独裁／機構と個人／ロシア共産主義は何故失敗したのか／社会主義の成功の条件

訳者解説

¹⁰ この時期、ボルシェヴィキの問題、そして産業主義の問題をめぐってラッセルとドラの意見は対立していた。「彼女 (ドラ・ブラックのこと、筆者注) は、私がボルシェヴィキに反対しているのを、ブルジョア的で、老いぼれた考えであり、感傷的だと考えた。私は、彼女のボルシェヴィキ崇拜を、当惑と恐怖で眺めた」(日高一輝訳『ラッセル自叙伝』II、理想社、1971、145 頁)。著書第一版 (1920 年) 中の第 4 章「Art and Education (芸術と教育)」(The practice and theory of Bolshevism, by Bertrand Russell, London, George Allen & Unwin Ltd., 1921. 2(reprinted), p. 11.) はドラが執筆したもので、第二版 (1948 年) 刊行の際ラッセルによって削除された。ラッセルは「自分が筆者ではなかった一つの章を除いた」(前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』、3 頁) と、「第二版のための序」で書いている。前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』は、英文原著の第二版に基づいて翻訳したもので、ドラ執筆の章は目録から消えている。

¹¹ 前掲『自叙伝』II、162 頁。

¹² ドラ・ラッセル、山内碧訳『タマリスクの木 ドラ・ラッセル自叙伝』、リブロポー

ト、1984、205-206 頁。

¹³ 前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』、7 頁。

¹⁴ 同上、16 頁。

¹⁵ 本稿で用いた日本語テキストは、河合秀和氏の訳（パートランド・ラッセル『ドイツ社会主義』河合秀和訳、みすず書房、1990）からの引用である。なお、同書の目次は以下で示す。

1965 年版への序文

まえがき

第一講 マルクスと社会民主主義の理論的基礎

マルクスの勉強／共産党宣言 1848 年と、唯物論的な歴史理論／『資本論』、1867 年に提出されたマルクスの経済理論

第二講 ラッサール

学者であって煽動家ではないマルクス。彼の見解を労働者階級に最初にもたらしたラッサール／ラッサールの煽動にいたるまでのドイツの状態の簡単な要約／ラッサールの著作と煽動、1863 年と 1864 年。全ドイツ労働者協会。ラッサールの死、1864 年／ラッサールの源、ロードベルツスとマルクス／ラッサールの人柄、彼の著作の影響。彼の影響は主として感情的

第三講 ラッサールの死から 1878 年例外法可決にいたるドイツ社会党の歴史

さまざまな組織と、マルクス主義にむけての発展／フランスプロセイン戦争。それに続く社会民主党弾圧／1871 年に決定されたドイツ憲法／社会党にたいする敵意の増大。例外法可決、1878 年

第四講 例外法下での社会民主党 1878 年-1890 年

社会民主党にたいする大衆的敵意の主要動機／例外法の主要規定／例外法の執行、例外法下の党指導者の態度／ビスマルクの国家社会主義、それにとまなう党指導者と一般党员との対立／一警察官の見た社会主義と例外法／例外法下での煽動。社会党票の増大。例外法の失効、1890 年

第五講 社会主義鎮圧法失効以後の社会民主党の組織、煽動、戦術、綱領

1890 年年次大会で決定された組織、最近の警察による解散措置、それに伴う組織の変化／煽動の方法／1891 年年次大会における戦術の討論。二つの対立する傾向、国家社会主義と革命／1891 年年次大会で採択されたエルフルト綱領

第六講 社会民主党の現在の立場

ドイツの各政党、その綱領と強さ。農業の過大代表、それに伴う農村票の重要性／農業問題／結論

原注

訳者解説

参考文献

¹⁶ 前掲河合秀和訳『ドイツ社会主義』、9 頁。

¹⁷ 同上、13 頁。

¹⁸ 同上、14 頁。

¹⁹ 同上。

²⁰ ラッセルは『共産党宣言』の修辞および歴史的意義に対して極めて高い評価を下すとともに、その宿命論的・宗教的特徴を分析している。「マルクスとエンゲルスが彼らの生

涯の哲学を発表した最初の偉大な著作は、1847年ロンドンで開催された国際共産主義者大会の依頼によって書いた『共産党宣言』であった。この著作は、文学的価値にかけては右に出るものがほとんどなく、そこには『資本論』の退屈な経済学的、ヘーゲル的もったいぶりが無い。また、余剰価値理論を除いてマルクスの政治的、歴史的信条の主要な問題点を打ち出しているが、しかも簡潔な修辞法と鋭い機知、歴史的洞察力においては、それは政治的文献としては最良の著作の一つであると、私は思う」（同上、17-18頁）。「この壮大な著作の中に、唯物論的歴史観の叙事詩的な力が、すでに存在していた。それは、無惨なまでに非感傷的な宿命論であり、道徳や宗教に対する軽蔑であり、一切の社会関係を非人格的な生産力の盲目的な作用に還元することであった。そこには、ブルジョワ革命の残酷さに対する非難の言葉は一言もなく、皮肉に描かれた中世世界の田園詩に対する遺憾の言葉も一言もなかった。マルクスには、正義や美徳は論外のことである。人間的な共感や道徳性に対する訴えかけもなかった。力だけが正義であり、共産主義の正統性は、それが必然的に勝利するという点にあった。たしかにマルクスも時には感情に走り、資本主義は「悲惨」を生み、共産主義は「幸福」をもたらすと信じたり、自らの論理を損ねるほどの憎悪をもって、資本を憎んだりする。しかし彼の学説は、ユートピア主義者が力説する「正義」にもとづくものではなく、感傷的な人間愛にもとづくものでもない。彼の学説は、歴史的必然性、生産力の盲目的発展にだけもとづいている」（同上、21頁）。

²¹ 同上、14頁。

²² 「ある商品の価値はその商品の生産に必要とされる労働の量によって測定されると、リカードは言った。彼はこの定義に、特に資本に関していくつかの留保条件を付け加えた。しかしマルクスは、これらの留保条件を無視してしまった。労働が価値の唯一の源であるという点のマルクスの証明は、リカードの証明とは類似していない」（同上、23頁）など労働、賃金といったリカードの概念の過大解釈や、多様な労働様式をある普遍的基準へと捨象できるかどうかを証明できないなどの問題を、ラッセルは指摘している。

²³ 「余剰価値論」によれば、資本家はみな富裕にならなければならないが、それでは後者の「資本集中論」の論理的前提となる「激烈な競争」が消滅してしまうとラッセルは指摘している（同上、22頁）。

²⁴ 「農業では収益減少の法則が支配しており、自体の全発展は工業の場合とは全く違ってくる。（中略）マルクスは地代（レント）と利潤を十分に区別していない。両方とも資本家の手に入ると考えたからである。したがって彼は、大地主と大農業経営者とを混同しており（中略）農地の経済的規模は土地面積ではなくて、それに投下される資本であることを記憶しておかねばならない。（中略）こうしてマルクスの資本集中の法則は、原料農産物の生産では崩れる。（中略）社会民主党は、国家を地主にすることと、国家を農業企業家にすることとの違いをまったく把握していなかった」（同上、41-43頁）。

²⁵ ラッセルがマルクス経済学理論の破綻を論証する具体的過程については、前掲河合秀和訳『ドイツ社会主義』の22-43頁を参照。ここでは論証の結論だけを引用する。「唯物史観は、ともかくマルクスに由来するその厳密な形態においては正しくないし、生産と価値を決定する一つの要素としての「需要」を無視するに至った。価値は完全に労働時間によって決定されるという理論は偽りであり、特に資本家は労働者の労働時間ではなくて労働力を買うという理論と矛盾している。賃金労働者は資本主義的生産が存続する限り飢餓的賃金に押しとどめられざるを得ないという理論は、完全な偽りであり、そのことはイギリス、アメリカ、さらにはドイツのサクセンにおける賃金の動きが、十分に証明している。

さらに、自由競争は必然的に資本集中の継続的増加をもたらすという理論は、農業については全面的に偽りであり、工業についてはある程度だけ正しい。しかし、集中の限界がしばしば国家と同じ範囲になるという事実は、認めねばならない。最後に、大会社における資本の集中は必ずしも資本が少数者の手中に集中することを意味しない。会社が株式会社の数多くの株主からなることもあり、したがって、大規模生産が巨大な規模で支配的になった国では、資本の収益に関心を持つ人々——マルクス主義的な意味では資本家であり、ブルジョワ社会の支柱である——の数が非常に多くなるかもしれない。マルクスは資本に対する反対は遅かれ早かれ、圧倒的な強さになると主張しているが、資本家の数が非常に多くなった結果として、資本に対する反対は決してそれ程の強さのものにならないかもしれない。したがって、論証済みの理論体系としてのマルクス主義的社会主義は拒否しなければならない。しかし、だからといって集団主義の理論までが同時に論破されたことには、決してならないであろう」（同上、44頁）。

²⁶ 同上、82頁。

²⁷ 前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』、17頁。

²⁸ 同上、17-18頁。

²⁹ 同上、114頁。

³⁰ モスクワで会ったレーニンへの印象として、「彼は非常に親しげで、一見単純で、傲慢そうなところは全然なかった。（中略）これ程までに尊大さのかけらもない人物に、私はかつて会ったことがなかった。彼が来客をじっと見つめ、片方の目を細める。それがもう一方の目の人を見抜く力を驚くほど強めるように思える。彼は大いに笑う。初めは彼の笑いはたんに親しく陽気であるように思えたが、私は次第に気味悪く感じるようになった。彼は独裁的で平静、恐れを知らず、私利私欲が異常なまでに欠け、理論が骨肉化したような人物である。唯物史観が彼の生命の源という感じである。自分の理論を理解してもらいたいと願う点で、誤解したり反対したりするものに怒る点で、また説明するのが好きな点でも、大学教授に似ている。私は、彼が多く人を軽蔑しており、知的貴族であるという印象を受けた」（同上、32-33頁）と記述されている。また会見中レーニンに対してラッセルは、1、イギリスの経済・政治の特殊条件についての理解、2、農業国での共産主義建設、3、資本主義諸国との貿易再開によって共産主義体制の維持ができるかという三つの質問をしたが、レーニンはそのすべてに階級闘争の理論に依拠して答えた。イギリス国内の内戦、貧富農の対立、資本主義国と共産主義国の対立を誘発しかねないその答えに、ラッセルは不満と恐れを抱いたのである（同上、32-36頁）。

³¹ ラッセルが訪露した当時は、ポーランド＝ソヴィエト戦争（1919-1921）の最中であり、この状況下、軍のナショナリズム的感情を喚起・利用しようとするトロツキーに、「芸術家や俳優」（同上、37頁）であるという印象を受けたというラッセルは、自分の間違いを折りつつも、「トロツキーと赤軍は今や強いナショナリズムの感情を背後に持っていることは疑いない。アジア・ロシアの奪還は本質的に帝国主義的な感じ方を復活させさせた」（同上、31頁）と懸念を示した。

³² 「ソヴィエト体制はすでに死滅しかけていた（後略）。どう工夫しても自由な選挙制度では、都市でも農村でも共産党は多数を得ることはできなかったであろう。そこで政府候補者に勝たせるための色々な方法が採用された。第一に、投票は挙手で行われ、政府に反対する投票を入れるものはみな要注意人物になる。第二に、共産党員でない候補者は印刷物を出せない。印刷工場はすべて国家の手中にあるからである。第三に、非党員の候補

者は集会で演説できない。会場はすべて国有だからである。もちろん新聞はすべて政府のものである。独立の日刊新聞は許されていない。このようなあらゆる障害にもかかわらず、メンシェヴィキはモスクワ・ソヴィエトの 1500 議席中 40 許りを得るのに成功した」（同上、40 頁）。

³³ ペトログラードで重病のゴリキーと短い談話を交わしたラッセルがこのように回想している。「私がロシアについて何か発言する時には、ロシアが何に苦しんできたかを常に強調して欲しいと、彼（ゴリキーのこと、筆者注）は頼んだ。彼は政府を支持している——もし私がロシア人なら、私も支持するだろう——が、しかし政府には欠点がないからではなく、それに代わり得る政府はもっと悪いという理由からである。彼の中にロシア人民にたいする愛情を感じるが、彼にあってはその愛情は純然たるマルクス主義者を支えている狂信的な信仰よりも先に立っており、まさにそれ故に現在の人民の受難が耐えがたいことのように思えるのであろう。彼は私が会ったすべてのロシア人の中で最も愛すべき人、私にはもっとお共感できる人であると感じた」（同上、37-38 頁）。

³⁴ バートランド・ラッセル、牧野力訳『中国の問題』、理想社、1970、23 頁。

³⁵ 同上、25-26 頁。

³⁶ E・J・ホブズボーム『破断の時代 20 世紀の文化と社会』慶應義塾大学出版会、240 頁。

³⁷ この文章の冒頭部では訳者が現在出ている翻訳のバージョンについて解説している。それによれば『晨报』でも、ロンドンのネーション誌に掲載されたラッセルの文章の前二章を翻訳、掲載していた。なお、『新青年』の特集号には、通しての頁数がふられておらず、文章ごとに頁数がふられているため、引用頁はそれを参照した。

³⁸ 『東方雑誌』（1904-1949（上海）、1967-1990（台北））は 1904 年 3 月に商務印書館より上海で刊行された総合雑誌であり、1948 年 12 月の終刊号まで、1949 年以前の中国における出版時期が最も長い商業雑誌であった。創刊当時の経営母体となる商務印書館は、東京金港堂書店の投資を受けている合弁企業であった。1914 年日本側の株をすべて買収するまで、『東方雑誌』の旨は「啓導国民、連絡東亜」としていた。1914 年前後商務印書館は民国出版界を独占し、この時期の『東方雑誌』も資本的に独立しており、1920 年から西洋の最新社会思潮および科学思想に関心を寄せ、1921 年から 1923 年までには、学説より社会の現実問題への注目がだんだん重みを占めてくるという変遷を見せる（石雅潔、李志強「『東方雑誌』 办刊宗旨的演变」『新聞愛好者』6、2010、78-80 頁）。

³⁹ 1920 年 5 月、陳独秀は来華したコミンテルン遠東支局の副局長、G・ヴォイチンスキーの建議で「マルクス主義研究会」を組織し、建党の準備に入った。そこで『新青年』雑誌は 1920 年 9 月 1 日発刊の第 8 卷第 1 号より、中国共産党の機関誌となった（唐宝林、林茂生編『陳独秀年譜』上海人民出版社、1988、124 頁）。

⁴⁰ 張崧年執筆の紹介文「羅素（ラッセル）」のほか、張崧年訳「夢與事實（夢と事実）」、凌霜訳「工作與報酬（仕事と報酬）」、張崧年訳「民主與革命（民主と革命）」、雁氷訳「游俄感想」、張崧年訳「哲学裏的科學法（哲学における科学方法）」という 5 つの訳文が載せられている。

⁴¹ 石橋湛山「小評論」（『東洋經濟新報』1920 年 10 月 9 日号）、『石橋湛山全集 第 3 卷』（東洋經濟新報社、1971、522 - 524 頁）再録。

⁴² 前掲『石橋湛山全集 第 3 卷』、522 頁。

⁴³ 同上、523-524 頁。

-
- 44 『東洋経済新報』1919年4月5日号「社説」。
- 45 同上、1919年9月5日号「社説」。
- 46 同上、1919年8月15日号「社説」。
- 47 1920年8月「日本社会主義同盟」の結成とともに、旧刊『新社会評論』は『社会主義』に改題され、同組織の機関誌となった。
- 48 『社会主義』2、1920.11-12、17-19頁；同上、3、1920.12、12-14頁。
- 49 前掲『社会主義』2、17頁。
- 50 「太陽にすらも黒点がある」（『ソヴィエト・ロシア』掲載のもの）、前掲堺利彦「お上品学者ラッセル」、19頁。
- 51 「いかなる革命もお気に召すまい」（『ソヴィエト・ロシア』掲載のもの）、前掲堺利彦「お上品学者ラッセル」、13頁。
- 52 「人道主義のブルジョア学者」（『リベレーター』掲載のもの）、同上。
- 53 同上、14頁。
- 54 ロシア内戦期において、ソヴィエト連邦政府によってアメリカに設置された非公式の外交組織である。
- 55 『社会主義』4、1921.1、2-10頁。
- 56 高津正道「新刊批評「ボルセヴィキの理論と実践 ラッセル著 前田河廣一郎訳」」『社会主義』9、1921.9、45頁。
- 57 同上。
- 58 1920年10月に大杉栄は、来日した朝鮮人共産主義者李増林の働きかけで上海へ渡航し、当時大韓民国臨時政府の要職にあった呂運亨、中国共産主義運動の指導者陳独秀、コミンテルンのエージェント、G・ヴォイチンスキーと会合していた。大杉は「極東共産者同盟」構想への加入を期待するコミンテルン側の要求を拒否するが、それでも「使い道自由」の承諾を得た資金2000円を日本に持ち帰り、共産主義者との「統一戦線」を目指して、その一部を「労働運動社」の再興と「労働運動」雑誌（第2次）の創刊に使った。1921年4月、李増林は日本の共産主義者との接触を確固たるものにするため再び日本に来ていたが、山川均と近藤栄蔵は合議して、近藤が「日本共産党暫定中央執行委員会」の個人代表として上海へ赴くこととなった。この「日本共産党暫定中央執行委員会」は上海行の決定後で組織された結党ための「準備委員会」であり、主には山川と近藤のイニシアチブで運営されていた。「日本共産党規約」と「日本共産党綱領」を携行して上海へ向かった近藤は、コミンテルンの援助金6500円を受けて日本に戻り、その一部を、大杉に反対する戦闘的アナキストが結集した「労働社」グループに配分し、大部分を暁民会のポスター宣伝に使った（黒川伊織『帝国に抗する社会運動 第一次日本共産党の思想と運動』有志舎、2014、154-164頁）。
- 59 同上、155頁。
- 60 『晨报』（前身『晨鐘報』）は、1916年8月15日、進歩党人湯化龍、蒲殿俊と劉崇佑により北京で創刊された日刊紙である。李大釗が最初の編集主任に任じられ、その後、劉以芬、蒲殿俊、劉放園、陳博生などが『晨报』の編集者として尽力した。創刊の際「民族意識の自覚を喚起し、中華民族の青春を創造する使命を担ぐ」と述べたように、国内外の新聞の報道、民意の反映、新思想の研究、宣伝活動など精力的に行った。特に『晨报副刊』は海外の様々な思想、ルポルタージュ、小説の翻訳の発表の場として知識の市場を画期的に拡大し、『京報』の『小京報』、『民国日報』の『覚悟』、『時事新報』の『学燈』と並び「四大副刊」と呼ばれていた。魯迅の「阿Q正伝」が連載されたことなどで、「新文

化運動」の思潮がその恩恵を受け、メディア史の上では無論、文学史上においても評価を得ている。『晨报』は従来、「研究系」知識人の言論の場であったと漠然と見られてきたが、政治的主張を脱する独立的、総合的側面もあったことについて、最近では再評価されつつある（武曉桐「日刊紙『晨报』の性格について 民国メディア史研究の基礎作業として」『国際文化研究』22、2016、17-29頁）。

⁶¹ 穎水「評論羅素游俄之感想（ラッセルの露西亞遊歴の感想についての評論）」『東方雑誌』17（20）、122-124頁。

⁶² 同上、123頁。

⁶³ 雁氷訳「羅素論蘇維埃俄羅斯（ラッセルのソヴェト論）」（原作者 J. W. Heartmann、『Soviet Russia』掲載）『新青年』8（3）、1-8頁。震瀛訳「批評羅素論蘇維埃俄羅斯（ラッセルのソヴェト論についての批評）」（原作者未署名、『Soviet Russia』掲載）『新青年』8（4）、1-4頁。袁振英訳「羅素 一個失望的遊客（ラッセル がっかりした遊客）」（原作者 B. J.、『Soviet Russia』掲載）同上、1-3頁。面白いのは二番目の批評は前掲堺利彦が訳した「いかなる革命もお気に召すまい」と同一文章だったことである。

⁶⁴ 「ボルシェヴィキと世界政治」（初出『民国日報』1920年11月3、7、8、9日）袁剛等編『中国到自由之路 羅素在華講演集』（北京）北京大学出版社、2004、12-27頁。

⁶⁵ 「ボルシェヴィキの思想」（初出『民国日報』1920年11月29日）姜繼為編『哲学盛宴 羅素在華十大講演』（合肥）安徽教育出版社、2007、5-9頁。

⁶⁶ 『改造』3（9）、1921年9月、81-108頁。

⁶⁷ 前掲「ボルシェヴィキと世界政治」、23頁。

⁶⁸ 前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』、72頁。

⁶⁹ 前掲「ボルシェヴィキの思想」、8-9頁。

⁷⁰ 張東蓀「由内地旅行而得之又一教訓（この度の内地旅行から得たもうひとつの教訓）」（初出『時事新報』（上海）、1920年11月15日付き）、克柔編『張東蓀學術文化隨筆』中国青年出版社、2000、98-99頁。

⁷¹ 『新青年』8（4）、1920年、1-24頁。

⁷² 同上、23-24頁。

⁷³ 「ソヴィエトの教育」「ペトログラードの写真」「ソヴィエトロシアの労働組織」「革命的ロシアの学校と学生」「ソヴィエト政府の経済政策」「文芸とボルシェヴィキ」「赤軍教育」「中立派大会」「ロシアの実業問題」「ソヴィエトロシアの社会改造」「労農政府召集の経過と情勢」「過渡時代の経済」という12篇の文章はすべて、のちフランス共産党（Parti communiste français、PCF）の機関紙となる『L'Humanité（リュマニテ）』紙や『Soviet Russia』など共産主義系メディアからの訳文であった。

⁷⁴ 前掲唐宝林、林茂生編『陳独秀年譜』、124頁。

⁷⁵ 張東蓀「現在与将来」（初出『改造』3（4）、1921年2月15日）、前掲克柔編『張東蓀學術文化隨筆』、101-117頁。

⁷⁶ 張東蓀「一個申説」（初出『改造』3（6）、1920年12月15日）、同上、118-123頁。

⁷⁷ 前掲張東蓀「現在与将来」、101頁。

⁷⁸ 同上。

⁷⁹ 同上、102頁。

⁸⁰ 同上、105頁。

⁸¹ 同上。

⁸² 同上、107頁。

⁸³ 同上、108頁。

-
- ⁸⁴ 同上、114 - 115 頁。
- ⁸⁵ 前掲張東蓀「一個申説」、119 頁。
- ⁸⁶ 同上。
- ⁸⁷ 同上、122 頁。
- ⁸⁸ 連省自治運動とは、1920 年代の中華民国における地方分権運動である。それはまず各省がそれぞれに省憲法を制定して自治を行い、しかる後に各省が連省会議を構成して連省憲法を制定することで、連邦制による全国統一の実現を最終目標とするものであった。この運動が 1920 年 7 月に湖南省からおこると、たちまち中南部諸省に波及し、裁兵運動とともにこの時期における有力な政治運動に発展した。この思想は早くは、清末の改革・革命両派によって唱えられ、将来の中国がアメリカ・スイスなど欧米の連邦制国家に倣うべきだという主張となった。1911 年 11 月、山東省が清朝政府に提出した八か条のもとで独立しようという気運が高まったことは、その最も早いものであるといえる。民国初年袁世凱の帝政運動のなかに、この連邦思想、あるいは地方自治の思想は再び梁啓超らによって主張されるようになった。袁世凱死後の軍閥混戦期では、三たび連邦思想が台頭し、「研究系」知識人の熊希齡によって主唱されるようになった。思想界でもこれに呼応して、高一涵、張君勱、胡適らがこの運動を推進するイデオログとして活動し、「連省自治」は、最も先端をいく政治スローガンとなり、「五・四運動」後における最大の政治運動となった（寺廣映雄「民国軍閥期における中国統一策について（1） 廢督裁兵・連省自治、湖南自治運動」『歴史研究』、1980、1-13 頁）。
- ⁸⁹ 逢先知主編『毛沢東年譜 1893-1949 上巻』（北京）中共中央文献研究室、2002、79 頁。
- ⁹⁰ 同上、81 頁。
- ⁹¹ 同上、82-83 頁。
- ⁹² 同上。
- ⁹³ 新民学会とは、1918 年に、中華民国湖南省長沙市で毛沢東、蔡和森らによって設立された学生団体の名称である。この団体は最初に湖南省第四師範学校に在学中の毛沢東が、「新文化運動」の思潮より影響を受けて設立した学生の互助や向上を目指すための団体であり、学術の向上や品行を磨くなどといった事柄が理念とされていた。1919 年の五四運動でマルクス主義が学生を指導するようになったのを機に、多くの会員もマルクス主義に傾倒していくようになり、新民学会の理念もマルクス主義を基としたものに変更されることとなった。
- ⁹⁴ 前掲逢先知主編『毛沢東年譜』、86-87 頁。
- ⁹⁵ 前掲唐宝林、林茂生編『陳独秀年譜』、138 頁。
- ⁹⁶ 同上。
- ⁹⁷ 同上。
- ⁹⁸ バートランド・ラッセル「中国到自由之路」（1921 年 7 月 6 日、教育部にて）前掲姜繼為編『哲学盛宴 羅素在華十大講演』、235 頁。
- ⁹⁹ 同上。
- ¹⁰⁰ 前掲西田幾多郎「学者としてのラッセルについて」、81-83 頁。
- ¹⁰¹ 前掲大杉栄の「苦笑のラッセル」、100-101 頁。
- ¹⁰² 前掲土田杏村の「ラッセル氏と露国及日本を語る」、84 頁。
- ¹⁰³ 同上、86 頁。
- ¹⁰⁴ 同上。

-
- ¹⁰⁵ 前掲土田杏村の「ラッセル氏と露国及日本を語る」、87 頁。
- ¹⁰⁶ George Lansbury: At the Heart of Old Labour, by John Shepherd, Oxford: Oxford University Press, 2002, p. 187-188.
- ¹⁰⁷ 同上、87-88 頁。
- ¹⁰⁸ 同上、90 頁。
- ¹⁰⁹ 同上。
- ¹¹⁰ 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』誠文堂新光社、1982、79 頁。
- ¹¹¹ 土田杏村「マルクス、ラッセル及び文化」『文化』1 (2)、1920.2。
- ¹¹² 土田杏村訳「自由人の崇拜（ラッセル）」「哲学の価値（ラッセル）」『文化』1 (4)、1920.3。
- ¹¹³ 土田杏村「ラッセルの思想の根本的立場（上）——ラッセル研究の第一」同上。
- ¹¹⁴ 土田杏村「ラッセルの哲学」『改造』3 (7)、1921 年 7 月、9-14 頁。
- ¹¹⁵ 同上、11 頁。
- ¹¹⁶ 前掲上木敏郎『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』、79 頁。
- ¹¹⁷ 前掲日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、134 頁。
- ¹¹⁸ 前掲河合秀和訳『ロシア共産主義』、75-76 頁。
- ¹¹⁹ 「1920 年 6 月 25 日付きコレッティ宛て書簡、ストックホルムにて」、前掲日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、159-160 頁。

第4章 「小国寡民」論と「共産主義体制」——長谷川如是閑とラッセルの交錯

はじめに

1920年10月12日から翌1921年7月11日にかけて、イギリスの哲学者・評論家B・ラッセルが中華民国を訪れ、そして北京大学の客員教授として約一年間滞在した。「新文化運動」後期の民国思想界は彼の到着を大いに期待し、当該期の主要メディアにおいてその思想は頻りに紹介されていた。到着直後の2週間で、彼はまず華南地域の上海、杭州、南京、長沙の都市に滞在し、そこで民国思想界の各団体に熱く迎えられ、巡回講演を行った。そして長沙から北京へと北上したあと、北京大学で講義・セミナーをもつほか、週末にも諸団体の要請で講演を行い、当該期の民国思想界に「ラッセルブーム」を巻き起こした。

これまでに、ラッセルが民国思想界に及ぼした影響ならびに当該期民国の知識人とのやり取り、ないしは中国の近代化過程との関わりについて、何冊かの著述が既刊された。たとえば、馮崇義『羅素与中国——西方思想在中国的一次経歴（ラッセルと中国 中国における西洋思想の一つの経歴）』（三聯書店、1994）、胡軍『分析哲学在中国（分析哲学の中国受容）』（首都師範大学出版社、2001）、丁子江『羅素与中華文化（ラッセルと中華文化）』（北京大学出版社、2015）などがそれである。これらの著作はいずれもラッセル訪中及びその政治・哲学的影響を考える際、重要な研究ではあるものの、一国的な視角に終始しているがために、「西洋の衝撃—東洋の反応」といった二元対立的、受身的歴史叙述を脱しきれておらず、また、同じ「遠東」にあつてこの訪問に熱い視線を向けた日本側の知識人の議論に関しても、ほぼ完全に看過されてきた。さらに一方では、ラッセル自身における訪中を通じての思想的変化に対する検討も十分なされていない。こうした視点が重要なのは、ラッセルに限らず、当該期の知識人はみな、単に自国の問題にその思索をとどまらせていたわけではなく、大戦後の世界情勢、「アジア」、そして自国の将来がそれらとの関係上にあることを前提にしながら思考していたからである。知識人たちの根底にあつたのは、こうした広い視座から、人類史上はじめての総力戦以降におこつた諸文明・国家の生起と凋落を受けて、戦争の勃発原因となつた資本、工業、科学、国家、そしてこれらをすべて誕生させ、組織・動員した「近代」という時代そのものをとらえようとする問題意識であつた。先述した諸研究は、「中国の近代化」という認識枠内で考えるならばいずれも大変な労作であるが、本章はそれらの成果の上に上記の問題意識を積み上げたい。そのために、断面的に描かれてきた「ラッセルの訪問」を当該期のトランスナショナルなネットワークと言論空間のなかに還元して見つめ返し、「近代」が生み出す諸問題をめぐって、国境によって切断された思想史叙述の余白を埋め、より複線的な歴史事

象を再検討しようというのが筆者の意図である。

かかる問題関心から本章ではまず、日中両国を行き来するトランスナショナルな視点で、思想史的「事件」としてのラッセルの訪問を再検討する。次に諸先行研究では注目されてこなかった、当該期日本論壇の雄・長谷川如是閑による、ラッセルの政治思想とその民国におけるの役割への分析にアプローチする。これにより、ラッセルの訪問が呼び起こした、日中知識人間に交錯して展開された言論状況、さらにはこれら波打つ言論・主張を受けて、また中国という「古い文明」を自らの目で見て体験したことによるラッセル自身の心境と思想的変化を追跡し、既存研究の余白を補いつつ、より立体的歴史事象を記述したい。

第1節 「科学と倫理」／「社会改造」——中日のメディアと知識人におけるラッセル

19世紀以降、その支配の基盤がすでに緩みつつあった清王朝は、西欧列強の侵掠など内外における矛盾の挟撃で、やがて1911年の辛亥革命を経て倒れた。しかしその後、巨大な近世帝国の遺骸から、近代的国民国家はなかなか分娩されず、1912年に成立した中華民国は、政権の正当性を巡って南北勢力の対立、列強に利用された内戦など、カオス的狀況が続き、難産の陣痛に苦しめられていた。かかる清朝後期から民国に至る内外の危機的状況を受け、知識人の国家進路に対する模索は止まらなかった。1860年、第2次アヘン戦争の敗北後、伝統文化や制度を本体とし、西洋の「機械文明」の技術だけを取り入れようという「中体西用」を理念とする「洋務運動」が始まった。しかしそれは、知識人官僚たちの派閥闘争によって、変革に導くような共働力とはなれず、1894年、朝鮮半島の宗主権をめぐる、近代化に「成功」した日本との「日清戦争」において惨敗を喫することとなる。これを機にヨーロッパ列強は、清王朝の実力を見定め、自ら勢力範囲と特殊利権を求めて、帝国間における分割競争を繰り広げた。こうした状況に対する強烈な危機感のもとで、康有為・梁啓超ら改革派官僚知識人は、皮相的な「体用論」を捨てざる一方、明治日本を模倣し、立憲君主制の導入など根本的な制度変革を目指す「戊戌変法」を始めたが、西太后らの保守派に阻まれて失敗し、康・梁らは日本亡命を強いられた。

民国創立後の1910年代中ごろ、これまでの制度面に限定された改革に限界を感じ、さらには1905年「科挙」制度の廃止に伴って西洋的学問を吸収していた若い知識人たちは、躍起して中華文明の深層部にある「病巣」を抉りだすことに挑んだ。彼らは伝統的で、主としてこれまで王朝社会の核心であった儒教的価値に矛先を向け、それに対する全面的批判・相対化を求めた。ここで、内的に近代的国民の自覚を喚起する「啓蒙」と、外的に主権の独立を目指す「救亡（国を救う）」を二重変奏¹とする「新文化運動」が爆発したのである。その際、若い知識人たちが掲げたのは、欧米から輸入した「徳先生」（デモクラシー）と

「賽先生」（サイエンス）の両面大旗であった。「民主と科学」の概念は民国期の中国文学界・思想界を席卷し、その勢いはすべてを測る尺度となったとさえいえる。

前章でも触れたように 1920 年初頭には、民国思想界の主な思想潮流には「三足鼎立」の局面を呈し始める。それは胡適をはじめとし、プログマティズムを旗にした「自由主義派」、梁啓超をブレインとし、東西文明の折衷を唱えた「東方文化派」、そしてコミンテルンの支援を受け結党の準備に着手している陳独秀、李大釗を首となす初期マルクス主義者たちであった。彼らはそれぞれの学知と政見を唱え、論戦を互いに浴びせかけていた。中国近代化の道程について、政見上融和しえない相違点をもつこれらの知識人たちは、しかし、その学問への態度において、一種の「科学言説の共同体」²を形成していた。「五四」新文化運動は「科学言説共同体」の文化運動であったといえよう。異なった文化集団が、ついに一つの文化運動と見なされるのは、彼らはある種、相互交流の通じる言語と記号系統を共有しているからであった³。かかる「科学」というパラダイムの転換によってもたらされた観念上の巨大な変化と時を同じくして、この時期の知識人たちは、「科学」を「改造」の重要手段として、それぞれに「科学的」な学説を宣伝し、新しい「少年中国」、すなわち新たな近代国民国家を作る政治的実践にも応用した。周知の通り、当時 20 世紀初頭の世界では、ヘーゲル哲学における唯心的観念至上的傾向に抵抗して、科学と新たに結合する形で真正な哲学を取り戻すという「新實在論」⁴の哲学運動がおこっていた。ラッセルはまさに、G・E・ムーアとともに「ケンブリッジ学派」⁵を形成し、かかる哲学運動のイギリスにおける主唱者のひとりであった。彼は哲学研究における最も科学的な方法論、すなわちある問題群を明確な諸問題・命題に分割し、さらに各個撃破的に解剖してゆくという論理分析の方法を主張する哲学者であった。しかも科学的方法論の提起だけにとどまらず、戦時において反戦平和を唱えて投獄され、また知識人に「国家のため」ではなく「人類のため」という自覚を喚起し、戦後にはヴェルサイユ条約の不正義を批判したラッセルは、訪中当時すでに、特定の立場を乗り越えた普遍的価値、そして学問の良心の代言人とも見られるようになっていた。当時の民国は、第一次世界大戦の戦勝国側にあったにも関わらず、パリ講和会議でドイツの勢力範囲だった山東半島を回収することはできず、日本への譲渡を強いられた。講和会議で舐めたこの「外交失敗」の屈辱が、「五・四運動」の導火線となり、大戦後の世論に見られた「公理が強権に取って代わる」という、戦後の世界秩序再建への楽観と確信も粉碎された。このように、「西洋」発の「科学」的価値に確信を持ちながらも、「西洋」が代表する倫理的価値、「正義」「自由」といったものへの懐疑と不信を抱えつつあった民国思想界は、「西洋文明」自体を乗り越えた者を求めているのである。

かかる民国思想界の需要にまさに符合したラッセルは、その訪中前から大いに注目され

ていた。1919年から、民国の雑誌メディアにおけるラッセルへの関心が徐々に高まり、ラッセルの主要政治関係書が一部紹介・抄訳されていた⁶。そのなかで代表的な翻訳紹介者が、民国期中国においてラッセル研究の第一人者、のち中国共産党の三大創立者⁷のひとりでもある張崧年（申府）であった。張は当時、北京大学で論理学と数学科目を担当した哲学科の講師であった。その彼がラッセルの哲学に興味を感じ始めたのは1914年、北京大学の数学科2年生の時からで、ある日図書館で偶然、ラッセルの著書『our knowledge of the external world（外界に関する我々の知識）』（1914）に巡り合い、深く惹かれたのである⁸。そしてラッセルがその大著『Principia Mathematica（数学原理）』（1910-1913）で展開した思考と十数年来、「哲学」という学問の価値への考えを濃縮し、一般読者のために書かれた『the problem of philosophy（哲学問題）』（1912）を探し出して読みふけた張は、論理学と哲学への関心がますます高まり、2年後の1916年、かかるラッセルの啓蒙で哲学科へと転科し、それ以来、論理学を勉強する傍ら、ラッセルの著書翻訳及びその研究に没頭していたのである。1919年から1920年にかけて、この作業はピークに達し、14か月の短い間に、張申府は10本あまりのラッセルの論文を翻訳・注釈⁹し、「初めてラッセルの主要著作を中国語に訳した人」¹⁰となった。とりわけ張の主導で、1920年10月号の『新青年』誌では「ラッセル特集」が掲載され、ラッセルの半身像と、その下に「まもなく中国を訪れる世界の大哲學家ラッセル先生の1914年の写真」がこの期の封面を飾った。張崧年執筆の紹介文「羅素（ラッセル）」のほか、張崧年訳「夢與事實（夢と事実）」、凌霜訳「工作與報酬（仕事と報酬）」、張崧年訳「民主與革命（民主と革命）」、雁氷訳「游俄感想」、張崧年訳「哲学裏的科學法（哲学における科學方法）」という5つの訳文からなったこの特集において、はじめてラッセルの論理哲学と政治哲学が系統的に中国の読者たちに紹介された。『新青年』誌のほか、「研究系」グループが主導する新聞『晨報』、雑誌『解放と改造』、そして商務印書館の『東方雜誌』¹¹でもこの時期、ラッセルの思想と著作を紹介している。ラッセルの単著も1920年より各出版社から刊行されるようになった。新青年社の「新青年叢書」から、『到自由之路（自由への道）』（李季、黄凌霜、雁氷訳、1920）、『哲学問題』（黄凌霜訳、1920）、公民書局から『社会改造原理』（訳者不明、1920）、北京晨報社の「晨報叢書」よりも『社会改造原理』（余家菊訳、1920）が世に問われている。

このように、当該期の主流的雑誌・新聞・出版社は、立場を超えて一斉にラッセルの来訪を宣伝したが、さらにラッセルへの期待を高めたのが、当時同じく講学社の資金で在中したJ・デューイの紹介と推薦であった。1920年3月5日から北京大学での連続講演¹²でデューイは、プログマティズムの創始者、ウィリアム・ジェームズ、「生の哲学」を創立したアンリー・ベルクソンと一緒に、ラッセルを「現代的三個哲學家（現代における三人の

哲学者)」のひとりとしてあげ、その理論哲学及び人生・政治哲学を講じた。

ジェームズとベルクソンの哲学は心理学を起点とし、人間の意識的生活から入手しているのに対してラッセルは科学の最も抽象的な数学から着手し、心理学を信仰しないし、それが哲学と無関係だけではなく、心理学の濫用はまとまった哲学体系を攪乱するものでさえと思われている¹³。

ラッセルの哲学は、理論面と実用面とはまったく異なる。それは彼が理性と経験を、厳格に区別しているからである。理性に対して経験があり、知識に対して動作がある。また普遍的命題と個体的事実も相対している。このようなはっきりとした区別は、彼の哲学において、理論的面と実用的、社会的面の重点は、完全なる相反を来す¹⁴。

デューイは三人の主な思想を並べて比較し、当時世界における最も重要な哲学者として中国の青年学生に紹介し、それぞれの思想における精髓を批判的に吸収・融合することを勧めたのである。

まとめて言えば、三人の哲學家はそれぞれ独自の貢献がある。ジェームズは、いわゆる未来は、なんといっても活動的、伸縮のできるものであり、われわれの自由創造によって作られるものであると主張しているため、彼の主義は根本的な自由主義であり、各人は将来の世界を自由に創造できるとする。ベルクソンの「直感」というのが、自らが作り上げようとする将来に、新たな感覚を与えるものであり、この感覚は決して推理や計算によって得られるようなものではない。われわれの信仰、不断なる前進によるものであるという。これはベルクソンの貢献である。ラッセルは、広大で普遍的、個人に偏向しない知識を重視する。この知識によって「直感」の不足は補われ、人類の前進する際に、指針を与えてくれるのは、ラッセルの貢献である¹⁵。

「世界範囲において数学哲学を本当に理解している者は20人以下だと言われているが、その20人にわたくしはいないし、数学哲学については分からない」¹⁶と、自らの「無知」を認めたデューイの話は、もうすぐ民国へ来るラッセルへの好奇心と期待を一層激発した。

一方では「大正デモクラシー」の風潮のなかの日本の思想界でも、民国ほどではなにしる、ラッセルへの注目があった。初めてラッセルの学説に注目したのは、日本における経済学を開拓し、大正期において吉野作造とともに「民本主義」を支えた知識人・福田徳三であった。彼のラッセルへの興味は1907年前後に遡ることができ、論文「社会党鎮圧法

(Ausnahmegesetz) の終始」¹⁷において彼は、ラッセルの『ドイツ社会主義』(1896)を参考書目の一つにしている。1913年に坂西由蔵とともに編纂した『内外経済学名著』叢書(全6冊)¹⁸を同文館から刊行するが、その第1冊となる『ジェヴォンス経済学純理』も、ラッセルが『ドイツ社会主義』でマルクス経済学批判の際に引用したジェヴォンスの価値理論¹⁹に触発されて生まれたものであったろう。1919年、福田は、吉野作造との協議で、「頑迷思想の撲滅」を目指し、民本主義知識人を集結した言論団体「黎明会」を発足させるが、その会の主な活動は、月1回の講演会とその内容を記録したパンフレットの刊行であった。その目的は明らかに、「民本主義」による学生から大衆まで包括する広範な政治的啓蒙にあったといえよう。1920年5月4日、『大阪毎日新聞』が主催した講演会で福田は、「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ」²⁰という題で講演し、ラッセルの著書紹介とともにその「衝動理論」を引き合いに、大戦後における日本国民の使命は、「虚偽のデモクラシー」を退けて「真正のデモクラシー」の促進であると唱えた。福田はまず、この大戦は「デモクラシー対オートクラシーの戦争」と宣伝されてきたが、実はまったくの嘘であると論じる。

英国哲学者バートランド・ラッセル氏の書物に(中略)曰く「英国や仏蘭西はデモクラシーを愛するが故に独逸を憎むと言うて居るが之は反対である英国や仏蘭西は独逸を憎むがためにデモクラシーを愛するようになったのである。何となれば戦前にデモクラシーを甚だしく虐待したのは事実である。決して彼等はデモクラシー主義でなかったが戦争になって急にデモクラシーになった。之は何故かと言えば独逸が憎いからであって独逸がオートクラシーの国であるから此敵にデモクラシーを引張出したに過ぎない独逸が憎いからデモクラシーを愛するようになったのである」と。ラッセル氏は之を書いた為にタッター冊の書物の為に英国官憲に捕えられ殆ど監禁同様の身になり英国内地は歩いても好いが海岸地方が行けぬという事になりました。殊に最近到着した書物を見るとラッセル氏は遂に牢屋に投げられたようであります。又人から承わると彼は牢死したとの事です。彼の祖父は嘗て総理大臣を二回も勤めた名家の出である。ケンブリッジ大学の先生で英国第一の哲学者であります。然るに右の如き言論を公にして少しも止めないために英国では遂に彼を牢に投じて了ったのであります。幸い日本では私を牢屋に投ずる人がなく今日此中央公会堂に於て遠慮なく自分の主張を述べる事が出来るのは何より幸福であります。今仮に私が牢屋に投げられるとしても法廷に於て私は公会堂で諸君の前に立ってお話すると同じ事を申上げるより外ない。何となれば夫れは事実であるからで事實は時を隔て所を違えても少しも相違がない。唯英語か日本語かの相違あるのみであります²¹。

続いて「英米の資本的局部的デモクラシー」とともに「独逸の労働者を中心とするソーシャル・デモクラシー、社会民主主義」ないしは「社会民主主義を徹底的に最も無遠慮に実現しようという」ロシアのボルシェヴィズムも、「虚偽のデモクラシー」であるとして退け、特定の間人か階級かに限定するこれらの偽物と違って「真正デモクラシー」である「全国民のクラシー」を実現することを呼び掛けている。

日本は真正のデモクラシーを世界に示すべき使命を持つ。日本は英米に於ける政治的資本的デモクラシーでもない、或は独露的社会民主主義でもない。どちらも日本では未だ有力ではない。殆ど全く痕跡もない程でありまして日本は全く白紙であります。だから之から新に真正のデモクラシーを打ち立てるにしても割合仕事は楽である²²。

然らば其真正デモクラシーとは何であるかというに言葉に示す通り全国民のクラシーである。全国民の支配権である、唯一人、唯一階級に権力を独占しないで凡ての国民を網羅して之を支配者たらしめるのが真正のデモクラシーである即ち政治を第三階級にやるのでもなく第四階級にやるのでもない或は封建時代の第二階級にしても不可ない、昔の時代の如き第一階級でも不可ない、第一第二第三第四凡ての階級に政治上の権力を公平に分配して与えると言うのが之が真正のデモクラシーである。一見して左様なデモクラシーは世界中何れの国にもない。幾何らウィルソン氏が立派な事を言っても駄目である。寧ろ英米にも之から起ろうと言うのである、此の新しい居真正のデモクラシーは今まで起ろうとしても却々起る事が出来なかつたのであります²³。

「全国民のクラシー」を唱えながらも外交、植民地問題に触れていない福田の論理は、ある種のポピュリズムを招致する危険性も孕むが、それは単に福田だけの問題ではない。稀な例を除いておおよそその大正知識人はほとんど日本国内の問題のみに注目したのが実際のところであり、これはまさに「大正デモクラシー」の落とし穴であり、それが批判されてきた原因でもあった。福田の講演に話を戻すが、彼はさらにラッセルの「衝動理論」を引用し、「所有の衝動」の基盤に築かれた「国家」と誤る「教育」を批判する。

人間を動かして生活上活動せしむる力は欲望と衝動であります。此の衝動に二つの種類がある。一つは物を得んとする衝動、之を所有の衝動と言うのであります。もう一つは物を造り出さんとする衝動即ち創造の衝動であります²⁴。

然るに十六世紀以来今日までの文明は悉く所有の衝動のみを尊重した所の文明であります。創造の衝動は悉く之れを打ち亡ぼし悉く押え付けたのであります。最も有力な例を引けば今日の国家が夫れである。今日の国家は生命財産の安固殊に財産権の保護をすると言う事を一大任務とする、今日の国家は文化国家、法治国家と云うが只名前丈けで事實は財産国家、所有国家であります²⁵。

我々の子供を育てる所の方針は所有教育の方針である。子供を教育する方針は彼をして財産を得せしめようと言うに外ならない。小学校で習う事は子供をして他日所有を得せしめん準備だと考えて居る。其反対に自分の創造力を出す事を許さない、規則づくめに教うる結果先生の言うより外は習わない教わった外には融通が利かない²⁶。

ここは基本的に大戦以来、ラッセルが諸著述で表した思考よりの福田が援用したものである。たしかに、社会問題の解決の鍵を人格価値の問題に置き、そして経済問題の本質を倫理問題に求めた福田は、「生存権」概念を提出し、その延長上にある厚生経済学を構築していくが、これは双方向的「自由」と労働尊厳の回復を唱え、共同社会の再建を目指すラッセルとの間に、その価値面における根本的な類似性を確認できよう。講演の最後に福田は、「創造の衝動」の解放という原則の樹立を世界改造の第一歩とする。

世界の改造ということは此不当な圧迫から我々の創造の衝動を解放する事、所有の専縛から人類を解放することから着手しなければならぬと思うのであります。我々の黎明というのも所有の暗黒の世界より創造の光明世界に移らんとする趣意である。私は之が真正デモクラシーに赴く所の第一着手であると確信するものであります²⁷。

ラッセルの理論を引き合いにしながら自らの意見を宣伝する福田を除いて、この時期、最も早くラッセルの著述を日本語に翻訳・紹介したのは、前章でも触れた、在野の哲学者・社会評論家、土田杏村であった。彼の関心はラッセルの論理学から社会・政治哲学まで広範なものであり、1918年の早い時点でラッセルの論文集「Mysticism and Logic, and Other Essays (神秘主義とロジック、およびほかの論文)」の出版に際して「ラッセル氏の新著たる『神秘主義と論理学』について」²⁸という書評を『文化運動』誌に載せた。1920年に入ると、京都大学哲学科を卒業し、同大学院に入った杏村は、思想界と学术界の懸隔を埋めようとし、個人雑誌『文化』を創刊する。彼は、これによりアカデミズムとジャーナリズムをつなぐことを志していた。そして、早くもその第2号に「マルクス、ラッセル及び文化」²⁹という一文を掲載し、また第4号にラッセルの「自由人の崇拜」と「哲学の価値」³⁰を

翻訳して載せ、「ラッセルの思想の根本的立場（上）——ラッセル研究の第一」³¹を著すなど、本格的にラッセルの思想を研究し始めたのである。

土田杏村のほか、当時慶應義塾大学経済学科の教授・小泉信三もラッセルの「自由への道」を読んで書評「学問芸術と社会主義」³²を書いた。福田徳三の弟子であり、D・リカード経済学の専門研究に従事する小泉がラッセルに注目した背後には、師の福田徳三からの影響も看過できないであろう。これらアカデミズム側、あるいはそれに近い立場にある知識人の反応のほかに、民間・論壇からも、ラッセルへの注目はあった。この注目は、「大正9、10年頃、日本における社会主義研究の最も盛んに行われた時代」³³、マルクス主義の宣伝に対抗する形での、「ギルド社会主義」の紹介とともになされた。

「ギルド社会主義」という思想風潮が日本の思想界にもたらされたのは、一般的には1919年のことであるとされる³⁴。この年の末頃に発売された『中央公論』の12月号に、室伏高信が執筆した「改造論の一年」という文章が掲載された。室伏は、新たに台頭しかつ分化している時代思潮を以下の4つに分けている。1、吉野作造・大山郁夫らの「政治的デモクラシー」論、2、売文社に拠るマルクス正統派とその分解、3、ギルド社会主義、4、サンジカリズム・無政府主義という4つの流れである³⁵。実は室伏に先行して、先述した小泉信三は早くも1916年の段階で、同様の思潮を紹介していたが³⁶、東京帝大の学会誌に寄せられたこの文章は、あまり大きな反響を起さなかった。1920年7月室伏より、『ギルド社会主義』³⁷という一冊が刊行され、思想界においてギルド社会主義研究者の地位を築き上げた。当該期の室伏は、「工業主義、機械主義、都会主義」がもたらした、個人と共同体の異化を改造するには、国家に過大な権力を渡すマルクス主義より、ギルド社会主義の「自由」理念が相応しいとこれに共鳴したのであった。

社会主義の諸系統にあつては、私はギルド社会主義が最も進歩したものであると思うことにおいて、今も昔も異なるところはない。工業主義、機械主義、都会主義のもとにおいては、ギルド社会主義が最も多く自由の側にあると思われるからである³⁸。

こうした室伏は、ギルド社会主義を擁護する立場からラッセルにも接近し、1919年にラッセルの『Political ideals』の第三章「Pitfalls in Socialism（社会主義の落とし穴）」を翻訳して『批評』誌に載せ、その国家社会主義への批判を大いに賛同した。

バートランド・ラッセルは英国今日の文明批評家として正に第一人者である。ここに訳出した論文は彼のPolitical idealsのうちの第三章である。この一文は国家社会主義に対する批判としてわれわれの聴くべきところ多きを思い、ここに全文を訳出する

こととしました³⁹。

またラッセルが来日する前の1921年1月に、室伏が執筆した「ラッセル評伝」が『改造』誌に掲載された。日本では初めてなされたラッセルの系統的紹介となるこの長文は、ラッセルの哲学・論理学における主な主張と業績が述べられるとともに、彼の倫理学・政治学についてもその原著を拠り所に要領よく整理されている。また、とりわけギルド社会主義の支持者であるラッセルを、「無政府主義者」と攻撃するようなマルクス主義者たちの宣伝に対して批判を加えた。

社会改造の原理として今日までのわれわれの前に主張されているもののうちにあつてラッセルのこの二つの原則、生長の原則と自由の原則とが最もよく体现されているものはギルド・ソーシャリズムであるという点から、社会改造の方法として彼自らギルド・ソーシャリズムを主張するということを宣明していることとに彼自らナショナル・ギルド同盟に入っているのがあつて、（中略）だからラッセルの社会思想をもつてアナキズムであるかのごとくに論ずることはもとより何の拠り所もない謬論である。（中略）ラッセルの認めるところの国家は勿論万能力の国家ではないのであるから所謂国家主義者と称する国家万能主義には反対するものであるがこれをもつて無政府主義と言いうべくんばギルド・ソーシャリズムもまたアナキズムであると言わなくてはならないこととなる。何となれば多くのギルズメンはラッセルと等しく職分的国家観の支持者であるからである⁴⁰。

室伏のほかに、論壇あるいはジャーナリストとしてラッセルに注目した人物に長谷川如是閑がいた。1920年11月の『読売新聞』に連載された「ラッセルの社会思想と支那」という一文は、ラッセルの政治主張を解釈する一方、如是閑自身の中国文化論、革命論を表出した極めて興味深い論説である（詳細は後述）。

以上個々の知識人の論説のほか、当該期日本におけるラッセルの著作集・単行書の翻訳・出版状況を見れば、主にはその政治学関連著述を中心になされていたことが分かる。前者の著作集の出版はこの時期、大日本文明協会より刊行された『社会改造の理想と実際』（1920）⁴¹および、日本評論社より出された『ラッセル論集』（1921）⁴²がある。後者の単行書の翻訳については、『The Problems of Philosophy』（1912）⁴³、『Mysticism and Logic』（1918）⁴⁴および『Introduction to Mathematical Philosophy（数学哲学入門）』（1919）⁴⁵という三冊以外は、全て政論書である。1916年の『Justice in War Time』には、先述した著作集にも収録されている⁴⁶ほか、時国理一が訳した『正義と闘争』（1920）⁴⁷という二

つのバージョンがある。同じく 1916 年に世を問われ、ラッセルの「衝動理論」が最も体系的に表されている『Principles of Social Reconstruction』に対する翻訳バージョンは最も多く、4 種類⁴⁸に達している。1917 年の『Political Ideals』に対しては 3 種⁴⁹、1918 年の『Roads to Freedom』は 3 種⁵⁰、1920 年年末に出版され、多くの論戦を引き起こした『The Practice and Theory of Bolshevism』は、前章で触れたように抄訳は多く出たが、単行書として刊行されたのは 1 種類⁵¹だけであった。

両国におけるラッセルのテキストの翻訳と受容状況をまとめて言えば、民国においてのそれは、ラッセルの思想を単独で受容した知識人・張申府より、1919 年に初めて導入されたあとに漸次多くなり、1920 年になるとその来訪を受けて一斉に翻訳・紹介され、関連する言論はピークに達した。張はラッセルの論理学によって啓蒙され、哲学に開眼したが、そのラッセルへの関心は、哲学に限定したものではなく、政治・倫理学も含めた全面的なものであった。一方で当該期のメディアでの紹介、そして著書の中国語翻訳は主に、ラッセルの政治関連書籍が多いように見受けられる。

一方で日本での紹介と受容はおおよそ、アカデミズム側における個々の知識人よりなされた一方、1919 年以降日本におけるギルド社会主義思潮の流入という状況が、その第二の支流をなした。ここではアカデミシャンとジャーナリストを分けてみているが、両者は決して無関係なものではなく、かなりの部分において重なっているように見える。というのは、ラッセルに関心をもった当該期日本の知識人は、アカデミックにせよジャーナリストにせよ、いずれも両者をおおむねある程度調合しようという立場の人々であったからだ。具体的に見れば、アカデミズム側に近い立場には、経済学からは福田徳三、その弟子に当たる小泉信三、哲学からは土田杏村などが挙げられる。論壇・ジャーナリズム側からは、マルクス主義に抗して、ギルド社会主義を擁護する立場ないし社会主義への総合的研究を提唱する室伏高信、前章で触れた「小日本主義」を唱え、『東洋経済新報』の主筆であった石橋湛山、そして言論弾圧事件で『大阪朝日新聞』を離れ、大山郁夫とともに社会問題雑誌『我等』を創立した長谷川如是閑がいた。

第 2 節 「小国寡民」論——「ラッセルの社会思想と支那」における図式

前節で見た言論の交錯状況からすればとして、長谷川如是閑の「ラッセルの社会思想と支那」という論説文はやや異色なものだったとはいえよう。なぜなら、その論説は分析の切り口を、ラッセルの「自由」概念およびその社会組織原理となる「ギルド社会主義」に置きつつも、彼自身の民国政治への理解を交えつつ、進路に苦闘している中華民国がラッセルの政治主張を、いかにうまく取り入れるべきかを論じていたからである。これは当該

期日本におけるラッセルの哲学・政治思想への関心のなかでは、ほぼ唯一民国の政治改革と関連して書かれたものであった。1951年、如是閑の回想には以下のようにある。

で1920年に、ラッセルが北京大学に招かれて始めて東洋に旅行して、帰りには日本にも立ち寄ったが、そのころ、私の友人で後にソ連で行方不明になった大庭柯公が、読売新聞の記者をしていて、ラッセルの思想と大陸の思想との関係といったようなことについて、私の見解を聞きたいというので、私がそれをいったのを彼が筆記して、読売新聞に掲載されたことがあった。それは中国伝来の思想と大戦当時のシナ大陸の混乱状態とが、ラッセルの思想の立場からはどんな風に見られるかを考えたものだったが、そのラッセルの思想というのは、彼が第1次大戦の始まった翌年の1915年に書いて、1916年に出版された『社会改造の原理』(Principles of Social Reconstruction)で展開した彼の社会思想であった⁵²。

この回想によれば、1920年11月10日から連載しはじめ、7回に分けて11月6日をもって終了したこの論説文は、彼の直筆ではなく、口述により当時『読売新聞』の記者だった大庭柯公が記録したものであった。6年後、この文章は上海商務印書館の『東方雑誌』23巻13号に、「羅素の社会思想與中國(ラッセルの社会思想と中国)」⁵³とのタイトルで訳され転載された。これは当該期の言論が国境を越えて連動していることのもう一つの証拠となるであろう。興味深いことに、この翻訳は如是閑による論説の全文ではなく、たとえば第7回の連載——その内容は主に如是閑が中国の将来を展望したもの、すなわち中国は一大国として統一する可能性はなく、小国分立するだろうという推測の部分——は全文無視され、また各章においても部分的な添削がみられるが、これには当該期民国に関する特殊なコンテキストがあったであろう。まず、如是閑の原文にあたって見てみよう。

バートランド・ラッセルが支那に来たと云う事は色々な意味で興味があると思うが、さてそれに就て私の感想はと聴かされると別段纏まった考えもない。氏は北京大学の招聘に応じたのだそうだが、そうすると費用は全部支那政府が負担するのであろう。北京大学は自主独立に勝手な真似をしているが、北京政府もそれを拒むと、大学の新思想家連の反抗を招いて引いて一般輿論の攻撃を受けるので、少しも圧迫を加えないのは面白い。支那の方が日本よりも輿論の勢力が強い。がそんな事は別として少しく茲にラッセルの思想と支那の現在ということについて断片的に考えてみようと思う。尤もラッセルの思想といっても直に支那の現在に交渉を持つのは氏の社会思想であろうと思うから、それを問題に限った訳である⁵⁴。

第一章の冒頭部において、如是閑はまず北洋軍閥政府がラッセルのような「危険人物」の訪中に干渉しないことに興味を示し、そこから世論の勢力はむしろ中国のほうが強いと論評する。実際ラッセルの訪中は、基本的には梁啓超とその人脈によって実現したもので、1920年代初頭、北洋政府の統制下における民国の言論状況は、たしかに1928年、南京国民政府により全国統一された後に比して「自由」ではあった。しかしラッセルの訪中が妨害されなかった理由は、「輿論の勢力」が強く、政府の干渉を押しつけたというより、むしろそれは社会的上層部が組織した一種の「啓蒙」運動であったためと見たほうがより適切であろう。

つづいて彼は、中国の現状とラッセルの「社会思想」について、「断片的に」考察するとし、最初に彼自身の中国観を展開してみせた。

支那は元来貴族的の文化とブルジョアの文化が非常に発達した国で、文化という点では世界の優等国であることは東洋を研究している西洋人の認めているとおりである。が経済状態は極めて幼稚で所謂産業革命以前の状態に在る。従って現代の意味で云うプロレタリアート即ち無産階級はまだ支那に無いと云って差支えない。無産者はあるが、それはマルキシアンの云うプロレタリアではなく、丁度露国に於ける専制時代の農奴に似たもので、（中略）此の状態は丁度仏蘭西人の所謂アンシャンレジーム即ち仏蘭西革命以前の状態に似ている。従って支那の革命は軍閥国家間の政権の奪合で、軍閥的な革命であった。（中略）本当の社会革命を起す様な経済事情はまだ成立って居ない。今日然ういう種類の革命に思想上の後援を与えるものは矢張りリベラリズムである。（中略）ラッセルのリベラリズムは大に今日の支那に役立つ事に違いない⁵⁵。

上述史料から見て取れるように、彼は中国の文化は優れたものだと認めつつも、しかしその経済的基盤は極めて弱いものと見て、当該期の中国の状態をフランス革命とロシア革命が起こる前の状態に喩えている。そして、辛亥革命以降発生した中国の諸革命を軍閥の勢力争奪と見て、「本当の社会革命」すなわちブルジョワ革命の成立基盤は整っていないと主張している。これは前章で触れた、中国は未だ階級未分化段階にあると見た張東蓀ら「研究系」知識人と近い見方であったといえよう。そしてラッセルの訪中が、「リベラリズム」の火種を中国にもたらし、ブルジョワ革命の思想的指導役となればという期待を示している。

次に如是閑はラッセルを引き続き「リベラリスト」と位置づけ、ラッセルは、たしかにマルクス主義の有用性に賛同するが、その個人を犠牲にする傾向にはむしろ反対だという。

ラッセルは英国式のリベラリストでマルキシアンではない。社会主義的な社会管理には中途の手段としては賛成しても、思想上または進行上反対の傾向を持っていて、寧ろ個人のイニシアチブを尊んでいる。氏の社会学説の一般法則として掲げているのは、第一に、個人及び個人の共同生活の発達と其生活力とを出来るだけ発展せしむると云う事、第二には一個人及び其集団の共同生活の発達は、出来るだけ他の個人や、他の集団性を犠牲にすることなしにそれを遂行すると云う事である。此立場は、社会主義者が個人性の保存に於て社会性を完成せしむると云う立場を取るのに対して、社会的生活に於て個人を完成せしむると云う立場を取るのである⁵⁶。

興味深いことに、ラッセルの諸主張から「英国式のリベラリズム」を強調するのが如是閑の立場であった。ラッセルの「リベラリズム」とは、個人およびその所属集団の連帯を重視するものであり、これは明らかに社会主義あるいはマルクス主義における、個人を押し潰す傾向と異なっていることを闡明した如是閑の言説には、「ラッセルが代表している」イギリスの市民的リベラリズムへの傾斜が大きかった。1918年「白虹事件」⁵⁷を経て『大阪朝日新聞』を脱退した如是閑は、個人に対して国家権力の抑圧と、排他的ナショナリズムが発揮する力を、身をもって体験した。つづいて1919年、大山郁夫とともに雑誌『我等』を創刊した長谷川如是閑は、この年を期に、一気にその国家批判を爆発させ、これらの論文は、翌1921年の著作『現代国家批判』⁵⁸にまとめられた⁵⁹。とりわけ、早くも1920年初頭に如是閑は、L・ホブハウス（Leonard Trelawny Hobhouse、1864-1929、イギリスの社会学政治学者、ジャーナリスト）の著述と理論⁶⁰を紹介し、これによって日本はじめてのホブハウスの紹介者となったことは注目されよう。イギリス理想主義⁶¹の系譜のなかで、カント哲学よりは、とりわけヘーゲル哲学の要素を吸収しているB・ボザンケ（Bernard Bosanquet、1848-1923）が、国家を国民の「一般意志（general will）」の体現集合体であり、倫理的「最高善」でもあると見ていた。これに対し、ボザンケにおける国家的価値の拝跪に反対し、ホブハウスはその著述『The Metaphysical Theory of the State（国家の形而上学的理論）』（1918）⁶²で、国家は社会の一集団に過ぎず、形而上学的価値を付与すべきでないとして鋭く批判している。かかるホブハウスの国家形而上学反対論に、如是閑は明治以来日本が採った、祭政一致的宗教国家観の時代錯誤を非難する立場で同調している。

日本の学生が、講堂で、教師から聴かされている国家論は、一様にヘーゲル臭味の超絶的国家観を根柢に持ったものである。日本人の所謂国民道徳というものは、丁度宗教家が神に対する場合のような、絶対的帰依と服従とを以て国家に対することなので

ある。それは「絶対に対する信仰」に立脚する宗教でなければ、哲学である⁶³。

この宗教や哲学は（中略）ある時代の国民生活の必然から発生し、確かにそれに役立ったことのあるものであると同時に、その必然性を失った後まで（中略）人間の意識生活に残っている時は、社会進化の過程に対して、意識的の障碍を為し、権勢、圧迫、怠惰、卑屈、停滞、固定、腐敗、等の衰亡的生理状態と心理状態とに社会を陥れると同時に、衰亡者は必然病的昂奮によって、社会を攪乱せしめるのである⁶⁴。

英国の社会学者ホブハウス教授が（中略）同国で現に有力な国家学者のボサンケットの立場を、その元祖たるヘーゲルの国家学のそれと一緒に束ねて攻撃し（中略）現代の国家思想を平らたく説明したものである。それは独逸流の哲学的国家観に対する英国流の実際的な国家観で、（中略）如何にして「国家」を現代に生かして行くかという「国家処世法」に近いものなのである。（中略）その思想は、国家を宗教的乃至哲学的の信仰と結びつけた数千年の昔からの思想に茹っている我國民には、清涼飲料ともなり、逆上引き下げ薬ともなる⁶⁵。

「独逸流の哲学的国家観に対する英国流の実際的な国家観」という構図は、如是閑が見通す日本国家の近代化路線をめぐる異なるモデル間の対決であった。絶対観念論と国家至上主義を退け、個人および言論の自由を強調するのは、もちろんホブハウスでありラッセルであるが、同時に彼らの口を借りた如是閑でもあった。かかる「独逸流の哲学的国家観」への批判は、学問的立場でヘーゲル理論を批判しているというより、むしろ当時政府が強く打ち出す「ドイツ型」のイデオロギーへの反感であり、「御用文人」である井上哲次郎らが唱道し、民衆生活の隅々まで浸透させられつつある「国民道徳論」への「本能的嫌悪」に見える。後年、長谷川如是閑は、1920年代の自分を回想して同じことを述べている。

私はラッセルを読む前から、日本の近代文明建設の青写真がだんだん英米型から離れて、ドイツ型を追いかけて、哲学でも社会学でも国家学でも、ドイツ学一点張りになって、いわゆる「コケの一つ覚え」で人間の内的・外的の問題も、国家の内的・外的の問題も、すべてドイツ的イデオロギーで片づけようとし出したのを、私の明治時代の英米型の教養の頭で、困ったことになったと思っていた。第一次大戦後、デモクラシーの空気が吹き込んで、相当メートルをあげたが、これも観念的の、ドイツ的デモクラシーで、ヘーゲルの「精神」に「物」を置きかえたマルクス主義も同じ型の絶対主義哲学で、いずれも頭でうけとって頭の中で空転しているだけのもので、時代の日

本人の五体から湧き出た力ではなかったもので、いつの間にかうやむやに消えてしまった⁶⁶。

すなわち彼からすれば、「明治」の「英米型教養」を受けた、日本の「近代文明建設の青写真」＝理想像を「英米型」に託した自分にとって、「ドイツ学一点張り」の「コケ」の上層に「困った」わけであった。その視点で見れば、マルクス主義でさえに、ドイツ型の「観念」に「物」を置き換えただけで、その風靡も「絶対主義哲学」横行の結果だったというのが如是閑の認識であった。この時期の如是閑が、イギリスを理想国と見ていることが察知できよう。こうして穏当的に「社会」の大多数の幸福を実現したイギリス国家の近代化過程に最も賛同した如是閑は、同じ近代化の道が日本でも実現されるべきであると、さもなければ、第一次世界大戦後のドイツ帝国と同じような国家的破滅を招くと警告している。

ホブハウス教授は、科学上、経験上の見地から、国家生活が、社会生活の一手段に過ぎないことを説き、それに絶対価値を賦与することは、意志と、意志の共同の働きとの心理学的考察からいっても不当であることを断言し（中略）個人意志と社会の諸制度との関係、殊に国家制度との関係について教授の説は、現時の学者が、最近の社会思想を、如何にして国家思想と結びつくべきかについて攻究しつつある一般の傾向を探ったもので、（中略）バートランド・ラッセルのそれのように、英国流の自由思想と、大陸流の社会思想との調和ということが中心の流れを為しているのである。（中略）教授は（中略）国家的制度の歴史的必然性を認めている点で、自由思想家としては左党に属するが、社会思想家としては、右党に属している。それが教授の説を实际的ならしめ、改造運動の中心思潮として堅実の地歩を占め得る資格をそれに与えている。（中略）英国ばかりでなく、改造を要求されている国家は、最も安全な進転を、そこに見出すことになりはしまいか。（中略）教授の思想位が国家的進化の最低度のもので、これ以下のものであったら、その国家の存立は、絶対国家と共に危険に瀕しはしまいか⁶⁷。

国家は社会の一集団であり、個人意志の集合は国家でなく、社会にあるというホブハウスの理論を紹介した如是閑は、ラッセルの政治的主張もホブハウスと同じ系譜にあり、その社会理論を現段階においてもっとも妥当的だと認めた。この年の末に発表された「ラッセルの社会思想と支那」という一文にも、このような認識は反映されている。また、ホブハウスの保守に傾く社会運動理論を日本社会の「改造」にも応用せしめ、過激化を見せる

社会運動と形而上学を辿る国家哲学の両方に「絶対国家」ドイツの壊滅をもって警告し、歯止めをかけようとした。ここからは、暴力的革命運動を危険視し、ロシア革命が日本と中国にもたらす巨大な影響を懸念している如是閑の革命観がうかがえる。かかる「国家」対「社会」の二元対立的言説は、如是閑一人に限った話ではない。大正期における「社会の発見」という風潮はすでに、飯田泰三を嚆矢とする諸先行によって指摘⁶⁸されている。その背景にあったのは、明治期国家主義風潮の後退、大正期以降における経済状況の好転によって、「個」的価値の上昇と多様な社会、労働問題といった諸現象であった。また、第一次世界大戦後、世界規模でみられるようになった国家主権至上に対する批判の風潮も、これを助長することになる。国家権力の分散を目指す「多元的国家論」⁶⁹は、内外の情勢に対応する形で日本に取り入れられた。

20世紀初頭の西欧・アメリカを中心にその端を発した「多元的国家論」が、第一次世界大戦を境に世界的に展開され、それに基づく主権・国家批判という潮流は、ほぼリアルタイムで日本に受容⁷⁰された。そしてこれは、大正期の社会主義思想の受容と大衆運動の気運とに合流し、大逆事件を経た「時代閉塞の現状」に突破口を見出そうとしていた知識人、並びに当時マスコミの発達を背景に活躍していた言論人たちは、直ちにこの理論を武器にして日本国家を「改造」しようとした。先述した多元的国家論者のひとりで、ホブハウスを紹介した長谷川如是閑が1921年に著した『現代国家批判』は、まさに日本において「多元的国家論」が展開する口火を切った書物であった⁷¹。如是閑以外の同時代の知識人では、高田保馬、中島重、大山郁夫、蠟山政道なども、それぞれの著述⁷²で「多元的国家論」を受容することで、時代的問題を凝視しようとした。

さて「ラッセルの社会思想と支那」という一文に話を戻せば、如是閑は前述したマルクス主義への懸念を表したあと、彼は、中国の孔孟思想を国家主義的、老子哲学を無政府主義的にとらえる「孔子 vs 老子」の図式を押し出した。

支那のアナーキズムも支那の文化の高度の発達によって発生したものである。(中略) 孔孟の思想に対して、老荘の思想が発展したという風である。で此北方の実際主義と南方の冥想主義とは強い対照を為して支那思想の内容を豊富にしているのであるが、一口に言うとも北方の思想が政治的に現れた場合には、文化主義であり、賢人政治であり、プラトニズムであり、温情主義であり、概して独裁的な傾向を有っている。これに反して南方の思想が政治的に現れた時には所謂無為の政治であり、個人主義的であり、自由放任主義であり、従って無政府的である。ラッセルの思想はその政治上の進展に於いては後者即ち南方のものと類似点を有っている。ラッセルの哲学の实在論的傾向は無論支那の南方の哲学とは非常に異なったものであるが、氏の社会思想に於け

る無政府的傾向は支那の北方の聖賢政治とは甚だ懸隔のあるもので、寧ろ南方のそれに近い⁷³。

彼は、この二つの思想を二項対立的に中国の北方の実際主義と南方の冥想主義に分けて捉えた。北方の思想は政治に反映して以下の特徴——文化主義、賢人政治、プラトン主義、温情主義、概括的に言えば一種の独裁的傾向、をもっているとする。南方の思想はこれと反対に、無為政治、個人主義、自由放任主義、概観すれば無政府主義に傾いているとした。そして、彼は、ラッセルの政治と社会思想は後者——すなわち南方の思想に近いが、その哲学においての实在論的主張はむしろ南方の思想からかけ離れていると述べた。中国の老荘思想は一種の形而上的観念に属するが、ラッセルの国家批判と無政府主義は相互扶助と連帯を重んじる実践を強調する「科学的無政府主義」であるというのである。それにまた、内的混戦と外的侵略という二重圧に面した中国にとっては、資本主義の萌芽はなかなか期待できないだろうと指摘し、それを克服するためには、まず思想上にイギリス式の重商主義を取り入れることで中国の南方に商業と貿易を逐次的に発展させ、これによって資本主義的デモクラシーを涵養すれば、今の難局を打破できるはずだと提案した。

何うしても支那は自分自身に一遍デモクラシクなブルジョワの自由を持来さなければ自己の繁栄は望まれないし、又国際的侵略をやめて仕舞わなければ自国の存立は常に危険を感じる。此点に於いて支那の立場は先づ商業主義を確立せしむる事にある。それは国内的に軍閥の政治を打破する事であると同時に、国際的の侵略主義から逃れる事である。斯る状態から発生する道德なり、政治哲学なりは必然にラッセルのそれに近いものでなければならぬ。ラッセルの思想が英国の商業主義と或る根本的の關係を有つと云う事は、聊か失礼な見方の様ではあるが、それだけ氏の道德なり政治哲学なりが實際的の立場を持っているということになる⁷⁴。

如是閑は、ラッセルの倫理思想と政治論の中には、ブルジョワ的階級立場とイギリスの国益も反映されていることを指摘し、中国もこういった思想を吸収して商業主義を確立すべきだと説く。ラッセルの理想国家像は「小国」であり、思想的には法理的ソリダリスト（社会連帯主義）に近く、経済的には国家権力を制限し、機能的国家を目指すギルド社会主義に類似するとも述べた。そして如是閑は、中国の歴史をたどって、「支那全体は一個の国家ではなく、全体的の世界をなしていた」ため、国家主義（ナショナリズム）の伝統はなく、かわりに自由主義の伝統があるのに対して、日本の場合は絶対の支配者が変わらなかったため、反抗の道德が発達しておらず、政治的自由主義が培われる土壌はなかった

と述べ、両国における「国家」に対する態度、そしてナショナリズムの発達過程を照合してみせる。

支那は元来国家主義なるものが歴史的に存在して居たか如何か頗る疑わしい。支那の国家なるものは理想としては孔孟の教えが高調した唐虞三代の国家と云うものがあった。併し是はプラトンの理想国の様な観念的存在を持ったもので、無論歴史以上に発展したものに相違いない。事実として見た時は、支那全体は一個の国家ではなく、全体的の世界をなしていた。其中には沢山の国家があつて、各国家は銘々自主独立の存在を有つていて、丁度今の全世界に各国家が分立している様な具合に存在していた。（中略）だから支那では其中の如何なる国家も天下を統一する先天的の権利を有つては居なかつた。プラトンの理想国家のみが其の権利を有つていた。で、各国家は此の理想国家を実現せしむる事によって、天下を統一する道徳的の是認を求めたのである。だから支那の天下をとつた国家は、希臘に於ける僭王（タイラント）の意味に於て肯定されていた。（中略）タイラントと云うのは暴君と云う意味ではなく、合法的理由なくして政權を掌握し、而も屢々善政を施す所の君主と云う意味であつた。支那の一国家が天下を取る時には皆然う（中略）一方において新しい篡奪者を承認し、是に道徳上の肯定を与えながら、他方には其の篡奪者に反抗する者にも道徳上の肯定を与えた。竟り国家に対する全人民の従属と云う事は、支那に於いては道徳的にあり得べからざる事である⁷⁵。

日本では（中略）絶対の支配者の変らなかつた為反抗の道徳の成り立たなかつたことは国家として仕合には違いないが、然しそれが為政治上の自由主義の発達が非常に阻害されたことは、今日になって見ると困ることなのである。つまり絶対の支配者に対する無条件の服従という伝統的生活を、一時的の支配者（即ち封建諸侯なり今日の政府なり）が利用して政治に対する国民の自由の批判を阻止することになつたのである。而もさういふ欺瞞的の道徳が本質的の道徳であるかの如く教育者等によって鼓吹されているのである⁷⁶。

日本の国民は国家に拝跪して完全な隷従を捧げているのに対して、中国にはかかる国に対する批判的「自由」の伝統があつた。したがつて中国には、ラッセルの自由思想を受け取り得る先天的環境があるが、それをいかに政治的権力と結びつけるのが問題であるとされる。しかし一方で、こうした思想的伝統に基づくナショナリズムの不在は、中国が近代国家としてなかなか組織されず、内戦と植民の問題をも招致する原因でもあり、これもま

た民国知識人が頭を悩ませた一番の問題であった。これに対し如是閑の処方箋は、ナショナリズムの人為的創出ではなく、世界の潮流でもある「経済生活に根柢する小自由国家」⁷⁷への路線である。

支那は、所謂国家思想なるものの建設が目鼻もつかないうちに、此世界的形勢に遭遇して、今では一足飛びに、国家否定とまで進まうとしている。元々碌な国家を持っていないのだから此点では支那は世界の如何なる文明国家よりも、さういう一足飛びをする論理上の可能性を持っている。ラッセルの新国家は、現国家の批判から出立したものである、支那はさういうしそくにぶつかると、今迄建設すべく企図していた新国家なるもの、即ち支那人には理想であって未だ建設されなかった新国家を批判されたことになるので、さういう国家の建設を企図するのは歴史的の順序ではあるが要するに二重手間、それよりは直ちにさういう国家の批判から出立した一層自由な新しき国家の建設に向かわんとするに至るのは当然のことである⁷⁸。

現代の非大国主義的傾向から云えば支那は到底一大国家として纏まる望みはない。(中略) 兎に角事実にて支那の地理上の茫大さは昔の思想が是れを世界と見た程のもので、全体的統一は空想としての外決して完全には成立たない。軍国的強制に因って統一してみたところでは到底一時的の性質を有たものに止まるであろう。其点で支那は当然分立すべき運命にある⁷⁹。

上海と広東が各独立国になり、それが、マンチェスターやリヴァイアプールが各独立国になったのと同じ様に、経済的生活を中心にしたものであるならば、両者の間には平和的な連帯が成立して、戦争と云う事が考えられない事になる。(中略) 即ち今日の国際連盟の思想と似通ったもので、小国の存在を大国が尊重すると云う傾向である⁸⁰。

目下は、国外の軍国国家の侵略とそれに関連して存在する時刻の軍閥政府の存在との為、支那自身の国家思想も未だ旧套を脱するわけには行かないが、然う云う外圍の事情を除き去った後には、彼の国家思想はラッセルの意味の国家思想であり得るのである。其の意味に於いても今日以後支那に成立する小国は、南北とか、軍閥の割拠とかに因るべき戦国時代の小国家であり得ないことになる。上海の様な発達から考えて見て、又支那の都会中心的生活から考えて見ても、ギルド式の小国が出来上がりはしないかと思われる⁸¹。

このように如是閑は、ラッセルをブルジョワ的自由主義の代表者として取り上げ、その政治理論から主に自由主義的側面を抽出することで、日本では実現されなかった貿易・平和立国の「小国主義」的近代化路線を、民国に提案したのであった。しかし、果たしてこの提案は、識字率が10%未満であり、近代工業の基礎も一切なく、内戦と植民地化の渦中にある民国において、実現する可能性はどれほどあったのだろうか。また、主権が不健全な状態で実業あるいは資本主義が発達しても、それは一国の独立に繋がるものなのであるか。我々はこれらの疑問を提出したうえで、ラッセルの民国体験とその民国の改革に対する建議にこの疑問を照らしてみよう。

第3節 資本主義か、共産主義か——ラッセルの中国近代化論

ラッセルは1920年10月12日、上海に到着した。彼は民国思想界の各団体による熱烈な歓迎の中で、まず（江蘇省の）杭州、南京で連日の講演を行った。休憩の間に杭州の西湖を見て「イタリアのそれをすらしのぐ、古代文明の美しさをそなえていた」⁸²と感嘆したという。続いて南京から揚子江に沿って遡り、沿岸の（湖北省の）漢口、（湖南省の）長沙まで赴いて大陸奥地での実地考察を行った。

そこ（杭州、筆者注）から私たちは南京に行き、南京から船で漢口（Hankow）に行った。揚子江上の日々は、ヴォルガ河での身の毛のよだつ日々とまさしく正反対の楽しいものであった。漢口から長沙（Changsha）に行った。そこではある教育会議が開かれていた⁸³。

意識的にか無意識的にかラッセルは揚子江での旅を、ヴォルガ河のそれと対比している。それは、まさに彼は西洋文明自体に絶望を覚えた場所であった。果たして古い中国には、彼が期待しているものがあるのでしょうか。10月27日にラッセル一行は、長沙から鉄道で北京に向かった。その後、翌1921年7月11日に天津より離れるまでは、彼はほとんどの時間を北京で過ごした。民国初年北京の雰囲気について、ラッセルと同行したドラ・ブラックの回想には次ようにある。

当時の北京は、各国の人が雑居して奇妙なコスモポリタンの社会を作っていた。もちろん各国政府の大公使館があり、そのすべてが中国をより多く支配するべく各種の策謀をめぐらしていた。事業家たちはあからさまに搾取に懸命だった。そして牧師団がいたが、その中でアメリカだけが教育や医療に熱心で、美しい緑色のタイルの屋根の

中国風建築の北京医科大学や清華大学を郊外に設立した。時には皇帝の家庭教師のジョンストン氏に会った。人は彼のことを「古風な中国のご用人」と呼んでいたが、彼はこの国を心から愛するようになり、そこを離れようなどとは決して思ってもいなかった⁸⁴。

ラッセルは北京大学で哲学について講義し、「精神の分析 (the analysis of mind)」を週に一度英語で、セミナーのクラスに講義をし、また隔週に一回通訳の中国語を通して講義をしていた。日曜には、技術哲学に対する理解を深めるための一般コースを持っていた。新年度からは、社会哲学についての講義をシリーズで始めることになっていた⁸⁵。同行したドラも北京女子高等師範学校で、「女子学生に女性の教育、専門家への道、社会主義、結婚などについて話し」ていた⁸⁶。最初に、「北京での仕事は興味あるものであったし、北京は想像できないくらい美しかった」⁸⁷と感じたというラッセルにとって、「中国は、動乱の中にあったという事実にもかかわらず、ヨーロッパと比べると、哲学者のような「平静さ」に満たされている国のようには思われた」⁸⁸。彼は工業社会以前の人々の生活に触れ、工業体制を導入した西洋の現代生活に反映されている性急と焦燥を反省しつつ、「中国は芸術家の国」⁸⁹であることを感慨深く書いている。

人間が美を求めてほとんど無意識に払う努力をも芸術と言う。それは、ロシアの農民や中国の苦力の間に見出せるもので、民謡を創作するあの衝動である。清教徒時代以前にわれわれの間に存在していたし、今も農家の庭に残っているあの衝動を私は指して言うのである。産業主義とわれわれ大部分の人間の生活に与える強い圧迫とにより、われわれは人間一般に共通する最も重要な幸福を奪われたが、その幸福の一つが本能的な幸福すなわち生きる喜びの中に在る。その喜びが中国に広く存在している⁹⁰。

未来の不幸に対し四六時中用心しているのは真に賢いのだろうか。将来のある時期に起こるかもしれない不幸を考えて、現在のあらゆる楽しみを失うことが果たして思慮深いことだろうか。ゆったりと暮らす暇も与えられないような豪邸を建てることで一生を過ごしてよいものだろうか。中国人はこれらの質問に消極的にしか答えないし、だから貧困、病気と無政府状態に耐えていかなければならない。しかしこれらの悪事の補償に中国人は、工業国家の国民が持ち合わせないような、文化的嗜みを享受し、余暇と欢笑を楽しみ、陽光を浴びて哲学的談話を楽しむ能力を持っている。あらゆる階級の中国人は、私の知っている他のどの民族よりも大笑いして楽しむのが好きである。あらゆることに楽しさを発見し、論争も常に一つの冗談で和らげられる⁹¹。

しかしこれらまだ農業文明のなかに生を営んでいる民衆たちと違って、ラッセルが教職にあった北京大学は、すでに「近代」に覚醒しかかっていた。「その雰囲気は、大きな覚醒の希望をもたせてくれる起電物体ともいふべきものであった。何世紀にもわたる眠りから醒めて中国はいまや近代世界を知り始めていた」⁹²。そしてまもなく、ラッセルはゼミナールの学生たちの政治的傾向を発見した。「たった一人を除いて、彼らのことごとくボルシェヴィキであった。その一人というのは皇帝の甥であった。彼らは、一人また一人とつぎつぎに中国を抜け出して、よくモスクーに潜入した連中であつた」⁹³。そして「私たちの知る限りでは、学生たちはシベリア経由で出たり入ったりしていた。当時はまだ共産党は結成されてなく、それが発足したのは一年かも少し立ってからだった。さらに奇妙なことを知らされたのは、モスクワとの連絡がひどく困難だ、ということで、オムスクまたはトムスクのいずれを通るにしても資金を運ぶ問題があり、誰が責任をもつにしても、みつからないように裏から行かなくてはならなかつた」⁹⁴。このような雰囲気の中で、北京大学の学生だけに限らず、その訪問客も常に、専門度の高い哲学領域の諸問題よりは、中国の前途についてラッセルの意見を求めることに興味を示した。「学生たちの中には、哲学に対して純粹の興味を示し、それを追求する能力にすぐれた者もいたが、全般的に自分で思考しようとして思いを巡らすよりも、ただ知識を吸収しようとする、とパーティーは不満を漏らしていた」⁹⁵し、「彼らが彼（ラッセル、筆者注）に望んでいたのは、政治的思考と忠告であり、私たちが哲学的見地から宗教についての意見をのべると、彼らは喜んで聴講した」⁹⁶。このような要求に対してラッセルは、基礎的な知識の欠乏と、複雑な政治経済問題は自力で解決するのが最も直接で簡単であるという立場、さらには自分の意見が各派閥の宣伝用にされないために、「当面している直接の困難な政治問題に関して助言を求めて来た中国人に助言を与えることをいつも断わっていた」⁹⁷。また10月下旬長沙で講演する間の、ラッセルの通訳を担当した楊端六（1885-1966、経済学者）の証言からも同じことを確認できる。

先日わたくしは、中国に来てからの感想についてラッセル先生に訪ねた。彼は、中国に来てまだ時間がそんなに立っていないし、この間は毎日講演か旅行かで費やされて、中国の実際状況を研究する暇はなかつたと答えた。また接触を持ったの人々はすべて教育を受けた者で、全中国人のごく一部に過ぎないため、中国の全体状況については全く把握していなく、判断できるほどの知識を持っていないと。あえて議論しようとしても、1、2ヶ月の経験では事実誤判が生じやすいため、せめて何ヶ月の定住がないと、とても中国の現実について論断できないと仰った。わたくしはこう申し上げた。

現在中国の社会状況は刻々変動し続けているので、はじめて来た外国人はもとよりわれわれ自身も、今日言った話は明日になると信じられなくなる。やや恒久的性質を帯びる断案が欲しいけど、ほとんど無理である。しかしわれわれはラッセルに、いまずぐ中国全体状況についての感想を求めている。あまりにも厳しい要求である。何ヶ月を待たないとだめである⁹⁸。

しかしラッセルが無考察の論断を常に控えていることを分かっている、国の前途を憂慮している場合はやはり抑えきれず政経問題をぶつけずにはいられなかった。

ラッセルが中国公学に来た時、わたくしの当面第一問として、中国が今資本主義を排斥する風潮があることについて尋ねた。彼は、資本主義は確かに良くない。しかし今の中国にとって最も緊急なのはやはり実業の発達であると答えた。実業を発達するのに三つの方法しかない。1、資本家がやる。近世欧米各国のような現象である。2、国家がやる。国家社会主義の人々——マルクスの弟子たちが主張する方法である。3、労働階級自身が主導でやる。例えば今日イギリスのギルド社会主義のようなやり方である。国家組織はあれほど腐敗で、労働階級の組織は同じく幼稚な状態にある中国の現状から論理的に言えば、資本家の手でしか頼れない⁹⁹。

上述の史料から、当時の民国、あるいは少なくともその思想界では、「反資本主義」の声が極めて大きかったことは分かる。そしてラッセルが中国に来た当初の判断では、民国の実際状況からは、外国の侵略を防ぐためには先に実業を発達すべきであり、そして資本主義の道が論理上、最も取りやすい方法であると認識していることもうかがえる。

中国人たちから向けられた真正面からの政治・経済問題に対する質問に対し、見解を示すことを避けていたラッセルだが、1920年12月3日での講演「Industry in undeveloped countries (未開国の工業)」のなかで、ようやく自らの意見を表明した。中国だけに限らず、近代化問題自体は、いかに工業を発達し、同時にその危害を最小限に限定するかという事に緊密に関わっていると見るラッセルは、以下のように建議する。

本来、工業的後進国での工業開発の必要はなかったが、ほかの工業国の野心と武力の脅威で開発せざるを得ない境地へ迫られる。外国人の手によっての工業開発は、抑圧は免れないため、自国人で開発すべきという論理になるが、ただ自国で工業開発するには、外国干渉を防ぐために（強力な陸海軍を必要とするため、筆者注）軍国主義に陥る危険になる。こうなれば共産主義を取ったほうが手っ取り早い。このほうが、工

業主義におけるいくつかの資本主義期の害悪を避けることもできるし、所要の情熱もわりと簡単に喚起されうるからである。国家的共産主義も結局、平和を保証することはできないが、資本主義よりは、貿易と原料を徐々に、国際的管理下に置かれるようになることが期待できる。これで戦争の休止は見えるものとなる。以上の理由からは、ロシアの選んだ方法は、自らを莫大な苦痛をもたらすが、その現実条件を考えれば、工業の発展に最良の方法だということは認めざるを得ない。それでは中国はロシアを模倣することはできるのか¹⁰⁰。

今中国人は実業の発達を願いながらも開発途上国 (partially developed countries) での害毒を避けようとする。わたしは、どちらかといえば、中国はこれらの害毒を避けることはできるのかと非常に疑っている。ロシアは共産主義を実施しているにも関わらず、これらの害毒と対面しなければならないが、長い労働時間、低い賃金、児童労働などがそれである。それは部分的に、工業制度の未熟に由来しているが、より多くは資本主義諸国の敵意から来ている。これらの危険と対面する際には、中国はロシアより弱いし、また今のところではとりわけアメリカの知力的、工業的援助に頼らなければならない状況にある。中国は、ロシアに頼る以外、単独で共産主義に成功するために、十分な教育、情熱と工業開発の経験があるとは思えない。しかし長期にロシアに頼ることは、いかなる外国に頼ることと同じようなデメリットがあるし、また諸列強の恨みという付き物も付いてくる。これらの議論は時間の経つにつれて軽減するかもしれないが、目下で言えば、もしわたくしが中国の工業開発権を握っているならば、ロシアよりはアメリカを選ぶ。次にイギリスを頼る。わたくしはまた、いかなる外国にも頼りすぎることできるだけ避けて、中国の工業の漸次なる自国回帰を狙う。と同時に、共産主義の可能性を、国際的状况に合わせて念頭に置くことにする¹⁰¹。

この時期のラッセルはやはり、一つの主義主張を押し付けるより、各方法の長短を示し、そしてそれを実践した際に起こりうる、将来のあらゆる可能性について語るという戦略をとっている。しかし「次第に私たちふたりは中国が外国の資本主義を徹底的に打破する唯一の道は、共産主義体制をとることだと確認するようになった」¹⁰²。翌1921年春、北京の厳寒に耐えられず重症肺炎を患い、瀕死ともなったラッセルは三ヶ月ほどの闘病でようやく少し回復した。くわえてドラも妊娠していたため、二人は中国を離れ、母国に戻ることを決める。7月6日の送別会の最終講演「中国到自由之路」のなかで、彼は文明保存の目的から論を敷衍し、ついに「ロシア式の手段」を中国に贈呈した。しかも「これらの意見は、最初に中国の土地に踏み込んだ時点で既に所持したものではなく、諸君との接触で徐々に

形作っていたものである」¹⁰³と、ラッセルは訪中による自らの認識形成と変化を語った。

そこでラッセルはまず、西欧文明に生まれた自分から、異質の中国文明の進路について建言するのは極めて僭越なことであり、「わたくしは常に「社会改造」を自任とする中国人に、自分の方法を規画し、完全に外国人の智識に依頼しないことを勧めている」¹⁰⁴としつつ、これまでに受けた好意を報いるためとして次のように論じる。資本主義的工業主義に基づいている現在の西欧文明も、儒教と仏教を根底にする中国の伝統的文明の双方と異なる、新たな文明類型の創造を、中国に期待している、と。しかし内外的混沌にある中国が、いかに沈淪状態から復興すればよいのか。ラッセルによれば、根本的にそれは、「教育」に頼るしかないのだが、その前提となる安定した政治と実業の発達、現段階の中国にとって長い年月の努力が必要となる。だが植民地化されつつある情勢の中では、富の分配をなし得る権力が中国人の手中にないため、「経済的問題から着手するのが無駄であり、政治の問題を先に解決しなければならない」¹⁰⁵と、先に資本主義を発展させるような可能性は否定されることとなる。

中国の政治改革は、かなりの年を経たない限り、西洋のモデル、すなわちデモクラシーの体制を模倣採用することができない。デモクラシーは、国民の読書識字能力と一定の政治的知識を前提にしている。中国の国民は、公共的幸福を図るような政府が成立してからの一世代を待たないと、これらの条件を満たすことはできない。われわれは、ロシア共産党の専制のような路程を経なければならないと見るが、このような方法でしか、人民の教育が普及されないし、資本主義的色彩が帯びない実業の発達が成就されない。ロシアのボルシェヴィキは、開拓者であるため、間違いだらけのことをしでかしたが、とくにその農民への反対手段は甚だしいものであった。同じ道路を行くならば、それを前車の鑑としては、極めて有益だと思う。（中略）人民が教育を受けていない、実業の発達方法も通達していないロシアと中国のようなところでは、ロシア式の手段は、最も適宜で可能な方法である¹⁰⁶。

現行の組織原理の中から、ラッセルはほかの方法の可能性を否定し、国家社会主義の方法が最も早く工業開発を実現する道だと説く。

非資本主義的実業の組織について、多くの学派から多くの方法が提供されている。アナキストコミニズムは、古代のポーランドと今の国際連盟で実践されているが、全員一致でないと決断ができない。サンジカリズムは、貿易連盟の同盟組織の一種である。またロシアが採った国家社会主義も実業開発方法の一種である。そしてギルド社

会主義は、サンジカリズムと国家社会主義の混合物である。アナキストコミュニズム、サンジカリズムおよびギルド社会主義は、いずれも発達した工業社会およびそのセツトとなる人々の習性を前提にしているものであり、後進国が社会主義へ向かう第一歩として不向きである。したがってわたくしは、工業の初期開発は資本主義的か国家社会主義的かの方法でしかないと思う。仮に「中国はいかにすれば資本主義を避けて実業を発達すべきなのか」と質問されれば、わたくしは必ず、「最初の段階は国家社会主義でしかない」と答える¹⁰⁷。

ただしラッセルは、彼が最も懸念していた国家社会主義・ボルシェヴィズムにおける最大の欠陥、すなわち権力と倫理の問題について、警告を忘れていない。

共産主義者は常に経済要素が社会生活において唯一大事な要素であると主張するが、これは完全な妄念である。倫理的原動力は少なくとも経済の地位と同じであると信じている。(中略) ロシアのボルシェヴィキが勝利したあとに、物質的誘惑に抵抗できているが、権力延長の誘惑に屈服しているようである。デモクラシー反対とプロレタリア独裁についてすべての言説に隠されているのは、彼らの本質的な権力愛である¹⁰⁸。

演説の最後にラッセルは、中国文明の再建だけではなく、新たな文明の価値を西洋にも輸出し、西洋人の観念にある工業と経済的要素の過大視による、金銭物質への崇拜という疎外病を治す希望を、未来の中国、そしてそれを建設する「ヤングチャイナ(若い中国青年)」たちに託した。

西洋において、工業と生活の経済面は過度に重視され、存在の根本目的(ends of existence)でさえあると考えられている。これらは目的ではなく、良い生活への手段に過ぎない。われわれが目指している共同体はこのようなものであるはずだ。そこには工業は人間の主人ではなく召使いであり、充足と余暇が全ての人に享受されている。そこでの経済は支配を目的としない。そこでの余暇は過剰な商品生産に犠牲されるのではなく、芸術、科学、友情のために使われる。中国はこの理想を実現するためのたくさんの長所を持っている。とりわけあなたたちの芸術的品位と上品な嗜みが、次なる発展段階において世界を導引していく希望をわれわれに与えてくれた。また、このような内的平穩(inner calm)をわれわれ落ち着きのない、狂死に近い西洋人に送り返すことを希望している¹⁰⁹。

ロシアへの考察を通して経験した西洋の近代文明への幻滅からはじまった中国滞在は、不確かながらある種の、新たな希望の曙光をラッセルは見えたようである。国家として混乱し、無秩序のどん底にある民国から、ひ弱でありながらも、確実な希望の覚醒の脈動を捉えていた哲人は、しかしそれに期待しながらも不安であった。希望の苗はあまりにも弱々しいもので、それ自身の生存の意志に頼るしかなかったからである。

異なる文明環境に浸る体験は、西欧的文明系統しか知らない哲人に希望と「内的平穩」を提供した。かかる心境の変化と病後の弱体を抱えてラッセルは、7月12日天津港から日本へ出発した。

おわりに

本章においては、ラッセルの中・日訪問前後の、両国における関連言論・出版物への書誌的研究を通して、両国のラッセルの受容過程の異同を比較したうえで、ラッセルが中国滞在中を通して、その心境と理論の変化を検討してみました。かかる受容側における書誌追跡作業を通して、両国におけるラッセルの受容方式の異同を比較し、両国言論界・知識界が共通する関心のもとでラッセルを受容した面がみられる一方、当該期各国の「近代化」段階の差違から、それぞれの現実問題に応じた形での受容も観察することができた。

当該期の民国思想界は啓蒙的性質を多く帯びた「新文化運動」後期の時点にあり、ラッセルの「分析哲学」・論理的方法論はまず、「科学」パラダイムの全面推進と一緒に受け入れられ、この支流はのち30、40年代以降、清華大学を中心とした、中国現代哲学の形成¹¹⁰と密接な関係をなしていくといえよう。一方で内外戦争の渦中における近代主権国家の創立という政治的情勢にあって、当時盛んであった新たな国家像をめぐる知識人間の論戦状況という文脈からもラッセルの政治理論は受容された。

時期を同じくして「大正デモクラシー」期にある日本の思想界では、権力分散・民選政治の樹立を目的とする政治的文脈のなかでラッセルが紹介されたと見ることができよう。当該期「多元的国家論」の支脈になるギルド社会主義、ホブハウス理論の紹介という形で、ラッセルの政治論は流入した。その中で、思想家・ジャーナリストの長谷川如是閑はラッセルの理論を敷衍しつつ、そこから自らの中国改革論を打ち出した点で、極めて特殊な存在であった。しかしその理論は、資本主義体制の導入と発達を前提としたものであったため、未だ主権すらない民国の実際状況に適しているものとは言えなかった。これはむしろ如是閑が日本の近代化路線に求めている自らの願望を、その中国改革論に託し、隠喩したものであったといえよう。

これと対照的に、実際大陸を訪れたラッセルは、中国の近代化に対して、最初の持論で

あった資本主義体制の優先創立から、中国を離れる直前において示した「共産主義体制論」へと、転向していったことが確認できる。また彼自身が大戦以来抱えている根本的問題意識、すなわち世界混乱の原因や、また工業主義に基づく近代西洋文明の反省と再生に対して、ロシアと中国という二つの農業文明の残骸を見ることで一つの答えを見つけたといえよう。この答えは、日本を経験したことでさらに確固たるものへと発展し、ついに1923年の著述『The Prospects of Industrial Civilization (産業文明の前途)』¹¹¹へと結晶していく。

吾々はかくて現代の世界に四つの大なる政治的勢力を有っている。即ち産業主義の二形式としての資本主義と社会主義、および国民主義の二形式としての帝国主義と民族自決主義とがそれである。世界に於ける混乱は、これらの勢力と勢力、即ち一方は資本主義と帝国主義、他方は社会主義と民族自決主義の間に大規模の闘争の形式を取っている¹¹²。

人間の生存競争と闘争本能を煽動するイデオロギーの対立に元凶を見出すラッセルは、ひとりひとりの生存価値、「内的平穩」の樹立と、それを保護する制度の完備を終生にわたって目指したのである。

¹ 李沢厚『中国現代思想史論』（北京）東方出版社、1987、7頁。

² 「いわゆる「科学言説共同体」とは、このような社会集団である。彼らは一般の日常言語と異なる科学的言語を使い、交流し、さらに言説の共同体を形成する。この言説共同体は最初に、科学団体と科学刊行物を中心としていたが、その外縁はいよいよ拡散し、印刷文化、教育体制とほかの伝播ネットワークを通して、全社会へと影響していく。最終的には科学言語と日常言語の境界は互いに融合した。（中略）科学言語共同体はその言説的实践および社会的実践を通して徐々に、体系的科学知識の系譜「天理宇宙観」に取って代わるようになり、反伝統的文化実践に自然観の前提を提供していく」（汪暉『中国現代思想的興起』（北京）三聯書店、2004、1123頁）。

³ 同上、1125頁。

⁴ 20世紀初頭にアメリカでは、W. モンタージュ、R・ペリー、E・ホルト、W・ピトキン、E・スポールディング、W・マービンの共著『6人の实在論者のプログラムと第一の政策』（1910）で顕在化し、『新实在論』（1912）でその名を得た運動で、イギリスの T・ヌウン、B・ラッセル、G・ムーアらの動きと呼応し、両グループまた個人間の考えの違いをこえて、観念論に反対し真正な哲学を形成するとともに科学との新たな結合を試みた。その考えは、1、ものの存在は、知られるということから独立している。2、また、もの間に成立する関係も、客観的で人の意識からは独立している。3、ものは心的な模写を通して間接的に知られるというよりは、直観的直接的に知られることを主張するが、客観的に外在するものを人間がいかにして認識するのか、また3が主張されるのであれば、どうして誤謬や幻想が生

じるのかを満足に説明できず、1914年頃A.ロウエジョイらの「批判的実在論」に取って代られた（「新実在論」、『ブリタニカ国際大百科事典 小項目版 2017』、ロゴヴィスタ、2017）。

⁵ 1920年代イギリスのケンブリッジ大学を中心に行った論理実証主義運動。G.ムーアやB.ラッセルを中心として起り、L・ウィトゲンシュタインなどがこの学派に属する。この学派は同時代の論理実証主義諸運動（ウィーン学派、ベルリン学派、ウプサラ学派）と、反形而上学の面で共通であるが、科学と常識を尊重するイギリス哲学の伝統を受継いでいる点では他派と主張を異にする。それゆえ新実在論的分析学派とも呼ばれる。この派の主張は、哲学の第一任務を知識の表現形態である言語の論理的分析による正確さに求め、命題の有意義性と経験的検証可能性とを結びつけることにあり、他者、外界の存在などの問題は常識によるべきだとみなした（「ケンブリッジ学派」、同上）。

⁶ 徐彦之訳「哲学問題」『新潮』1(4)、1919.4、張東蓀「羅塞爾的「政治理想」（ラッセルの政治理想）」『解放と改造』1、2号合巻、1919.9、張崧年「志羅素（ラッセルについて）」『晨報』副刊、1919.12、張崧年「羅素（ラッセル）」『学灯』1919.12、など。

⁷ ほかの二人は陳独秀と李大釗である。

⁸ 舒衡哲、李紹明訳『張申府訪談録』北京図書館出版社、2001、145頁。

⁹ 同上、146頁。

¹⁰ 同上、153頁。

¹¹ 張崧年「羅素の哲学研究法（ラッセルの哲学研究法）」『東方雑誌』17-20。

¹² J・デューイ「現代的三個哲學家」（初出『晨報』1920年3月8日、『北京大学日刊』1920年3月11日から4月30日において再録）『杜威五大講演（デューイの五つの講演）』胡適訳、安徽教育出版社、2000、228-265頁。ちなみにこの講演は、彼の弟子で当時北京大学英文学教授を務めた胡適によるものである。

¹³ 同上、252-253頁。

¹⁴ 同上、258頁。

¹⁵ 同上、264頁。

¹⁶ 同上、256頁。

¹⁷ 福田徳三「社会党鎮圧法（Ausnahmegesetz）の終始」（『国民経済雑誌』2(5)、1907.5、23-32頁；2(7)、1907.7、1-12頁）（金沢幾子編『福田徳三書誌』日本経済評論社、2011、413頁）。

¹⁸ 『内外経済学名著 第一冊 経済学純理』ジェヴォンズ著、小泉信三訳、同文館、1913.4、『内外経済学名著 第二冊 国民経済学』フックス著、坂西由蔵訳、同上、1914.4、『内外経済学名著 第三冊 経済学原論』リーフマン著、宮田喜代蔵訳、同上、『内外経済学名著 第四冊 富の理論の数学的原理に関する研究』クールノー著、中山伊知郎訳、1913.11、『内外経済学名著 第五冊 消費組合論』ディード著、久我貞三郎訳、同上、1915.3、『内外経済学名著 第五冊 英国経済学史：十六・十七両世紀に於ける』ロッシヤー著、杉本栄一訳、同上。（同上、441-442頁）。

¹⁹ 「私は、ジェヴォンズの価値理論をかりて、根本的な反対意見を唱えることもできたであろう。そうしなかったのは、マルクスの見解には、外からの助けをかりなくても自分から崩れてしまうような内的矛盾があったからである」（バートランド・ラッセル、河合秀和訳『ドイツ社会主義』、みすず書房、1990、27頁）。

²⁰ 福田徳三「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ（一から八）」『大阪毎日新聞』、1919年5月27日から6月3日付。

²¹ 前掲福田徳三「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ（四）」同上、1919年5月30日付。

²² 前掲福田徳三「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ（七）」同上、1919年6月2日付。

-
- ²³ 同上。
- ²⁴ 同上。
- ²⁵ 同上。
- ²⁶ 同上。
- ²⁷ 前掲福田徳三「虚偽のデモクラシーより真正のデモクラシーへ（八）」同上、1919年6月3日付。
- ²⁸ 土田杏村「ラッセル氏の新著たる神秘主義と論理学について」『文化運動』100、1918. 11。
- ²⁹ 土田杏村「マルクス、ラッセル及び文化」『文化』1（2）、1920. 2。
- ³⁰ 土田杏村訳「自由人の崇拜（ラッセル）」「哲学の価値（ラッセル）」『文化』1（4）、1920. 3。
- ³¹ 土田杏村「ラッセルの思想の根本的立場（上）——ラッセル研究の第一」『文化』1（4）、1920. 3。
- ³² 小泉信三「学問芸術と社会主義」『三田学会雑誌』11、1919. 11。
- ³³ 室伏高信『室伏高信著作集（2） 社会主義批評』批評社、1926、1頁。
- ³⁴ 田中真人「ギルド社会主義と中島重」『キリスト教社会問題研究』30、1982、400頁。
- ³⁵ 同上。
- ³⁶ 小泉信三「集産主義、サンヂカリズムとギルド・ソシャリズム」（『国家学会雑誌』大正6年5、6月所載）小泉信三『社会問題研究』岩波書店、1925、328頁。
- ³⁷ 室伏高信『ギルド社会主義第1巻 創生及建設』批評社、1920. 7。
- ³⁸ 前掲室伏高信『室伏高信著作集（2）』、2頁。
- ³⁹ 同上、47頁。
- ⁴⁰ 室伏高信「ラッセル評伝」『改造』3（1）、1921. 1、133-134頁。
- ⁴¹ 『社会改造の理想と実際』宮島信三郎、浮田和民共訳、大日本文明協会、1920. 12。これは、『Political Ideals』と『Roads to Freedom』という二冊の日本語訳である。
- ⁴² 松本悟朗訳『ラッセル論集』、日本評論社、1921. 2。こちらは『Justice in War Time』『Principles of Social Reconstruction』『Political Ideals』『Roads to Freedom』の日本語訳になる。
- ⁴³ 稲毛詛風訳『新哲学綱領』、天佑社、1921. 1。『哲学の問題』中込本治郎訳、三協出版社、1924. 11。
- ⁴⁴ 松本悟朗訳『ラッセル叢書』、日本評論社、1921. 7-11。7冊に分けられている「叢書」となっているが、『Mysticism and Logic』の全訳である。
- ⁴⁵ 宮本鐵之助訳『数理哲学概論』、改造社、1922. 6。
- ⁴⁶ 松本悟朗訳『戦時と正義』、日本評論社出版部、1920. 5、前掲『ラッセル論集』所収。
- ⁴⁷ 時国理一訳『正義と闘争』、日本評論社、1920. 5。
- ⁴⁸ 1、高橋五郎訳『社会改造の原理』、文志堂、1919. 11、2、松本悟朗訳『社会改造の原理』、日本評論社出版部、1919. 12、3、松本悟朗訳『社会改造の原理』、前掲『ラッセル論集』所収、4、室伏高信訳『社会改造の原理』、冬夏社、1921. 8。
- ⁴⁹ 1、松本悟朗訳『政治の理想』、日本評論社、1920. 2、2、宮島信三郎・他訳『政治の理想』、前掲『社会改造の理想と実際』所収、3、『政治の理想』松本悟朗・他訳、前掲『ラッセル論集』所収。
- ⁵⁰ 1. 坂橋卓一、時国理一、松本悟朗訳『自由への道』、日本評論社、1920. 1、2、宮島信三郎・訳『自由への道』、前掲『社会改造の理想と実際』所収、3、松本悟朗訳『自由への道』、前掲『ラッセル論集』所収。
- ⁵¹ 前田河広一郎訳『ポリシェビーキの理論と実際』、三田書房、1921. 7。
- ⁵² 長谷川如是閑「バートランド・ラッセルのこと」、江上照彦訳『権威と個人』社会思想研究会出版部、1951年、227頁。
- ⁵³ 「羅素的社會思想與中國（日本長谷川如是閑著）」劉叔琴訳、商務印書館『東方雑誌』

23 (13)、1926.7、61-72 頁。

⁵⁴ 長谷川如是閑「ラッセルの社会思想と支那」、『長谷川如是閑集』第7巻、岩波書店、1990、209 頁。

⁵⁵ 同上。

⁵⁶ 同上、210 頁。

⁵⁷ 『大阪朝日新聞』は日露戦争講和反対運動に際し、22 日間の発行停止処分を受けるなど幾多の筆禍事件を蒙ったが、もっとも有名なのは、大正七年（1918）米騒動さなかのいわゆる「白虹事件」である。8月26日付夕刊は寺内内閣攻撃の関西記者大会の記事（大西利夫執筆）を掲げたが、その中に「白虹日を貫けり」の一句が引用されてあった。『史記』など中国古書に君主に対する反乱・暗殺の予兆として使用されているこの句は、かねて『朝日新聞』の寺内内閣攻撃に手を焼いている官憲に弾圧の口実を与え、『大阪朝日新聞』は新聞紙法違反に問われ、担当検事は永久発行禁止論求を予告した。黒竜会系の右翼も朝日攻撃のキャンペーンを展開し、社長村山竜平を白昼石燈籠に縛るという事件も9月28日に発生した。10月14日社長は辞任、翌日編集局長鳥居素川は退社し、長谷川如是閑・花田大五郎・丸山幹治・大山郁夫ら大戦中朝日の民本主義的言論を支えた論説陣もこれに殉じ、『東京朝日新聞』でも編集局長松山忠二郎ら十三名が辞任した（「白虹事件」、『国史大辞典』、吉川弘文館、1979-1997）。

⁵⁸ 長谷川如是閑『現代国家批判』弘文堂書房、1921。目次は以下の通り。

自序

第1編 国家

第1章 闘争本能と国家の発生／第2章 生活の現実と超国家の死滅／第3章 国家意識の社会化／第4章 国家的万能力の進化／第5章 国家悪と産業悪／第6章 国家の進化と愛国的精神／第7章 国家と真理との交戦状態／第8章 自国本位主義の解剖

第2編 政治

第1章 実際政治に於ける自由主義と干渉主義／第2章 政治思想としての「無政府」と「独裁」／第3章 政党政治の完成と自壊作用／第4章 政党政治の本質的欠陥／第5章 議会政治の存在理由と崩壊／第6章 国家の商人化 国家の商人化と政治否定／第7章 我が現代政治に於ける世界的傾向

付録 (1) 形而上学的国家学説の批判／(2) 社会連帯の国家法理／(3) 主権説の成立と其崩壊

⁵⁹ 「国家意識の社会化」『我等』1 (4)、「官吏の道徳的倒錯」同誌1 (8)、「社会的欠陥（新聞紙休刊問題）」、「戦後の目的」同誌1 (11)、「政府の代表と労働者の代表」同誌1 (12)、「国家と成金」同誌1 (13)、以上1919年。「ヘーゲル派の自由意志説と国家——哲学的国家観に対するホブハウス教授の批判を紹介す」同誌2 (1)、「森戸助教授問題と森戸君の態度」、「絶対国家説に対する社会学的批判——ホブハウス教授の絶対国家説の批判」同誌2 (2)、「国家と真理の交戦状態」同誌2 (3)、「生活の現実と超国家の破滅」同誌2 (6)、「国家的万能力の不合理性」同誌2 (7)、「国家悪と産業悪」同誌2 (8)、「「無政府」と「独裁」——政治思想の両極に対する断片的考察」2 (10)、「妥協と圧迫の一年・反動としての国家主義」同誌2 (12)、以上1920年。

⁶⁰ 長谷川如是閑「ヘーゲル派の自由意志説と国家——哲学的国家観に対するホブハウス教授の批判を紹介す」『我等』2 (1)、1920、同「絶対国家説に対する社会学的批判——ホブハウス教授の絶対国家説の批判」『我等』2 (2)、1920。

⁶¹ イギリス理想主義(オックスフォード学派)(British Idealism, Oxford School)は、19世紀から20世紀にかけてのイギリスにおいて、古代ギリシャ哲学やドイツ観念論哲学などを援用しながら、経験論、原子論的個人主義、そして功利主義といったイギリスの知的伝統を批判、修正した思想運動と言われている。そしてこの思想運動の創始者であるトマス・

ヒル・グリーン(Thomas Hill Green、1836-1882)をその前期の代表者とすれば、バーナード・ボザンケ(Bernard Bosanquet、1848-1923)は、後期の代表者と目される思想家である(芝田秀幹「バーナード・ボザンケの生涯と著作」『宇部工業高等専門学校研究報告』47、2001、149頁)。

⁶² The Metaphysical Theory of the State, by Leonard T Hobhouse, London:George Allen & Unwin, 1918.

⁶³ 前掲長谷川如是閑「絶対国家説に対する社会学的批判——ホブハウス教授の絶対国家説の批判」、26頁。

⁶⁴ 同上。

⁶⁵ 同上、28頁。

⁶⁶ 前掲長谷川如是閑「バートランド・ラッセルのこと」、227頁。

⁶⁷ 同上、50頁。

⁶⁸ 飯田泰三「吉野作造——ナショナルデモクラットと「社会の発見」」(『批判精神の航跡』筑摩書房、1997、初出は1980年)、猪原透「「社会の発見」再考——福田徳三と左右田喜一郎」『立命館大学人文科学研究紀要』96、2011、25頁。

⁶⁹ 多元的国家論(the theory of pluralistic state)は、厳密に言えば、イギリスの規範的多元主義、アメリカの分析的多元主義ならびにフランスの社会連帯主義の三つの系譜に区別できる。この呼称自体は英国のH.ラスキに由来する。彼はそれを国家一元論(the monistic theory of the state)の対極概念として用いた。国家一元論とは、ボーダン、ホブス、ルソー、ヘーゲル等によって代表される見解で、主権の諸属性(最高、絶対、不可分)を重視することによって、国家の国内他集団に対する優越性を強調する国家観を指す。ラスキはこのような一元論を批判すべく彼の多元的国家論を展開したのであった。多元的国家論者としては、ラスキ、フィッギス、バーカー、コールが代表格であり、周辺圏にはホブハウス、デュルケム、デュギーがいる。多元的国家論については、主に大塚桂「日本における多元的国家論の受容過程」(『駒澤大学法學部研究紀要』57、1999、31-52頁)、高山巖「多元的国家論による主権批判」(『埼玉大学紀要』45(1)、2009、83-88頁)より参照。

⁷⁰ 1920年出版された亀島勝美、岡上守道訳、コール『産業自治とギルド社会主義』は、日本における多元的国家論の受容の嚆矢とされている。前掲大塚桂「日本における多元的国家論の受容過程」、37頁。

⁷¹ 同上。

⁷² 高田保馬『社会学概論』(岩波書店、1921)、中島重『多元的国家論』(内外出版、1921)、大山郁夫『現代日本の政治過程』(改造社、1925)、蟬山政道『政治学の任務と対象』(巖松堂書店、1925)。前掲大塚桂「日本における多元的国家論の受容過程」、37-38頁。

⁷³ 前掲長谷川如是閑「ラッセルの社会思想と支那」、211-212頁。

⁷⁴ 同上、213頁。

⁷⁵ 同上、215-216頁。

⁷⁶ 同上、216頁。

⁷⁷ 同上、223頁。

⁷⁸ 同上、221頁。

⁷⁹ 同上、224頁。

⁸⁰ 同上、225-226頁。

⁸¹ 同上、226-227頁。

⁸² 日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、理想社、1971、164頁。

⁸³ 同上。

⁸⁴ ドラ・ラッセル、山内碧訳『タマリスクの木 ドラ・ラッセル自叙伝』、リプロポート、1984、189頁。

-
- ⁸⁵ 同上、199-200 頁。
- ⁸⁶ 北京においてラッセルおよびドラの講義時間・内容について、付表 1 をご参照ください。
- ⁸⁷ 前掲ドラ・ラッセル『タマリスクの木』、165 頁。
- ⁸⁸ 同上、168 頁。
- ⁸⁹ バートランド・ラッセル、牧野力訳『中国の問題』、理想社、1970、14 頁。
- ⁹⁰ 同上、16 頁。
- ⁹¹ 同上、226 頁。
- ⁹² 前掲日高一輝訳『ラッセル自叙伝』、167 頁。
- ⁹³ 同上、166 頁。
- ⁹⁴ 前掲ドラ・ラッセル『タマリスクの木』、202 頁。
- ⁹⁵ 同上、201 頁。
- ⁹⁶ 同上。
- ⁹⁷ 前掲日高一輝訳『ラッセル自叙伝』、169 頁。
- ⁹⁸ 楊端六「和羅素先生的談話（ラッセル先生との談話）」（初出『東方雑誌』17（22）、1920. 11）前掲姜継為編『哲学盛宴 羅素在華十大講演』、240 頁。
- ⁹⁹ 同上、240-241 頁。
- ¹⁰⁰ The Collected Papers of Bertrand Russell, Volume 15: Uncertain Paths to Freedom: Russia and China, 1919-22, Edited by Richard A. Rempel and Beryl Haslam with the assistance of Albert C. Lewis and Andrew Bone, London and New York: Routledge, 2000, p. 212.
- ¹⁰¹ Ibid.
- ¹⁰² 前掲ドラ・ラッセル『タマリスクの木』、202 頁。
- ¹⁰³ 前掲姜継為編『哲学盛宴 羅素在華十大講演』、231 頁。
- ¹⁰⁴ 同上。
- ¹⁰⁵ 同上、235 頁。
- ¹⁰⁶ 同上。
- ¹⁰⁷ 同上、236 頁。
- ¹⁰⁸ 同上、236-237 頁。
- ¹⁰⁹ 同上、237 頁。
- ¹¹⁰ 胡軍『20 世紀西方哲学東漸史 分析哲学在中国』首都師範大学出版社、2002、「内容提要」部分をご参照。
- ¹¹¹ The Prospects of Industrial Civilization, by Bertrand Russell in collaboration with Dora Russell, London, Allen & Unwin, 1923.
- ¹¹² バートランド・ラッセル、塚越菊治訳『産業文明の前途』、早稲田大学出版部、1928、9 頁。

第5章 社会改造と文化主義の間——土田杏村における新カント主義とギルド社会主義

はじめに

イギリスの哲学者・思想家 B・ラッセルが日本を訪問した前後の時期は、日本の思想界に「大正デモクラシー」と呼ばれる風潮が一世を風靡していた時代であった。1916年に発表された吉野作造の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」という一文に象徴的なように、「民本主義」は当該期の代表的政治スローガンとなり、それは天皇制との折衷した形態とはいえ、「政治的自覚」を民衆に呼びかけていたものであった。こうした風潮を受けて国内では護憲運動・普選運動・労働運動が民間で盛り上がりを見せるとともに、政党政治も徐々に進展していく。しかし一方で、外政に目を向ければ、日本は台湾・朝鮮を植民地とし、民国に向けて権益の拡大とその浸透を狙う帝国主義的活動も行われていた。とりわけ第一次世界大戦後のパリ講和会議での「外交失敗」と、1919年の植民地朝鮮における「三・一」運動、民国における「五・四」運動などをきっかけに、帝国日本の世論は危機感を煽りたて、危機感に駆り立てられた知識人層も「帝国改造」を高唱しつつ行動し始めた。かくして、先述した「大正デモクラシー」と護憲運動の風潮、またコスモポリタニズムや社会主義に基づく国際的な連帯の試み、アジア主義の国内への旋回はこの時期の日本思想界の主旋律となる¹。

このような時代的背景下に来日したラッセルは、日本に対してどのような思惑を抱いていたのか、また当時の日本の知識人たちは彼の思想に何を求めていったのか、本章では、これを問いたいと考える。その中でも、哲学者・社会評論家・活動家、西田幾多郎の弟子筋たる土田杏村(1891-1934)は、この来日に対し最も情熱を寄せた一人であった。「杏村は彼(ラッセル)の来朝に最も大きな期待をよせる者の一人であった。そして、ラッセルが京都に滞在した三日間、いな日本滞在中の全期間を通じて、ある意味で杏村ほど彼に近づき、彼から多くを引き出した日本人は他にない」²と指摘されたように、杏村はラッセルの訪問中において、最も積極的にラッセルを理解しようとした者であったと言っても過言ではない。杏村は個人雑誌『文化』でラッセル思想研究を展開し、また前章でも検討したように、来日中のラッセルと交流をもつことで、その思想の真髄に迫ろうとした。さらに彼は、ラッセルが擁護した「ギルド社会主義」について、自らの「文化主義」との折衷する形での在地化を図り、また、ラッセルが最も強調していた「教育」の理念を、地方の実践活動、「信濃自由大学」³の設立に取り入れることを試みた。

ところで、かかるラッセルとの交流と理論批評にとどまらず、ほかにも多様な活動を杏村は展開した。彼の業績に関して、思想史研究者の清水正之氏が『日本思想全史』で次の

ように紹介している。

土田杏村は、西田幾多郎のもとで哲学を修め、大正から昭和の初めにアカデミズムの外で、評論・社会教育などで活躍した。広義の京都学派の一人と見なされるべきだが、在野にあって、文化時評をはじめ、一方で新カント派、現象学などの考察紹介に先駆的な仕事をした。日本の文学史・思想史に関心を向け、現象学に近い立場から、明らかに浩瀚な通史的な哲学的思想史、文学史を構想していた。『国文学の哲学的研究』などにその一端をうかがえる。和辻的な解釈学的循環（ここでは日本とはこういうものだという前提を立て、各思想をそこから分析することを指して言う。和辻が必ずしもそうだというわけではない）をまぬがれた、現象学の手法による、構成的な思想史の構想・研究態度は、和辻的倫理思想史を相対化する可能性をもつものとして興味深い。彼の文化主義の主張、「生活価値」の吟味を哲学の役割とする思想は、大正期から昭和初期の思想的流れをよくあらわしている⁴。

「現象学の手法による構成的な思想史の構想・研究態度は、和辻的倫理思想史を相対化する可能性をもつ」と、その業績を極めて高く評された杏村は、しかしなぜか、思想史研究の分野においては、長い間忘れ去られていた。彼は、主に論壇で活躍した1914年から、逝去する1934年までの間に、刊行された著作だけでも61点があるほか、個人雑誌『文化』を発行し、雑誌論文などを含めれば合計6000点以上に達する浩瀚な作品群を残した。それにも関わらず、その早世と在野の身分にあったためか、その膨大な著作と実践活動に現れていた彼の思考や、時代に応じて提起した問題とそれに対する解決策も、歴史の壁に忘れ去られていったのである⁵。

ようやく近年になって、杏村に関する一連の研究が世に問はれたが、ラッセルとの関連や思想的影響関係については、先述した上木敏郎氏による教育史的視点を中心とする伝記を除き、ほぼ触れられていない状況にある。上木氏の研究も、ほとんどが若き杏村のラッセルに対する学術的関心および来日中のエピソードを紹介するに留まり、「当時杏村の教育論ないし社会改造論に最も大きな影響を与えていたのは、恐らくバートランド・ラッセルであったろう」⁶との示唆的論及にも関わらず、両者の影響関係については、引用文を含めてわずかな紙数しか⁷割かれていない。

そこで本章では、早世した哲学者・社会評論家・活動家、土田杏村（1891-1934）によるB・ラッセル思想への研究、そしてラッセルの来日にとまなう二人の交流を通して、当該期の時代像とそれに対する個人の視線を追い、また大戦後の時代思潮に対応した形で、ラッセルの「社会改造」の言説がいかに展開し、杏村による「文化主義」にみられるその残響

を追跡していく。

第1節 「特別な東洋と西洋の混合」——ラッセルが見た大正期の日本

ラッセルにとっての日本訪問は、決して快いものとは言えなかった。1921年春に北京の厳寒で重症肺炎を患って病床にあったラッセルについて、大阪毎日新聞上海支局は、特電でその客死を誤報し、世界中にそれが広がってしまったという経緯があったし、またそれは彼の離婚手続きの進行にも影響しそうだった⁸。また彼の回想によれば、「私たちは、12日間の熱狂的な歓迎の日々を過ごした。それは、非常に興味を引くものではあったが、およそ愉快と言えない日々であった」⁹。日本での滞在は、その病体とフィアンセたるドラの妊娠にも拘らず、ほとんどそれへの配慮がなされず、過重なスケジュール、記者の包囲、特高の監視及び諂いだらけの招待に終始されたものだったという¹⁰。そもそも中国滞在中を通して実感した、日本の帝国・軍国主義的政策に大きな警戒心を覚えていたラッセルは、北京から『改造』誌への寄稿を通じて、ナショナリズムと他者差別の害悪について警告を連発した。1921年新年号の巻頭を飾ったのは、ラッセルの「愛国心の功過」¹¹という論文であった。さらに、第三号の巻頭論文「現下の混沌状態の諸原因」¹²、第4号の巻頭論文「社会組織良否の分岐点」¹³、第9号の巻頭論文「工業主義の内的傾向」¹⁴、第10号の巻頭論文「工業主義と私有財産」¹⁵においていずれも工業主義と国家主義、帝国主義の相互促進について触れている。それでも来日したラッセルとドラは、日本国内における人種差別や女性差別の雰囲気に対して怒りを禁じえなかった。1921年7月28日に、慶応義塾大学大講堂でラッセルは「文明の再建」という演説を行った際、自らの理論を紹介するとともに、ナショナリズムおよび他者差別についても意味深な発言をしている。

国家の私有財産に対する獲得欲と、それから起こるところの優越感とは、旧い意味での愛国者、即ち現在の国家主義者たちによって多分に蔽せられている本能的な感情である。それが自国民に対する場合はまだしもだが、他国民に対する場合は極めて露骨に現示されて、而も誰も怪しまない理由は何故であるか。のみならず、こうした感情が教育によって養成されているのだから堪らない。例えば私の生国である英国では、英国が世界中で最も良い国だと教えられる。仏蘭西ではやはり仏蘭西が世界中で最も良い国だと教えられている。深くは知らないが、恐らく日本の学生諸君も、日本が世界で一番良い国だと教えられていることだろう。こうした教育は、一体我々の単なる獲得欲や所有欲や優越感の如き古い古い面からも恥じ入るべき本能性を助長する以外に、如何なる効果を我々の子弟に向かってもたらすであろうか¹⁶。

日本人は従来、男女間に非常な差別が置かれてあった。而も諸君の正義と自由との観念は、漸次その差別を撤廃しつつあるではないか。また日本は東洋諸国を代表して白人の専横に対抗している。私は白人の立場からそれに対して満腔の同情を表すものである。何故ならば真の正義は、個人間に平等を要求すると同様に、人種間にも平等を要求するのが当然だからである。然し乍ら自国の権利を主張するばかりが正義の途ではなくて、其の権利を他国民にも分け与える事が正義であることを、日本人は反省しているだろうか¹⁷？

ラッセルにとって日本滞在中に「会った中で本当に好ましく思った日本人は、唯一ミス・イトウ（伊藤野枝のこと）だけであった」¹⁸が、彼女はやがて甥と大杉栄とともに憲兵によって虐殺された（甘粕事件）。このことに対して、ラッセルは自叙伝の中で強く非難している¹⁹。こうした個人的感情の問題にも関わらず、ラッセルは近代日本がかかえる問題は、その歴史に古層の原因を有する一方、近代以降は欧米のアジア植民と不可分なものであると見て、アメリカニズムやボルシェヴィズムなどと同様、西洋文明の中に「宿る病根」²⁰の一形式に過ぎないと見る。

極東全般に及ぼす白人種の影響を考える際、近代日本は欧米的勢力のうみ出したものの一つと見なさねばならない。中国における日本の行動の責任は、究極的には日本の先生格であった白人たちの肩にかかっている。しかしながら、日本は依然欧州とも米国とも非常に異なっており、中国に関し、欧米の野心とちがった野心を抱いている。

（中略）しかし、結局日本は英米と協調できないだろうと私は思う。つまるところ、日本が極東を制圧するか、さもなければ、瓦解するだろうと私は信ずる。もし日本国民が今とちがう国民性をもつならば、この予想はあてはまらないだろう。しかし、日本人の野望の性格が彼らを排他的かつ非友好的にしている²¹。

西洋の考え方の中に宿る病根が如何に根深いものであるかを、私が初めて実感したのは、1920年の夏、ヴォルガ河を航行した時であった。日本と西欧諸国が中国で現在行っているのと、そっくり同じように、ボルシェヴィキは本質的にはアジア人種である人々に西洋流の考え方を押し付けていた²²。

そしてこの時点でラッセルは西洋文明の「病根」の所在について、以下のように認識していた。

わが西欧文明は、ある心理学者の言によれば、過剰エネルギーの合理化だ、という仮定の上に築かれている。われわれの産業主義、軍国主義、進歩愛好、説教熱、帝国主義、支配欲と組織欲などは、皆活動意欲の過剰から発生している。能率をあげる目的を考えずに、能率そのものを有り難がる考えに、第一次大戦（the war）以降、欧州ではいくらか疑問を抱くようになった。それは、もし西欧諸国がもうすこし怠惰で、ゆったりした気持ちで暮らしていたならば、第一次大戦も勃発していなかったろうにと考えるからである。しかし、アメリカにおいては、この能率主義の信条が今なお広く重視されている。日本でも同じであるし、ソ連のポリシェヴィキも同じである²³。

彼は西洋文明の「病根」、「活動意欲の過剰の抑制」、すなわち前章で考察したラッセルの核心概念である「衝動」という生理・心理的要素に起源をもっていると分析した。この強力な「衝動」により起動した強い実践的「主体性」が科学を発達させ、人類による自然支配をもたらす一方、社会の画一化による他者への規制、暴力、押し付けといった負の側面がそれに付随し、「西洋文明」の病的側面をなしているという。しかし彼は、日本の軍国的帝国主義は、上記の「病根」に由来する西洋の植民的帝国主義への模倣によるものである一方、独自の歴史的、伝統的な要素、すなわち「島国」という地理的要素及び「軍事的封建制」という歴史的要素の混合が、その特質形成に大きく作用していたとも見ている。

日本の抬頭は全く特別な東洋と西洋の混合である。——それを究極的に中国において達成されるべき混合と、予言するつもりは私にはない²⁴。

社会学、社会心理学、および政治理論にとり日本は特別に興味深い国である。成果をあげた東洋と西洋の総合は甚だ特異な性格のものである。表面に現れている以上にずっと東洋的であるのに、国家的能率に役立つ西洋の特色が一つ残らずもっている²⁵。

（西暦紀元前2世紀の、筆者注）中国の最初の皇帝の時以来、中国は歴大な統一された官僚的な陸の帝国（a vast unified bureaucratic land empire）で、外国人と深い接触をもっていた。他方、日本は島の王国（island kingdom）であって、朝鮮とは接触していたが中国とは時おりの接触で、外国との接触は事実上ほとんどなかった。そして国内は互いに戦闘を繰り返していた氏族に分かれていた。そして、封建的武士道のもつ美德と悪徳とを発達させていたが、大規模の経済的、行政的問題にはほぼ無関心

であった²⁶。

さらにラッセルは、日本の歴史²⁷を拠り所に、国家として日本の特質を分析している。彼はまず「明治維新」の役割を「大化の改新」の役割とに比較し、明治維新を後者の変奏形として見た。

日本史は實際上、1867年から1868年にかけて行われた明治維新という王政復古と全然異なることのない大化の改新という王政復古で始まる²⁸。

1867年から8年における明治維新の目的は、部分的には何らかの意味で、西暦645年の大化の改新を復活することであった²⁹。

大化の改新の運動はその運動推進者たちによって、王政復古と言いつたされていて、多分、明治維新におけると同様に真実を含んでいた。明治維新において、天皇の権力に関する限り、復古が行われ、西欧思想の輸入に関して維新が行われた。同様に、大化の改新において、天皇について行われたのは過去への復帰であったが、中国文化の弘布という点で行われた内容はまさに逆であった。好古趣味と改革的傾向との混合という面があったにちがいがなかった³⁰。

そして、彼によれば、いずれの改革後の政治も、その後の歴史も、「本土的」な勢力と「外来的」な勢力との拮抗によって綴られてきたという。

大化の改新以後の日本史を通じて、明治維新まで、人心を支配する戦いに、二つの相反した勢力のあることが誰にも判る。すなわち、一方には、中国から由来する政治思想、文化および芸術観があり、他方には日本土着の封建制への傾向、氏族政治、内乱などが見られる。(中略) 実質的な政治の担当者と名義上の政治の担当者とを区別する。後者には外見の地位を与え、前者に実権を許すのである。まず、天皇は子である幼帝のために退位し、しばしば僧籍を得て、僧院から現実の政治を依然司る。次に、軍事力を代表する将軍は最高でありながら、天皇の御名を拝して統治する。(中略) 維新は名目上の政府の蔭で実権を握る政府が政治を行うという慣行を打ち切ったわけではなかった。首相と彼の閣僚が部外には日本政府を代表するが、真の政府は元老すなわち古参の政治家とその継承者たちである³¹。

このような上層部の権力闘争と分裂に対し、民間は仏教によって無力化されながらも、本土化され、権力と結ばれた仏教の勢力に巻き込まれていった。

日本国民が仏教から得たものはいろいろの点で、チュートン民族系の諸国民がキリスト教から得たものを思い出させる。仏教とキリスト教とは、元来、その精神において、甚だ似ていた。両者は共に現世を棄てて、神聖に生きることを目標としていた。共に、政治、政府、富を無視し、これらに対して真に重要なものとして、来世を置き換えた。共に、平和の宗教であり、温順と無抵抗とを教える。しかし、両者は好戦的野蛮人たちの本能に適応させるに当たり大きな変貌を蒙らねばならなかった。日本において、多数の宗派が起こり、大乘仏教の伝統からいろいろの点でちがってくる教義を教えている。仏教が国家的また軍事的になった。（中略）日本史には、僧院の包圍攻撃や僧兵との戦闘は始終発生記述されている³²。

そして近世におけるキリシタンへの迫害も、別に宗教上の信条的対立からきたものではなく、政治権力による迫害であったと見る³³。このような高圧的政治と従順な民衆の結合もたらしたのが、「明治維新」の発生とその後の歴史的展開であるという。

現存する日本は、正確に言って、1867年の明治維新の指導者たちにより企図された通りのものである。多くの予測されない事件が地上に起きた。すなわち、アメリカが抬頭して、帝政ロシアは崩壊し、中国は共和国に成り、大戦が欧州を粉碎した。これらすべての変化を通り抜けて、日本の指導的政治家たちは明治初年に目指した路線にそって歩み、そして国民はいや増しになってゆく忠実さで指導者に追従してきた³⁴。

明治維新以降の日本の変貌は驚愕すべきものであり、国民も当然それに驚嘆した。しかし、なお一層驚くべきことは、知識や人生観が計り知れない変化を受けても、宗教や倫理にはさほどの変化が見られない点、また、そのような変化から当然期待されるような変化とは裏はらの方向に日本が向かっていた点である。科学は人を合理主義に走らせやすいと想像するのに、日本における科学的知識の普及は、日本文化の中でも一番時代錯誤的な特色である天皇崇拜の一大強化策に合体されてきた³⁵。

明治維新は、普通西洋において実感される以上に大幅に、保守的にかつ反動的でさえある運動であった³⁶。

近代化の原動力を西洋による圧力に見出し、これに対応すべく政権の正当性を天皇権力の復帰・神化に据えたことで、国民を神道という土着的・民族主義的宗教へと強制改宗させ、天皇崇拝のもとで動員・集結するに至った日本の近代化過程に実ったのは、全体主義・帝国主義という悪の花であった。

薩摩と長州の両藩が天皇を支配し、天皇の地位・権勢を高めて外国人に対し天皇を抵抗の象徴にすることになった。そして、国家主義の花形闘士になることによって国民の支持を得た。特に有能な指導者たちの下で、これまでずっと一貫して追求して来た方針を採択し、西欧の貪欲の無力な餌食とならずに、日本を世界の最大強国の一員となるまでに地位を高めた。封建制は廃止されて中央政府は万能となって、強力な陸・海軍が創設され、中国とロシアとが相次いで日本に敗れ、朝鮮は併合され、満州と内蒙古に保護領を設け、工業と通商は発展し、広く国民に義務教育を課し、天皇崇拝は学校教育と学者が後援した歴史的な神話とにより不動のものとなった³⁷。

天皇崇拝を自然の成り行きまかせにせずに技巧的に作り出すことは現代日本の最も興味深い特色の一つである。合理的精神の成長を妨害する方法として世界中の他の国家に示す一つの見本である³⁸。

神道は国教としてその地位を確立し、そして、現代人の要請に応えるため再建されたのは最近四、五十年のことにすぎない。神道は土着のもので、国民的であるから、仏教より望ましいことは勿論である。神道は種族的宗教であるが、全人類に訴えることを目標とする宗教ではない。神道の全目的は、現代の政治家たちによって発達させられたように、日本と天皇とに栄光を与えることにある³⁹。

こうした天皇崇拝によって洗脳された国民のもとでは、民主主義政治が無謀なポピュリズムを生じる恐れが高いゆえ、むしろ元老政治の方がより日本の「国益」にかなうと、ラッセルは述べている。

愛国的見地よりすれば、元老は事態処理の点では非常に深い知恵のあることを示してきた。もし日本が民主国であるとすれば、その政策が現在以上に一層盲目的愛国主義（ショウブニスティック）に傾くことであろうと考える根拠がある。（中略）日本における民主主義は外交政策における盲目的愛国主義を減少させることにはならない。純粹に盲目的愛国主義に反対し、反軍国主義的な少人数の社会主義者がある。（中略）

いわゆる日本の自由党は日本政府と同じくまさに盲目的愛国主義者で、また輿論もそうである⁴⁰。

ラッセルから見て日本は、中国大陸、あるいは白人の見た「アジア」と比べ、明らかに異質な文明を所持していた⁴¹。それは島国の「孤立主義」⁴²、及びその延長上にある、「何世紀もの間一貫して同一の勢力と同一の考えが持続されてきたこと」⁴³からくる単一的価値系統によるものである。こうした島国的閉塞と、強烈な自己防衛本能のもとで取り入れた西洋文明の能率主義が相互に作用・補強し合い、やがて今の形式一すなわち極めて向心力が強く、他者侮蔑的・強権的な在り方として現出したのだ、と。

日本は、英国のように、力と繁栄とを求めて、貿易に依存しなければならない。これまでのところ、日本は貿易国家にふさわしい自由柔軟な思考法 (liberal mentality) を育成してこなかった。そして、今なおアジア征服と軍事的にあっばれな腕前を示すことに夢中になっている。この政策は当然中国とロシアとの闘争を引き起こし、両国が現在かかえる弱点のおかげで、今までのところ、日本は成功裡に行動して来たのである。しかし、両国は早晚国力を回復しそうであるから、そこで日本の現行政策のもつ本質的弱点が表面にハッキリしてくることだろう⁴⁴。

歴史からきた集団主義的伝統と、それを助長する形で取り入れられた西洋の産業主義が相乗して、日本の近代化の道は、すでに矛盾に陥り、前途多難なものになっているとラッセルは判断した。

日本が二つのいささか相容れない野望をもつことはこの事態から来る当然の帰結である。一方では、白人の圧迫に対抗してアジアの花形闘士たらんと願い、他方では、白人の列強から平等に待遇して貰い、かつ、後進国を搾取して行う宴会に参列したいと願っている。前者から出る政策は日本人を中国やインドに対し友好的に振る舞わせて白人に敵対させることになる。後者から出る政策は日英同盟、その成果たる朝鮮併合、内蒙・満州の事実上の合併を実現させることになる。国際連盟やヴェルサイユにおける五か国の一つ、そしてワシントン会議における三カ国の一つとして、日本は普通の大国の一員として登場している。しかし別の瞬間に、白人の暴政からたまたま黄色人種か褐色人種である人々（黒色人種を除いて）を解放するためのアジアにおける覇権秩序を立てようとする⁴⁵。

したがって日本の直面する問題は非常に困難である。増加する人口に備えて、工業を発達させる必要があり、工業を発達させるには中国の原料を支配することが必要であり、中国の原料を支配するには欧米の経済上の利益と衝突せざるをえない。これをうまく乗り切るには大規模の陸・海軍が必要となる。ところがそうなるには賃金労働者が赤貧状態に追い込まれる破目になる。賃金労働者らを貧困状態に釘付けして、工業を拡充すれば、労働者の不満は増大し、社会主義者が増加し、貧民階級の親孝行の心持ちと天皇崇拜心とは崩壊し、結局、国家機構の基盤全体に絶えず増加してゆく脅威を与える。国外から、日本は対米戦争とか中国の復興とかの危機的脅威を受けている。国内では、やがて、プロレタリア革命の危機に見舞われるであろう⁴⁶。

このような内外の危機を避けるため、日本の国民ないし上層部はどうすれば良いのであろうか。ラッセルはそこで、伝統に遡った形で、すなわち大化の改新後に、中国の宗教・道徳を取り入れたのと同様に、「さらに強烈な西洋化」という解決策を勧めた。すなわち、すでに日本固有の集団主義的伝統に孕まれている個体の無視・疎外・暴力を、よりいっそう効率的に助長する西洋の「機械文明」をばかりでなく、こういった悪い傾向を抵抗・矯正できる「理想・宗教・人生観」などといった、人間の独立的思考能力と倫理的価値の培養に資する西洋の形而上学をも取り入れるべきだというのである。

これらすべての危険から逃れるただ一つの逃げ道がある。それは出産率の低下である。しかし、そのような考えは、砲弾の餌食となる兵隊の補給を減らすものとして軍国主義者の猛反対に会うだけでなく、愛国心と孝行を基盤としている日本人の宗教や道徳心に根本的に反するものである。したがって、もし日本が成功して国際的に抬頭することになるならば、さらに強烈な西欧化が必要となってくる。機械文明に関する技術やありのままの事実についての知識だけでなく、理想や宗教や人生観も取り入れなければならない。自由思想、懐疑主義、そして動物的群居本能の減少が必須項目である。これらなくては人口問題は解決できないし、そして、これが未解決のままであると、早晚、日本の悲惨事は避けられない⁴⁷。

しかし、日本に対し忠実な建言を行ったこの著作は、日本の知識人たちからほぼ無視された。「中国の問題」と題されているためか、この著作は1924年にタイムリーに中国語に翻訳された⁴⁸のに対し、その日本語版は1970年の牧野力氏による翻訳まで待たなければならなかったのである。翻訳に限らず、同時代の日本側においては、原著への注目は、二つほどの書評⁴⁹を除いて、ほぼみられなかったのである。

第2節 「論理と情熱との調和の人格」——杏村のラッセルへの追跡と「大正人格主義」の系譜

しかし、著作自体は重視されていなかったも関わらず、まるでかかるラッセルの懸念とそれに対する解決策に並走しているかのように、当時の日本知識人たちは奔走していた。出産率の軽減に関し、サンガ夫人の来日招聘など国外の経験を取り入れようとした試みは、のちに「日本フェビアン協会」の会長・安倍磯雄や、生物学者・社会運動家の山本宣治らによってなされていく。また、「道徳」「人格」「価値」などに関する西洋哲学・形而上学の移入、とりわけ「価値哲学」「文化哲学」を強調する「新カント哲学」の導入は、近代日本哲学の第二世代、すなわち明治40年代の日露戦争後から大正初期の第一次世界大戦前にかけてヨーロッパに留学した桑木巖翼、朝永三十郎、波多野精一、さらには東京専門学校の大西祝(1864-1900)や金子馬治(筑水、1870-1937)らによって、講壇哲学の形で進められた⁵⁰。なかには留学経験をもたなかった西田幾多郎のように、こういった新カント哲学及びそれに連なった初期現象学と、「東洋的」禅仏教の理念とを融合しようとする独自の哲学体系の構築を試みる者もあらわれた。さらにこの系譜を汲みながらも、より倫理面・実践面に傾斜した思想体系の創設、またそれを「社会改造」のために応用し、ついには地方教育へと連動させようとする試みも、西田の弟子・土田杏村によってなされた。

大正期の哲学思潮に関して言及した宮山昌治氏の研究⁵¹によると、1910年頃に新カント派が紹介されて以来、それは日本の思想界の主流を形成するようになり、「日本ではカント自身の本格的な研究も、新カント派的立場で行われ」⁵²ることとなった。1914、15年頃には、存在論の不可知論的な立場に立ち、事実上形而上学の可能性を封じたカント哲学に対抗する形で、直接人間の「生」に触れ、自己内面への無限な沈潜を通して、前意識的な「直観」を感得すると説くベルクソン哲学の受容がピークを迎えていた⁵³。のちにベルクソン哲学の大流行は一時後退し、新カント派は大正期の人格主義的教養主義という形で再び主流派に返り咲くことになる。実際1915、16年にかけての日本の思想界においては、ベルクソン哲学の大流行にはすでに翳りが見え始めていたが、その契機となったのはまさにラッセルによるベルクソン哲学の批判論文——「ベルクソンの哲学」(The philosophy of Bergson, 1912)——の、高橋里美、野村隈畔による紹介であった⁵⁴。同じ頃にはすでに論壇で活躍し、かつベルクソンの作品の翻訳⁵⁵も行っていた杏村においても、ラッセルへの注目はあったであろうと推測される。

繰り返しになるが、杏村のラッセルへの直接的な言及は、上木敏郎が指摘したように、「…すでに久しく、大正7年(1918)に提出した卒業論文のなかでも、彼の新實在論的立

場を論じている」⁵⁶。また同年、ラッセルの大戦以来4年ぶりの哲学著述——『Mysticism and Logic』（1918）の刊行について、書評「ラッセル氏の新著たる『神秘主義と論理学』について」⁵⁷を、ほぼ同時に発表していたことを鑑みれば、かなりタイムリーにラッセルの思想と動向を追跡していたはずであった。とりわけ、ラッセルが日本を離れた1921年に、杏村の著述『文化主義原論』⁵⁸は内外出版社より上梓された。杏村は其中で、当時ラッセルが主張していた「ギルド社会主義」を、自らの「文化主義」と折衷融合し、日本の「社会改造」を実現するための主体形成における組織原理としたのであった。

1920年1月1日、まだ京都帝大の大学院に在学していた杏村は個人雑誌『文化（Die Kultur）』（1920-1925、8巻5号で終刊、合計46冊）を発刊し、アカデミズムとジャーナリズムをつなぐことを志していた。そこでは、早くも第二号に「マルクス、ラッセル及び文化」⁵⁹という一文を掲載し、また第四号にラッセルの「自由人の崇拜」と「哲学の価値」⁶⁰を翻訳して載せ、「ラッセルの思想の根本的立場（上）——ラッセル研究の第一」⁶¹をものにするなど、本格的にラッセルの思想を研究し始める。1921年7月、ラッセルが日本に来る直前に、杏村は雑誌『改造』に「ラッセルの哲学」⁶²という一文を寄せた。杏村はそこで、知・情・意を融和した理想的な人格像、そして、「論理と情熱との調和の人格的基礎の上に立てられた」哲学・政治学研究の展開をラッセルに見出している。

バートランド・ラッセルは、不思議にも相反する二つの性格の平行的持主だ。謂うところの二つの傾向とは、一つは論理に随っての冷静なる思索であり、他は情意に随っての熱情的運動である。ラッセルが数学の原理の学究的検討をやって居る処を見ると、とても社会改造の情熱などを持って居る人の様には見えないで、単に一個の学究窮措大の姿を想起せしめるが、さて翻って「社会改造の原理」や「自由への途」を論じ出す情熱の奔激を眺めると、彼が急湍の様の性格の流露はまざまざと其の紙面に躍って居るに驚かされる。ラッセルの性格は冷熱だ。正に氷れる熱汁だ⁶³。

我々の環境悪を改造しようという性格の持ち主は、多くはヒューマニズム風の型に属する人物である。人間は万物の尺度なりという言葉が何時までも其等の人物の言動に支配原理となって居る。プラグマチストは現代に於ける其の一つの代表者であったと見てよいだろう。此れに反して専一に冷静なる思索に沈潜しようという性格の持ち主は、自己の人間的要求などを一旦棚の中へ蔵い込んで置いて、論理一点張り、学問の体系片押しで以て万事を律しようとする。其の前者には学問自体の体系を無視して、ただ浅薄に、ただ通俗的に随在する惧れがあり、其の后者には、現実複雑の事象に無頓着となって、融通の利かない象牙塔内の窒息化骨を経過する危うさが伴う。実にも

此の危惧、此の墮落を免れ得た哲人、社会改造家は甚だ少なかつた。然るにラッセルは、不思議にも其の両端の性格を併せて具有する、現代に稀れなる性格の持ち主なのである。ラッセルの性格は冷熱だ。正に氷れる熱汁だ⁶⁴。

ラッセルの哲学的企図は、論理と情熱との調和の人格的基礎の上に立てられた。即ち其れは哲学上の主知論と経験論との統一の事業であつた。ラッセルは此の企てをば其の哲学の三部門の中に等しくプロジェクトした。此れが結果は第一の数学の哲学に就ては『数学の原理』に、第二の一般認識論に就ては『哲学の問題』に、第三の社会哲学に就ては『自由への途』に、何れも学界を驚嘆せしむる名著となつて品化せられたのである⁶⁵。

「ラッセルの性格は冷熱だ。正に氷れる熱汁だ」「一つは論理に随つての冷静なる思索であり、他は情意に随つての熱情的運動」などといった評価に見えるのは、まさに思想と人間、ひいては「科学」と「人文」を総合的に思索しようとした杏村自身の理想である。さらに杏村はラッセルのあらゆる教条と独断の桎梏を砕いた、世界観と人生観を高く評価している。「自由人の愛」から発し「宇宙の市民」を目指すような形而上学を根柢とするからこそ、その認識論研究における論理的原子論⁶⁶が萌芽し、また枝先としての社会哲学批判が生まれたのだと。

通俗に哲学と言へば、或る哲学者の世界観、人生観を意味する。術語的に言へば所謂形而上学である。併しラッセルの哲学からは毫末も独断的形而上学の声を聞く事が出来ない。其れ故に、ラッセルに就て哲学上の何等かの結論や何等かの信仰を聞こうとするならば、其の人は直ちに失望する。彼にはただ部分的の認識論的研究があるのみだ。ラッセルは寧ろ世間一般の人間の求める形而上学的独断を排斥した。而して此の如き要求を生産する個我の執拗を客観的対象の世界に没入せしめ、「宇宙の市民」としての公平を以て、個我の迷執を批判し、破却しようと努めた。もしも強いてラッセルに形而上学を求む可しとならば、「自由人の愛」が即ち其れであると言ってよいかも知れぬ。彼は其の著書『哲学の問題』の最後に於て次の如くに主張して居る。「真の哲学的瞑想は、其れの満足を非我の拡大に見出し、又瞑想され居る客体を拡大し、しかも其の場合に主体は瞑想しつつある様なすべての物の中に見出す。自由の知性は、神の見る如くに見、此処彼処の区別を離れ、希望と恐怖を離れ、習俗の信仰と因習的僻見の桎梏を離れ、静澄に、非激情的に、単一にして又独特なる知識の欲望に於て一一知識、其れは非個人的にして、純粹瞑想的にして、人間に取り獲得の可能なる知識

——見るのである」⁶⁷。

此れ即ちラッセルが転じて社会哲学と論ずる場合の態度であった。信条であった。彼は此れに於て、唯理論に相当する国家社会主義と、経済論に相当するアナキズムと、両者の統一を求めて結局、コール、ホブソン等の、ギルド社会主義の立場に賛成した。併し其の批判は徹底的に非我への没入である。因習的僻見の打破である。其の態度には非激情的の激情が動いた。非個人的の個人が生きた。ラッセルの哲学は正に冷熱だ。ラッセルの人格は正に氷れる熱汁だ⁶⁸。

これはまさに、杏村の理想である、客観と主観を統一し、科学と人文を総合的取り入れた学風であり、「自由の知性」を尊ぶ人格像に由来するものであった。先述したように1920年1月1日に、杏村は個人雑誌『文化 (Die Kultur) 』を創刊するが、これは単なる一つの文化批評誌であるのみでなく、「日本文化学院」という機関の機関誌でもあった。「日本文化学院」とは、日本の人文学を憂慮して杏村が、1919年著述『象徴の哲学』が刊行された際に、自らが創設した先行機構である。その序文では彼は以下のように述べている。

理化学研究所は設立されましたが、日本文化研究所と言うものは未だ設立せられて居りません。理化学的発明だとか武器の改良だとか言うことには、かなり多くの経費を投じておりますけれども、文化の理論的研究者に対しては社会は何等の庇護をも與えておりません。私は僅僅五十万円あれば、その利子によって最も経済的に、日本文化研究所というものを施設運用し、有力なる文化学者を養成し、それら学者の共同研究によって日本および東洋の文化を闡明し、且つ日本将来の問題たる労働、社会、文化、国際諸問題の解決に資することが出来ると考え、将来必ずこれの施設を完成したいと発願致して居るものであります。併し目下のところは、これらの文化的研究を原理的になしているものは、僅かに文科大学、法科大学の諸教授等であります。(中略) これらの学者を失えば、差し詰めその専門の研究は停止せられるという状態であります⁶⁹。

従来文化学的方面の研究に携わっている青年学究の状態は如何でありましたでしょうか。一二の数しかない専門学者の失われた際、直ちにそれを補充すべき重要な任務を持っているそれら青年学究の攻学の状況は如何でありましたでしょうか。私はここに正直に私の見聞を告白致します。彼等は偽らざるところ、日々の生活の物質的基礎を得るに頗る困難を感じて居りました。彼等の事業は、誤られたる意味の非生産的事

業でありますがために、彼等が自己の専門の研究に忠実であることは、直ちに彼等の物質生活を支持する道とはなっておりません。勿論彼等は清貧に甘んずるだけの決心は持って居ります。併し一身一家の生計を維持すること既に、今日の経済組織に於いてすこぶる困難なる道でありますために、それだけの物質的基礎を得ることに彼等の勢力の殆ど大半が消費せられ、専門的研究には僅かに十が一分の精力しか注ぐことは出来ません。これが彼等の最も活動力に富んだ青年期の状態であります。彼等が意気漸く消沈し、学説に概ね澁刺たる清新味を缺く少老の時期に達して、彼等の百が一は、初めて大学の諸教授等となり、先輩の後を襲うこととなります。（中略）それを思う毎に、私は現今の文化的研究の方面の不経済なる状態を、悵然として慨嘆しなければならぬものでございます⁷⁰。

彼は「日本文化研究所」の創立を宣言し、本当の意味で「研究所の施設せられますまでは、私一身の全論作を挙げて「文化的研究」と題し、逐次刊行」⁷¹するとともに、「一身並びに一家の費用を出来るだけ節約致します。同時に私は単なる衣食のための所謂労働を出来るだけ局少しようと致します。そして私の時間の大部分を挙げて、一方では文化的研究の準備教育を自己に施すことに使い、他方では文化一般の純理論的研究および特殊部門的研究、並びに文化の純歴史的研究に使いたい」⁷²と、同じ序文で声明した。日本の近代学科制度におけるの、倫理的価値を没却した「科学」の偏重という奇形的状態を匡正し、人材育成のもとで人文学科の再建を求め、人文的価値と科学的価値の相互融合・相互補正を実現しようとする杏村の悲願は、まさに前章で述べたラッセルが指摘した近代日本、否、近代自体の「病巣」に対処しようとするものであった。しかし、今日に至って結局、杏村が念願した人文学の復興は実現されたのだろうか。

実は少年時代より杏村はすでに、かかる科学と人文、理論と現実を架橋するような総合的、多面的才能と性質を示していた。たとえば、東京高等師範学校（博物学専攻）の在学時より、勉学だけでなく、校友会雑誌に研究と評論を寄稿⁷³する一方、生徒の生活改善を図って学校当局との交渉などに大活躍している⁷⁴。「談話部（弁論部）」の主事を担当し、自ら講演を依頼しに出かけた際、「成る可く社会の活問題に批評的の立場を取っている人を」という方針を立て、財政学者の田尻稻次郎、法学者江木衷、「支那通」青柳篤恒に加え、「街頭の哲学者」として名を馳せた評論家・田中王堂を訪問し、働きかけた⁷⁵。特に王堂とは、はじめての対面にもかかわらず、大いに意気投合し、その指導でウィリアム・ジェームズ、ジョン・スチュアート・ミルを研究し始めるとともに、王堂から「芸術と経済とに等分の興味をもって人生を批評する態度」を身につけ⁷⁶、後年大学卒論を加筆して出版した『象徴の哲学』にも、田中王堂に捧げると中扉に書いたほどであった⁷⁷。さらに高師の諸教

員中でも、とくに当時博物学部の教授であった丘浅次郎の「自由人の態度」という学風に最も影響され、「実験の御指導を受けている間には、学問を研究し問題を考え自由人の態度を自然の間に教えられたが、私は今なおその自由人の態度を支持することと、文章を平易に書くことについて、先生よりうけた影響を忘れることができない」⁷⁸と追慕している。1915年に高師を卒業後、杏村は京都帝大文科大学（文学部）哲学科に入学し、西田幾多郎に師事して哲学の道を歩み始めた。1925年大学院から卒業するまでの10年間、杏村は哲学、とりわけカント哲学および初期現象学に携わりながら、当該期哲学界における「新カント学派」の影響下、桑木厳翼、左右田喜一郎らにより提起された「文化主義」に啓発され、自らの「文化主義」哲学体系を建てようとした。一方で彼は雑誌創刊および地方大学の創設などにまい進し、ここでも論壇と学界をつなげようとした。

こうして「大学で現代哲学を専攻し、特に西田幾多郎から多くを学ぶ一方、文明批評家としての田中王堂の学風をつぎ、河上肇や米田庄太郎らの影響も大きく、当時の哲学科出身者としては珍しく社会思想に深い関心を示していた」⁷⁹杏村は、ドイツ観念論の解釈学的受容に集中し、難解なディスコースを不断に生産し続ける当該期の講壇哲学と意識的に距離を置いていた。当時の杏村は、ほかの社会科学および現実世界との懸隔を広める一方のアカデミー哲学を、いかに日本の現実問題に目を向けさせ、あるいは哲学の知識を、いかに日本の「社会改造」に応用すべきかという問題に悩まされ続けていた。そこで彼が着想したのは、「文化主義」をもって哲学と科学の間、そして理論と現実の間を架橋することであった。これをもってまず言論界の「改造」をなし、さらには「社会改造」につなげようとしたのである。『文化』の発刊辞を読めば、まず批評界からの「改造」を図り、哲学と諸社会科学の融合を目指そうとしたその志向がよくわかる。

現時我国に盛んなる文化批評の言論を見るに概ねこれに二類の謬想者あり。一は単に特殊文化科学の原理を応用して、この生きたる全人生の価値問題を決定せんとし、その背後に哲理より出てたる人生観の体系を缺く政治学者、経済学者、社会学者なり。他は厳密学問としての哲学の素養を有するも、しかもなお時勢批評の勇氣と着眼を缺き、文化批評家の言論に哲学上の謬想あるを指摘するに止まりて、漫然彼等を冷笑し去らんとする哲学者なり。（中略）蓋し前者は人間を愛することを知りて未だ思想を愛することを知らず、後者は思想を愛することを知りて未だ人間を愛することを知らざるの致すところにあらざる否か。余輩は識乏しく見浅しと雖も、窃かに思いをここに潜むるもの、幸いに大方の助力と奨励とによりて、幾分ともこの両者の長所を併せ、弊所を砕き得ば、欣幸これに過ぎたるものなからんとす⁸⁰。

「人間」と「思想」をともに愛し、両者を融合しようとした杏村は、かかる志向ゆえに当然、「論理と情熱との調和の人格的基礎」をもったラッセルに共鳴したのである。また杏村は、1921年に上梓された『原論』の序論で次のようにも述べている。

大正9年中、私の思想の発展に寄与する事の最も多かった社会思想は二つである。其の一は英国のギルド社会主義者によって提唱せられた self-government in industry (産業自治) の主張であり、二は露国のポリシェヴィーズムによって喚起せられた Demokratie oder Diktatur (民主主義か独裁主義か) の問題である⁸¹。

すなわち、社会思潮として流入された「ギルド社会主義」への関心である。「ギルド社会主義」に関しては、前説で触れたように、一般的に1919年頃、室伏高信が日本の思想界に紹介したものとされている。しかし早くからラッセルの哲学・社会思想に注目していた杏村にとっては、ラッセルの著述から直接これを受容した可能性も否めないであろう。

ただし実際、もし純粹の哲学的立場から考えれば、ラッセルらによって発展させられた記号論理学という新実在論的立場に対しては、新カント学派と初期現象学の系譜を汲んだ杏村は、むしろその反対の立場に立っていたともいえる。しかし、ラッセルは、その哲学発展の過程において、「分析哲学派の中の最も形而上的哲学者」と言われたように、「人間は如何に生きるべきかという存在の問題」＝形而上学の可能性を彼は一度も放棄したことがないし、主体の問題以外に、個体が連携して形成する共同体＝社会に関しても、19世紀末、ヘーゲル主義に反逆して以来、常に多元論的立場を貫いていた。杏村の場合も、1919年頃から噴出した「社会問題生活問題」の中心にあるのは、「我々人生の意義」⁸²であるとみ、ひいては「人生の意義はなんであるかということ」を闡明してくれる学問は⁸³、「哲学」であり、「形而上学」であると見定め、⁸⁴そのために「文化学」を樹立⁸⁵しようとした。すなわち杏村は、同じく「形而上学」の問題に関して、ラッセルの立場に同調したわけである。

大正期といえ、⁸¹「大正生命主義」「大正教養主義」「人格主義」「文化主義」などにみられるように、研究者たちによって提起された諸タームは、さまざまな限界があると批判されてきたが、一方では、これらの解釈枠が象徴しているように、明治期の国家主義に対抗し、明治末年から大正期以降の「個人主義」とそれに関連した諸価値の回復と高唱が、われわれが観察できるほど確かな形で図られた。当該期の日本哲学界においても、人間認識の不完全性を証明することによって、人間の主体的価値を否定したカント哲学を乗り越えようとした「生の哲学」が紹介され、その大流行がみられたことはその流れを受けたものであったといえよう。ショーペンハウアー、ニーチェをその先駆とし、ディルタイ、オ

イケン、ジンメル、ベルクソンなどを代表者とする「生の哲学」は、科学技術の発達に伴った実証主義氾濫に対するアンチテーゼであり、「人間の存在」と「非合理的情念」を中心に思考しかつそこに価値を置く哲学的思潮として19世紀後半からヨーロッパを中心に興った。前述した通り、かかる「生の哲学」の流行期に身を置き、とりわけベルクソンが唱えた「エラン・ビタール（生命の躍進、élan vital）」⁸⁶に大いに借用した杏村が、同じく「内的衝動」から人間行為、社会現象を解釈したラッセルの社会哲学に共鳴したのも十分納得できる。

この時期、杏村によるラッセルの学説への言及も、ほぼ記号論理学の専門領域を避け、その倫理・社会学説に賛同する形でなされている。これはまさに大戦後の時代風潮と大正期の人格的教養主義の影響であると言えるであろう。

ラッセル氏は私の親しさを感じて居る思想家の一人である。人間には其れ其れ動かすことの出来ない根強い傾向があり、其れが常に、衝動となって発揮せられ、理性により合理化せられるものと考えられるが、其の根本動向はいかなる理性によっても根抵より変化せられることは無いであろう。其の意味に於て各思想家の判断には、其れ其れの典型があり、其の典型を異にするものの判断には親しさが感ぜられない。其の意味に於て私は、ラッセル氏の批判の何れにも同感出来る。社会問題の批評としては、今後も私は、余りに遠く氏と途を隔てることはあるまいと思う⁸⁷。

杏村はここでラッセルの「衝動」概念を借りて、自らもこういった人間の本能的な部分に関し、ラッセルの所説に同調できるとの立場を表明したのであった。とりわけこういった人間性と深く関わる政治・社会問題については、この時期杏村の思考に与えたラッセルの影響は深いものであったといえよう。

まとめて言えば、生物学を専攻しのみ哲学の徒になり、また「日本文化学院」を創設した杏村が、生涯を通して目指したのは、「自然」（科学）と「人文」（哲学）の融合であった。また、彼は自分が師と仰いだ人々から常に理想的な人格像を見出して学んだ。丘浅次郎から「自由人の態度」を、田中王堂から大衆啓蒙とプラグマティズムの理論を、西田幾多郎からは「強靱な思索力」⁸⁸を、それぞれ吸収して自分のものにした。この意味ではラッセルもその師に連なる一人であったに違いない。それは、特定の概念あるいは理論の継承ではなく、「人格」からの影響であった。杏村はラッセルのなかに、彼が常に念願してきた、科学と哲学の理想的融合を成し遂げた人間像を見出し、またその形而上学における人生、学問への態度を学んだと言えよう。それは一方で杏村の内的価値観によるものであり、もう一方では、時代が形成した「人格主義的教養主義」による影響も無視できないである

う。

第3節 汎価値主義的「文化主義」——『文化主義原論』（1921）の意図

さてラッセルの理論と人格とに多く影響されたこの時期の杏村は、1921年6月に『文化主義原論』⁸⁹を上梓するが、500頁に近い⁹⁰この分厚い著述は、新たに書き下ろされたものではなかった。それは、「大正九年中に執筆して、「日本及日本人」「中央公論」「雄弁」「大観」「解放」の諸誌に、其の都度掲載したものの一部であるが、今此れを整頓塩梅して一の纏まった論著」⁹¹であり、また「本書を纏めた時齡正に三十歳ならんとしつつある。然らば本書は偶然にも私が二十代の青年時代を捨てて三十代の中年時代に這入る入門の書である」⁹²という、而立の年で表した思想の結晶でもあった。本書を通読すると、ラッセルの政治論や倫理観を念頭におきつつも、その理論や概念自体はむしろ、参照と批判の対象として背景に退いている。たとえば以下のようなものである。

実に此れ哲学に於いては、カントとベルクソンとを如何に結合し、尚一般的に言えば唯理論と経験論とを如何に結合すべきやの大問題である。ギルド社会主義は、此処にその一の結合方法を案出し、ラッセルをして実行の可能性の最も多き方案であると称揚せしめたものであるが、恰も其の二傾向の結合を計った一計画であると言う事が出来る。併し私自身の研究するところに随うならば其の結合は実は甚だ折衷的である⁹³。

ラッセルは社会主義のもとに於ける芸術や科学の地位を考えた。彼の論旨をよくよく考えて見ると、経済活動は芸術や科学やの活動の手段であるという風に考えて居るところがある様である。若し然りとすれば、此れ即ち経済価値の自律性を害する者である。併し彼の論旨の中に労働をより芸術化しようとする要求のあることは観取するに難くない⁹⁴。

彼は、ラッセルが当時擁護していたギルド社会主義の「折衷的」「無哲学的」な部分を批判し、最終章の「ナショナルギルドの社会論の文化主義的修正」においてさらに、新カント派マールブルク学派の国家哲学をもって、ギルド社会主義を改造しようとしているのである。それでは、いわゆる「文化主義」とは、杏村の場合、どういう意味合いで使われているのだろうか。本書において杏村は、いくつかの定義を下し、またそれを時々「理想主義」「人格主義」とも言い換えるなどで論理的な混乱をきたしているが、基本的にそれは、近代ヨーロッパ発の「自然主義」的形而上学に対するアンチテーゼと理解してよいである

う。

我国に現在、人生観上の唯物論の上に立った思想家が居る。其れだけでも如何に我国の思想界が混乱して居るか想像ができる。人生観上の唯物論は、ヘーゲル末後の唯物論哲学の勃興と、及び十九世紀末に殊更隆盛を極めた自然科学の勢力とによって欧洲思想界を一時風靡した。併し人心は何時まで此んな素朴的な人生観に満足して居る事が出来るか。二十世紀は自然科学的人生観、即ち自然主義の人生観に対しての新理想主義、即ち文化主義の時代となった⁹⁵。

其れ自身に存在し、しかも其れ自身に決定するものは人格である、人格は決して自然物に征服せられるものでは無い。而して同時に人格ほど尊厳なものは宇宙に無い。即ち人格は此の宇宙の本体であると言うべきである。私の文化主義は人格主義なのである⁹⁶。

我々が文化主義を主張するときの所謂「文化」は、此の哲学的に特定の意義を有する「文化」であって、其の他通俗的に使用した時の「文化」では無いのである。新カント学派の或る哲学者達に随い（ウィンデルバンド及びリッケルト等のドイツ西南学派の哲学）、我々が自然と文化とを明瞭に区別して、その自然の上に立脚した世界観を自然主義と読んだとするならば、此処に新たに文化の上に立脚し、文化価値の実現を目的とする世界観を樹立して、此れを文化主義と呼ぶに何等の不当も無い。文化主義——少なくとも私の考えて居る文化主義は、斯くして厳密哲学の上に立って何等の誤謬も無い、純粹形而上学上の一主張となって居るのである⁹⁷。

「文化」とは価値が存在に内在したる意味的成立であることは、私は従来至るところで論じて居る⁹⁸。

文化は価値関係の所産であって、価値判断の初段では無い。…随って文化には悪の文化も無論含まれて得る。…然らば文化を生活理想とするというのは、厳密には何等の意味も無いことである。私は此の点で世の多くの文化主義者とは大いに見方を異にして居るかも知れない。然らば真に生活理想となるものは何であるか。其れは意味としての文化では無く、其れの本源に立って居る文化価値である。文化価値の実現を努める主張を文化主義と言う⁹⁹。

(森本、筆者注) 博士の諸説の如き文化生活主義は、実は文化主義とは何等の関係も無く、又文化と言う語の意義をはっきりと学問的に定めるならば、其れが文化生活なりやをさえも疑わなければならぬ性質のものであると私は考える。(中略) 兎に角博士の文化生活論は貴族的、ブルジョア的、享樂的のものであり、(中略) 而して私は従来我々の提唱して居た文化主義が文化生活の論者の意見と屢々混同せられて、何等か貴族的、ブルジョア的のものである如くに誤解せられた境地から自己を取り除くために、改めて私の文化主義を新文化主義と呼んで他から区別しようと思う。(中略) 文化生活論は文化主義に反する一自然主義に所属するものであると見、新文化主義は社会主義の中の諸派により近く其の地位を占めて居る、否寧ろ社会主義の諸派を、理想主義的に修正して行くところに其れの現代的意義を持って居るのだと言うことが出来るのである¹⁰⁰。

文化とは、(中略) 価値が存在に内在した一の意味的存在である。其れは時空的或いは自然科学的存在をなすものではなくて、其れとは離れた、其の立場を一つ ausschalten (切断、筆者注) した現象学的存在をなすものである¹⁰¹。

引用が長くなってしまったが、要するに杏村が「文化主義」を定義づける際に大きく影響されていたのは、新カント学派、なかでもとりわけドイツ西南学派の「価値哲学」¹⁰²であることがまず確認できよう。それは、現実の「生」(存在)と「価値」とを、徹底的に対立させる二元論的形而上学であった。しかし、上述の史料からも分かるように、最初から新カント派の「価値哲学」にしたがって、「文化価値の実現を目的とする世界観」を「文化主義と呼ぶ」ことにした杏村は、叙述の進行に連れて徐々に、「文化」とは価値が存在に内在したる意味的成立」というような「現象学的存在」へと発展させていった。すなわち「存在」と「価値」の分離か、それとも両者の融合かという点で、杏村が定義した「文化主義」が、場合によって動揺しているのである。かかる定義・概念上の揺れ動きに、この時期の杏村の内的矛盾が反映されていることとして看取できよう。

現代は一大危機に陥って居る。現代の標識である表情は「死」であり、現代の讚美歌である会話は「死」である。我々は今や「死」の淵に向かって其の機関車を急がせておるのである。「改造」は何としても急務だ。今に於いて其の道途の方向を意識し、此れを正しきに回さなければ、人類は遠からず滅亡するの外は無い。歐洲の大戦は正に其の滅亡の口火であった。この機関車の脱線の如何に危険なるものであるかは、今こそ世界全体の人間の、強く其の感情に鑄込んだところであるだろう¹⁰³。

凡そ我々の文明の墮落する原因は何処にあるかというに、我々の生活の何れかの方面が他の方面の手段になって居るといふことになる¹⁰⁴。

人類文明を滅亡に導く「死」の原理とは、杏村の説明によると、まず資本主義¹⁰⁵そのものであり、そしてその根底にある「最大多数の最大幸福」を求め、すべてを手段とする利用しようとする、「功利主義」の原則である。突き詰めて言えば「死の原理」とは、人間的、自律的価値の没落である。これを改造するためには、人間的、自律的価値の復権を唱える「文化主義」による「改造」が急務である。しかし一方では、前節で触れたように、杏村が常に抱えていたのは、自然的価値を代表する「科学」と人間的価値を代表する「人文」の融合という願望であった。「人間」をめぐるのかかる矛盾は、本書における「文化」の定義における揺れとして現れた一方、そこからは「生の哲学」と「価値哲学」的言説のせめぎ合い、また現象学を用いて両者を融合しようとする杏村の理論的難澁をも読み取れる。

さらに彼は、この「文化主義」、あるいは「価値哲学」をもってすべての事象を基礎付け、「改造」を加えようとする。まず功利主義の道具に墮落した経済・政治の領域において、「あるべき」価値を回復する試みである。『文化主義原論』一書において、最も紙幅を割かれているのは、まさに「第二篇 経済理想論」（計5章）と「第三篇 文化主義政策論」（計7章）であった。

然るに従来永遠的に手段となって居て解放せられることの無かったものは、政治的行動と経済的行動とである。政治的価値と経済的価値との自律を信ずるもの、換言すれば政治と経済とには其々の文化理想があり、其々は此の理想によって批評せられ命令せらる可しということが、長い間世間に知られずに居た。…凡そ何物であれ、其れ自身の目的を有せず、或る他のもの手段であるとのみ考えられる場合ほど墮落するものは無い¹⁰⁶。

彼は「第二篇 経済理想論」において、「経済哲学のカント化」¹⁰⁷を説き、「改造」の要点を多く議論されていた分配問題から、カント倫理学に基づく経済価値の創出へと見出す。そこでは、「社会的正義」「労働の人格化」「奉仕（良心）」と「自由（自律）」などの諸原則に基づく経済体制の再建が求められた。「第三篇 文化主義政策論」で提起された政治哲学および現実の政治改革においては、実際の憲法問題と普選問題と関連して議論されている。憲法と主権者（天皇）の関係を、経験的世界・形而上学の主体「宗教的象徴」

とし、カント的自律の鉄則に沿って、現実の政治問題はすべて憲法によって決まり、立憲政治を形成すると説く¹⁰⁸。普選問題に対しては、憲政会の功利主義的態度（理想と原理はない）と政友会の素朴的経験論（厳密な事実調査がない）をともに批判し¹⁰⁹、理想合理的普選問題においては、論理と実践、及び試行錯誤がともに必要であると述べている。そしてさらに、外交問題についても、国民的外交から文化的、民間的多元外交を志向し、文芸問題における歪曲を指弾しつつ、全人的生活（人格）に基づく万人のための文芸を実現することを建言している。

最後の章である「ナショナルギルドの社会論の文化主義的修正」では、杏村はナショナルギルドの主張は、「我々が主張して居る社会思潮の文化主義とは、（中略）其の外観だけには余程類似的のものを持って居る様である」¹¹⁰とし、「此の両主張共に単なる破壊的の要求ではなくして、其の根本的の要求は社会建設にあり、其の方法は（中略）現実性に立脚して居る。調和・統一の点においても両者は一致している」¹¹¹と、「ナショナルギルドは現今考察せられて居る社会理想論の中では最も建設的、穏和的、諧調的のものであり、実行の可能性のより大いなるものであるに相違ない」¹¹²と認めている。しかし、そのうえで、彼はそれを次のように批判する。

ナショナルギルドには哲学が無い。（中略）其れは社会の理解に於いて、特に国家の理解に於いてアトミスティックである。其れはアトミズムが持つて居るすべての欠陥を負荷して居る。（中略）其れは一種の折衷派の哲学及び社会論であるより外は無い¹¹³。

我々は、（中略）より厳密に国家の意義を限定しなければならない。それは即ちカント化せられたる独逸社会主義者の国家観でもあった¹¹⁴。

ここで杏村は、新カント派マールブルク学派¹¹⁵の創設者コーエン（Hermann Cohen、1842-1918）の国家観、すなわち国家は個人の単なる集合ではなく、個々人の意志の体現でもあるという立場に同調する。

コーエンの国家観は全く其の数学観から出て来たことが分かる。即ち彼は国家という全を離れては、個人という単位は理解せられないというのである。此処に国家は決して「多」ではない。それは何処までも「多の統一」によって生ずる「全」である。この考えはさらにナトルプによって発展せられ、（後略）¹¹⁶。

全体性は単位性と多性とを止揚せしめたる、より高度の实在なのである。人間という

言い表し方は単数的と複数的と二義性の解釈が可能であるとするならば、其の二義性は全然的に排斥する其れではなく、全体性を言う時すべて其の中に包容せられて了う其れである。この全体性 (Allheit) こそは国家であり、多性 (Mehrheit) は何等国家と言わる可きもので無いのである。国家の本質を多性の立場から理解しようとする誤れる国家論を我々はコレクティヴィズムと呼んで居る¹¹⁷。

これに対し彼は、ギルド社会主義の国家観は単なる「多性 (Mehrheit)」に基づく、ルソーの集団主義を継承したものであると見る。

近世に顕著なる国家論を為した諸学者の中、コレクティヴィズムの見地を脱しようとして未だに完全に其れを脱却するを得なかつた主張者の最大なるものを我々はルソオに見る。ルソオは実に国家の人的統一の概念をば、統治的国家力と人民の「普遍的意志」 (general will、筆者注) との合一融合によって非常に深めていった。而して彼は卓越的にも、国家をば一の「公人」 (personne publique) として理解し、其れ自身の意志と、其れに固有した「我」とを、全人民に対して共通的に持って居るとした。しかもなお彼は進んで国家人格性をば純粹概念的に理解することを知らず、其の根拠を人民の「集結体」の力と妥当性の上に求めるだけのことであった。換言すれば、国家の意志は人民の意志以外に存するのではなく、其れは人民の多数を占める意志によって決定せられるとした。此れ即ちルソオの所説が一の進展せざるコレクティヴィズムの上に立脚する所以である。ギイルケもキスチアコフスキイも、ルソオのこの点を批難し、以て統一的意志としての国家論を建設したのは所以あることである¹¹⁸。

然るに現代になって再びルソオのコレクティヴィズムを採用しようとする学者がある。それは即ちナショナルギルド思想の主張者であるコオルである¹¹⁹。

すなわち杏村は、国家は国民の生活を保護する一機関ではなく、国民の意志の反映であり、価値をも担保する「共同体」でなければならないことを説いているのである。これは新カント派のコーエンからの影響でありながら、この時期における杏村自身の「汎価値主義」的立場の表れとも言えよう。すなわち、彼は国家にある種の形而上学的価値を賦与しようとしたわけである。これはまさに、ラッセルと反対する立場である。おそらく杏村自身もこの点に気づいていたのであろう。1921年8月3日の日刊紙『Japan Chronicle (ジャパクロニクル)』に掲載された、杏村宛てのラッセルの返信には、面白い一段がみられる。

I do not believe in the 'general will'. I think it is a fiction. In philosophy I am an atomist. Even the individual seems to be already a complete logical structure. I think all government is essentially the imposition of the will of the strong upon the weak. (わたくしは「普遍的意志」を信じません。作り話だと思います。哲学においてわたくしはひとりの原子論者である。(この立場から言えば)たとえひとりの個体にしても、すでにひとつの複雑なる論理的構造である。すべての政府が本質的に、弱者の上に強者の意志を押し付けるものだと思います。) ¹²⁰

両者のズレは明らかであった。ラッセルはまさに杏村が批判しているアトミストであり、いわゆるルソー的「普遍的意志 (general will)」を、真っ赤な嘘で、国家を暴力機関しか見ていない立場をとったのであった。国家は、国民の「普遍的意志」の代表者であるべきか否か、すなわち「国家」に形而上的価値を付与すべきかどうかについて、両者は真っ向から分岐しているのであった。

「国家」の位置づけという分岐点を別にして、ラッセルはまた、特定の哲学をもって政治理論および政治実践の普遍的基礎としている「基礎付主義的」な試みは、異なるカテゴリを処理する原則の混淆として強く批判している。例えば彼は『The Practice and Theory of Bolshevism』において唯物史観を批判する際に、「人間性の具体的事実依存している問題を決定するのに理論的哲学の議論が用いられたりする (中略) ような混同は、哲学と政治学の双方にとって有害であり、それを避けるのが重要である」¹²¹と指摘した。さらに次のようにもいう。

政治理論を哲学理論の上に基礎づけようとするのは、もう一つの別の理由からも望ましくない。哲学的な唯物論がいやしくも真実であるとすれば、それはすべての所で、常に真実でなければならない。それにたいする例外がある、例えば仏教やフス派の宗教改革運動は例外であると、期待してはならない。そのため、ある哲学の帰結として政治をやっている人は、その哲学の政治への適用において絶対的で全面的であり、歴史の一般理論はせいぜい、全体として、主要な点で真実であるとしか言いようのない性質のものであることを認められないであろう。マルクス主義的共産主義の独断的性質は、その理論の哲学的基礎とされているものに支持されているのである。そこには、カトリック神学に見られるような固定された確実性がある。近代科学における常に変化する流動性、懐疑的な実際性がない¹²²。

すなわち、特定の哲学を用いて、非合理性が大半を占める人間生活を考える社会科学あるいは政治実践の認識枠とし、その認識枠の規定より、人間生活を改造しようとする企図は極めて有害であり、やがてドグマに陥てしまうというのは、ラッセルの立場であった。これはまさに、杏村が『文化主義原論』のなかで犯した過ちであった。

まとめるならば、『文化主義原論』全篇において杏村が目指していたのは、学術におけるあらゆる特殊科目だけではなく、実践におけるすべての制度・政策にも、「文化主義」をもって基礎付けようとする作業である。そこから看取できるのは、大戦後日本の内外的危機、とりわけ近代国家として成立して以来、倫理・価値の失範という近代性の危機に対応した、杏村青年のラディカルな処方箋であった。「生の哲学」を基底とし、新カント派の「価値哲学」を中核としたその理論体系は、倫理・価値への大きな傾斜が見られ、これは一種の「汎人格主義」、「汎価値主義」的な、観念論的形而上学体系と見てもよいであろう。しかし、杏村にとっては、「科学」と「人文」の融合もまた至急の任務の一つであった。「科学」が代表する自然的価値を、捨てざるか、拾いあげるのかの間に動揺した杏村は、「文化主義」の定義における論理的アポリアに陥る。これもまた、日本の「近代」自体が抱えたアポリアだったのではないだろうか。

おわりに

本章では主に、近代日本の諸問題をめぐって、ラッセルと土田杏村という、東西二人の知識人の思索を関連付けながら検討してきた。1922年の著述『The problem of China (中国の問題)』でラッセルは、近代日本を、その師ともいべき「西洋近代」の産業主義・帝国主義から生まれた、ひとりの奇形児であったと見ていました。大陸に遠く位置する島国の「孤立主義」とその延長上にある文化的内向性は、歴史を貫く「高圧的政治」と「従順な民衆」という政治伝統を生んだ。かかる内在的平衡は列強による侵略への危機感によって破られ、そこからの防衛を意図するなかから取り入れられたのは機械的、没価値的な「文明」であった。近代化への原動力を西洋の圧力にもち、これに対抗するために樹立した新政権の正当性を天皇の復帰・神化に求め、国民を神道という土着的・民族主義的宗教へと強制改宗することで、天皇崇拜のもとに動員・集結していったという日本の近代化過程によって実ったのは、全体主義・帝国主義という悪の花であった、というのはラッセルがみた近代日本の姿である。そこでラッセルはこの偏向を牽制するために、さらなる「強烈な西洋化」、すなわち西洋の宗教・道徳・倫理といった、形而上学の摂取という処方箋を準備する。

一方、日本の青年知識人・土田杏村は、ラッセルから人格的に影響され、またラッセル

の来訪を機に彼との直接交流を通してその感化はさらに深まりました。前述したラッセルの問題意識と平行に、時代の潮流を敏感に感じ取って、国の進路を憂慮している杏村は、1921年の『文化主義原論』という著述で、「文化主義」という汎価値主義的な形而上学体系をもって、「近代」の問題を解決し、日本国家の「改造」を目指そうとした。しかし彼は時代の子であり、「歴史的存在」であった。大きな歴史的偏向は、個人によって匡正され得るようなものであろうか。むしろ、「共同体」の「一般意志 (general will)」を「国家」に託そうとしたその形而上学は、国の進路にさらなる偏向を与えかねない力として加担していくように見える。アウトサイダーとインサイダーという視線の差が織り成す光景から、我々は何を見出すべきなのであろうか。

¹ 拙稿「「東アジアの覚醒」と「大正デモクラシー」の相克と相乗 ——大正期メディアにおける三一・五四運動への認識を手がかりに」（『日本思想史研究会会報』33、143-163頁）、143頁。

² 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』誠文堂新光社、1982、79頁。

³ 大正期に長野県上田・小県地方に開設された民衆教育機関。1924年2月に上田自由大学と改称。1921年11月、地域で創造的に生きようとする3人の農村青年、金井正、山越脩蔵、猪坂直一が推進者となり、これに在野の哲学者土田杏村が協力して発足した。自由大学は農閑期を利用して民衆が労働しつつ生涯学んでいく民衆大学として構想され、講師には土田杏村をはじめ、タカクラ・テル（高倉輝）、新明正道、恒藤恭、谷川徹三など新進気鋭の学者が参加した。自由大学運動は、長野県、新潟県その他の地方都市や農村に波及し、24年には各地の自由大学の連絡組織として自由大学協会がつくられ、25年からは『自由大学雑誌』が刊行された。上田自由大学は、地域の青年たちの学習の拠点として大きな役割を果たしたが、急激にファシズムへ傾斜する社会情勢のなかで、また養蚕業の不況の深刻化や官憲の弾圧などの要因に災いされて、31年には消滅した（山野晴雄「信濃自由大学」、『日本大百科全書』、小学館、1994）。

⁴ 清水正之『日本思想全史』ちくま新書、2014、370-371頁。

⁵ 現在、土田杏村に関する最も基礎的な研究、すなわちその個人研究だけに限ってみても、彼が残している著述の量と質（1914-1934年の間では、刊行著作だけでは61点、ほか個人雑誌『文化』を発行し、雑誌論文などを含めて合計して6000点以上に達している）とに比して、はるかに遅れていることは衆目一致するところである。史料の面から見てもかなり不備があるのが現状といえよう。例えば杏村の没後の1935年から36年にかけて、『土田杏村全集』全15巻が第一書房より出版されたが、清水真木氏の指摘によれば、これは「全集」という文字を表題に掲げているにも関わらず、杏村の全著述の3分の1しか収められず、また書誌の遺漏と杏村の卒業論文であり、初めての著述でもあった『象徴の哲学』（1918）が未収録（当時の編集者・務台理作が全集から締め出したという）という大問題があり、そして代表作の選別や同時代人の誤読など、現在杏村の業績をまとめている唯一の刊行物であるにも関わらず、多くの問題があることが分かる。そしてなぜか杏村は、1970年代に

上木敏郎氏によって「再発見」されるまで、長い間忘れさられていた。こうした状況に対し、上木氏はまず杏村に関する史料蒐集を始め、個人雑誌『土田杏村とその時代』(1966-1972 (1-16)、1989 (17、複1号にあたる)、計17号)を自費で出版し、その業績を『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』(誠文堂新光社、1982)という一冊にまとめた。2004年に、大木康充氏は博士論文、「土田杏村の文化主義と時代思潮」を提出し、また同年山口和宏氏は『土田杏村の近代 文化主義の見果てぬ夢』(ペリかん社、2004)という「トータルな杏村論」を上梓した。また去る2016年には、川合大輔氏がその博士論文をまとめて、『土田杏村の思想と人文科学 1910年代日本思想史研究』(晃洋書房、2016)を上梓し、これは杏村に関する最新の著述と言えよう。

⁶ 前掲上木敏郎『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』、160頁。

⁷ 同上、160-162頁。

⁸ 日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、理想社、1971、172頁。

⁹ 同上、173頁。

¹⁰ 同上、172-176頁。

¹¹ バートランド・ラッセル「愛国心の功過」改造編集部訳、『改造』3(1)、1921.1、3-14頁。

¹² 同「現下の混沌状態の諸原因」改造編集部訳、『改造』3(3)、1921.3、2-22頁。

¹³ 同「社会組織良否の分岐点」改造編集部訳、『改造』3(4)、1921.4、179-197頁。

¹⁴ 同「工業主義の内面的傾向」改造編集部訳、『改造』3(9)、1921.8、2-16頁。

¹⁵ 同「工業主義と私有財産」改造編集部訳、『改造』3(10)、1921.9、71-80頁。

¹⁶ 「ラッセル教授は、講演「文明の再建」で何を語ったか」『読売新聞』1921年7月31日付き、日曜付録。

¹⁷ 同上。

¹⁸ 前掲日高一輝訳『ラッセル自叙伝』、175頁。

¹⁹ 同上。

²⁰ バートランド・ラッセル、牧野力訳『中国の問題』、理想社、1970、23頁。

²¹ 同上、19頁。

²² 同上、23頁。

²³ 同上、22頁。

²⁴ 同上、72-73頁。

²⁵ 同上、114頁。

²⁶ 同上、134-135頁。

²⁷ ラッセルの日本史の知識は主に、ジェームズ・マードック (James Murdoch、1856-1921) の『日本歴史』の前の二巻 (A History of Japan (1) - From the Origins to the Arrival of the Portuguese in 1542, Kegan Paul, 1910. A History of Japan (2) - A History of Japan, dealing with the century of early foreign intercourse, 1542-1651, Japan Chronicle, 1903.) をからきっている。

²⁸ 前掲牧野力訳『中国の問題』、100頁。

²⁹ 同上、103頁。

³⁰ 同上。

³¹ 同上、103-105頁。

³² 同上。

³³ 同上、109頁。

-
- ³⁴ 同上、113 頁。
- ³⁵ 同上、113-114 頁。
- ³⁶ 同上、117 頁。
- ³⁷ 同上、118-119 頁。
- ³⁸ 同上、119 頁。
- ³⁹ 同上、118-119 頁。
- ⁴⁰ 同上、123 頁。
- ⁴¹ 同上、137 頁。
- ⁴² 同上、11 頁。
- ⁴³ 同上、100 頁。
- ⁴⁴ 同上、137 頁。
- ⁴⁵ 同上、137-138 頁。
- ⁴⁶ 同上、131 頁。
- ⁴⁷ 同上。
- ⁴⁸ バートランド・ラッセル、趙文鋭訳『中国之問題』中華書局、1924。
- ⁴⁹ 長岡克暁「ラッセル氏ノ新著『支那ノ問題』ヲ読ム」（山口高等商業学校）『東亜経済研究』7（1）、1923、210-222 頁。飯塚浩二「ラッセル著『中国の問題』第4章 「現代日本」について」飯塚浩二『比較文化論』白日書院、1948、序文として収録。
- ⁵⁰ 大橋容一郎「桑木巖翼における「新」カント主義と「新カント学派」——リールとヴィンデルバントによる心理主義の超克」『思想』1126、2018、105 頁。
- ⁵¹ 宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』4、2005、83-104 頁。
- ⁵² 同上、87 頁。
- ⁵³ 同上。
- ⁵⁴ 同上、90 頁。
- ⁵⁵ ベルクソン、土田杏村訳「夢」『新評論』2（4）、1915.2。
- ⁵⁶ 前掲上木敏郎『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』、79 頁。
- ⁵⁷ 『文化運動』100、1918.11。
- ⁵⁸ 土田杏村『文化主義原論』内外出版、1921。
- ⁵⁹ 土田杏村「マルクス、ラッセル及び文化」『文化』1（2）、1920.2。
- ⁶⁰ 土田杏村訳「自由人の崇拜（ラッセル）」「哲学の価値（ラッセル）」『文化』1（4）、1920.3。
- ⁶¹ 土田杏村「ラッセルの思想の根本的立場（上）——ラッセル研究の第一」同上。
- ⁶² 土田杏村「ラッセルの哲学」『改造』3（7）、1921.7、9-14 頁。
- ⁶³ 同上、9 頁。
- ⁶⁴ 同上。
- ⁶⁵ 同上。
- ⁶⁶ イギリスの哲学者 B. ラッセルの初期の思想を特徴的に示し、論理実証主義にも深い影響を与えた理論。論理分析によって、論理的に相互に独立し、認識からも独立しているアトム的事実に到達することができるとする。したがって論理的結合によってすべての事実が説明されうることになる。この汎論理主義的考えは、『哲学における科学的方法』（1914）で述べられているが、のちにL. ウィトゲンシュタインによって、それが標準的使用の枠外で用いられることから哲学的困難が生じることが示され、論理分析の万能性は否定され、

ラッセル自身も晩年には否定的となった（「論理的原子論 (logical atomism)」、『ブリタニカ国際大百科事典 小項目版 2017』、ロゴヴィスタ、2017）。

⁶⁷ 前掲土田杏村「ラッセルの哲学」、14 頁。

⁶⁸ 同上。

⁶⁹ 土田杏村「『文化学的研究』刊行の趣旨に就いて——『象徴の哲学』序」前掲『土田杏村全集』、176-177 頁。

⁷⁰ 同上、178 頁。

⁷¹ 同上、182 頁。

⁷² 同上。

⁷³ これらの投稿文章は、のち杏村のはじめての単行書『文明思潮と新哲学』（廣文堂、1914）として刊行された。その出版事業を斡旋したのも、田中王堂であった（前掲上木敏郎『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』、36 頁）。

⁷⁴ 同上、31-35 頁。

⁷⁵ 同上、35 頁。

⁷⁶ 同上、36 頁。

⁷⁷ 同上、49-50 頁。

⁷⁸ 同上。

⁷⁹ 同上、55 頁。

⁸⁰ 土田杏村「綱領（『文化』発刊の辞）」（初出『文化』1（1）、1920年1月1日発刊）『土田杏村全集 第14巻』第一書房、1935、188-189 頁。

⁸¹ 前掲土田杏村『文化主義原論』、3 頁。

⁸² 土田杏村「文化学と社会学」（初出は『創造』1919年8月号）前掲『土田杏村全集』、159 頁。

⁸³ 同上、160 頁。

⁸⁴ 同上。

⁸⁵ 同上。

⁸⁶ 土田杏村は、前掲『文化主義原論』のなかで「エラン・ビタール」というタームを、政治哲学の解釈する際に多用している。

⁸⁷ 土田杏村「ラッセル氏の『産業文明の前途』」『文化』6（4）、1924.2、42 頁。

⁸⁸ 務台理作から上木敏郎宛てた手紙においての回想では、杏村は「西田先生の間人としての偉さ、強靱な思索力、青年への愛好の情——そういうものには無条件に敬服していたのですが、当の西田哲学の内容などについてはかなり批判的なものがありました」。二人は会うたびに論争していたという（前掲上木敏郎『土田杏村と自由大学運動 教育者としての生涯と業績』、43 頁）。

⁸⁹ 参考として『文化主義原論』の目次を以下で示す。

序論

第一篇 総論

第1章 社会改造の原理

損なわれたる現代人の表情／損なわれたる日常会話／生と死との原理／破壊すべき「貯蔵概念」／社会主義者の貯蔵概念／最も具象的な事実／価値と存在との二道／社会運動に於ける個人主義／幸福は理想たり得るや／自由と奉仕

第2章 民衆文化と文化主義

文化の語義／民衆文化の意義／価値に就いての一般の謬想／民衆文化主義の謬想／私の文

化主義

第二篇 経済理想論

第3章 経済理想論の新建設

経済哲学のカント化／ギルド社会主義の中心思想／新経済学の立場、労働概念の改造

第4章 経済理想論上の快樂説

享樂主義の批判／自然主義対文化主義／文化生活論との区別／森本博士の文化生活論／文化生活が先決問題なりや／生産の過多と労働能率問題／労働問題の目標／労働と精神修養／社会的正義／経済活動の意義／労働遊戯化の意義

第5章 経済理想の自律性

カーペンターの懐古主義／ギルド社会主義の中世復古主義／文明は絶えず進歩する傾向を有す／文明の墮落を防ぐ

第6章 労働概念と理想主義

共産党宣言の文化批評／利害心と価値的精神／価値と幸福との区別

第7章 経済理想論と宗教

宗教と社会問題との関係如何／宗教の本質は何か、ウンデルバンドの論／リッケルトの宗教論、ミュンステルベルグの宗教論／形而上学的価値としての宗教価値／経済生活と価値生活／奉仕と自由／ウェルスの新世界／ペンティアーの旧世界／経済生活改造の方向

第三篇 文化主義政策論

第8章 社会改造の文化主義的方法

世界人心の不安／現実悲観の人心不安／理想樂觀の人心不安／社会改造の方法

第9章 法理哲学と文化主義

前独帝裁判の法理如何／現実法の解釈／正法上の解釈

第10章 政治哲学と文化主義

社会問題と哲学／思想の誤謬型／政治の形而上学化／政治上の経験論／論理の創造

第11章 排斥すべき外来思想

外来思想とは何ぞ／外来思想の排斥には理あり／外来思想の種別如何／存在を動かさんとする外来危険思想／文化に侵入する外来危険思想／哲学の範囲を奪取せんとする外来思想

第12章 統一文化の生活

傷つけられざる魂へ／一般文化学の意義如何／文化生活の分裂此れ現今の文明病／生活様相の相対的見地に立て／個々文化より文化理想へ、文化理想より人生観へ／青年の運動のみ生活を深化統一す／青年政治の実現、国家の黎明／我々青年は此く要求す

第13章 文化的外交の主張

第14章 芸術と社会問題

商業の世紀／芸術の商品化／芸術と社会問題／凡俗世相の写実主義／個人主義的天才主義の排斥／通俗文芸の問題

第四篇 唯物史観説批判

第15章 マルクス唯物史観と理想主義

基督再臨の問題／唯物史観のみを説く主張／河上博士の二元論／唯物史観と理想主義／理論と政策／此れに関する博士の諸論文／個人の努力の意義

第五篇 ギルド社会主義批判

第16章 ナショナルギルドの社会論の文化主義的修正

ナショナルギルドと文化主義との類似／社会論特に国家論に於ける差違／余の理解する国家観念／マーブルグ学派の国家観／コールの社会論に於ける個人意志／多元的社会観と機

能的原理／個人の承諾と自治／国家論に於ける修正

⁹⁰ 全 474 頁。

⁹¹ 前掲土田杏村『文化主義原論』、14-15 頁。

⁹² 同上。

⁹³ 同上、8 頁。

⁹⁴ 同上、99 頁。

⁹⁵ 同上、42 頁。

⁹⁶ 同上、54 頁。

⁹⁷ 同上、79-80 頁。

⁹⁸ 同上、83 頁。

⁹⁹ 同上、89 頁。

¹⁰⁰ 同上、131 頁。

¹⁰¹ 同上、282 頁。

¹⁰² 「価値哲学」は、「価値」とはなにか、それはどのようにして認識されるのか、価値と事実との関係、価値の体系や上下関係などについて研究する哲学で、ロツツェによって準備され、新カント学派の一つである西南ドイツ学派のウィンデルバントやリッケルトらによって樹立されたものである。19 世紀後半以降第 1 次世界大戦の時期にかけて、ドイツで栄えた価値哲学は、そのころ顕著であった伝統的な価値観の崩壊現象や自然科学的唯物論、実証主義に対決しようとしていたこともあって、われわれが体験する現実の生と価値とを徹底的に対立させる二元論を根本原理とするものであった（「価値哲学」、『改訂新版 世界大百科事典』、平凡社、2014）。

¹⁰³ 前掲土田杏村『文化主義原論』、26 頁。

¹⁰⁴ 同上、143 頁。

¹⁰⁵ 「貯蔵せられる得るものは「死」である。（中略）「死」の貯蔵は「死」其のまま何処へでも転移させられる事が出来、死せしものに死せしものを植え接ぐ事も出来る。其れが即ち「死」の定義であった。（中略）資本とは何であるか。経済学者は言っている。資本とは、過去の労働、若しくは厳密には過去の労働の産物の貯蓄であり、又同時に将来の生産に使用せられるものであると」（同上、29-32 頁）。

¹⁰⁶ 同上、143 頁。

¹⁰⁷ 同上、93 頁。

¹⁰⁸ 同上、229-231 頁。

¹⁰⁹ 同上、234-236 頁。

¹¹⁰ 同上、423 頁。

¹¹¹ 同上、426-427 頁。

¹¹² 同上、426 頁。

¹¹³ 同上、430-431 頁。

¹¹⁴ 同上、439 頁。

¹¹⁵ ドイツ語 Marburger Schule の訳で、新カント学派の中心的学派。カントの構成主義を發展させ、動的な純粹思惟の一元論を唱えることによって自然を歴史に媒介しようとした。創始者はマールブルク大学教授の H. コーエン。ナトルプ、カッシーラー、フォルレンダーらが代表者（「マールブルク学派」、『百科事典マイペディア』、ソースネクスト、2004）。

¹¹⁶ 同上、444 頁。

¹¹⁷ 同上、445-446 頁。

¹¹⁸ 同上、446-447 頁。

¹¹⁹ 同上、447 頁。

¹²⁰ Japan Chronicle (Daily ed.), Aug. 31, 1921, p. 5. 訳文は筆者による。

¹²¹ バートランド・ラッセル、河合秀和訳『ロシア共産主義』、みすず書房、1990、80 頁。

¹²² 同上、81 頁。

終章 未完の問い

私がおかしな夢を見たのはこんな時だった。私たちは小さなボートに乗っていて激流に押し流されていた。私は舳先に跪き、舟を沈める障害物を流そうとしていた。パーティーは立ちながらあたりの騒音よりもっと声高に、荒れ狂う川に向かって熱弁をふるっていた。「これはよい演説だった？」と彼が叫んだ。「ええ、でも誰かそれを聞いたと思っているの？」と私が叫び返した¹。

ドラは、ラッセルとともに北京に滞在したときの、とりわけラッセルの『The Practice and Theory of Bolshevism』が四方から批判された時期のことを回想して、自叙伝にこのように綴った。それは、この訪問に向けたひとつの隠喩として見ることもできよう。一旦書かれてしまったテキストが、どのように読まれ、拡散していくのは、原著者が十全に意図し得るところではない。人々はその著作を、それぞれにおかれた状況とコンテキストのなかで読み、解釈していく。「極端な時代」の幕開けにある20世紀の初頭において、人々の目に見える、あるいは目を向けさせられた状況とは、戦争、混乱、飢餓、滅亡であり、「すべての人が難破船の上で…各人が他人を押しやり突いたりし、各人が積荷全部を救う新しい方法を提案しながら、いつも自分だけが無事に逃れようとひそかに計画しているだけ」²であったかもしれない。かかる混乱と焦燥のなかにあっては、ひとつの道を固く信じ込み、これに縋ったほうが、楽である。もちろん、こうした環境でもなお自らの「内的平穩」を守り、真摯な対話を求めようとする人もいたが、それは余りにも少なかった。人々は、自ら信じる道を突き進むのが、常であった。

本稿は1920年から1921年にかけて哲学者バートランド・ラッセルが大戦後のロシア・中国・日本を訪問、また滞在したことを、子安宣邦氏がいうところの「思想史的事件」と定義し、この「事件」を当該期の日・中両国のメディアと知識人からの反響だけでなくラッセル自身におけるこの経験を通しての思想変化をも視野に入れつつ、トランスナショナルな視座に基づくテキスト分析によって、立体的に描こうとしたものである。

研究史を回顧すれば既存の研究は、ラッセルの訪問と中国の近代化という視点に立つものか、あるいは大正期日本の思想界における偶発的で、「西洋かぶれ」的なエピソードとして捉えるものか、いずれにしてもそれぞれに一国史的視座から語られてきた。前者は、ラッセルが「宣伝」した「ギルド社会主義」がいかに民国の初期マルクス主義者に批判され、「社会主義論戦」によって敗れたかということを中心に展開し、前記の一国史的視座にくわえ、目的論的な叙述傾向を帯びるものであった。後者は主に、ラッセルの日本訪問を焦点にして、ラッセルの哲学や政治理論自体は日本に根付かなかったことを指摘することで、「大正デモクラシー」という潮流の皮相さを表す一つのエピソードに過ぎないと過小評価する場合が多かった。

しかし、すでに前章まで述べたように、ラッセルの哲学・政治理論及び国際時論は、当該期日・中両国のメディアと知識人によって咀嚼・伝播され、両国の近代思想史上に大

きな足跡を残していく。また一方、ラッセル自身もこの一年余りの露・中・日訪問を通じて、「東西文明」ひいては彼が生きる時代自体についての思索を深め、それは著作としても結実していった。これらの点、とりわけ後者、すなわちラッセル自身がこの訪問を通して得られた識見に対して、先行研究ではほとんど扱われていない。

こうした研究状況から本稿は二つの視点を導くことができる。まず、この訪問が双方向的な効果を生んだことである。先行研究は、ラッセルがいかに受容されたかばかりが語られるが、実際には、この訪問からラッセル自身も大きな影響を受けていた。よって「事件」としてのラッセル訪問を考える際には、こうした視点を見逃すわけにはいかない。次に、この「事件」が典型的なトランスナショナルな「思想的な事件」であったということである。とすれば、それを論じる際には、越境的かつ共時的視点をもって行わなければならない。

かかる問題関心および先述した研究史の余白を鑑み、本稿では横軸にラッセルの思想変化を置き、縦軸として日・中両国のメディア・知識人のまなざしに目配りすることによって、より複線的かつトランスナショナルな叙述を試みた。かかる視座からこの「事件」を見つめ返し、それを複雑系としての歴史的な脈に還元することこそ筆者の意図であり、本稿の意義でもある。

本稿の議論をまとめるならば、第1章「B・ラッセルの「露・中・日訪問」及び1920年代初頭の東アジア」では、第一次世界大戦後の東アジアという混沌とした歴史世界から、「ラッセルの訪問」を一つの越境的歴史事象として取り上げ、その思想史における意義及び成立の条件と背景を追跡した。日本国内で未出版の『欧遊心影録』『The Collected Papers of Bertrand Russell (バートランド・ラッセル論文集)』などといった史料類、また当事者の回想文などを追跡して検証した結果、大戦後の東アジアという共通する状況を背景に、日中両国の知識人は各自の関心より行動しつつも、互いの協働を通してラッセルの両国訪問を実現させたと言える。梁啓超をはじめとした「研究系」知識人は、ヨーロッパ遊歴後の体験に基づく西洋文明への批判的考察から、「東西文明の化合」を企図し、青年学生・国民を啓蒙する目的でラッセルを招聘していく。一方、日本の改造社は、梁たちのグループとのネットワークを保持していたという前提のもとで、自らの総合インテリ誌としての地位を高め、また大正期日本の思想界に新思想を紹介するという目的をもってラッセル招聘に動いた。「ラッセルの訪問」という一見孤立した歴史事件ではあったが、その背後には無数の人々の思惑と行動が交錯し、しかもそれは、トランスナショナルなインタラクションなくしては決して成り立たないものだったのである。

第2章「「文明」を守護する異端者——B・ラッセルが求めたもの」では、第一次世界大戦の戦中および終戦直後（1914—1918）における、ラッセルの政治行動および期間中に刊行された4冊の政治論著述を分析対象に、その思想遍歴を検討し、とりわけ日中の知識人から最も注目されていた、ラッセルの政治論を支える倫理的な核心——「衝動理論」の形成過程を見た。大戦を「文明諸国」の相互虐殺を通して「ヨーロッパ文明の消滅」をもたらすものと危惧していたラッセルは、開戦当初より、反戦の立場を取っていた。史上未曾

有の総力戦を引き起こした原因は、「衝動」を抑えつつ歪めてきた経済（私有財産制）・政治（国家の集権）制度にある一方、科学における倫理的価値の没却と、政府・メディアの煽動によるものとラッセルは分析する。そして、その解決策としてはまず、抑圧状態にある人間の「衝動」を解放し、さらに私有財産や国家制度などに現れた、歪んでいる「所有的衝動」から、芸術や科学など、良性的な「創造的衝動」へと導くような教育と制度の改革、ならびに共同体の再建といった方法に可能性は秘められているという。こうした指導理念から、戦中の1916年までに、ラッセルが選んだ組織原理は、「産業自治論」と「労働組合」の政権掌握による国家の廃滅を目指したサンジカリズムであった。しかしその後彼は、こうした方法では、労働者階層の利益のみを強調し、組合団体間の権力闘争も避けられないと見て、サンジカリズムを放棄していく。1917年より戦後に至り、ラッセルは「産業自治論」を継承しつつ、社会の各階層の利益を調合することを目指し、かつ国家権力にも一定の協調性を示す「ギルド社会主義」を擁護するようになった。彼はギルド社会主義を、（国家）社会主義、無政府主義、サンジカリズムと比較し、国家権力の分散と社会秩序の維持に最もバランスをとった思想として、また現代の産業システムが生んだ個体の疎外を治療し、自治のもとで個人および地方共同体に再び活力を与えられる思想とみてこれを擁護する立場を打ち出したのである。彼は、その依って立つ組織原理を求め転々としたように見えるが、彼の探求は一貫して、個人およびその共同体の「消極的」自由と共存、ひいては人類諸文明の多様性の持続と保存という、「多文明」的立場によるものであった。これもまた彼の倫理学の核心的価値の所在であると確認できよう。

第3章「新しい宗教」とロシアの失敗——ラッセルのボリシェビズム論とそれが惹起した波瀾」では、ラッセルの訪露後の著作『The practice and theory of Bolshevism（ボリシェヴィズムの理論と実践）』（1920）の論点をまず分析し、さらにこのテキストの日中両国での伝播・受容過程を考察した。時代の核心的議題であったロシア革命後の政権様式を実地で観察し、そして革命の理論構造を分析した彼の論説は、たちまち世の関心と知識人の議論を惹起した。この著述においてラッセルは、ボリシェビズムに対して、まず自らの倫理的信条と完全に反するため擁護できないことを説明し、次に史的唯物論・マルクス主義経済学への論理的分析を通して、マルクス主義ひいてはボリシェビズムが論理的誤りを内包しているにも拘らず、弁証法のロジックから発達した宗教的な力を梃に、強く人心に訴えられるという一種の「新しい宗教」であると論断した。それは、ロシアという特殊条件のもとでは、その歴史的必然性と意義を評価され得る一方、西欧の政治改革者にとって採るべき方法ではないと結論している。しかしのちその訪中の経歴や中国の人々との接触を通してラッセルは、ボリシェヴィズムに対する態度は当初より柔らかくしたようにも見受けられる。やがて1921年6月中国を離れる前に、産業後進国のための急速な近代化手段として、ボリシェヴィズムを中国人に勧めた。

一方でラッセルのボリシェビズム論に対して、日中両国における反応は、おおよそ二つの段階に分けてみることができる。第一段階では、ラッセルの議論に最も敏感に反応したのは、マルクス主義者たちであった。これら初期の反響はほぼ学理ぬき、階級的立場を先

行させた批判・嘲弄一色のものであった。これは一方で時代状況によるが、他方でコミンテルンの極東工作与密接に関わっていた。当時において一般的であったロシアの実情に対する無知と左派内部でのロシア革命への同情があつて、さらにコミンテルン極東支局から両国への働きかけによって、最初の段階で見られた論評はほぼ階級的視点からの批判となつたのは、考察の結論であつた。しかしラッセルが両国を実際に訪れ、両国の知識人が彼とじかに接触し交流を持ったことにより、より価値中立的な、あるいは学理的な論説も見られる第二段階へと入る。これらは主にラッセル本人と直接接触し、また党派闘争やプロパガンダ戦から相対的に距離をとっていた知識人によって担われた。民国では「研究派」に属していた張東蓀、日本では在野の知識人・土田杏村がその代表であつたといえよう。両者にも、もちろん自らの立場による先入観はあつたものの、いずれもラッセル自身の考えに積極的に接近し、相手の話を先に受け入れ、相互的対話を行おうとしていた。なお両国での議論は、マルクス主義・ボルシェヴィズムめぐって理論的論戦よりは、自国の政治実践および近代化の過程と方法と密接に関わっていることは確認できた。

第4章「「小国寡民」論と「共産主義体制」——長谷川如是閑とラッセルの交錯」では、ラッセルの中・日訪問前後の、両国における関連言論・出版物への書誌的研究を通して、両国のラッセルの受容過程の異同を比較したうえで、ラッセルが中国滞在を通して、その心境と理論の変化を検討してみた。かかる受容側の書誌追跡作業を通して、両国におけるラッセルの受容方式の異同を比較し、両国言論界・知識界が共通する関心のもとでラッセルを受容した面がみられる一方、当該期各国の「近代化」段階の差違から、それぞれの現実問題に応じた形での受容も観察することができた。当該期の民国思想界は啓蒙的性質を多く帯びた「新文化運動」後期の時点にあり、そのためラッセルの「分析哲学」および連帯する論理的方法論は、「科学」パラダイムの全面推進とセットで受け入れられ、この支流はのち30、40年代以降、清華大学を中心とした、中国現代哲学の形成と密接な関係をなしていく。一方で内外戦争の渦中における近代主権国家の創立という政治的情勢を背景に、当時盛んであつた新たな国家像をめぐる知識人間の論戦状況という文脈からもラッセルの政治理論は受容された。

時期を同じくして、「大正デモクラシー」期にある日本の思想界では、権力分散・民選政治の樹立を目的とする政治的文脈のなかでラッセルが紹介されたと見ることができる。当該期「多元的国家論」の支脈になるギルド社会主義、ホブハウス理論の紹介という形で、ラッセルの政治論は流入した。その中で、思想家・ジャーナリストの長谷川如是閑は、ラッセルの理論を敷衍しつつ、そこから自らの中国改革論を打ち出した点で、極めて特殊な存在であつた。しかし、その理論は、資本主義体制の導入と発達を前提としたものであつたため、未だ主権すらない民国の実状に適しているものとは言えなかつた。これはむしろ如是閑が日本の近代化路線に求めていた願望を、その中国改革論に託し、隠喩したものであつたといえよう。

これと対照的に、実際に大陸を訪れたラッセルは、中国の近代化に対して、最初の持論であつた資本主義体制の優先創立から、中国を離れる直前において示した「共産主義体制

論」へと、転向していったことが確認できた。また彼自身の根本的問題意識である、世界混乱の原因、また工業主義に基づく近代西洋文明の反省と再生に対して、ロシアと中国という二つの農業帝文明の残骸を見ることで一つの答えを見つけたといえよう。この答えは、日本を経験したことでさらに確固たるものへと発展し、ついに 1923 年の著述『The Prospects of Industrial Civilization (産業文明の前途)』へと結晶していくことになる。

第 5 章「社会改造と文化主義の間——土田杏村における新カント主義とギルド社会主義」では近代日本の諸問題をめぐって、ラッセルと土田杏村という、東西二人の知識人の思索を関連付けながら検討してみました。1922 年の著述『The problem of China (中国の問題)』でラッセルは、近代日本を、その師ともいうべき「西洋近代」の産業主義・帝国主義から生まれた、ひとりの奇形児であったと見ていた。大陸に遠く位置する島国の「孤立主義」とその延長上にある文化的内向性は、歴史を貫く「高圧的政治」と「従順な民衆」という政治伝統を生んだ。かかる内在的平衡は列強による侵略への危機感によって破られ、そこからの防衛を意図するなかから取り入れられたのは機械的、没価値的な「文明」であった。近代化への原動力を西洋の圧力にもち、これに対抗するために樹立した新政権の正当性を天皇の復帰・神化に求め、国民を神道という土着的・民族主義的宗教へと強制改宗することで、天皇崇拜のもとに動員・集結していった日本の近代化過程によって実ったのは、全体主義・帝国主義という悪の花であった、というのはラッセルがみた近代日本の姿である。そこでラッセルはこの偏向を矯正するために、さらなる「強烈な西洋化」、すなわち西洋の宗教・道徳・倫理といった形而上学の摂取という処方箋を準備する。

一方、日本の青年知識人・土田杏村は、ラッセルから人格的に影響され、またラッセルの来訪を機に彼との直接交流を通してその感化はさらに深まった。前述したラッセルの問題意識とはパラレルな形をとったとはいえ、時代の潮流を敏感に感じ取って、国の進路を憂慮している杏村は、1921 年の『文化主義原論』という著述で、「文化主義」という汎価値主義的な形而上学体系をもって、「近代」の問題を解決し、日本国家の「改造」を目指そうとした。しかし彼は時代の子であり、「歴史的存在」であった。大きな歴史的偏向は、個人によって匡正され得るようなものであろうか。むしろ、「共同体」の再建を国家に託したその形而上学は、国の進路にさらなる偏向を与えかねない力として加担していくように見える。

以上は本稿の主な内容であった。時系列的に歴史事象を検討する作業から筆者が痛感したのは、刻々と変化していく時代の流れと、瞬間瞬間に激しく変わっていく「状況」、そしてそれに応じた、当該期の人々の言説と思索を追跡することの困難さである。さらに、ひとりの「歴史的存在」としての筆者も、自身のアプリオリな立場や、不完全な認識水準から免れ得ず、とすればかかる立ち位置から、複合的・流動的な歴史事象および言説を分析し、ある種の結論を導き出すことが果たして、従来の固定化したイメージを相対化することにつながるのか、それとも、もう一つの固定化したイメージを生産したに過ぎなかったのか、いまだ結論が出せない。これまでの先行研究より生まれた成果を吸収・揚棄する

うえで、「日中戦争」→「日中関係」→「国際政治」といった単線的・目的論的・国民国家的認識枠を相対化することを、一つの自覚的な課題としている筆者は、前記の作業を通して、これまでに未発見の材料の発掘や、ある程度研究史上の余白を埋めることはできたとはいえよう。しかしそれが当初目指していた、歴史を動かす重層的な要因を照射することは、結局のところ達成できたのだろうか。これらの疑問は、未完の問いとして、10年後、20年後の自分に残しておきたい。

¹ ドラ・ラッセル、山内碧訳『タマリスクの木 ドラ・ラッセル自叙伝』リプロポート、1984、211頁。

² 同上、210頁。

付表1 B・ラッセルの訪問日程（1920-1921）

時間	場所	行程	メディアと知識人の反応
1920. 5. 11	ペトログラード	詳しくは「付表2」ご参照	張東蓀「ラッセルの政治理想」『解放と改造』第1、2号合巻 1919. 9 張崧年「ラッセルについて」『晨報』副刊、1919. 12. 1 張崧年「ラッセル」『学灯』1919. 12月号 デューイ講演「現代の三人の哲学者」『晨報』副刊 1920. 3. 23-3. 27 土田杏村「マルクス、ラッセル及び文化」『文化』1920. 2月号 張崧年「ラッセルと人口問題」『新青年』7-4 1920. 4 土田杏村「ラッセルの思想の根本的立場（上）ラッセル研究の第一」『文化』1920. 4月号
1920. 5. 16-5. 27	モスクワ	詳しくは「付表2」ご参照	
1920. 6. 16		帰国	
1920. 10. 12朝	上海港	到着	特集「ラッセル」張崧年等『新青年』8-2 1920. 10. 1 石橋湛山「ラッセルの露国観」ほか『小評論』1920. 10. 9
1920. 10. 13夜	上海 大東旅館	7団体歓迎会において答辞	張崧年「ラッセルの哲学研究法」『東方雑誌』17-20
1920. 10. 14	上海呉松中国公学	講演「社会改造の原理」	
1920. 10. 16	上海 江蘇省教育会	講演「教育の効用」	
1920. 10. 19	杭州 浙江第一師範	講演「教育問題」	
1920. 10. 20夜	上海 一品香飯店	江蘇省教育会の宴会において講演	
1920. 10. 21	南京 中国科学社	講演「アインシュタイン引力新説」	
1920. 10. 26-27	長沙 湖南省教育会	「ボリシェヴィキと世界政治」四回講演	

1920. 10. 27 -31 日		長沙から北京へ	
1920. 11. 7- 1921. 1 (毎 週日曜午前 の10時から 12時まで)	北京大学 第三院と 瑠璃廠高 等師範講 堂 (2回 目以降)	「哲学問題」十二回 講義	長谷川如是閑「ラッセルの社会思想と支那」 『読売新聞』11.6より7回連載 張崧年「ラッセル既刊著作目録初稿」「ラ ッセル既刊著作目録初稿(続)」『新青年』 8-3、8-4
1920. 11. 9	北京 国 立美術学 院	講学社歓迎会にお いて答辞	張東蓀「内地旅行から得たもうひとつの教 訓」
1920. 11. 10 -1921. 2 (毎 週水曜午後 の7時半か ら9時半ま で)	北京大学 第一院	「心の分析」15回 講義	堺利彦「お上品学者ラッセル」『社会主義』 1920. 11-12月号
1920. 11. 19 夜	北京 女 子高等師 範	講演「ボリシェヴィ キの思想」	
1920. 11. 28 - (二週ごと に)	北京大学	北京大学教授・傅銅 のもとで「ラッセル 学説研究会」が組織 され、それに参加	「羅素月刊」4期発行
			講演「社会主義についての討論」陳独秀 毛沢東「1920年12月1日付き蔡和森への手 紙」
1920. 12. 10	北京 中 国社会政 治学会	講演「未開発国家の 工業」	
1920. 12. 21 -1921. 3	北京大学	「物の分析」6回講 義	毛沢東 新民学会の新年大会における意見 陳独秀「社会主義批評」
1921. 2-3	北京 教 育部会場	「社会構造学」5回 講義(病気のため四 回目まで)	土田杏村「ラッセル氏はギルヅメンか」『文 化』1921年2月号 張崧年「哲学と数学の関係論文」『新潮』 1-2
1921. 3. 8- (毎週火曜 夜の7時半 から9時半	北京大学 第二院大 講堂	「数学論理」四回講 義 (1回目以降休 講)	

まで)			
1921. 3. 4	保定 育徳中学	講演「教育問題」	
1921. 3. 5-7		肺炎のため入院及び休養	訃報「思想界の巨星 ラッセル氏逝く」『大阪毎日新聞』3. 29 (横関愛造) 「支那におけるラッセル氏」『改造』2-12
1921. 7. 6	北京 教育部会場	講演「中国の自由への道」 (ドラ・ブラック) 講演「少年中国の男女」	
1921. 7. 7	北京	梁啓超、丁文江等と餞別	
1921. 7. 12	天津港	出発	
1921. 7. 16 朝	門司港	上陸せず	胡適「ひとりの哲學家」1921
1921. 7. 17 正午	神戸港	到着	
1921. 7. 18	神戸 阿弥陀寺	演説会に出席、約千名の労働者の前で短く講演(賀川豊彦通訳)	
1921. 7. 21	京都 都ホテル	改造社主催の歓迎会に出席し、京都大学教授等学者27名(新聞報道では26名)列席	
1921. 7. 26 午前	東京 帝国ホテル	日本の著名な思想家達と会見(大杉栄、堺利彦、桑木厳翼、姉崎正治、上田貞次郎、阿部次郎、和辻哲郎、北澤新次郎、鈴木文次、与謝野晶子、福田徳三、石川三四郎等)	
1921. 7. 27 午前	東京 帝国ホテル	新聞記者と会見	
1921. 7. 28	東京 慶應義塾大	聴衆3000名の前で講演「文明の再建」	

	学大講堂		
1921. 7. 30	横浜港	帰国、見送る人 20 名余り（山本実彦、大杉栄、伊藤野枝、堺利彦等）	
			梁漱溟「ラッセルに対しての不満」「中華新報」1921. 9 特集「ラッセルの印象」『改造』1921 年 9 月増刊号 （土田杏村）「ラッセルからきた手紙について」『文化』3-1

袁剛等編『中国到自由之路——羅素在華講演集』北京大学出版社、2004

宮本盛太郎『来日したイギリス人』木鐸社、1988

等を参考して作成。

付表 2 B・ラッセルの露・中・日訪問の関連年表 (1914-1923)

時期	ラッセル関連事項	大日本帝国の動向	中華民国の動向	世界史の動向
1914年	<p>42才</p> <p>3月から4月ハーバード大学で論理と認識論について講義、6月に帰英</p> <p>8.4 イギリスが独に宣戦布告、ロンドン街頭で群衆の参戦歓呼を目撃してショック、8月より一連の戦争反対、外交、国際問題分析の関連文章を発表、この時期から1918年11月終戦するまで、論理学の仕事からほぼ離れている状態</p> <p>11月反戦運動開始 (時期不明) 自由党を離れることになった</p> <p>「Our Knowledge of the External World」出版</p>	<p>3.27 内藤湖南『シナ論』出版</p> <p>4.16 第2次大隈内閣成立</p> <p>7.8 東京で中華革命党成立大会</p> <p>8.23 ドイツに宣戦布告</p> <p>10.14 海軍、赤道以北の独領南洋諸島占領</p> <p>11.7 膠州湾・青島占領</p> <p>12.3 加藤外相、21カ条要求を日置公使に訓令</p>	<p>1.10 袁世凱、国会解散</p> <p>5.1 中華民国約法公布、臨時約法廃止</p> <p>8.6 袁世凱、欧州大戦に中国の局外中立を宣言</p> <p>9.1 孫文国内外の国民党組織に中華革命党への改組を通告</p> <p>9.25 袁世凱、祭孔の指示を公布</p> <p>10.27 中華革命党「全国の同胞に告げる書」発表、討袁と共和再建を呼びかけ</p> <p>12.7 戦争終了につき日本軍の撤兵を要求</p> <p>12.23 袁世凱、北京天壇で祭天</p>	<p>6.28 サラエボ事件</p> <p>7.28 オーストリア、セルビアに宣戦布告、第一次世界大戦勃発</p> <p>8.1 独、ロシアに宣戦布告</p> <p>8.3 独、仏に宣戦布告、ベルギー侵攻</p> <p>8.4 英、独に宣戦布告、米、中立宣言</p> <p>8.20 タンネンベルクの戦い、独軍、露軍に圧勝</p> <p>9.5 英仏露単独不講和宣言</p> <p>11.15 ムソリーニ参戦主張、社会党より除名</p> <p>12.18 英、エジプトを保護国とする</p>
1915年	<p>43才</p> <p>1月「The Ethics of War」掲載、従来の道徳的客観主義の立場から道徳的主観主義の立場へ転換</p> <p>2月頃、D・H・ロ</p>	<p>1.18 日置公使、袁世凱に21カ条を提出</p> <p>1.22 駐英大使井上勝之助、英外相に21カ条 (除第5号) 通告</p> <p>2.20 米英仏露に21カ条第5号を内密に通告</p> <p>2.11 東京で21カ条反対の</p>	<p>1.21 北京の新聞に21カ条に関する報道</p> <p>1.29 馮国璋ら19名の各省将軍は21カ条反対を政府に電報</p> <p>2.1 袁世凱、21カ条に関する秘密会議召集。各界代表は21カ条全体の拒絶を要</p>	<p>2.4 独、対英封鎖開始、潜水艦による海戦始まる</p> <p>2.14 『タイムズ』、21カ条は不当ではないと論評</p> <p>2.19 『シカゴヘラルド』</p> <p>21カ条全文を暴露</p>

<p>ーレンスと知り合う</p> <p>「Principles of Social Reconstruction」を執筆開始</p> <p>11月、「Justice in Wartime」出版</p>	<p>中国留学生全体学生大会開催、参会者2000余名</p> <p>3.13「ブライアンノート」発布</p> <p>3.27 英大使、日中交渉斡旋を申出、日本側拒絶</p> <p>4.28 国民義会、対支問題大演説会開催、聴衆1000余名、政府に要求貫徹を希望</p> <p>5.6 御前会議、対中最後通牒案（第5号削除）を決定</p> <p>6.1 衆議院、2個師団増設費・軍艦新造費など追加予算案可決</p> <p>6.3 衆議院で対中外交失敗を理由に内閣弾劾案提出、否決</p> <p>10.14 閣議、袁世凱への帝政延期勸告を決定</p> <p>11.10 東京在留の朝鮮人学生、朝鮮学会を設立</p> <p>12.6 政府、英仏露三国に中国の対独奥国交断絶に反対と回答。三国、再考を要望</p>	<p>求</p> <p>2.25 上海で国民対日同志会結成</p> <p>3.14 国民対日同志会21カ条反対集会、参加者3-4万人</p> <p>3.22 日貨排斥運動で上海の日本商店が襲撃される、杭州寧波へ広がる</p> <p>4.8 上海で中華救国貯金団設立</p> <p>5.8 袁世凱、最後通牒の受諾を決定</p> <p>5.9 北京の20余紙、5.7を「国恥記念日」とするよう提唱。同日全国教育連合会、5.9を「国恥記念日」と定める。4団体上海で国民大会開催、以降全国に21カ条反対運動広がる</p> <p>5月から6月中国各地で日貨排斥運動激化、1915年上半期日中貿易不振</p> <p>8月より袁世凱、帝制開始の輿論準備</p> <p>9.15 陳独秀上海で『青年雑誌』創刊</p> <p>10.10 天津『益世報』創刊</p> <p>12.11 参政院、国民代表大会開催、君主立憲を決定し袁世凱を「中華帝国皇帝」に推戴、12.12 袁世凱即位を受諾</p> <p>12.15 日英露仏伊5国公使、帝制延期の声明書を陸徴祥外相に交付</p>	<p>3月、柳東説・朴殷植ら、上海英租界で新韓革命党結成</p> <p>4.22 独軍、イーブルの戦いで初めて毒ガス使用</p> <p>5.3 伊、三国同盟脱退</p> <p>5.6 米、英仏露に日中交渉への共同干渉を提議。三国いずれも拒絶</p> <p>5.23 伊、奥に宣戦布告</p> <p>5.24 独、伊と国交断絶</p> <p>6.7 米國務長官にランシング就任</p> <p>8.2 サンフランシスコで万国仏教大会開催</p> <p>8.5 露軍、ワルシャワ放棄</p> <p>9.5 スイスで国際社会主義者大会開催</p> <p>11.30 仏英日伊露5国、単独不講和の共同宣言</p>
--	--	---	---

			12.25 唐繼堯、蔡鍔、李烈鈞ら、共和制擁護・帝制反対・雲南独立を宣言し、護国軍を組織（第三革命・五国運動）、同日孫文、討袁宣言発表	
1916年	44才 1月、「Principles of Social Reconstruction」(1916)の内容を8日間に渡って講演 4月よりNCF（徴兵反対協会）の委員となる。「1916年中頃から1918年5月に投獄されるまで、わたくしは「徴兵反対協会」の仕事に非常に忙しかった」 6.15 反戦リーフレットで有罪確定、100ポンドの罰金刑を受ける 7.11 ケンブリッジ大学トリニティ・コレジより講師職解任 「Justice in War Time」出版 11月「Principles of Social Reconstruction」出版 12月、米大統領ウ	1.9『東京朝日新聞』社説「帝制を断念せよ」 1.15 吉野作造「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」 1.21 石井菊次郎外相、陸公使に帝制不承認の閣議決定を通告 1.28 梁啓超、犬養毅に手紙で反袁の状況を知らせる 2.27 各党代議士・対外硬派ら、対支有志大会開催、200余名参集して反袁決議 3.7 閣議、中国の南軍を好戦団体と承認し、民間有志の討袁援助を黙認する方針を決定 3.27 吉野作造、満州・朝鮮へ調査に赴く 4.21 北一輝『支那革命外史』後半を執筆、配布 5.29 タゴール来日 6.30 北一輝、上海へ 7.3 第4次日露協約調印 8.10 柳宗悦、朝鮮・中国旅行に出発 9.1 工場法施行 9.11 河上肇「貧乏物語」連載開始 10.8 山路愛山『支那論』出	1.1 袁世凱、洪憲元年を宣す。総統府を新華宮と改称。同日中華民国護国軍政府は昆明に成立。 1月から4月貴州、広西、広東、浙江諸省独立宣言 1.21 外交部、各国公使に2月初の袁世凱即位を取りやめと内密に通告 2.23 帝制実施延期を宣布 3.22 袁世凱、帝制取消宣言 4.23 段祺瑞内閣成立 5.9 孫文、第2次討袁宣言 5.12 黄興、各界一致の反袁を呼びかけ、全国に通電 6.6 袁世凱、没 6.7 副総統黎元洪、大總統就任 6.29 黎大總統、臨時約法の復活と旧国会の召集を命じる、段祺瑞を國務総理に任命 8.15『晨鐘報』北京で創刊、1918.9『晨报』と改題 9.13 旧進歩党の梁啓超・湯化龍ら、憲法研究会結成 10.31 蔡元培ら北京で国語研究会設立、言文一致・国語統一を主張 12.16 蔡元培、北京大学校	1.1 ドイツでルクセンブルクとリプクネヒトら、スパルタクス団を結成 2.21より7.11 ヴェルダン攻防戦。仏軍、独軍の猛攻に要塞死守。死傷者各35万人。 2.29 独、潜水艦作戦を強化、武装商船を無警告攻撃 4.24 アイルランドのダブリンでシン・フェイン党の指導により武装蜂起。アイルランド共和国を宣言 5.27 米ウイリソン大統領、国際連盟創設を提唱 5.31 英独海軍、ユトラント沖海戦 6.17 蘭領東インドのバンドンでイスラム同盟第1回全国大会開催 7.1から11.18 ソンムの戦い、英仏軍、独軍を総攻撃 7.2 レーニン『帝国主義論』の稿成る 11.7 米大統領にウイル

	<p>イルソンに公開書簡を送り、「ヨーロッパ文明」を「内戦」という「破滅から救い出す」ために「局外の強国の仲介」たるアメリカの参戦を歎願した。書簡は「ある平和主義者の委員会」を通して、「ほぼ全米の新聞」に発表された」</p>	<p>版</p> <p>10.9 寺内内閣成立</p> <p>10.10 立憲同志会・中正会・公友倶楽部合同して憲政会結成、総裁・加藤高明</p> <p>10.16 朝鮮総督に長谷川好道を任命</p> <p>11.14 犬養毅・頭山満・原敬ら、日支協会創立</p> <p>12.4 日本興業銀行・台湾銀行・朝鮮銀行、対中投資借款団結成</p> <p>12.9 夏目漱石没</p> <p>12.17 西原亀三、寺内首相の命で中国へ、翌年8月まで両国間を頻繁に行き来</p>	<p>長に任命される</p>	<p>ソン再選</p> <p>12.10 英ロイドジョージ首相のもと、挙国一致内閣成立</p> <p>12.12 ドイツ宰相ベートマン・ホルヴェークはウイルソン大統領宛てに条件付き和平を模索する覚書を送る</p> <p>12.18 ウイルソン大統領、交戦諸国に停戦と平和を呼びかける覚書を発表</p> <p>12.26 ウイルソンの平和覚書に対し、同盟国側は野心的条件で返答ラクナウ協定</p> <p>12.30 ラスプーチン暗殺される。連合国、ドイツの平和申し入れを拒絶</p>
1917年	<p>45才</p> <p>1.18 よりNCFの仮議長を担当</p> <p>年中の仕事は主に平和主義、政治理論、徴兵制に関しており、ロシアの2月革命を「新しい希望」としてみた</p> <p>7.10 独立労働党(ILP)に入党決定</p> <p>11月、反戦運動に見切りをつけ始める</p> <p>「Political</p>	<p>1.9 閣議、中国の内政干渉、満蒙などにおける権益の拡充、山東の旧独権益を継承などの方針を決定</p> <p>1.20 日本特殊銀行団(日本興業銀行・朝鮮銀行・台湾銀行)と交通銀行間に借款500万円の契約締結(第1次西原借款)</p> <p>2.9 閣議、米の中国参戦勧誘を支持、この旨を英仏露3国大使に内話</p> <p>2.13 英外相、駐英大使珍田捨巳に、講和会議で山東省の独権益と赤道以北の独</p>	<p>1.1 胡適「文学改良芻議」、白話文文体提唱、「文学革命」の口火を切る</p> <p>2.1 陳独秀「文学革命論」、胡適の主張に賛同</p> <p>2.4 米ラインシュ公使、対独国交断絶を勧告</p> <p>2.28 仏公使、日英露など連合国側7カ国を代表して中国の対独国交断絶条件是認の旨回答</p> <p>3.9 孫文、参衆両院及び英首相ロイドジョージに世界大戦への中国参戦反対を通電</p>	<p>1.9 独、無制限潜水艦作戦を内部決定</p> <p>1.22 ウイルソン、「戦勝なき平和」を上院演説で訴えかける</p> <p>1.31 独、無制限潜水艦作戦実施をアメリカに通告</p> <p>2.3 米、対独国交断絶</p> <p>2.21 から12月、ヴェルダンの攻防戦</p> <p>3.12 ペトログラードで労働者兵士ソヴィエト成立。3.15 リヴォフ首班の臨時政府成立。</p>

Ideals」を米国で出版	<p>領諸島に関する日本の要求を支持すると回答、3.1 仏、3.5 露も支持を回答</p> <p>3.10 日本工業倶楽部設立</p> <p>3.12 閣議、中国の財政援助要請に対し、義和団事件賠償金の戦争中支払い延期・関税の現実5分に引上げなどを決定</p> <p>3.7 北京政府、間島における朝鮮人の居住権と土地所有権を承認</p> <p>3.27 閣議、ロシア臨時政府承認を決定</p> <p>5.1 堺利彦・山川均ら在京社会主義者、ロシア革命支持を決議</p> <p>6.6 臨時外交調査委員会官制公布</p> <p>6.6 米大使、本野外相に中国の内争停止に関し共同勸告を提議、6.15 拒否</p> <p>6.15 駐米大使佐藤愛麿、国務長官に中国における日本の特殊地位の承認（1915.3.13 プライアン公文）の再確認を非公式に要請、7.6 米、拒否</p> <p>7月、黒龍会、月刊誌『亜細亜時論』創刊</p> <p>7.20 閣議、段内閣を財政援助し、南方派を積極的に抑圧はせずとの対中政策を決定</p> <p>8.1 吉野作造『支那革命小史』</p>	<p>3.14 対独断交、5.1 国会、対独宣戦を決定</p> <p>5.23 黎大總統、段祺瑞国務総理を罷免、伍廷芳代任（第1次府院の争い）</p> <p>6.7 張勳、弁髪部隊5000人を率い徐州より北上、6.14 北京入城</p> <p>7.1 溥儀（宣統帝）、張勳・康有為らに擁立され、復辟宣言。黎大總統、政權返還否認の通電（張勳復辟）</p> <p>7.2 黎大總統、復辟により北京の日本公使館に避難、段祺瑞を国務総理に再任</p> <p>7.3 段祺瑞、張勳討伐のため挙兵、7.12 張勳の復辟、段の討逆軍に敗れ失敗</p> <p>7.14 黎元洪、大總統辞任、7.30 馮国璋就任</p> <p>7.17 孫文、上海より広州に戻り、護法を提唱</p> <p>8.14 独塊に宣戦布告</p> <p>8.25 国会議員120余名、広州で非常会議開催、8.30 中華民国軍政府組織大綱を議決</p> <p>9.15 孫文、広州来訪のジャーナリスト河上清に、日本の満州支配容認と「アジア人のアジア」を主張</p> <p>9.26 広東軍政府、対独宣戦</p> <p>11.10 上海の「民国日報」他紙に先んじてロシア革命を報道</p> <p>11.15 段国務総理、辞表提</p>	<p>3.17 ニコライ2世退位。ロマノフ王朝滅亡（ロシア2月革命）</p> <p>4.6 米、対独宣戦布告</p> <p>6.16 から7.7 露ペトログラードで第1回全ロシア労働者兵士代表ソヴェト開催</p> <p>7.16 ペトログラードで労働者兵士の武装デモ</p> <p>7.21 y g</p> <p>7.22 タイ、連合国側で大戦への参戦を宣言</p> <p>8月、申圭植ら上海で朝鮮社会党結成</p> <p>9.5 から9.12 ストックホルムで国際社会主義会議開催</p> <p>10.20 蘭領東インドのイスラム同盟第2回国大会、綱領にインドネシア独立を掲げる</p> <p>11.2 英外相バルフォア、パレスチナでユダヤ人の国家建設支持を約束（バルフォア宣言）</p> <p>11.7 から11.8 ペトログラードでポリシェヴィキの指導する武装蜂起勝利。ケレンスキー政府転覆、ソヴィエト政權樹立。人民委員会議長・レーニン、外務人民委員・トロツキー（ロシア10月革命）</p> <p>11.21 トロツキー、連</p>
---------------	---	--	---

		<p>8.7 本野外相、中国の北方派援助につき英の同意を要請、英同意</p> <p>9.12 大蔵省、金貨幣・金地金輸出入取締に関する件公布（事実上の金本位制停止）</p> <p>9.15 から 12.9 徳富蘇峰訪中</p> <p>9.28 日本特殊銀行団、交通銀行へ借款 2000 万円の契約成立（第 2 次西原借款）</p> <p>11.2 石井ランシング協定</p> <p>11.9 北京政府、日米両国に石井ランシング協定に関し拘束を受けずと通告</p> <p>12.18 台湾新聞紙令公布</p>	<p>出、馮大統領承認、汪大燮代任</p> <p>12.6 連合国駐北京公使団、中国政府にハルビンへの軍隊派遣を申し入れ</p> <p>12.26 ハルビンのロシア革命派とロシア兵 2000 名、中国軍より武装解除、国外退去させられる</p>	<p>合国に対独講和締結を提案、11.22 連合国、黙殺と決定</p> <p>12.3 ソヴィエト政府、独逸と休戦交渉、12.15 独露休戦協定成立</p> <p>12.3 連合国最高軍事評議会にて仏参謀総長、シベリア軍事干渉案を提示</p> <p>12.6 フィンランド、ロシアから独立を宣言</p>
1918 年	<p>46 才</p> <p>1.03、「ドイツの平和提案」を「The Tribunal」誌で発表</p> <p>1月から3月、ロンドンで論理的原子論について8回に渡って講演</p> <p>「ドイツの平和提案」で禁固6ヶ月の判決</p> <p>5月から9月、入獄。期間中二元論から中立一元論へ、「Analysis of Mind」(1921)の大半を執筆</p>	<p>2.5 田中義一参謀次長、章宗祥公使を訪問、独勢力のシベリア浸透に共同対処を、と談話</p> <p>2.7 閣議、中国関税改訂方針決定、現実5分容認</p> <p>2.17 小寺謙吉『寺内内閣の対支外交の失敗』</p> <p>3.7 米、シベリア干渉に疑義を呈し、干渉の始末は講和会議の決議に任す旨の日本の声明を要求</p> <p>3.8 閣議、日中共同防敵軍事協定締結の方針を決定</p> <p>3.26 から 4.3 吉野作造「支那南北妥協論」『大阪毎日新聞』</p> <p>4.22 中華匯業銀行・中国政</p>	<p>1.15 『新青年』4巻1号より白話文、新式標点符号を採用</p> <p>3.8 段祺瑞派の王揖唐ら、安福俱樂部を結成</p> <p>3.23 馮国璋大総統、段祺瑞を國務総理に再任</p> <p>4.14 毛沢東・蔡和森ら、長沙で新民学会創設</p> <p>4.17 広東軍政府、日英米仏伊など16か国に軍政府を中華民国の合法政府として承認を要求</p> <p>5.12 帰国した留学生、上海で龍日学生救国団を組織して日中共同防敵軍事協定に反対</p> <p>5.15 伍廷芳・李烈鈞ら、馮</p>	<p>1.1 英外務次官セシル、駐英大使珍田にウラジオストクへの日英米共同派兵を提案、1.21 米拒否</p> <p>1.8 ウイルソン米大統領、議会教書で14か条平和原則発表</p> <p>3.3 同盟国とロシアの間、ブレストリトフスク条約締結、ロシアが第一次世界大戦から離脱</p> <p>3.12 ソヴィエトロシアの首都、ペトログラードよりモスクワに移る</p> <p>3.21 から 4.5 独軍、西部戦線で大攻勢開始</p>

<p>「Mysticism and Logic, and Other Essays」出版</p> <p>「Roads to Freedom: socialism, anarchism and syndicalism」出版</p>	<p>府間に有線電信借款 2000 万円成立(第 3 回西原借款)</p> <p>5. 1 朝鮮林野調査令公布</p> <p>5. 6 中国人留学生、東京神田の維新号で日中共同防敵軍事協定につき集会、25 名逮捕される、210 余名帰国、5. 11、400 名に達し、さらに 1000 名へ、5. 9 吉野作造「支那留学生拘禁事件」に就て、当局及国民の反省を促す『東京日日新聞』、留学生への迫害を非難</p> <p>5. 15 満鉄、鞍山製鉄所設立</p> <p>5. 16 日中陸軍共同防敵協定調印、5. 19 日中海軍共同防敵協定調印、1919. 3. 14 公表</p> <p>5. 21 から 6. 25 孫文ら訪日</p> <p>5. 31 林駐中国公使、西原借款に関し寺内首相攻撃</p> <p>6. 18 日本特殊銀行団、中国政府と吉会鉄道借款予備契約締結、前貸金 1000 万円交付(第 4 回西原借款)</p> <p>6. 21 英首相、珍田大使にシベリアへの迅速な出兵を要望</p> <p>7. 8 米国務長官ランシング、石井大使にチェコ軍救援のためウラジオストクへ日米共同出兵を提議、</p> <p>7. 17 日本同意、兵力制限は拒絶</p> <p>7. 31 米価大暴騰により期米市場大混乱、東京米穀取</p>	<p>国璋に日中共同防敵軍事協定調印反対と南北平和会議開催を要請</p> <p>5. 15 『新青年』4 巻 5 号に魯迅の「狂人日記」掲載(中国最初の近代白話小説)</p> <p>5 月から 6 月、北京、上海、天津の学生が日中共同防敵軍事協定反対のためデモ・請願</p> <p>この頃孫文、レーニンに祝電を送る、8. 1 外務人民委員チチェリン、感謝書簡を返送</p> <p>8. 12 北京で国会開会、安福系議員、議席の 7 割を占める(安福国会)</p> <p>8. 24 北京政府、ウラジオストクへの出兵宣言を発表</p> <p>9. 2 湯化龍、カナダで暗殺される</p> <p>9. 4 北京国会、大總統に徐世昌を選出、広州非常国会は不承認と宣言</p> <p>9. 7 馮大總統、張作霖を東三省巡閱使に任命</p> <p>10. 10 徐世昌、大總統に就任、同日広東軍政府反対通電</p> <p>11. 14 北京 3 日連続の戦勝祝賀大会</p> <p>11. 15 李大釗「庶民の勝利」『新青年』5 巻 5 号</p> <p>11. 23 教育部、注音字母表を公布</p> <p>11. 28 全国で戦勝祝賀活動</p>	<p>4. 5 日英陸戦隊、ウラジオストク上陸開始</p> <p>5. 25 ロシア国内のチェコ軍、シベリア鉄道沿線の各地でソヴィエト政権との武力衝突開始</p> <p>6. 26 李東輝ら、ハバロフスクで韓人社会党を結成、1919. 4 本部をウラジオストクに移し高麗共産党に改称</p> <p>7. 10 米、対中新四国借款団組織を日英仏に提議</p> <p>7. 17 連合軍、独に全面反攻開始</p> <p>8. 3 米政府、シベリア出兵を宣言</p> <p>8. 19 米軍ウラジオストクに上陸</p> <p>8 月朝鮮独立運動家呂運亨・金九ら上海で新韓青年党結成</p> <p>10. 17 ハンガリー議会、オーストリア・ハンガリー帝国からの分離独立を宣言</p> <p>10. 29 ザグレブ国民評議会、オーストリア・ハンガリー帝国からの分離独立を宣言(1929、ユーゴスラヴィア)</p> <p>11. 3 独キール軍港で水兵反乱(ドイツ革命)</p> <p>11. 9 ベルリンで労働者武装蜂起、社民党のエ</p>
--	--	--	--

	<p>引所立会停止</p> <p>8.2 政府、シベリア出兵宣言、8.4 日米両国、シベリアで共同行動を宣言、同日、中華匯業銀行・中国財政部間に吉林、黒龍江両省金鉱森林借款 3500 万円成立（第 5 回西原借款）</p> <p>8.3 富山県で米騒動始まる。全国に波及</p> <p>8.12 シベリア派遣軍、ウラジオストク上陸開始</p> <p>8.28 白虹事件</p> <p>9.3 武者小路実篤ら、宮崎県に「新しき村」建設開始</p> <p>9.12 寺内内閣弾劾全国記者大会、東京で開催</p> <p>9.21 寺内首相、辞表提出</p> <p>9.29 原敬内閣成立</p> <p>10.9 満川亀太郎・大川周明ら、老社会結成</p> <p>10.10 芳澤謙吉代理公使、対中外交の統一（軍・西原の活動排除）を建言</p> <p>10.29 閣議、中国の南北騒乱を助長する借款を差し控える方針を決定、同日、駐中国公使に小幡西吉任命</p> <p>11.16 米、日本のシベリア出兵数につき抗議</p> <p>11.20 有賀長雄『支那正観』出版</p> <p>11.23 吉野作造、浪人会（内田良平ら）と立会演説を行う</p>	<p>12.1 パリ講和会議への特使陸徴祥、出発、日本経由でパリへ向かう</p> <p>12.2 日英米仏伊各国公使、中国に対し南北統一まで政治借款の拒絶を申し合わせ</p> <p>12.3 北京大学学生傅斯年ら、新潮社結成、1919.1.1 『新潮』創刊</p> <p>12.22 陳独秀、李大釗ら、北京で『毎週評論』創刊、（～1919.8.13、37号）</p>	<p>一ベルトら政権掌握、皇帝退位</p> <p>11.11 独、連合国と休戦協定調印（第 1 次世界大戦終わる）</p> <p>11.13 呂準・金奎植ら、満州で大韓独立宣言書を発表</p> <p>11.18 オムスクでコルチャク政権成立</p> <p>12.30 独共産党創立大会</p>
--	--	---	--

		<p>12.7 東京帝大学生赤松克鷹・宮崎竜介ら、新人会結成</p> <p>12.10 牧野伸顕、パリ講和会議出席のため横浜出発、米国経由、1919.1.18 到着</p> <p>12.23 吉野作造、福田徳三から黎明会を発足</p>		
1919年	<p>47才</p> <p>2月「On Propositions」出版</p> <p>5.6から6.24「Analysis of Mind」について講演</p> <p>12月、1914年以来初めてウィトゲンシュタインと会う。同月トリネティコレッジは新たな5年間の講師契約をラッセルに提供</p> <p>「An Introduction to Mathematical Philosophy」出版</p>	<p>1.4 台湾教育令公布</p> <p>1.13 パリ講和会議全権委員に西園寺公望、牧野伸顕、珍田捨巳らを正式任命</p> <p>1.14 西園寺、神戸出、スエズ経由、3.2 パリ着</p> <p>1.27 講和会議5国会議で牧野全権、山東半島の旧独権益及び赤道以北の独領の無条件譲渡を要求</p> <p>2.7 国際連盟規約委員会で日本代表、人種的差別待遇撤廃を提案</p> <p>2.8 東京で朝鮮人留学生ら約600名、朝鮮独立宣言書と朝鮮民族大会召集請願書を発表</p> <p>2.9 米哲学者デューイ来日</p> <p>3.1 京城・平壤などで朝鮮独立宣言発表、示威運動、朝鮮全土に拡大（三一運動）</p> <p>3.22 吉野作造、黎明会第3回講演会で三一運動に言及し、朝鮮統治策を批判</p> <p>3月羅振玉、1911年以來の日本滞在を切り上げ帰国、</p> <p>4月周恩来、帰国</p>	<p>1.11 広東軍政府、護法政府と改称</p> <p>1.21 北京政府、陸徵祥、顧維鈞、王正廷ら5名を全権代表としてパリ講和会議に派遣（王は広東軍政府の代表）</p> <p>1.28 講和会議で顧維鈞中国代表、山東半島の旧独権益の中国への直接還付を要求</p> <p>2.1 李大釗「大亜細亜主義と新亜細亜主義」</p> <p>2.12 講和会議中国代表、日中共同防敵軍事協定の一部を公表</p> <p>2.20 上海で南北平和会議始まり、3.2、会議中断、</p> <p>4.9 再開、5.13 決裂</p> <p>4.5 孫文、上海で日本人記者に朝鮮独立の承認を訴え、「日本人はアジア人ではない」と語る</p> <p>4.20 山東の国民請願大会、講和会議で中国代表団の奮闘を要請</p> <p>5.1 国民外交協会、講和会議中国代表団に調印拒否</p>	<p>1.5 独、スパルタクス団蜂起、軍に鎮圧され、</p> <p>1.15 ルクセンブルクとリープクネヒト虐殺される</p> <p>1.5 ドイツ労働者党（ナチスの前身）結成</p> <p>1.18から6.28 パリ講和会議開会</p> <p>1.21 朝鮮高宗没</p> <p>2.13 ワイマール連合政府成立</p> <p>2.14 ウイルソン大統領、国際連盟規約提案</p> <p>3.2 コミンテルン創立大会、モスクワで開催、日本より片山潜、石川三四郎ら、中国より劉紹周ら参加</p> <p>3.21 ハンガリーでソヴェト政権成立</p> <p>3.23 ムッソリーニ「戦士のファッション」結成</p> <p>4.1 英、金輸出禁止</p> <p>4.6 インド、ガンディー指導の第1次非暴力抵抗運動始まる</p> <p>4.11 朝鮮の民族主義</p>

		<p>4.3 山本実彦『改造』創刊</p> <p>4.12</p> <p>4.21 政府、山東問題の要求 が通らない時国連規約調 印を見合わせと訓令</p> <p>4.23 朝鮮13道代表、漢城 臨時政府結成、執政官総 裁・李承晩</p> <p>5.4 講和会議で牧野全権、 山東還付を声明（経済的特 権及び青島における居留 地設置の権利を留保）</p> <p>5.7 中国人留学生1000余 名、東京で国恥記念日デ モ、多数検挙、吉野作造救 援に奔走</p> <p>5.17 内田康哉外相、山東還 付を声明</p> <p>5.22 中国人留学生帰国の 動きに関し、吉野作造、対 中政策を根本からの改正 を主張</p> <p>5.26 対中新借款団、横浜正 金銀行を中心に18銀行で 結成</p> <p>6.22 孫文、「朝日記者に答 えて中国の日本に対する 所懐を述ぶ」寄稿、日本の 「帝国主義の野心」非難</p> <p>7.16 日本政府、中国内政不 干渉を声明</p> <p>7.19 寛城子事件</p> <p>8.1 満川亀太郎・大川周明・ 北一輝ら、猶存社を結成</p> <p>8.22 青島で全山東日本人 会開催、山東還付につき決</p>	<p>を要請</p> <p>5.1 から1921.7.11 デュー イ訪中</p> <p>5.4 北京の学生3000余名、 山東問題に抗議し示威行 動（五四運動始まる）</p> <p>5.6 北京学生連合会成立</p> <p>5.7 上海で北京学生運動支 援の国民大会開催、参加者 2万余名</p> <p>5.9 蔡元培、学生運動弾圧 を怒り北京大学校長を辞 す</p> <p>5.15 上海の新聞7紙、日本 の商業広告と日本船の出 入期、為替など不掲載を決 議</p> <p>5.19 北京の学生3万余名、 山東問題及び学生の逮捕 に抗議デモ、各地波及</p> <p>5.28 毛沢東ら、湖南学生連 合会を組織</p> <p>5.28 『新青年』6巻5号を 「マルクス主義特集号」と する</p> <p>5月から6月、各地に日貨 排斥運動広まる</p> <p>6.3 北京各校学生、政府の 「媚日」外交反対に講演、 178名逮捕、翌日講演続行、 700名逮捕</p> <p>6.5 上海の労働者・店員、 北京の学生を支援してス ト、商人も罷市開始（三罷 闘争）、各地に波及</p> <p>6.10 北京政府、外交総長曹</p>	<p>者、上海で大韓民国臨 時政府樹立、國務総理・ 李承晩</p> <p>4.22 講和会議、山東問 題に関する第1次首脳 会議</p> <p>4.30 講和会議の首脳会 議、膠州湾租借地と山 東省旧独権益の日本譲 渡を決定</p> <p>4.24 パリ講和会議、仏 外務省貴賓室で国際連 盟規約を採択</p> <p>4月、満州北東の朝鮮 人義兵ら、延吉県に義 軍府 結成。南満州の朝鮮人、 柳河県に西路軍政署設 立</p> <p>5.7 パリ講和会議、 赤道以北の独領諸島の 委任統治国を日本に決 定</p> <p>5.12 金奎植、パリ講和 会議に朝鮮独立請願書 を提出</p> <p>6.28 ヴェルサイユで講 和条約（含国連規約） 調印（ヴェルサイユ条 約）</p> <p>7.31 独国民議会、ワイ マール共和国憲法を採 択</p> <p>9.10 オーストリア、サ ンジェルマン講和条約 調印、ハプスブルク帝 国解体</p>
--	--	---	--	--

	<p>議</p> <p>8月、北一輝、上海で『日本改造法案』脱稿</p> <p>8月、吉野作造「日支国民的親善確立の曙光」（『解放』8月号）、日中青年の交流計画を発表</p> <p>10.10 大日本国粋会結成</p> <p>10.28 米、新四国借款団に関し、日本の満蒙留保を不当と通告</p> <p>10.29 台湾総督に田健次郎任命（初の文官総督）</p> <p>11.3 寺内正毅没</p> <p>11.27 朝鮮独立運動指導者呂運亨、東京で朝鮮独立の抱負を記者団に語り、問題化</p> <p>12.17 小幡公使、中国に排日運動取締を要求</p> <p>12.30 満鉄、『調査時報』創刊</p>	<p>汝霖、駐日公使章宗祥、幣制局総裁陸宗輿を罷免</p> <p>6.16 上海に全国学生連合会成立</p> <p>6.20 山東省各界代表85名、北京へ赴き条約調印拒否など請願、徐、接見せず</p> <p>6.28 中国代表団、ヴェルサイユ条約調印せず</p> <p>6月、銀元市価の統一成る</p> <p>7.1 北京に少年中国学会成立、月刊『少年中国』創刊</p> <p>7.25 ソヴィエト政府、中国に関する帝政ロシアの不平等条約廃棄を宣言（第1次カラハン宣言）、1920.3 中国に伝わる</p> <p>9.3 徐大總統、駐日公使に劉鏡人を任命、就任せず</p> <p>9.16 周恩来ら、天津で覚悟社結成</p> <p>10.9 英、列国共同で中国に500万ポンドまでの借款提供を提議（平和会議再開、不要軍隊の解散を条件に）</p> <p>10.10 孫文、中華革命党を中国国民党に改組・改称、総理に就任</p> <p>10月、孫文、新人会の宮崎龍介に、中国の急務は「民心開発」にあり、日本の民衆的改革を望むと談話</p> <p>11.5 國務総理に靳雲鵬任命される</p> <p>11.16 福州事件</p> <p>11.20 劉師培没</p>	<p>10.10 から 1920.1.16 連合国、対ソ経済封鎖を実施</p> <p>10.29 ワシントンで第1回国際労働会議開催、武藤山治ら出席</p> <p>11.9 朝鮮人金元鳳ら、吉林省で義烈団結成</p> <p>11.14 ソヴィエト赤軍、オムスク占領</p> <p>11.23 デリーで反英の全インド・カリフ擁護大会開催、ガンディー初めて対英非協力運動を提唱</p> <p>11月、アインシュタインの一般相対性理論が実験で証明された</p> <p>12.27 コルチャク、反乱部下より逮捕</p>
--	---	---	---

			11.20 北京政府、クーロン当局に外蒙古の自治取消を公表させる 12.28 馮国璋没	
1920年	48才 4.20 労働党訪露代表団に随行することを申し入れ、翌日許可される 5.11 より6.16、英国労働党代表団に加わって、革命後のロシアを訪問、 5.12 から5.15、ペトログラード（サンクトペテルブルク）で過ごす 5.12 ペトログラードにつく 5.13 ペトログラード哲学協会に訪問 5.15 病床につくゴーリキーに訪問、同日ペトログラード物理数学協会での講演 5.16 エマ・ゴールドマンと会う、のちペトログラードを離れる 5.17 モスクワにつき、ボリショイ劇場でトロツキーと会う 5.18 ボリショイ劇場でロシア革命に	1.9 中国の排日運動につき第2次警告を発するよう小幡公使に訓令 1.19 小幡公使、中国に山東問題に関する直接交渉を提議し、日本政府の還付交渉公文を外交部に交付 1.30 小幡公使、外交部に学生の嚴重取締を申し入れ 1.31 労働団体など、全国普選期成連合会結成 2.11 東京で111団体、数万人が普選促進のデモ 2.15 全国10大商業会議所、在中日本人商業会議所及び実業協会と対中経済政策、排日貨善後策につき協議 3.2 閣議、シベリア出兵の目的を、チェコ軍救援より朝鮮満州への「過激派」阻止へ変更、駐留決定、3.31 政府、シベリアの政情安定まで撤兵せずと声明 3.5 『朝鮮日報』創刊 4.1 朝鮮で朴泳孝らが『東亜日報』創刊 4.17 ソヴィエト極東外交代表、シベリア派遣日本軍司令官に国交回復を提議、日本回答せず 5.2 日本初のメーデー、東	1.2 北京政府、日貨排斥禁止を各省に通電 1.29、1.31、天津・北京学生15000余名が山東問題の日中直接交渉反対デモ、 2.9 上海でデモ 2.6 徐大總統、学生の政治干渉禁止、学生運動取締命令 3.1 周作人、「新しき村」北京支部の設立を発表 3.29 広東軍政府分裂、政務総裁伍廷芳ら上海へ 3月コミンテルン派遣の極東部門責任者ヴォイチンスキー一行、北京着、李大釗と会見、同月李と鄧中夏、北京で秘密裡にマルクス学説研究会を組織 4月ヴォイチンスキー上海で陳独秀と会見 5.1 中国最初のメーデー、各地で挙行 5.20 清水安三北京朝陽門外に崇貞工読女学校（のち崇貞学園）創立 5.22 北京政府、山東問題につき直接交渉拒絶の覚書を提示 5.29 開灤炭鉱スト、6.1 漢陽鉄廠スト 5月末、陳独秀ら上海でマ	1.10 国連発足 2.24 ドイツ労働者党、国民社会主義ドイツ労働者党（ナチス）と改称 3.19 米上院、ヴェルサイユ条約を最終的に否決、国連加入拒否 4.1 米シベリア派遣軍、撤退完了 4.4 白軍戦敗、ロシア内戦終結 4.6 ヴェルフネウジンスクで極東共和国樹立 4.23 アンカラでトルコ大国民議会開催、トルコ臨時政府樹立、大統領・ケマル 4月から10月ソヴィエト＝ポーランド戦争 5.11 日英米仏の対中四国借款団事実上成立 5.23 東インド共産主義者協会（インドネシア共産党）成立 5.30G・E・モリソン没 7.19から8.7 コミンテルン第2回大会、社民勢力に対して、ボリシェヴィキはコミンテルンの加入条件を厳格化

<p>関する会議に参加</p> <p>5.19 レーニンと1時間ほど英語で対談。</p> <p>5.20 近郊でレフ・カーメネフと一晚を過ごす</p> <p>5.21 プロレタリア芸術学校を訪問</p> <p>5.22 メンシェヴィキのリーダー、ユーリー・マルトフとラファエル・アブラモヴィッチと会見</p> <p>5.23 様々なサナトリウムを見学</p> <p>5.24 モスクワソヴィエトの幹部会に出席</p> <p>5.25 あるトルストイ主義者団体を訪問</p> <p>5.26 旧法務大臣のスタインバーグを訪問</p> <p>5.27 から6.16「農民と接したい」と、ヴォルガ川に沿って船旅、「ニジニ・ノヴロドからサラトフにかけてヴォルガ河を下り、多くの場所に止まって住民と自由に話し合」った</p>	<p>京上野で举行</p> <p>5.5 北京大学遊日学生団来日、東京帝大新人会の同人が接待、6.16 北京帰着</p> <p>5.7 中国人留学生、東京で国恥記念大会開催、山東問題の直接交渉反対、ロシア政府承認の要求など議決、来日中の遊日学生団も参加</p> <p>5.17 日中両国学者演説会</p> <p>5.25 尼港事件</p> <p>6.3 沿海州派遣日本軍、ニコライエフスク（尼港）占領</p> <p>6.15 高島素之訳『資本論』第1巻、大鑑閣出版</p> <p>6.18 日華実業協会創立、会長・渋沢栄一</p> <p>7.12 衆議院、憲政会・国民党各提出の普選法案を上程、否決</p> <p>7.16 日本政府、安直戦争に関し、内政不干渉声明</p> <p>7月、満鉄の増資2億4000万円の半額を政府が負担する件につき、議会で問題化</p> <p>8.9 小幡公使、徐樹錚ら安福派要人9名を公使館に収容・保護と北京政府に通告</p> <p>9.17 小島祐馬・青木正児ら支那学社設立、『支那学』創刊</p> <p>10.1 第1回国勢調査、7698万8379人、うち内地人口</p>	<p>ルクス主義研究会結成</p> <p>6.3 孫文・唐紹儀・伍廷芳・唐繼堯4総裁共同宣言を発し南北和議の復活と軍政府の上海移転を声明</p> <p>6.12 海軍省、長沙・重慶へ軍艦出動と発表</p> <p>6.14 小幡公使、山東問題に関する3回目の覚書を北京政府に提出</p> <p>6.29 国際連盟加入</p> <p>7.14から7.19安直戦争(直皖戦争)始まる、段祺瑞敗れる、辺防督軍辞職、徐大總統、安福倶楽部の解散を命令</p> <p>8.22 上海社会主義青年団成立(翌年成立の中国共産党の下部組織)</p> <p>8月陳独秀、上海に共産主義小組成立</p> <p>9.5から11.28中国軍事外交使節団モスクワ訪問</p> <p>9.27 ソヴィエト政府、中国使節団に中ソ交渉基本事項を提示(第2次カラハン宣言)</p> <p>10.2 間島事件(琿春事件)</p> <p>10.24 岑春煊・陸榮廷ら、広東軍政府の取消を宣言</p> <p>10.30から1921.7月、B・ラッセル訪中</p> <p>10.30 徐大總統、南北統一に向けての国会選挙の準備を命ずる、10.31 孫文、南北統一否定、軍政府の存</p>	<p>するための21カ条の加入条件を採択</p> <p>9.1から9.7コミンテルンがバクーで東方諸民族大会を開催</p> <p>9.3 チェコ軍、シベリアから撤退完了</p> <p>9.4 インドの会議派、カルカッタで特別大会開催、非協力運動に関する決議</p> <p>9月、ビルマ人団体総評議会結成、反英運動活発化</p> <p>10.2 間島地方琿春</p> <p>10.15 日英米仏の新四国借款団規約成る</p> <p>10.17 インド共産党創立大会、タシケントで開催</p> <p>11.2 米カリフォルニア州、排日土地法可決、12.9 実施</p> <p>11.15から12.8 国連第1回総会、ジュネーブで開催</p> <p>11月満州北東の朝鮮人部隊、大韓独立軍団を結成、のちイルクーツクに移動</p>
---	---	--	---

	<p>5.28 ニジニ・ノヴ ロド着、5.30 カー ザン着、6.1 サマラ 着、6.2 マルクスタ ード着、6.3 サラト フ着、6.4 ツァリー ツィン、 6.5 ヴラディミロ フカ、6.6 から 6.8 アストラハン、以 降川を遡って、 6.12 サラトフで一 行は船を離れて鉄 道でモスクワに戻 る 6.13 モスクワ 6.15 ペトログラ ード、6.16Revel より 出国、6.28 ニュー カッスル着 6.30 家で中国講学 社の招待状発見、 7.23 招待を受諾 9.4 パリで「The Practice and Theory of Bolshevism」完成 9.6 ドーラ・ブラッ クとともにマルセ ーユから出航 10.12、上海到着 10.15 から 10.16、 「社会の再建」と 教育に関して講演 10.18 杭州西湖で 過ごす、以降連日</p>	<p>5596 万 3053 人 10 月大杉栄、上海の極東社 会主義者会議に出席 10.7 閣議、間島へ出兵を決 定、11.2 撤兵決定 11.6 日華実業協会・華北の 旱魃・飢饉に対し義援金募 集、1921.12、6 万 4000 余 円集まる 11.20 閣議、張作霖援助決 定 11 月、東京日日新聞社、大 阪毎日新聞社、中国への留 学生募集 11 月、日本・朝鮮・中国の 社会主義者よりコスモ倶 楽部結成 12.9 大杉栄・堺利彦ら、日 本社会主義同盟設立 12.27 朝鮮総督府、朝鮮産 米増殖計画策定</p>	<p>続を声明 10 月北京に李大釗を中心 に共産主義小組成立 11.7 共産党上海発起組、月 刊誌『共産党』創刊、同日、 勤工儉学フランス留学の 周恩来ら 197 名、上海出航 11.9 孫文、中国国民党総章 を修正公布、党の目的を五 権憲法の確立とする 11.20 北京政府、日本公使 館に亡命中の 8 名の引き渡 しを要求、11.27 日本拒絶 11.28 孫文広州に戻り、 11.29 軍政府を回復 12.2 李大釗ら、北京大学社 会主義研究会発起</p>	
--	---	---	--	--

	<p>講演</p> <p>10.22 南京から船で漢口へ出発</p> <p>10.25 漢口で講演</p> <p>10.26から10.27 長沙で講演会四つを行う、在中のデューイ夫婦と会い、鉄道で北京へ出発</p> <p>10.31 北京到着</p> <p>10月末、トリニティコレッジの講師職を断る</p> <p>11.4、「The Practice and Theory of Bolshevism」出版</p> <p>11.5 梁啓超と会談</p> <p>11.7 北京大学で「哲学の問題」について初めての授業、聴衆1000名以上集まる</p> <p>11.28 「羅素学説研究会」創設、『羅素月刊』発行（1921年まで合計4期）</p> <p>11月から1921.3月、北京大学で授業、ゼミ実施、各学校・組織で講演</p>			
1921年	<p>49才</p> <p>1月よりドーラも政治思想及び女性問題で授業開始</p> <p>3月初、肺炎にかか</p>	<p>1.30 林獻堂ら178名、台湾議会設置請願書を第44帝 国議会上に提出、不採択</p> <p>2.10 吉野作造『第三革命後の支那』出版</p>	<p>1.8 北京政府交通部と米フェデラル無線電信会社、無線電信協定調印</p> <p>1.15 吉林省延吉・黒龍江省東寧など5県代表、日本軍</p>	<p>2.28から3.18、ソヴィエトロシアでクロンシタット水兵の反乱</p> <p>3.1から3.6 モンゴル人民党創立大会、キャ</p>

り、下旬危篤 3.27 日本の新聞に死亡 誤報が出る 6月「The Analysis of Mind」出版 7.6 離別講演「中国 の自由への道」 7.11 北京離れる 7.17 から 7.30、日 本訪問 7.16 門司港着、山 本実彦が出迎え、 上陸せず 7.17 神戸港より上 陸、神戸クロニク ル主筆ロバート・ ヤングと賀川豊彦 が出迎え 7.18 神戸の阿弥陀 寺で開催された演 説会に出席、1000 余名の労働者の前 で短い講演 7.19 大阪経由で奈 良着 7.20 奈良見学後、 京都着 7.21 都ホテルで京 都帝大荒木総長と 会見。夕方5時よ り、改造社主催の 歓迎会に出席。京 都帝大教授その他 の学者27名(新聞 報道では26名)出 席。以降京都見学	3.30から7.12 芥川龍之介、 大阪毎日新聞社の特派員 として訪中 4.24 大連に日満通信社創 設 4月下旬、施存統・周仏海、 日本で中国共産主義小組 結成 5.13 閣議、山東鉄道沿線か らの撤兵及び満蒙に対す る政策を決定 5.16 東方会議開催 5.17 閣議、張作霖が東三省 の内政・軍備を充実する限 り援助するが、中央への進 出は援助せずとの方針を 決定、5.18、閣議、中東鉄 道への財政援助に関する 件決定 7.21 幣原喜重郎駐米大使、 米國務長官に山東問題の 日中直接交渉につき中国 説得を依頼 9.2 閣議及び外交調査会で 山東問題解決方針大綱決 定 9.15 外務省、山東還付条件 を東京と北京で公表 9.27 ワシントン会議全権 委員に加藤友三郎、徳川家 達、幣原喜重郎を任命 9.28 安田善次郎、国粹主義 者朝日平吾に刺殺される 10.1 大亜細亞協会創立 10.17 台湾文化協会結成 10.19 小幡公使、山東還付	の暴状を総統府・國務院・ 外交部に提訴し、対日嚴重 抗議・損害賠償を要請 1.19 四国銀行団との間に 華北飢饉救済借款400万円 調印 3.14 北京の国立大学・専門 学校教員、月給未受領4か 月により授業放棄、4.8全 員辞職、4.15 北京各校校 長、政府の教育経費支出拒 否に抗議して辞職 4月上旬、孫文、米人記者 との談話で日本の中国植 民地化の企図を批判 5.4 孫文ら、軍政府の廃止 と中華民国政府の成立を 通電、5.5 各国に新政府の 承認を要請 5.20 中ソ協定成立、独、対 中不平等特権をすべて放 棄 6.3 コミンテルン代表マー リン、上海着、李達・李英 漢に共産党創立大会開催 を提議 7.23 中国共産党第1回全国 大会、上海で開催、7.31 嘉 興で閉幕 8月中国労働組合書記部、 上海に成立 9.30 上海の韓国臨時政府 専使申圭植、広州で胡漢民 らと会見、10.3、孫文、申 と会見し、北伐完成後に韓 国独立運動を全力で援助	フタで開催、3.13 臨時 人民政府樹立 3.8から3.16 ロシア共 産党第10回大会開催、 レーニンの新経済政策 (ネップ)採択 4.29から5.5 ロンドン 賠償会議、独の賠償金、 1320億金マルクに決定 4月ロシア共産党、東 方勤労者共産主義大学 (クートヴェ)創設 6.22から7.12 モスク ワでコミンテルン第3 回大会開催、田口運蔵 ら出席 7.5から7.19 赤色労働 組合インターナシヨナ ル(プロフィンテルン) 創立大会、モスクワで 開催 7.6 モンゴル人民義勇 軍、ソヴィエト赤軍連 合軍、クーロン入城、 7.10 モンゴル人民共和 国政府成立 7.11 米、日英仏伊に軍 備制限及び極東問題討 議のためにワシントン 会議開催を非公式に提 議 8.23 イラク王国成立 9.5から10.6 国連第2 回総会開催 11.5 モンゴル人民共和 国、ソヴィエトと友好
--	---	--	---

<p>7.24 横浜着</p> <p>7.25 東京着</p> <p>7.26 午前11時、帝国ホテルで日本の著名な思想家達と会見（大杉栄、堺利彦、桑木巖翼、姉崎正治、上田貞次郎、阿部次郎、和辻哲郎、北澤新次郎、鈴木文次、与謝野晶子、福田徳三、石川三四郎など）</p> <p>7.27 都下新聞記者20名と共同記者会見</p> <p>7.28 夜、慶應義塾大学大講堂にて、聴衆は3,000人以上（2000人とも）の前で講演「文明の再建」（講演開催にあたっては小泉信三などが尽力、通訳は帆足理一郎）</p> <p>7.30 横浜から出帆</p> <p>8.25 イギリスに到着</p> <p>9.27 ドーラと結婚</p> <p>11.16 長男ジョン誕生</p> <p>11月から12月、独立労働党党内講義「中国の国内状</p>	<p>に関する第2次覚書交付、</p> <p>11.3 中国、反駁回答</p> <p>10月、張太雷、コミンテルンの密使として来日、近藤栄蔵、堺利彦らと連絡</p> <p>11.4 原首相、中国人ジャーナリスト董顕光と会談、対中内争不干渉・満蒙既得権益擁護を語る、同日、東京駅で中岡良一に刺殺される</p> <p>11.5 原敬内閣総辞職</p> <p>11.12 尾崎行雄ら、全国普選断行同盟結成</p> <p>11.13 高橋是清内閣成立</p> <p>12.10 大日本実業組合連合会、支那問題に関する決議</p>	<p>と述べる</p> <p>10.4 広州で中韓協会設立</p> <p>10.5 中国、日本の山東還付条件に不同意と回答</p> <p>10.27 巖復没</p> <p>11.25 北一輝『支那革命外史』出版</p> <p>12.8 上海で国民大会開催、4から5万人参加し、ワシントン会議の決議に反対</p> <p>12.23 マーリン、桂林着、孫文と会見</p>	<p>条約調印</p> <p>11.12 から 1922.2.26 英米仏伊日中蘭・ベルギー・ポルトガル9か国、ワシントン会議開催</p> <p>11.16 ワシントン会議極東問題総委員会で中国代表、10か条の提案</p> <p>12.1 ワシントンで、山東問題に関する日中会談開始、12.5 日本側、中独条約（1898）に拠る特権を放棄と宣言</p> <p>12.10 ワシントン会議極東問題に関する9か国委員会、中国における治外法権放棄に関する決議決定</p> <p>12.13 日英米仏4か国条約調印、日英同盟廃棄</p>
--	--	---	--

	況」「中国と列強」 「ワシントン会議」			
1922年	50才 通年、中国及び遠東情勢について講演・講義 9月「The Problem of China」出版 11月、労働党の候補として下院議員選挙に立候補し、落選	1.1 山川均ら『前衛』創刊 1.10 大隈重信没 2.1 山県有朋没 2.2 ワシントン会議で幣原全権、21か条中の第5号要求の撤回、満蒙投資の優先権の放棄を声明 2.6 改正朝鮮教育令・改正台湾教育令を公布 3.6 第45議会で荒川五郎ら12名、「義和団事件賠償金還付に関する建議案」提出、3.9 山本条太郎ら6名「対支文化事業施設に関する建議案」提出、いずれも可決、3.14 松本亀次郎ら、議会で「支那共和国留学生の教育に関する請願」提出、採択される 4.9 日本農民組合結成 4.22 閣議、列国との協調及び張作霖顧問の日本軍人を奉直戦争に関与させないとの方針を決定 5月から3か月ほど、鶴見祐輔訪中 6.12 加藤友三郎内閣成立 7.15 非合法に日本共産党結成 8.25 閣議、中国政府の義和団事件賠償金支払延期要請を拒否、爾後これを対中文化事業に支出に決定	1.1 湖南省憲法公布 1.13 ワシントン会議中国全権王寵惠、21か条要求の取消を求める陳述書発表 1.15 中国社会主义青年団機関誌『先駆』、北京で創刊（4期より上海へ） 2.3 孫文、桂林で北伐出師の命令を下す 4.27 張作霖の奉天軍、呉佩孚の直隸軍と開戦（第1次奉直戦争）、5.4 奉軍敗れて退却、5.12 張作霖、東三省独立を宣言 5.1 広州で第1回全国労働大会開催 5.4 孫文、陸海軍大元帥名義で北伐開始を命令 6.2 徐世昌、大總統辞職 6.11 黎元洪、大總統就任 6.16 陳炯明広州で反乱、総統府を攻撃、孫文軍艦で逃れる、のち上海へ 6.19 北京政府、義和団事件賠償金の2年延期を各国に申し出 7.16 から7.23 中国共産党第2回全国代表大会上海で開催 8.1、1917年の国会復活、北京で開会、8.5 北京政府内閣改造、國務總理唐紹	1.21 から2.2モスクワで第1回極東諸民族大会開催、中国より30名、日本より片山潜ら出席 1.22 ハーグに国際司法裁判所発足 2.4 に中両国全権、ワシントンで山東懸案解決に関する条約及び付属書に調印 2.6 ワシントン会議終了、海軍軍備制限条約調印(1923.8.17公布)、中国に関する9カ国条約、中国の関税に関する条約調印(1925.8.6公布) 2.11 ガンディー、非協力・不服従抵抗運動の停止を指示 4.3 ロシア共産党書記にスターリン選出 4.10 から5.19 ジェノヴァ国際会議開催、経済問題討議 10.18 ウラジオストク政府崩壊 10.29 イタリア国王、ムッソリーニを首相に任命、10.31 ムッソリーニのファシスト政権成立

		<p>9.4 長春で日・ソ・極東共和国会談開始、9.25 決裂</p> <p>10.25 シベリア派遣軍、ウラジオストクより撤退完了</p> <p>11.4 閣議、借款団に対する中国の財政援助要請を拒否の方針を決定</p> <p>11.14 小幡公使へ日中21か条廃棄要求は断固拒否を訓令</p> <p>12.6 宮崎滔天没</p> <p>12.10 青島守備軍、青島の行政を中国に引き渡す、総領事館を設置</p> <p>12.12 閣議、対中借款方針決定</p> <p>12.20 閣議、張作霖の中央進出に反对方針を決定</p>	<p>儀、外交総長顔惠慶</p> <p>8.12 ソヴィエト政府代表 ヨッフエ一行24名北京着、マーリンは上海へ</p> <p>8.25 孫文、上海でマーリンと会談</p> <p>8.29 共産党中央執行委員会全体会議杭州で開催、マーリン、党員の国民党への個人加入を提議、会后、李大釗・陳独秀ら国民党に加入</p> <p>8月旅順・大連回収運動盛んとなる</p> <p>9.13 共産党機関誌『嚮導』上海で創刊</p> <p>9.22 孫文、張作霖との合作を図るため汪精衛を奉天への派遣</p> <p>11.1 衆議院（北京）、21か条条約の無効を決議</p> <p>12.23 日英米仏4か国公使、外債整理につき共同覚書を提出</p>	<p>11.1 トルコ、オスマン帝国滅亡</p> <p>11.5 から 12.5 コミンテルン第4回大会開催</p> <p>11.19 ロシア・ソヴィエト共和国、極東共和国併合</p> <p>12.30 ソヴィエト社会主義共和国連邦成立</p>
1923年	<p>51才</p> <p>3月、「The Prospects of Industrial Civilization」をドーラとの共著で完成</p> <p>再びチェルシー選挙区から下院議員選挙に立候補して落選、職業的政治家になる道を断念</p>	<p>1.2 米、石井ランシング協定廃棄を正式希望</p> <p>1.16 後藤新平、中国滞在中のヨッフエを日本へ招待、</p> <p>1.23 ヨッフエ受諾、1.27 ヨッフエ、上海から日本へ、廖仲愷同行、2.1 横浜着</p> <p>1月、台湾に治安警察法施行</p> <p>2.28 国防方針を改訂、仮想敵国を米・ソ・中の順</p>	<p>1.17 改訂輸入税率実施</p> <p>1.18 孫文、上海でヨッフエと会談、1.26 孫文・ヨッフエ、上海で共同宣言発表</p> <p>2.1 京漢鐵路総工会成立、</p> <p>2.4 スト決行、2.7 呉佩孚武力弾圧、死傷者多数（二七惨案）</p> <p>2.21 北京政府、21か条条約の廃棄を宣言し日本への通告を決定</p> <p>3.7 上海大学創立</p>	<p>1.1 日中両政府間に膠済鉄道国庫証券借款4000万円成立</p> <p>1.11 仏・ベルギー軍、ルール地方占領</p> <p>2.17 から 2.20 蘭領東インドでイスラム同盟全国大会開催</p> <p>3.24 全インド労働組合会議第3回大会</p> <p>4.10 アフガニスタン、最初の憲法採択、立憲</p>

<p>9月「The ABC of Atoms」出版</p> <p>12月、長女キャサリン誕生</p> <p>「The Prospects of Industrial Civilization」出版</p>	<p>3.31 対支文化事業特別会計法制定</p> <p>4.1 日本共産党機関誌『赤旗』創刊</p> <p>4.4 台湾出身者600余名、東京で日本の台湾統治反対大会開催</p> <p>4.12 から 5.1 皇太子裕仁、台湾巡視</p> <p>4.14 石井ランシング協定 廃棄につき日米公文交換</p> <p>6.2 上海日本商業会議所、反日運動に対する政府の措置につき外相に請願</p> <p>6.5 堺利彦ら共産党員50名 検挙される（第1次共産党事件）</p> <p>6.14 全国商業会議所連合会、中国の日貨排斥に関する決議</p> <p>6.20 大蔵省、満州財界救済資金2800万円の融通を決定し公表</p> <p>8.24 加藤友三郎首相没</p> <p>9.1 関東大震災</p> <p>9.2 第2次山本内閣成立</p> <p>9.2 朝鮮人の放火・投毒・暴動の流言、急速に広がり、朝鮮人殺害頻発</p> <p>9.3 東京大島町で中国人労働者200名以上虐殺される</p> <p>9.4 亀戸事件</p> <p>9.16 甘粕事件</p> <p>10.24 伊集院外相、震災の際殺傷された中国に関して北京政府から交渉ある</p>	<p>3.10 代理駐日公使廖恩燾、内田康哉外相に21か条条約の廃棄を通告、合わせて旅順・大連の返還を要求、</p> <p>3.14 日本拒絶、以降中国で対日権益回収運動広がる</p> <p>5.9 全国各地で国恥記念日のデモ、21か条廃棄・旅順大連回収・対日経済絶交を要求</p> <p>6.12 中国共産党第3回全国代表大会、広州で開催、国共合作の方針決定</p> <p>7.22 張作霖、反日運動禁止を厳命</p> <p>8.16 から 12.15 孫文派遣によるソ連視察団（蒋介石・沈定一・張太雷ら）訪ソ</p> <p>9.2 ソ連代表カラハン、北京着</p> <p>9.4 北京政府、関東大震災に見舞金20万円決定</p> <p>10.5 国会（北京）における総統選挙で曹錕、買収により当選</p> <p>10.22 中国公使館、日本政府に地震の際行方不明もしくは殺害された王希天につき説明を要求</p> <p>10.30 北京政府、無線電信の中日米合同経営を決定</p> <p>11.12 国民党臨時中央執行委員会、中国国民党改組宣言を発表</p> <p>12月天津に南開大学設立</p>	<p>王制となる</p> <p>7.24 連合国とトルコ、ローザンヌ条約調印</p> <p>8月、ドイツ、マルク紙幣大暴落</p> <p>10.29 トルコ、共和国宣言、大統領にケマル</p> <p>11.8 から 11.9 独、ヒトラーのミュンヘン一揆失敗</p> <p>11.15 ドイツ、マルクは最低点に下落</p> <p>11.28 コミンテルン執行委員会主席団、中国民族解放運動と国民党問題に関する決議を採択</p>
--	---	--	---

		が、法治国では司法権の発 動によるべきで外交問題 にならぬと発言 11. 10 国民精神作興に関する 詔書発布 12. 15 永井柳太郎、衆議院 本会議で震災時の朝鮮人 中国人殺傷事件につき政 府糾弾 12. 27 虎の門事件 12. 29 山本内閣総辞職		
--	--	--	--	--

The Collected Papers of Bertrand Russell, Bibliography of Bertrand Russell, Volume II: Serial Publications, 1890-1990, By Kenneth Blackwell and Harry Ruja with the assistance of Bernd Frohmann, John G. Slater and Sheila Turcon, London and New York: Routledge, 1994.

The Collected Papers of Bertrand Russell, Volume 14: Pacifism and Revolution, 1916-18, Edited by Richard A. Rempel, Louis Greenspan, Beryl Haslam Albert C. Lewis, Mark Lippincott, London and New York: Routledge, 1995.

The Collected Papers of Bertrand Russell, Volume 15: Uncertain Paths to Freedom: Russia and China, 1919-22, Edited by Richard A. Rempel and Beryl Haslam with the assistance of Albert C. Lewis and Andrew Bone, London and New York: Routledge, 2000.
 Historical Dictionary of Bertrand Russell's Philosophy, edited by Rosalind Carey, John Ongley, United States, Scarecrow Press, Inc., 2009.

日高一輝訳『ラッセル自叙伝』Ⅱ、理想社、1971

バートランド・ラッセル『ロシア共産主義』みすず書房、1990

松下彰良(編)「バートランド・ラッセル年譜」 <http://russell-j.com/R4HOME.HTM>

近代日中関係史年表編集委員会『近代日中関係史年表』岩波書店、2008

等を参考して作成。